

私のいつか帰るところ

にくはるまき

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

社畜だったある日、見慣れぬ神社でFF9の世界へ行きたいと願ったらホントに飛ばされてしまう。種族はヴェイエラに変わり、ジョブチエンジをしながら物語へと介入していく。

現実逃避を楽しみつつ、過去から逃れようと生きている。

はたして、それは本当の幸せなのか。

※22.8.15

現在様々なトラブルが発生して私生活が安定していません。

どれくらいで落ち着けるのかも分からない状態になっています。すいません。

22.7.11

どこかしらでアレクサンドリアではなくアレキサンドリアってごっちゃになってやらかしています許して

# 目次

せつてい、かんたんな解説	1
アレクサンドリア〜魔の森	3
魔の森〜氷の洞窟	27
ダリの村	40
カーゴシツプ〜リンドブルム	58
狩猟祭	73
ギザマルークの洞窟〜ブルメシア	86
クレイラ	102
レッドローズ〜ピナツクルロックス	121
リンドブルム〜フォツシル・ルー	143
コンデヤ・パタ〜黒魔道士の村	162
コンデヤ・パタ〜イーファの樹	177
マダイン・サリ〜イーファの樹	196
アレクサンドリア	219
トレノ〜アレクサンダー…	235

## せつてい、かんたんな解説

FF9以外の物を使用する場合がありますが、ジョブはTA、召喚獣をFF10からお借りします。(私が知っているのはこれくらいのタイトルなのです……)

会社員25歳女性。

毎日仕事に疲れているブラック社畜。

転生者が流行っているし、別な世界に行きたいと現実逃避をしたら本当に行けてしまった残念な人。

元の世界に戻るためには、エンディングを迎えなければならない。転生後、種族がヴェイエラへ変化。

名前が日本名なのは違和感だと思い、種族の呼称である「ヴェイエラ」と名乗る。

能力は24時間に1度だけジョブチェンジが出来る。(カウントはチェンジしてから数える)

職によって服が替わります笑。X-2のドレスチェンジと同じ感じです笑。

初期は武器レイピア。精霊使いで、ステータスというと画面が表示されて、自分の状態(HPMP、Lvや状態異常、アビリティ、使用できる技など)を確認できる。

戦闘時、攻撃は数値化されないのどれだけ攻撃が入っているのか確認が出来ない。(受けるダメージも当たるときにステータスで確認するほか無し)

人のレベル、ステータスは見ることが出来ない。

途中で死ぬのはいやなので、ジョブチェンジして戦い、一人でこっそりレベル上げていきます(チートの音がする)

主人公の名前は今のところ決まっています。

出来れば最後まで名前は出さないで行こうかと思っています。

偽善者だったり、チートを楽しんだり結構情緒不安定ですが、社畜

で精神崩壊していたんだろうなと言う事で温かい目で見守って上げてください。

本人はFF9が大好きで、細かいところまでまあまあ把握してるプレイ済な人。

本内容でキャラやらに何がひどいことを書いてしまうかもしれないので、一応アンチをつけさせてもらいました。

恋愛もほぼありません。誰ともくつつかず、友情で進めていく予定です。

ブランクにちよつかい出しますが、その程度です（笑）

クジャとはあんまり仲良くなる予定はありません。ていうか仲良くなれるような人ではない……

ご都合主義、ゴリ押しがとにかく多いです。

ご了承ください。

精霊使いの技

アースヒール：HP回復

ファイアウィップ：炎攻撃＋敵の攻撃を封じる

ヘビィダスト：土攻撃＋敵の動きを封じる

ホワイトフレイム：HP回復

スリッピーレイン：水攻撃＋スロウ

シャイニングエア：攻撃＋暗闇

ゲイジングヒル：攻撃＋混乱

その他のジョブチェンジをしますが、一々すべての技を書くのは面倒なので書きません。

## アレクサンドリアく魔の森

毎日が苦痛だった。

毎日毎日決まった時間に帰れず休みも返上、朝も早くて眠ってる時間も短い。上司は怖いし言う事があべこべだし仕事を押し付けてくるし文句言うの長いし。同僚もどんどん辞めていって、辞めた分更に仕事が増えていくのを、残った同僚達と終わらせて行く日々。

なのにいくらやっても仕事は終わらなくて終わらなくて終わらなくて終わらなくて終わらなくて終わらなくて……

今日は終電まで逃してしまい、しまっている改札口を見つめながら呆然とする。一緒にいた同僚は彼氏の家に行くと言ってタクシーに乗って行った。

私の家は電車で30分なのでタクシーは困るから、今日はネカフェに泊まるか、と、踵を返して進んだ。

こういう事は月に5、6回あるから慣れている。

行きつけのネカフェがあるのでそこに向かっていたのだが、ビルとビルの間小さな鳥居とお社が見えた。

こんな所に神社なんてあったかな？なんて思いつつ呼ばれるようにそこへと足を踏み入れる。

深夜だし、誰もいないせいかな少し怖い。なのになぜか鳥居をくぐりお社を覗き込む。掃除されているのかとてもキレイではあったが、古ぼけた賽銭箱さなどを見るとやはり最近作られたものではないのがわかる。

お社の中には小さな丸い鏡が置かれていて、暗いので光を反射することはなく、私の顔すら写すことはなかった。

とりあえず何かの縁だと思い、お財布から小銭をいくらか取り出して賽銭箱に入れてみた。

コツンコツン、と何も入っていないかかったのか板にぶつかる音だけが響き、ちよつと寂しく思いながら手を2度叩いてから手を合わせた。

今思う事はただ一つ、「自由になりたい。どっか異世界転生したい」である。

ここ最近では異世界転生物が流行っていて、大体は社畜の人が飛ばされていたりするし、もう私も自由になりたくてこんなことを願ってしまっていた。

ちよつと気晴らしに、ツイッターで愚痴をこぼすような気持ちでお願いをしただけだったが、その時突然お社の中の鏡が光を放ち、眩しさに目を開けていられなくなった。

光が眩しすぎて目が痛い。バ〇スを食らったム〇カみたいになっ  
てしまう。目が、目がああ。

『その願いを叶えて差し上げましょう』

まだ光り輝く中、透き通るような声が聞こえた。いきなりの怪奇現象もあり、流石に背筋が寒くなってしまう。幽霊とかそういうの結構苦手なんです。

『我が社を見つけられたのも、何かの縁……あなたの願いを叶えましょう。何処が良いでしょうか。私は俗世の物には疎いので、指定していただければ案内いたしましょう』

「……え？ホントに言ってる？私疲れすぎて夢でも見てんのかな……あはは、じゃあ、この前久しぶりにプレイしたFF9ってゲームの世界に行きたいな」

子供の頃に初めてクリアした思い出のゲーム、私の青春である。

幼い頃、このまねをして木の棒を振り回したり、魔法を唱え、寶石に興味を持ったり星座に興味を持ったり色んな事を教えてくれたゲームだ。

社畜だけど、これのリマスター版が出るって聞いて速攻買ってムービーの美しさに泣いた。お陰で寝る時間が無くてしばらく飲み物がモンエナになったのを覚えている。流石に30連勤の中での3徹は道端に倒れて搬送されたなあ……

そんな思い出のゲームの世界に行くのが私の望みだ。

夢の中だけでも良いから、この世界に触れてみたいんだ。

「あ、ちなみに何かしら力が欲しいです。ただの一般人で行ったらつまらないですー。異世界転生と言えばチートですから！」

どや顔して胸を張るが、ちよつと目を開けちゃってまたム〇カに

なった。目があああ。っていうかいい加減光りどうかしてくれませんかまぶしすぎるんですけど。

あんまりにもまぶしいから背を向けたら、そこは何も無い暗闇が広がっていて、引きつるような悲鳴を上げてしまった。

私の居た路地じや無い。何も無い暗闇……なにここの。

『チート……とはなんでしょうか』

困惑している私と、知らない単語に困惑している主さん。私はまぶしいけど背を向けて話すのは失礼と思い、目をつむりつつお社の方を向いた。

お社の主にチートは通じなかつたので、誰よりも力も能力も兼ね備えることです。と言えば、なるほどと返す。

『では具体的におっしゃってください、どんな力をお望みですか』  
「うーん、ジョブチェンジってのが欲しいですね。ジョブチェンジ出来れば色んな職業になれるから、剣士でも魔法でも使えるんで楽しいそうです！」

『ふむ、では媒体となる物語などを教えてください。あなたが使えるようにしましょう』

設定するのに結構細かいんですね……

「FFにはTA（タクティクスアドバンス）って言うのがありまして、その職をすべてジョブチェンジで使えるようにしてください。……あ、あと召喚獣って言うのがあるんですけど、私だけFF10の召喚獣を使えるようにして欲しいんです（バハムートのパンチかっこいいし、イクシオン乗りたいし、アニマしゅき）」

『要望が多いですね』

「訊かれたから答えたのに!？」

確かに注文が多いと思いますけどもね!!

『TAのジョブ、10の召喚獣を使えるようにする、ですね。流石に数多の力を代わる代わるいつでも使えるようになるのは、私の力では限界があります。職が変えられるのは24時間に一度です。職を変わってから24時間後、です』

「はい、ありがとうございます。これでいい夢見られそうです」



『それではいつてらっしやいませ』

そして光は無くなり、目が慣れたと思えば知らない高原にたたずんでいた。

夜空には赤と青の月が二つ浮かんでいて、爽やかな風が頬を撫でる。

………え？嘘でしょ、夢じゃ無いの？

頬をつまんで引っ張ってみれば、痛みを感じる。夢じゃ無い。

気が付けば服装も替わっていて、腰にはレイピアが下がっている。

何だか踊り子みたいな服装だと思つて頭に触れたら、ピンと上へ伸びたウサギ耳があるではないか。

ま、まさかヴィエラになつてる!!要望は出してなかったけど、美人であれば嬉しいんだけど、この世界にヴィエラいないんだよね!?!……まあいいか。

自身の強さが分からないので、アイテムも持ってないようだし、試しにステータスと言えば、ステータスが映し出されて現在が精霊使いというジョブになっていることを確認できた。

レベルは2。1ではないけど、強くてニューゲームは望んでいなかったなので、これから自分で頑張らないとなと意気込んで右手を上へ突き上げた。

社畜人生からおさらば！夢の異世界転生生活を満喫してやるぜ!!  
『そうでした、元の世界に戻るためには、エンディングをむかえることです』

突然話しかけてきたお社の主だが、この人の正体は一体何なのだろう。

「あなたは一体何者ですか」

『気まぐれな神ですよ』

ただそう言うてからは、もう声が聞こえることは無かった。

とりあえず見渡してみると、街らしき建物が見える。ゲームと違つてただの野原ではなく、木が生えていて思ったほど遠くは見ることは出来ない。

でも高台にあつて大きな街だと、選択肢は限られてくる。

城があつて大きな剣がそびえ立つならアレクサンドリア城。リン  
ドブルムは要塞。私が見えている建物はとてもキレイな外装の集ま  
り……つまりトレノだろう。

ダリ村であれば田舎だからお屋敷なんて建ってないし。

まず最初のスタートがトレノだとは思わなかったな。とりあえず  
行ってみよう。

見えている明かりを指して進んでいけば、鳥のモンスターに出く  
わした。

この辺に出てくるモンスターって多分弱いよね。大丈夫かな？

ステータスで自分の技を確認済みなので、レイピアの先を向けて唱  
える。

「ファイアウィップ！」

レイピアの先から炎の輪が放たれ、鳥モンスターに絡みついて焼い  
ていく。FF9には無いシステムだが。この技にはドンアクという  
ステータス異常を付与できる。ドンアクは技が出せなくなるので、攻  
撃される心配が無くなるのは良いことだ。

鳥は地に落ち、飛べなくなった羽をバタバタと振り回してなお残つ  
ている炎を払っている。可哀想なのでとどめにレイピアでひと突き  
にして終わらせ、私に経験値が入ってくる。

レベルは3になった。うん順調。

だけどモンスターはギルを落とさなかった。

まあ普通にモンスターと戦ってお金落とすっておかしい仕様よな、  
何て思いながら歩き続け、向かってくるモンスターをバシバシやつ  
けていった。

現状の精霊使いはステータス異常を添えた攻撃魔法が主なので、と  
ても戦いやすい。この周辺に居る敵も強くないのが更に良いところ  
だ。

段々と街に行くことを忘れて夢中で戦っていたせいで、モンスター  
が寄ってこなくなった。私の足下にはたくさん死骸が積まれ、散ら  
ばっているから血のにおいが凄いんだけど、おそらく動物的勘と言う  
やつなのか、モンスターが寄ってこないってのは危険を感じたんだろ

う。

いくつか手触りの良いモンスターを背負って街に向かい、モンスター狩りをして旅している事を門番に伝えたら中に入れてくれた。

「毛皮は貴族が喜んで買うからね、左の奥に毛皮を中心に買い取っている店があるから行ってみてくれ。良い皮が入ればオレも新しいグローブが買えるぜ」

門番は笑みを浮かべ、私は教えて貰った店へと入る。

玄人感を醸し出している職人じいさんが一人毛皮を選別していて、声を掛ければ買い取りか、と私の持っているモンスターを手にとった。

「ふむ、傷が少ない。一発で仕留めたのか」

「そうですね、剣でひと突き」

生まれてこのかた、剣なんて握ったこと無かったけど、転生効果で使えるよ

うになってました。アリガタヤアリガタヤ。

「これ一匹か？」

「いえ、林に100匹ほど」

「……それは大量じゃな。荷車を出してやる、運んでこい」

そしてじいさんは奥から弟子達を呼び、一緒にモンスターが散らかっている林まで来て貰い、荷車に乗つけてトレノまで運んでもらった。

そこから選別して買い取りになったんだけど、丸焦げになってたり、血まみれになっているもの、切り傷が多いもの、切断されてしまっているものは大分買取額が下がってしまっているようだった。

「買い取り価格は……10万ギルだ」

初っぱなからかなりの額貰っちゃったよ!? 確かトレノのオークションだつて一万とかのやり取りを貴族がするんだよ!?

「驚いているようだが、普通の客が持ち込むモンスターの量は多くたって10匹ほどだ。それなのにお前は113匹持ち込んだ」

「あつ……100匹超えてるう……」

「ほとんどが状態の良い皮が多いからな、良い素材になる。貴族は毛

皮や羽根を好むから、量があるのはこつちも助かるからな。受け取ってくれ」

こうして私は一夜にしてお金持ちになり、とりあえずよさげな宿屋に泊って一夜を過ごしたのであった。

目を覚ませば日が昇っていて、トレノにも朝が来るんだな、と寝ぼけながら身体を伸ばす。

とりあえず転生は夢じゃ無かったと言うのには段々頭が理解してきたし、お金は昨日のモンスター虐殺で儲かったから問題は無い。

あと気になるのは今が何処の時系列か、だ。

トレノだと国のあちこちの変化を感じ取れないと思うから、物語が始まっていないならアレクサンドリアに向かわないと、主人公達に出会えないではないか！

せっかくこの世界に来たのなら堪能しないと！

まずはアイテムを買いそろえたりしないといけない。ちなみに私のレベルはどうなってるかな……？

ふかふかのベッドの上で胡座をかいて、画面を呼び出す。

「ステータス」

レベルは10まで上がっていて、HPが500を超え、MPは80。うん、序盤って感じ。上げといて怖いことは無いから、暇があればバンバン上げちゃお。

外の大陸に出たときにサボテンダーに出くわして、はりせんぼんに耐えられるくらいには強くなっておきたいものだ。

レベル10だったら平均的に、リンドブルムからブルメシア間のところかなというイメージだ。

だけどブルメシアであればベアトリクスがいる。アレと戦うとなると、手加減されて瀕死くらいで止めて貰えるけれども、やっぱり渡り合ってみたいものもある。

ストーリー上、戦闘で彼女に勝っても大技出されて強制的に負けるんだけど、私が介入したらどうなるかちよつと気になっちゃうかも。

一人怪しくニヤリと微笑み、アイテムなどを買いに外に出た。

貴族は優雅に歩き、そしてごろつきは端っこで座っている。うー

ん、異世界。

この空気を満喫しつつアイテムも買いそろえ、私のバッグは異次元バッグだというのを今気が付いた。

RPGあるある。そんな装備の山は何処に持っているんだい？つてやつよ。

ウエストポーチみたいに腰に巻いて準備万端。あとは情勢を聞き回ったりするだけだ。

——その時、遠目に一人の男がこちらへと歩いているのが見えた。私はその男の方へ駆け出し、おーい！と大手を振って笑顔で彼を呼んだ。その男は一瞬驚いたのか“四本の腕”を降参したかのように少し手を上げて後退り、ちよつと逃げ腰であった。

「こんにちわー！会いたかったですー!!」

ようやく目の前までやってきた私は挨拶しつつキラキラと憧れを込めた瞳で見つめれば、自分を捕まえに来た人じゃないと理解してくれたみたいで四本の腕を下げた。

「オレに会いたかったとなると、カードかな？それともファンかな？ひひひ」

ちよつと鼻の下を伸ばしていたけども、彼はFFVでエンキドウとエクスカリバーを探しに来たって設定だったはずなんだよね。間違つてなければ。

12時間以内に最終ダンジョンに行かなきゃ行けなかったって言うのはなんとなく覚えていてる程度。実際にエクスカリバーIIを取つたことは無いしね。

「ギルさんのファンです！」

「えつつ?? え。まって、何でオレの名……」

「ファンですもんそりゃあ知ってますよ！四本の腕がかっこいいですねえ！」

ギルガメツシユ……愛称なんかでギルさんと呼んだが、普段なら通り名で過ごしているから本名を知っている人が居るわけが無かったから、驚いたんだろうね。

それにしても、この世界に来て始めて会ったキャラがギルガメツ

シユになつちやうつてのも不思議なものだ。

「かつこいいだなんて、へへへ。お嬢ちゃんも見かけない種族だな」

「ヴィエラって種族なんです。」この世界には「居ませんね」

私の最後の一言でギルガメツシユは全て理解したのか、なるほどと言いながら腕を組んだ。

「よそから来たんで、オレのことも知ってた訳か」

「同じ世界では無かったですけどね。私の世界では様々な世界を覗き見することが出来たんです。さて、こんなところで立ち話もアレなんで、どこかでお食事でもいかがですか？是非おごらせてください」

「いいぜ、とっておきの店があるんだ」

ギルガメツシユに着いていくと、貴族が入るような店ではなく、一般市民が立ち寄れる酒場のような場所であった。まあ高い店はちよつと緊張しちやうしね。

席に着き、ギルガメツシユは料理とお酒を頼み、私はフルーツジュースにする。

「実はこの世界に来たのも昨日なので、あらかたの情報は得ては居るんですけど、情勢が分からないんです。何か知ってますか？例えばアレクサンドリア城でそろそろ劇団が見られるとか」

先に運ばれてきたお酒をギルガメツシユはグイツと一気に流し込む。

「きゃー、良い飲みっぷり！素敵ー」

「え、そう？・そんじゃあ、じゃんじゃん頼んじやおつかな」

まあ、払うの私ですから。

そしてまたお酒をぐいーつと飲み干し、幸せそうに微笑んでいた。ここでの旅はスリをしたりして生計を立ててたって言うから、こっちはやってお酒をあおるのも中々なかったのではないかな。

「つぷは。えつと、そうだな。近々リンドブルムの劇場艇がアレクサンドリア城で公演をするんだと。君の小鳥になりたいだったか、そんなのを演目にしたな。チケットはまだ売ってるぜ、観に行くなら買っていくといい。オレも明日アレクサンドリアに向かうつもりだったから、一緒に行つてやつても良いぜ」

「ホント!?うれしい良かった!!」

更に詳しく話を聞くと、ここの貴族の方々も飛空艇に乗ってアレクサンドリアに行くらしく、飛空艇がたくさん来ているそうなの。

ギルガメッシュは忍び込もうと言ったので、とりあえず乗車賃を聞いてみたら一人五千ギルだと言われる。

リンドブルムの狩猟祭で優勝したとき貰った値段でそんなもんだったよね。

やっぱり10万って恐ろしいほど大金だと思うよ。

「ギルさん、あなたの分の乗車賃を私が払うんで、一緒に乗りましょ」「えー!いいの!?やったぜ!!」

ギルさんはただ乗り出来るから大喜びでまたお酒を追加。

そしてどんどん追加して最後に潰れてしまいました。

「ギルさん宿屋何処ですか?歩けます?」

「うーん、うーん」

だめだ、これはまともに会話も出来ないだろう。

支払いを済ませ(3千ギル)とりあえず迷惑なので引きずって店から出す。

でも彼の宿屋も分からないから彼を引きずって近場の宿に入ることにし、適当に部屋を借りて彼を投げ込み、私は隣の部屋でぐっすりと眠ったのであった。

翌日、目が覚めたギルがフロントから私が引きずって連れてきたという経緯を聞いたようで、わざわざ部屋に来てお礼を言われた。

「そんじゃ、早速飛空艇の乗車券買ってくるから金くれ!」

彼のこういう軽いノリが好きよ。

「二人合せた乗車賃一万ギル……と、お小遣いに千ギルあげちゃうわ」「もしかしてきみ、どこか良いところのお嬢さんなの?」

「君と同じく別世界から来たんだよ。やたら金があるのは外のモンスターを虐殺して毛皮ハンターになったからだよ。ギルだって弱くはないだろうから、モンスター狩りして集めるのもアリよ」

「めんどくさいからやだなあ」

結局スリしているのが良いらしく、モンスター狩りはしないそう

だ。今アレクサンドリアに行こうとしている理由も、公演で貴族たちが集まるからそいつらからお金を盗もうって算段みたい。

それから彼はお金を受け取って乗車券を買ってきてくれた。自分たちが乗る艇はお昼に出るらしい。その時間まで一時間あるけど、先に行って待つているのが安全だよな。

時間になり、たくさんの貴族達に交じって飛空艇に乗り込み、そして飛空艇は大空高く飛び上がる。甲板で外気を肌で感じながらこーやって空を飛ぶというのは私の世界でも普通は出来ないことだ。

「すごいー！下が霧で何も見えない」

もくもくと霧が邪魔して下の方が上手く見えない。

崖や山は見えるから、それを眺めていようと甲板でのんびりする。

ギルさんは貴族達からスリをするのに忙しいようで、私は一人で外を眺めているのだった。

あつという間にアレクサンドリアに到着し、ギルさんとはここでお別れになる。

「色んな観光客が集まるだろうから、しばらくはここに滞在するつもりなんだ。じゃ、またな！」

「がんばってねー」

ギルさんは街の中へと走って行き、私は逆に街の外へと足を運んだ。

物語が始まるのはまだ先、プリマビスタすらまだアレクサンドリアに着いていないのだ。私が今やるべき事はレベル上げだ。

レベル上げはとにかく重要です。この近辺はバンダースナッチが出てきたと思うから、それと難無くやりあえればしばらく怖くないな。

街から離れ、適当に歩き回ればモンスター狩りの始まりになる。

ゲームと違って色んなモンスターが現れるので中々楽しい。お目当てのバンダースナッチも出てきて、ポンポン切り捨てていった。

それから段々日も沈み始め、辺りが夕焼けに染まっていく。

自分のレベル上げのためにこーも簡単に斬っていくのは良いんだけど、死骸がその辺に散乱しているのが問題だ……



申し訳ないがこれはそのままにして、ステータスを開けば15レベルまで上がったみたいでしばらくはレベル上げをしないで済みそう  
だ。

バンダースナッチも二発か運が良ければ一発で倒せるようになってるし、攻撃力は申し分ない。

魔法の攻撃はレイピアの攻撃より弱いみたいだけど、その代わりにステータス異常を付与できるのがおいしい。

「HPは……700ちよつとか。割と高めかな」

とりあえず今の状態ではベアトリクスと渡り合うのは難しいので、ブルメシアまでにはもう少し上げておこう。

レイピアをしまつてたくさんのモンスターの死骸の中を歩き、アレクサンドリアに戻ってきた。

ストーリーが始まるまでは、普通にこの街を観光して回ろうと思  
い、宿屋を探す。

まだ宿の空きはあつてくれて、なんとか泊ることは出来た。

一日身体を休め、そして次の日はアレクサンドリアの観光を始め  
る。他にも貴族達がガイドを雇って散策していたり、街は賑わつて  
いた。

私は名物を食べて回ったり、アイテムをあさったり、カードバトル  
に興じたりもした（全敗）

その時ついに大きな音が鳴り響き、空を見上げればあのプリマビス  
タが頭上を通り過ぎていく。

ついに物語が始まる。

私は興奮と喜びに子供みたいにぴよんぴよん跳んでしまった。あ  
あどうしよう、本当に私物語の中に入ってるんだ！なんでだろう、今  
なんかやつと実感した……！モンスター狩りは作業だったから何も  
感じなかったせいなのかもしれない……

跳ねている心臓を通常の数になるまで深呼吸で落ち着かせる。

ああ、どうしよう。嬉しすぎて頬もつり上がったまま戻らない!!

——刹那、背後でドテつと音がした。

何かと振り向けば、尻餅をついている黒魔道士、ビビがそこにいた。

あれだけ騒がしかった心臓が止まるかと思った。そして数秒間止まった心臓はまたけたたましく鼓動を始めて息苦しさに胸を押さえた。

やっと出会えた重要なキャラクターに動揺しすぎてまともに動けない。嬉しくて泣きそう、感情がパニック起こしておかしくなりそう。

「……あの、」

もだえながらもずっとビビのことを見つめすぎたのか、ビビが声を掛けてきた。

私は彼のあまりの可愛いさに膝をついた。

「えーあ、大丈夫ですか…!？」

ビビは立ち上がり私に駆け寄ってきて、私はめちやくちや泣いてしまった。

そんでもってビビに抱きついてしまった。

「なーな、なに!?あの…!？」

私は我に返って離れてから、深呼吸を繰り返して、演技モードに入る。というか、演技して話しかけないと「かわいい」とか「しゅき」とかいつて全く会話が成り立たないからやらないといけない。

それに、黒魔道士の事を知っているのは間違いなくまずい。頑張れ私。

「ああ、ごめんね。私カワイイものに目がなくてつい抱きついちゃった」

やっと絞り出した言葉は、演技しているんだけど胸の内をさらけ出して悲惨なことになってしまった。カワイイ少年に抱きつく怪しいお姉さん。おまわりさん案件です。

「……ボク、かわいい…?の?」

少年は初めて言われた言葉に衝撃を受けているのか困惑しているもよう。私は慌てて「人の感性ってそれぞれだからさ!」って言ったんだけど、とりあえず抱きつくのはダメだったと思う。初っぱなから何やってんだよ私!

「そ、そうだ、今上を通り過ぎていったのが劇場艇。プリマビスタなんだ

よ！有名な劇をやるみたいなんだって！知ってる？」

とりあえず話題を変えようと、先ほどの劇場艇の話をしたら、その劇を見るためにトレノから来たどビビは答える。

トレノから来たのは私も同じなので、私も昨日トレノから来たんだよーって言って親近感をわかせて近づくと作戦に出た（きたない）

「チケットはスタンプを押して貰わなきゃいけないから、チケットブースに行こう。場所を知っているから案内してあげる」

ニコツと微笑んでこっちだよ、と歩き出せば、ビビも歩き出す。

何この生き物全てがカワイイ辛い、生きるのが辛い。

「あの、お姉さん、どうして……その、怒ってるの……？」

「怒ってる!?いや怒ってない逆よ幸せで死にそうなのよ!」

……は！もしかしてこのニヤけるのを我慢しているせい!?それで表情がおかしくなって怒っていると思われていたのかも……

「……ごめんね、ニヤニヤとしているのが恥ずかしくて我慢しているだけなの……怒ってないんだ、幸せなんだ……」

「幸せ……」

この時のビビは幸せや生きる意味、とかそういうのよく分からないんだろうから、ちよつと戸惑っている感じだった。

でも劇を観たいとかそういうのがあるっていうのは、自分の意志があつてイイよね。

「街が賑やかで、色んな人と出会えて私は幸せ！ずっと狭い世界で生きてきて、こうやって自由に歩けるって楽しいの!」

ずっと仕事ばかりで、休みなんて無いに等しくて、交流ができる人間も会社の人とだけになっていた私にとって、この世界に来たというのは自由を得たと言うことなんだ。

それに、好きなキャラクターとつてのがもう幸せでああああ

「お姉さん、ホントに楽しそうだね——うわっ!」

ビビの言葉は後ろからぶつかってきたネズミの少年によって止められる。

ネズミの少年は自分がぶつかってきたというのに「気をつけろよな!」とか言つて走り去っていく。

それを横目にビビに手を差し伸べて立たせてあげて、ポンと背中を叩いた。

「びっくりしちゃったね、元気な男の子だったなあ」

「う、うん」

ビビは帽子のずれを直しながら頷き、そしてチケットブースへと向かっていく。

ブースのおじさんにチケットを見せれば、偽物だと言われてビビががつくりと頭を垂れ、哀れに思ったおじさんは励ましの言葉と共にカードをくれたのだった。

「偽物だったのはかなしいね。もうチケットは売り切れてるから買えないし……せっかくアレクサンドリアに来たのに何もしいのは悲しいから、お姉さんと観光しよつか!」

「え、お姉さん、劇観るんでしょ?」

「実はチケット買いそびれちゃったんだー、ほら売り切れてるじゃん? だから私も観られないんだ。観られない同士仲良くしよ!」

私もビビを励ましてあげながら路地の方へと誘導し歩いて行く。

ストリー的に、こうしないとイケないからね。

路地に入れば意味深にはしごが置かれていた。おそらく看板の取り付けに使っていてそのまま放置されているのだろう。

そこに先ほどぶつかってきたネズミ少年がやってきて、我々に声を掛けてきた。

「先ほどチケットが偽物と言われていただろ。オレの家来になれば今日の芝居を観せてやるぞ? 家来になれ!」

なんと強引な子供でしょう。

とはいえ、正体はブルメシアのパック王子なのだから偉そうなのは当たり前である。

私は大人しく家来にしてくださいと答えてあげれば、パックは満足そうに微笑んでいた。

ビビも洪々家来になり、置き去りにされていたはしごを持ち去るパックのあとを追いかけて、鐘の塔を登っていく。はしごを片手にはしごを登っている王子様って結構なすごさよね……? ?

私たちもはしごを登り、そして屋根の上まで出てきた。屋根には隣の屋根に渡れるように板がかけられているが、一体誰がかけたんだろうか。

パックが事前にかけて用意したのかそれはわからない。

「ボク……高いところが苦手なんだ……」

板を渡れずに立ちすくむビビが、少し声を震わせながら怖いと言った。

私はぴよんと下へ飛び降り、ビビとパックがびっくりして声を上げたが、私はヴィエラ族になっているので高所からの落下は全く痛くもかゆくもない。

この世界に居るネズミ族と同じような身体能力だと思う。

「私こういうの得意だから、落ちても助けてあげられるよ！安心して渡ってね」

無事だよと手を振れば、パックに驚かせるなど怒鳴られて私は屋根の上へと戻った。

「全く！寿命が縮んだかと思ったぜ！」

「は、申し訳ありません王子」

私が「王子」という単語を使った瞬間顔が強ばり後退ったから、茶化すように「ワタクシ家来ですから、主人を呼ぶならば王子かなって？」と笑えば、ぎこちなくパックは「そ、その通りだ」と腕を組んだ。「そういえばお前達の名前を訊いてなかったな。オレはパックだ」

ようやくここで自己紹介タイムが始まり、ビビも自分の名前を名乗る。

私は……この美人なヴィエラの見ただ目で日本名を名乗るのは気が引けた、というか……元の世界の事を思い出してしまうから、本名を名乗る気にはなれなかった。

「私はヴィエラ」

名前はこの種族であるヴィエラでいいだろう。この世界にはいない種族だから名前がかぶることはないだろうしね。

「二人とも変わった名前だな、まあいい、これからよろしくな！ここから先が城内になってるから、忍び込めるぜ！」

足りなかった足場に持つていたはしごをかけて渡っていく。  
無事に不法侵入が完了したのである。

そんなことをしているうちに陽が落ちていき、二つの月が昇って辺りを照らす。

私たちは貴族達が座っている席の後ろに行き、劇が始まるのを待った。

「お芝居楽しみだねビビー！」

「うん！」

「ここまで連れてきてくださり、誠にありがとうございます王様」

「お、おう」

パックは最後の王様でまた動揺しているのでクスリと笑えばちよつと睨まれたのだった。

そんなことをやっているとお開演したようで、花火と共にステージが下から現れ、派手な演出に皆が心を躍らせ、遠目に見えるブラネ女王が嬉しそうに舞っている。

わかる、この始まり方つてだけでも楽しいよね。

「すごい！キラキラしてる！」

「花火って言うんだよー、すごいね！たのしいね！」

「たのしいね！」

ビビは前に座っている貴族の頭が邪魔でよく見えないから左右に揺れながら眺めているが、もう私はそれが可愛くて胸射貫かれて死にそうです。

それから劇は始まり、お馴染みのタンタラスがお芝居を披露している。私はお芝居を観ながら裏でガーネット姫をさらう経緯と光景を脳裏に浮かべて楽しんだ。

それにしてもタンタラスお芝居上手いなあ……

「おい、ここじゃ前が邪魔でよく観えん！移動するぞ！」

パックはせっかくのお芝居がよく観えないから前へ行こうと言いつ出した。

だからいつの間にか前に居て舞台に入り込めたんだな。

私たちはパックに続き最前列まで移動し、ジタンとブランクがチャ

ンバラを繰り広げたとところまで出てきた。

ビビとパツクは小さいから良いんだけど、私は大人のサイズなので邪魔にならないように四つん這いになりながら客席に見えないよう進んだ。

そこから話は段々とクライマックスになり始め、舞台の下からガーネット姫とジタン、そしてそれを追いかけてきたスタイナーが現れて、それさえも劇の一部にして進められていく。

そして恋人役のマーカスがレア王を突き刺そうとしたら、恋人コーネリアもといガーネット姫に庇われ彼女を刺してしまう。

コーネリアは死に、そしてマーカスも自分を刺して後を追ってしまった。

私は内容を知っている（裏側も含め）ので、ニヤニヤしながら観ていたが、ビビとパツクは泣いていたので、私も泣いているフリをしていた。

その時、パツクが「ヤバイ逃げるぞー！」と声を上げ、カシヤカシヤと金属が擦れる音が聞こえ、その方向を見たらプルート隊員が「コラー！」と大声を上げて走ってきていた。

私たちはタダ観の不法侵入者ですので、急いで逃げ出したのだが、逃げているうちに舞台に入り込んでしまう。

ていうかいつの間にかパツクがどこかに逃げてしまつて、今追いかけられているのは私とビビだった。

ビビは倒れているガーネット姫の上を飛び越えて、威嚇にファイアを放つてしまい、その火がガーネット姫の顔を隠していたフードに燃え移り、彼女は慌ててそのフードを脱ぎ捨てた。

そのせいで顔をさらしてしまうこととなり、家出をしようとしていたガーネット姫が舞台にいる姿をブラネ女王に見られてしまった。

レア王もとい盗賊の首領バクーは潮時だと告げ、部下を連れて引っ込んでしまう。

私はファイアを放った際に後ろに飛んでつたビビを抱き起こしていた。

「大丈夫？」

「う、うん」

するとジタン達もこちらに駆け寄り、コケてたビビを心配してくれた。彼優しいよね。

「姫様！観念なされよ！」

スタイナーはガーネット姫を連れ戻そうと手を伸ばすが、ジタンが間に割って入って邪魔をし、二人は剣を交えた。

プルートの部下もマークスが追い返し、私も加勢して部下を追い返してやれば、マークスがこちらを見てニコツと微笑んだ。

「やるツスね」

「でしよ？」

こつちもニコツと微笑み返してみたら、急に劇場艇が動き始めて空を飛び始める。舞台に残されている私たちは大きな揺れに振り回されて、物にしがみついたりしている。

だがそんなのもつかの間、ブラネ女王の放った鉄の杭が発射され、劇場艇がこれ以上進めないようにと鎖でつながれてしまった。

鉄の杭は舞台にも突き刺さっているので、姫がどうなつても良いというのがここで見て取れる。ひい。

そんなことにも気が付かず、スタイナーはまだ姫を連れ戻そうと向かってくるので、ジタン達が相手をしている。私はレベル高いからワパンで終わっちゃうので後方で見えています。私はレベル高いからワ

しばらくしたらブラネ女王がこちらにボムをぶち込んできて、劇場艇は大爆発を起こした。

爆風から逃れようと私は舞台裏に入ったのだが、爆発の規模が大きいく私の隣の壁に大きく亀裂が入り、置かれていた物がこちらに一気に吹き飛ばされてきたから慌てて外に逃げる。

煙が立ちこめている舞台だったが、爆発に耐えたプリマビスタが加速したことで視界は良くなった。

転がっていたビビに駆け寄り怪我がないか確認すると、大丈夫だよと身体に着いているススを払う。

よくあの爆発の現場に居たのに大丈夫だったよな……

「この艇も長くはもたないと思うから、しっかりと掴まってね」



「う、うん！」

近くにあった物にしがみついたのを確認してからガーネット姫に声をかけて、怪我がないか確認。

ジタンもスタイナーも多少の怪我で済んだみたいだ。

劇場艇はアレクサンドリアを抜け、霧の上を飛んでいたが徐々に高度が下がり始め、魔の森へと落ちていく。

揺れが激しくて近くの柱に掴まっていたのだが、墜落した瞬間の衝撃は思っていた以上で、掴まっていた柱ごと遠くに吹き飛ばされてしまった。

微かに他のメンバーも投げ出されているのが見えたが、空を飛ぶ魔法は知らないのもそのまま森の中へ落ちていく。

高所からの落下はヴェイエラの身体能力的には問題なく着地し、辺りを見渡してみれば、大きな黒煙が奥の方で立ちこめていて、あつちにプリマビスタがあるのはすぐに分かった。

「さてさて、この辺のモンスターはどんくらい強いのかな？」

レイピアを抜いてモンスターの襲撃に備える。

正直一番最初のステージだから、一番弱いはずなんだよね。

すると早速フアングとゴブリンが現れたが、レイピアで簡単に切り捨てる事が出来た。うん、この辺はチュートリアルも兼ねているからやはり弱いな。

とにかく劇場艇に向かっていき、上下の移動も難無く熟せるヴェイエラ族になって良かったと心底神様に感謝した。

「皆さーん無事ー？」

消火活動をしているタンタラスの皆さんに声をかければ、火を消し止めたいから手伝ってくれと言われて劇場艇の中に入り込む。

そう言えば私の今のジョブで水を使った技があったな。

「スリッピーレイン」

水の塊が落ちて飛び散り、雨のように周りを濡らし、火の勢いはかなり弱まった。

だけど水塊が落ちた部分はおもいつきり穴が空いてしまって、魔法の威力の強さに眉をひそめる。レベル上げすぎると調整が難しいな

……仕方がないからどうでも良いところに当てて、それで飛び散らせた方が良いかな。

すでに壊れている可動部に当てたり、エンジンに当てたりして水浸しにし、消火活動は終わった。

「火は消し止めたかな？」

ふうと息を吐けば、シナさんが助かったズラと喜んでくれて、ブラंकさんも顔を出してありがとまで言ってくれた。

「でも消火の際に色々壊しちゃった、ごめんね」

「いいさ、どうせもう飛べなかつただろうし。もう一つ頼みがあるんだが、この周辺に飛ばされた連中がいなか探してくれないか。あんなの強さなら任せられる気がする」

ブラंकから周辺の搜索を頼まれ、元気よく任された！と手を上げれば、そうだと止められる。

「少ないがポーシオンを渡しておく、持って行ってくれ」

ポーシオンを3個渡してくれたが、私はポーシオンを30こもっているので、ここで怪我した人に使つてと断つた。

それに私回復魔法も使えるし。

「エーテルは持つてないですか？」

「それはないな……ボスなら持つてるかもしれないが」

「じゃ、ならいいです。周辺の搜索行つてきますね！」

ぴよんと壊れた小窓から飛んで森に侵入する。

薄暗いけど神秘的で美しいよね、この森。

すでにジタンが他のメンバーを探しに入っているから、何かしら物音がしそうだ。

木の枝を跳んで移動していくと、少し遠くで爆発音が聞こえ、ジタン達が居ることを確信してその方向へと跳んで行く。

そしたらプリゾンケージに掴まっているビビがいて、それに立ち向かうジタンとスタイナーが見えた。

降りようと思ったその時に戦いが終わってビビはプリゾンケージから脱出することが出来た。だがつかの間、そのモンスターが息絶えると同時に何か胞子をまき散らして、吸い込んでしまったビビとスタ

イナーが地面に倒れ込んでしまう。

ジタンはとつさに飛び上がった。胞子から逃れたから無事でした。

「なんだ、もう終わっちゃった。来るのが遅かったなあ」

枝の上で残念だなど肩を落としていたら、残っていたジタンに新たなプリゾンケージが襲いかかった。

不意を突かれてジタンまでもケージの中に閉じ込められてしまう。

彼は持っているダガーで抵抗するも、体力を吸収された際に持っていたダガーを落としてしまった。

「しまった……！」

唯一の武器を落としてしまった彼だったが、大丈夫！私がいるのだから！

「フアイアウィップ」

枝から飛び降りると同時にプリゾンケージに炎の輪で攻撃すれば、威力が高くて真つ黒焦げになった。

ケージの中にいたジタンもちよつと食らってしまったみたいなので、急いで回復魔法を唱えて回復させてあげた。

「ホワイトフレイム」

白い炎がジタンを包み込み、彼の傷を全て癒やした。

これで大丈夫だろう。だけど魔法を使うときは慎重にならないとな……仲間まで巻き込んでしまう。

「驚いた、あの時のウサギのお姉さんじゃないか」

「ごめんね勝手に舞台に入り込んでしまった。まさかこんなことになるなんて思ってたよ、怪我は大丈夫だね？でもこの二人は毒を受けちゃったみたいだから早く運ばないと」

ビビに駆け寄ると、苦しそうに呻いているのが聞こえた。

確か種を植え付けられてるから、毒消しは効かないんだよね。

「この子は運ぶからその方をお願いします」

ビビを抱き上げれば、ふんわりと柔らかいぬいぐるみみたいでちよつとほっこりしてしまう。可愛すぎるでしょうんもー!!

ジタンはスタイナーを引きずっていて、まああんな甲冑のおっさんなんかまともに運べないよなーと、一足先に戻ってからタンタラスの

メンバーに応援を頼んだ。

それから劇場艇に戻ってから、二人は解毒剤を与えられて休ませてあげていて、その間にこれからのことを話し合っていた。

「ガーネットが連れて行かれたんだ！早く助けないと！」

ジタンは姫の救出を訴えるが、怪我した仲間も多いので、下手に動けないと頭領に言われて却下されてしまっていた。

私はそれを横目にタンタラスに持っていたポーションを分けていたのであった。

魔法で治してあげるのも良いんだけど、エーテルを持っていないのでMPが枯渴したら私困っちゃうんで使っていない。

ポーションいっぱい買って良かった。

「こんなにポーションを持っていてるって、ヴェイエラさんて薬屋さんか何かツスカ？」

マーカスさんが倒れてる楽団にポーションを使いながら訊いてきたけど、旅してるからいっぱい買ったんだと答えれば納得したようでした。それ以上訊かなかった。

「とにかく助かったよ。消火もしてくれたあげくにクスリまで分けて貰って。ありがとなヴェイエラ」

「いえいえブランクさん、私もいきなり舞台に入り込んじゃってごめんさい。お芝居おもしろかったですよ。また次の公演を楽しみにしてますね」

「実はオレたち楽団員じゃなく盗賊なんだ」

「あらーびつくり」

「全然驚いた顔してねえぞ」

「正直楽団やってるようなツラには見えなかったんで」

「これでも毎日手入れしているズラ!!」

遠くからシナさんの声が聞こえてみんなで笑った。

よかった、タンタラスと仲良くなれるのはめっちゃ嬉しい。

「まあ、理由は詮索しないでおきます。それよりこの森を抜けることを優先にしないとですからね」

「そうだな……」

ぽっかりと空いた壁の向こうに広がる森を見つめ、全員口を閉ざしてしまった。

誰も生きて出た者が居ないと言われる魔の森……みんな不安でいっぱいだったんだろう。

私はジタンがガーネット姫救出に出るのを待ったために、ビビの寝ている部屋で身体を休めるのであった。

## 魔の森く氷の洞窟

しばらく休んでいたら、ジタンがビビの様子を見に来たようだ。

「ヴィエラもここで休んだのか」

「うん、ベッドを使わせて貰ってるよ」

ベッドに腰掛けながらニコツと微笑んだら、ジタンはにんまり微笑んだ。ジタンって美人や女の子に弱いしね。

それからビビと少し話してから部屋を出て行き、私はビビとお喋りをする。

ビビはずっとガーネット姫を助けられなかったことを悔やんでいて、しゅんと暗くなっていた。

私はヨシヨシと背中を撫でてあげて、ビビの魔法は強いと慰めてあげた。

「だけど、ボクなにもできなくて……」

「じゃあ、次は私を助けてくれれば良いよ。これからこの森を抜けなきゃいけないから、先に進まないといけない。そうなるとうんすと戦わないといけないからね。ビビが居たら心強いよ」

「ボク……」

「大丈夫、ビビは優しくして強い子だよ」

ポンポンとまた背中を撫でていけば、ジタンとスタイナーが部屋に入ってきた。

話を聞いてみると、ガーネット姫救出に行きたいからビビにも力を貸して欲しいとのこと。

もちろん私にも手伝って欲しいと言ってくれた。

「ヴィエラは強いし、回復魔法も使える。居てくれたらものすごく助かるんだ。一緒に来てくれないか」

「いいよ。お姫様を救ったってなれば、恩を売って得できちゃうだろうしね！」

ふふんと微笑んだら、スタイナーにも感謝いたすと頭を下げられた。

私は盗賊じゃないから扱いが丁寧で安心だね。

そうして色々準備を整え、森の奥へと進むことになった。

ジタンはブランクさんから解毒剤をうけとり、シナさんもアイテムを分けてくれた。

「ブランクさんと離れちゃうの寂しい」

そう言ってブランクさんの腕に絡めば、ブランクさんが焦ったような顔をしたので、普段はクールだけどいさこうなると慌てるからあまり耐性ないんだなあと感じた。

「えーヴィエラってブランクみたいなのが好みなの!?!オレの方がイケてない?」

自称モテモテなジタンくんがブランクさんに負けたと感じたのか驚いていて、その反応を見たブランクさんは満足そうに鼻で笑っていた。

わあ、かわいいって思っちゃうのは歳を感じるな……(中身25歳)

「離れたくねえならここに居れば良いさ」

「うーん、お姫様に恩を売っておきたいから行ってきます」

そして何気なくほっぺにチューしていったら、びっくりして後退って頬を押さえていた。ウブ過ぎるのか可愛いかな。

「そんじや行ってきまーす!」

おつきく手を振って「さあ行こう!」とみんなを先導し、ずんずん森の奥へと歩いて行く。

すると背後でジタンが「はあ……」と溜め息を吐いていて、女にモテると自負していたからショックだったんだろうね。

なので、少し歩みを遅らせて隣に並び、キミには麗しのお姫様がいるじゃあないかと背中を叩いた。

「お手並み拝見です」

「……ヴィエラって結構遊び人?」

「さあ、どうでしょう」

ニヒヒと笑ってみたら、遠くでガサリと音がした。

モンスターの気配に皆が警戒態勢に入り、茂みからファングが飛び出してきた。

レイピアを抜いて私は後方に下がり、アシストに入る。  
するとスタイナーはビビを呼んだ。

「ビビ殿！ファイアを頼む！」

「う、うん！」

ビビはファイアを唱え、スタイナーの剣に魔法を集めた。その剣でファンクを斬れば、ファイアの魔法も上乘せしてダメージを与えて一発でファンクを倒してしまった。

「二人の連携技かっこいいね！ビビ凄いじゃん！」

褒めてあげると照れくさそうに帽子を握り、スタイナーの提案だと聞かされた。

スタイナーはおつちよこちよいで頼りないところもあるけど、真面目に騎士をやってきただけあつて経験値があると思う。

「スタイナーさんすごいですね！流石プルートの隊長！」

「なになに、これくらい造作も無い事である。これもビビ殿のお陰で出来る技なのである。そこにいるコソ泥の手なんて借りることなどないのである！」

スタイナーはジタンを睨み付け、ジタンはため息交じりに相手をしてもらえないと言わんばかりに先に進んでいく。

ガーネット姫を助けたいのも個人的な理由だから、スタイナーがいろいろがいがまいが関係ないからね。

私は小走りで追いかけて、そして横の方から出てきたゴブリンにびつくりして「きや」なんて高い声を出してしまった。柄にもないのに。

そんなゴブリンをジタンはダガーで切り捨て、こちらもあるという間に倒してしまった。

私が出る幕がないけど、本来私が居ないのが普通だから、これでいいのだ。むしろこんな雑魚に手間取っていたら先が思いやられる。

「おい貴様！姫様の居所はこの方角で合っているのだろうな！」

確かにスタイナーの言うとおり、こちらが森の主のいる場所なのかよく分からない。

でもなんとなく薄暗さと気味の悪さが強くなっているし、変なツタのようなものがどんどん張り巡らされているから、合っているのかも



しれない。

「足下のツタがどんどん奥へと伸びてる。多分そこに親玉がいると思うんだ」

ジタンも同じ考えだったみたいなので、私もそう思ったと賛同すれば、スタイナーはムムムと唸って着いてくる。

それから何体もモンスターが出てくるのでとにかくやつつけるのだが、みんなが強いので私の出番がホントにありません。

「そういえばヴェイエラ殿はどんな特技があるのであるか？」

私の能力ってタンタラスとジタンくらいにしか見せていないから、確かに何が出来るのか分からないよね。

スタイナーには軽く魔法とレイピアの剣技って言っておいた。

「魔法は相手を状態異常にする物が主かな」

こう言うと完全にサポーターなのだが、レベル的には私が一番威力があるのでアタッカーです。

「この森の主と交えるのであれば、ヴェイエラ殿のお力添えが必要であるな！必ず姫様をお助けせねばならん！」

カチャカチャと鎧を鳴らしながら彼は歩みを早め、ツタの伸びる先へと急ぐ。

するとようやく親玉の巣が見えて、ドデカい花の化け物がそこに居た。

全員が臨戦態勢に入り、その化け物の後ろにガーネット姫が倒れているのも確認できた。スタイナーはビビの魔法を頼み、いきなり魔法剣で攻撃を入れた。

「姫様、今すぐお助けいたします！盗賊の手なぞ借りん!!」

スタイナーはそう言って敵に斬りかかるが、バシンと大きなツタではたかれてこっちに飛ばされ戻ってきた。

流石にボス相手なのでファイア剣一発じゃ全然倒せないようだ。

「そんなこと言ってる場合かよ！コイツは一筋縄じゃいかないようだぜ！」

ジタンも迫り来るツタをよけ、根元にダガーを突き立てる。だがそんな攻撃が全く効いている感じはしなくて、スタイナー同様に叩かれ

てこちらに飛ばされていた。

「ビビ、ファイアをとにかく撃つて！あいつ植物だから炎が苦手だと思う！ビビへの攻撃は私が守るから、撃つことだけに集中して！」

「わ、わかったよお姉さん！ファイア！」

ビビは魔法に専念し、私はビビに迫り来るツタを簡単に切り捨てる。

レベル差があるのでレイピアの剣でも糸を切るようにたやすく切り落とせた。

「えええ、ヴィエラすつげえ……オレも負けてられねえな！」

そんな私の姿をみてジタンも負けじと刃を突き立て、スタイナーも迫り来るツタをいなしながらも根元を攻撃していく。

どんなに小さな攻撃でも、何度も何度もやられていたら傷は大きくなっていき、化け物も苦しみ始めていた。

「頑張つて……このままなら行けそうだよ！」

私はビビを守り、ビビはどんどんファイアを打ち込んでいく。そしてジタンとスタイナーの攻撃で根元もボロボロになり始め、倒すのも時間の問題だ。

だが化け物は花粉を大量にまき散らせて私たちの視界を奪ってしまふ。

私の魔法もステータス異常回復はもってないんで暗闇が治せない。

「みんな、一回離れた方が良い！私目薬持つてるから持つてなかったらこっち来て！」

涙目で鞆をあさつて目薬を見つけ、目を洗う勢いで使つてやったらめちやくちやスツキリした。んんー！効くう。

私の視界がはつきりしたが、ジタンとスタイナーがツタに襲われていて、それをファイアウィップで焼いてあげた。

「ビビ、お目々開けて？ちよこつとしみるぞー」

涙目になっているビビの大きな目にも、洗浄するごとく目薬をたっぷり使つてあげたが、ビビはしみるうって嘆いてた。かわいいな。

「つたく、危なっかしくて見てらんねえな」

その時ブランクさんが颯爽と現れ、加勢してくれる。

ジタン達に迫り来るツタを次々切り落とし、その間に私が駆け寄って目薬を渡した。

「ありがとねブランクさん、心強いよ!」

「フン、退いてな、オレが手本を見せてやる」

そう言つてバツサバツサとツタを切り、そして目薬で復活した二人も加勢に入る。ビビは流石に敵の側にみんながいるからファイアが撃てず、慌てているようだけど、今は魔法攻撃は危険だとちゃんと判断できてエライねと褒めてビビのもとに戻って肩を叩いた。

化け物の根元はどんどん切り刻まれ、痛みに奇声をあげた。

化け物もそうなのだが、三人もツタの攻撃で怪我だらけになつていて、私は後方で回復魔法を唱えた。

「ホワイトフレイム」

三人を白い炎が包み込み、そして傷が癒えていく。力が戻った彼らは更に攻撃を強め根元を切り進み、ついに化け物は力尽きた。

「よっしゃあー!勝ったぜ!!ありがとかなブランク」

「フン、お前もまだまだだな」

ニヤツと微笑んでから、みんなでガーネット姫の介抱を始める。意識はなく、急いで解毒剤を飲ませたからこれで平気だと思うが、まだまだ休ませないといけないのだが、森の様子がおかしくなり、森の主が居た場所からたくさんの花カマキリみたいなモンスターがどんどん湧き出した。

それは我々を取り囲むようににじり寄り、姫様はスタイナーに運ばれてみんなで逃げる。

何処へ逃げるんだ、と言われても、どんどん追いかけてくるからとにかく走り出しているに過ぎない。

「森の様子がおかしい……森が追ってくる……?」

どんどん追いかけてくるモンスターの数が増え、後ろを振り返る暇すらなくなっている。

流星の私もこの量を相手にするのはキツイ物があるわ。

その時我々を先に逃がそうとしているのかジタンが後方を走ってくれていて、最悪な場合おとりになろうと思っていたのかもしれない

い。

私はちよつと横目でそれを見ながら走り続け、ジタンにモンスターの触角が迫ったその時、ブランクが横から体当たりをして捕まった。私はその光景を目にして足を止め、二人の様子を見守る。

そしてブランクは手に持っていた何かを投げ、よく見ると背後のモンスター達はどんどん石化していった。

「ブランクさん！あとでまた会いましょう！」

私は彼が固まる前にそう告げ、光が見える森の出口かと思われる場所まで全速力で駆けた。

出口に出てから数秒後にジタンも転がり出て、そしてまもなく森が石化して中へは入ることが出来なくなってしまった。

ジタンは石化した森の石壁を叩いて、余計なコトしやがってと小さく呟いていた。

「大丈夫、石化しただけなら治せる方法があるはず。死んでないから希望がある」

そう笑えば、ジタンもそうだなと立ち直り、今後のことを話さないと焚き火を起こして話し合いが始まった。

姫様はまだ目が覚めず、のんびりとしたジタンの態度にスタイナーが癪に障ったのか、とにかくジタンに食ってかかった。

私とビビは彼らの事情を知らないので口を閉じてそのやり取りを眺めている。

私たちはたまたま着いてきてしまったただだし、ね。

それから姫様も目を覚まし、アレクサンドリアには戻らないと告げ、とにかくこの霧の立ちこめているこの場所から離れて高原へ行こうと言うことになった。

だがここは高い崖に囲まれていて、簡単には上には登ることが出来ないのである。とにかく身体を休めようと言うことでテントを張り、ゆっくりと休ませて貰った。

次の日、姫様も元気になったみたいで、ようやく周囲の探索が始められるようになった。

「ブランクから貰った地図によると、この周辺に洞窟があるって書か

れている。上へ抜けられるかもしれないから、まずはそこに行ってみよう」

ジタンの指示でこの場を離れ、霧の中を進んでいくとモンスターに出くわす。

ジタンが先陣を切り、スタイナーが続く。そしてビビのファイア……うんうん、いい連携だ。

「姫様は白魔法がお得意で？」

「ええ、少しですが」

この時召喚の文字が出ているのであるが、今の彼女のMPでは到底使うことが出来ない。

初見の方々はなんだよ使わせろよ！って悔しがってるだろうね。

「私も後方支援が得意なので、前線は彼らに任せましょう」

たまーにファイアウィップで焼いてあげたりするが、ホントにその程度。

今の彼らは私がめっちゃくちゃ強いだなんて思っていないだろう。うひひ。

「さて、洞窟が見えてきたよ。なんか寒くなってきたね」

洞窟を目の前にして、めっちゃくちゃ寒くてびっくりした。

踊り子のような格好の私は間違いなく一番薄着です。寒い死ぬ。

「ヴィエラのその格好だと凍死しちまいそうだな……目の保養には良いんだけど……」

最後に本音を入れてくるのがジタンの良いところである。

流石にジヨブチェンジで温かい格好になっておくか。

ローブ系がいいな、何にしようかな。

「あの、氷の洞窟ってしってる？」

突然ビビが口を開き、ジタンも氷の洞窟は名前だけ知っていると言っていた。

「おじいちゃんから聞いただけなんだけど、その洞窟は霧の下から上まで続いている洞窟なんだって」

かなり優良な情報を得た私たちは、この氷の洞窟を進むことになった。

中に入れば氷の花々が宝石のように輝き、光を放っている。本当に美しい世界に私もうっとりした。

「へっくしーああ、何にジヨブチェンジしよ……」

結局まだ決めずに居て、寒さにくしやみを放ってしまった。

さみいー！うーん、初めてのジヨブチェンジだけど、回復も攻撃も出来る赤魔道士にしよう。

セージや錬金術師も良かったのだけれど、多分威力が強すぎるだろうから今はまだやめておこうと思う。

メテオやフレア、アルテムブロウとかめっちゃ強いを使うにはまだ早い段階だし、この世界には赤魔道士がないからね。

「ジヨブチェンジ、赤魔道士」

すると身体に光が集まり始め、踊り子のような格好から赤いローブの魔法剣士へと姿を変えた。

武器はレイピアのままだから前戦の戦いも出来る。うん、いいね。

「えー！すげえ魔法だ！服が着替えられるのは便利だな」

「ちよつと特殊な魔法なんだ。服装によつて戦い方も変わるから、さっきのファイアウィップももう使えない。今はケアルと下級黒魔法とかまたステータス異常系かな」

「頼もしいぜ。それじゃあ進もう」

寒さも耐えられる程度になり、どんどん奥へと進んでいく。

その途中壁の中に閉じ込められている宝箱に気が付いて、ビビのファイアで溶かして入手していく。冒険しているって感じ。

その時強い冷たい風が吹き、モンスターが現れた。

マンモスの鼻がないバージョンのような魔物は長い牙を持っていて、しゃくりあげるような攻撃や爪の攻撃、ブリザドも放ってくる。

凍って滑る足場に苦戦しつつ、モンスターに攻撃を入れていき、私もファイアを唱えてやった。

そしたら結構な爆発になってしまって、モンスターは吹っ飛び、崖下へと落下してしまった。

「……お姉さん、今のファイア凄い威力だったね」

「えつとね、ちよつと手元が狂ったんだ。うん」

ビビの強みである黒魔法を奪っちゃいかん。次からはスリプルやポイズンで応戦していき、洞窟をどんどん進んでいった。

途中道が二つに分かれていて、風の弱い方へと進めば氷付けのモーグリがいたので、ビビのファイアで溶かしてあげた。

すると最初はとても攻撃的な言葉を放ってきたのだが、氷を溶かしてくれたことに気が付いてすぐにお礼を言ってくる。そして自分を氷付けにしたやつの特徴を教えてもらってから元の道に戻り、吹雪く先へと進んでいった。

でも流石にその吹雪の寒さには耐えられず、ビビは転んで下のくぼみに落っこちてしまう。

スタイナーも様子を見に言ったのだが、本人もくぼみに落下し動かなくなる。

ジタンは溜め息を吐いて二人を起こしに行くが全く起きる気配がない。

「姫様、この吹雪で寝ると死にますよー」

「でも、目が、開けていられ……な……」

私の隣にいたガーネット姫もついに睡魔に耐えられず眠りに落ちてしまった。

そして残った私は眠気はないが寒くて辛い。

ジタンがガーネット姫まで眠ってしまったことに焦り始めたが、本人も謎の睡魔に襲われて膝をついた。

「こんなところで……眠っている場合じゃ……」

倒れるジタンを眺めつつ寒いなど腕をさする。こんなものじゃあつたまらないよさむいよ！

寒さに縮こまっていると、チリンと鈴のような音が聞こえてきた。

その音にジタンも反応し、何とか目覚めてその音の方を見つめる。

「この寒さと眠気は誰かが手を引いているかもしれないね」

「……よし、いくぞ」

私とジタンは先へと進み、凍り付いた滝の麓までやってきた。

その時、鈴の音を聞いて上を見上げると、ビビの姿に似た何かがある。ここにいて、目の前まで降りてきた。

「そのまま眠っていけば苦しまずに済んだものを」

ビビに似た何か……黒のワルツ一号と呼ばれる黒魔道士だ。ここでは自己紹介はしてくれず、そのまま戦闘に入るようだ。

私はレイピアを抜いて一歩下がり、前線はジタンに任せた。

「いでよ、氷の巨人シリオン」

一号はシリオンという大きな氷の翼のついた魚のような化け物を生み出し、二対二の戦いが始まった。

シリオンは翼でジタンをはたき、私はファイアで一号を攻撃する。だけど間違いないクワンパンになってしまっているので、あえて外してちよつと当てる程度にしている。

「小娘……威力はとんでもないが当てられねば意味は無いぞ！」

「下手くそなんですー」

一気に距離を詰めてレイピア振るうが、翼のついた一号は空を飛んで上へと逃げてしまった。

だけど私もヴェイエラになって高くジャンプできるから、一号の居るところまで一気にまたも距離を詰められた。

「くつ、はやい！」

「はいはい、リングにお戻りくださいーい」

蹴りを入れて転がし、背後に回ってもう一発蹴ってあげた。

ステータス高いから普通の蹴りもつよいみたい。

そして高所からたたき落とすときに背中羽を両方とも切り取っておいたので、飛ぶことが出来ず一号は氷の床にたたきつけられた。

私は華麗に着地し、ふふんと鼻を鳴らした。

「ぐ……シリオン、後は任せたぞ……」

落下ダメージが相当なものだったみたいで、一号は死んでしまう。

その瞬間シリオンが津波の準備を始めたので、上手くいくかは分からないがジタンの前に立ち、バリアを張る。

そしてまもなくシリオンの起こした津波が押し寄せたが、私の張ったバリアのお陰で全くダメージは無かった。

「助かったぜー！」

「そんじゃ、たたみかけるぞー！」



私はシリオンの翼を切り落とし、それもういちよ！と両方切断する。そしてジタンに胸のコアを狙うように指示をした。

多分そこが弱点でしょう。たぶん。

「うをおおおお!!」

翼をもがれたシリオンは為す術もなく、ジタンの刃を受けて倒れた。

シリオンはガラスが砕けるかのように散り散りになり、そして吹雪で固まっていた滝は溶け出し流れ始めたのだった。

「おわったね！おつかれ！」

「ヴィエラのお陰だ、ありがとう」

「どういたしまして、さて皆さんは無事かしら」

倒れている一号に雪をかぶせて隠し、二人で急いで戻ればみんなが目を覚ましたようで身を起こしているところだった。

何かあったのか聞かれたけど、なんかみんな寝ちゃったから、先に偵察に行つてたんだと言つて黒のワルツ一号のことは誤魔化して先に進んでいく。

ようやく洞窟の出口に出られて、新鮮な空気と適度な温度にぐぐつと身体を伸ばした。

ああ。綺麗な景色、ああ、寒くない。

「やつと霧の上に出られましたね！やはり青空の下が一番！」

ガーネット姫は感激して胸元で手を握りながら空を仰ぐ。

魔の森に落ちたりしてから青い空を見てないから随分久しぶりになった気がする。

「あそこに村が見えるぜ」

ジタンが指さす方向には小さな村があった。

「ダリ村だね。聞いたところだと農業が主な村だったはずなのに、畑が見当たらないね」

私の言葉でジタンはダリ村を思い出したようで、確かに、と呟いた。

それからガーネット姫が家出をしている最中なので、姫だと言うことを気付かれてしまつてはいけないと、ジタンに待ったをかけられた。

ていうことで呼び名もガーネットからダガーへと変更になり、言葉遣いももつと柔らかくなるように練習しよう!と提案された。

スタイナーは相変わらず城に戻りましょう!と言うが、ダガーは聞き入れずダリ村へと進み始めるのであった。

## ダリの村

ダリ村を訪れ、まだ昼間なのだがまず宿に入ることになった。

宿屋のオジサンは昼間つから寝ていて、仕事をやる気が無いのがうかがえる。

まあ、こんな田舎に来訪者があることはあまりないのだろうから、宿を使う人もすくないのだろう。

ジタンはオジサンを起こし、宿に泊りたいと言うことを伝えるのだが、オジサンがビビを見つめて固まってしまっていた。

ジタンは寝ぼけている、もしくはダガーに見とれてしまったと思いちよつと笑っていたが、これはビビを見て驚いていたのだ。

私はそのことに気が付いているけど、暖炉の上でくつろいでいる猫を見つめて悟られないようにした。

「あ、いえ、お部屋は奥になります。どうぞどうぞ……」

オジサンは誤魔化して部屋の場所を示し、ダガーは驚いたように小さく声を漏らした。

「あの、ジタン？わたくしの泊る部屋はどちらでしょうか？」

姫様だから、まさか同室になるとは思っていなかったようでそんなことを言っていて、ジタンもこんな田舎で個別の部屋を願うのは無理だよと告げ中へ招く。

「ダガー、これも勉強になるね。どうせ長旅していれば野宿になったりするし、こういう小さな街も少くない。時には我慢も大切だよ。大丈夫、私が居るから安心して？」

「そう、ですね。わたくしの考えが未熟でしたわ」

「言葉遣いも私と話していれば慣れてくるだろうし、先の話もかねて練習しよう」

「はい」

みんなが中に入って扉を閉め、本題に入った。

ジタンはダガーに何処へ行くつもりだったのか問うと、隣国であるリンドブルムに行こうとしていたと答えた。

家出すると言うだけではなく、何か深い事情があったことをなんと

なく悟らせるが、まさか本人自らが自分の国から出てしまおうと考えていたとはジタンでも思っていなかったようだ。

飛空艇のない今は国境を歩いて越えなければならず、そうなればダガーが見つかってしまう確率も上がる。

第一にゲートパスを持っていないので国境を越えるのはかなり難しいことなので、忍び込んで行くとなるとかなり骨が折れるだろう。

流星のジタンも答えが見つからずに悩んでしまっていた。

「事情はまだ話せませんが、わたくしにはやらなければならぬことがあるのです……だから、どうか……」

ダガーは辛そうに訴え、ジタンは必ずリンドブルムに連れて行くと言ってくれてダガーも満足そうに微笑んだ。

だがそこにスタイナーが割って入って、ジタンを信用するなどダガーに主張する。

やつを信用すれば危険な目に遭うかもしれない、何があつたかは知りませんがとにかく城に戻りましょう!! ってスタイナーはしつこい。

流星に私も口を挟ませてもらった。

「彼女自身が何かを決断してここまで来ているんだから、ハイハイ分かりましたで城に戻るわけありませんよスタイナーさん。まずはアレクサンドリアに戻るより、彼女を守って寄り添うことも必要なのでは？」

連れて戻りたいのだろうけど、彼女の意見を聞いてあげていないのも可哀想なのです。

まだ世間知らずで王室が嫌で飛び出しちゃった反抗期に見えてるんだろう。

こんな真剣な顔をしているのに、なんで理由を聞いてあげないんだろうか。

……いや、言つたところであのブラネ様がそんなことはありえない! というのだろう。

今は暴君のような女王になってしまったが、本当は心優しい素敵なすばらしい女王だったブラネ。誰からも愛されていたブラネ……だからこそ、変わってしまったブラネに対してもダガーは諦めずにつ

と訴え続けるんだ。

「ヴィエラ殿には悪いがそれは出来ぬ！ブラネ様からのご命令なのであります！」

「で、おっさんはどうやって城に戻ろうって言うんだ？」

ジタンにそう言われると、結局方法は見つかっていないので、城に戻ることに出来ない状態なのであった。

ふと気が付くとビビはいつの間にかベッドで寝ていて、気持ちよさそうに寝息を立てている。

あんまりにも可愛くってクスリと微笑んだが、よく考えるとこの宿はベッドが4つしかない。

現在私たちは5人だ……足りないぞ!!

「……しかたない、私はまだ元気だからモンスター狩りでも行ってくるわ」

女の子を一人おいていく事になるのだが、優秀な騎士様がいるから問題は無いだろう。

「戦って疲れてるだろう、休んだ方が良い。オレと添い寝で問題なしだ！」

ジタンがそんなこと言ってくるので私は彼に近付き、耳元で小さく忠告しておいた。

「ダガーの目の前で他の女と添い寝ですか……後で後悔しても知らないよ……?」

ダガーに惚れたからついてきていた彼にとって、それは結構まずいことである。

ダガーの目の前で他の女性と添い寝……軽い男って見なされるだろうし正直周りからの感度的なメリットはないだろう。

「どうする?それでも私と寝る?」

ちよつと青ざめながら狩りにいってらっしゃいと弱々しく答えていたので、声を出して笑ってしまった。

「やっぱりヴィエラって遊び人だろ……」

「さあ、どうでしょー」

いたずらげにほほえみながら「気が済んだら戻るからみんな休んで

て」と告げて宿を出た。

少し間をおいてから小窓を覗き込んで部屋の様子をみてみれば、魔の森を抜けてから休んではいなかったみんなだから、なんだかんだ疲れが溜まっていたようで、すんなり眠りについたようだ。

私はレベル差もあつたからちよつとしたハイキングに来たつて感じだろうからまだ全然疲れてない。

ここで休んでいる間に、とつさに使えるジョブや緊急時のジョブを考えたり、先のことも含めて私自身も作戦を練るのも悪くはない。

私は村から離れてモンスターと戯れながら色々と考えを巡らせる。

例えばボスが思いも寄らない攻撃をして、みんなが危険にさらされたとき、私は何が出来るのか。

今は赤魔道士になっているから、高出力な魔法は放てない。レベル差があると言っても、私が15だから……多分差は10くらいだと思われる。

こうやって表に出てモンスター狩りをしているから少ないけれども経験値が入ってきているので、ジタン達に追いつかれることは無いだろう。

でもレベル差10くらいではたいした事は出来ないと思う。

やはり少しでもレベルを上げて、危険を感じ取ったらワンパンで沈める……つてのがいいだろう。

一日一回しか出来ないジョブチェンジだから、大切にしていかなないと。

とりあえず赤魔道士よりも精霊術士の方が扱いも楽だったので、基本的な操作はそのジョブを使いたい。

もし方が一大ダメージを与えなければならぬときや、カーゴシツプが墜落なんて事になった場合は、召喚士になってバハムートと呼ばれるのが一番安心かもしれない。

ヴァルフアーレは腕がないので、背負うことは出来ても掴むことは出来ないし、両手が空いていて空も飛べて力持ちとなれば、バハムートが一番だろう。

一度出してどういふ風に指示を出せるのかやってみたいところだ

が、まだまだ24時間経つには時間がかかる。

今の段階だと召喚士の練習は出来そうもない。

モンスター狩りを止め、高原にまたも死屍累々の状態で私は村に戻ってきた。

宿屋の小窓から覗いてみると、まだまだお休み中のようだ。

私は飲み屋に入り、机を貸して欲しいと言えばすんなりとOKが貰えた。

まだ昼間だから店は準備中なので何も出せませんが、と、店番している女の子に言われたが、場所を借りているお金だけは払わせて貰うわと100ギル置いた。

「え、いえ、まだお店も開店していないのにお金なんて」

「開店していないからこそ、です。場所をお借りしているのですから、その分のお金を受け取ってください。ついでに紙と書くものを貸していただけると助かるのですが」

そういうと、女の子はお金を受け取り、紙と羽根ペンを渡してくれた。

めちやくちやありがたいわ。

まずはとっさの火力を求めたジョブチェンジ枠

セージ（ギガフレア、アルテマブロー）

錬金術師（フレア、メテオ）

闘士（バックドラフト）

狩人（モンスター相手ならサイドワインダー、アルテマショット）

召喚士（バハムート、アニマ）

：てっ感じになるけど、召喚獣は使っているところを見られてしまうと後々抽出される恐れがあるからやはり危険だ。

本当に切羽詰まったらバハムートを呼ぼう。

魔法も強いけど、物理攻撃も自身のダメージを受けるタイプであればかなり火力が増す。闘士のバックドラフトはよく使ったもんだ。カンスト行けるし豪快で好きだったし。

狩人は弓の攻撃になるけど、モンスターに対してはかなり特攻になるジョブだ。遠くからでも狙えるし、大体の敵がモンスターだから、

そういうのを考えればかなり強い。

いやまああ、魔法が一番楽ではあるけど、近くに仲間が居た場合は一緒に食らうことになってしまうので、魔法も使い方次第だ。

こういうのは実践してみないと分からないことばかりだから、書いた内容は小さく折りたたんで異次元ポツケに突っ込んで置いた。

さて、そろそろ皆さん目が覚めたかな？

宿に戻ってみれば、ビビが目を覚ましていたようだ。

「おはよ、ビビ」

「おはようお姉さん」

くいくいっと帽子を整え、風車を見に行つてくると言つてビビは出て行き、その音でスタイナーが目を覚ました。

「ヴィエラ殿、戻られたのだな」

「ええ、モンスター狩りも飽きちゃつてね。そろそろ私も休んでおかないと後が困ると思つたのもあるんですけど」

よいしよとビビの寝ていたベッドに横になり、寝る体勢を取つた。ダガーも慣れない旅だったからかまだ寝ていて、ジタンは特にそういうわけでもないのだろうがめっちゃ寝てる。休めるときに休んどこうっていうことなのかな？

「それじゃ、おやすみなさい」

私はそう言つて目を閉じ、以外と疲れていたのかすんなりと夢の世界に旅立つたのであった。

目が覚めたらジタンだけ部屋に居て、置かれている本とかを眺めていた。

「じたあん、おはよお」

ふ抜けた声で挨拶すれば、もう起きるのか？と聞かれ、多分3時間くらいしか寝ていないのかもしれないけど、疲れは取れていてスッキリしている。

元々そんなに疲れていなかったからだろうか。

「げんきげんきい」

「ちよこっつと寝ぼけている感じはあるな」

寝起きってそんなもんよ。



するとジタンは三人を探しに行くつて宿を出て、その間に身なりを整えた。

しばらくするとジタンはダガーを連れて戻ってきて、ビビには声をかけたからすぐ来るだろうと言った。

ジタンはダガーに村の感想を聞いてみて、彼女は初めて見るものがいっぱいで、そしてここまで自由に歩いたのは初めてだったと楽しそうに話した。

私が寝ている間に村の娘とお喋りして、口調の練習をしたんだという。

確かに今私と話していて、時折丁寧になるけど、すぐに町娘のような話し方に直していた。

「これならダガーが姫だなんて分からないね」

「ふふ、わたしもつとがんばるわ」

ニコツと微笑んだダガーだったが、そう言えば、と言葉を続ける。

「この村には大人が見当たらなかったわ。畑仕事をしているおばあさんと、この宿の方くらいしか居なかったように見えました」

そう、このダリ村には子供の姿しか見えないのだった。大人は一体どこに居るのだろうか。

「昔は一面の畑で働いていたんだがなあ」

「畑は小さいものしかなかったわ」

「ここまで急に畑仕事を無くしたなぞが解けない。そして大人はどこに居るのだろうか。」

ジタンはこの村の異様な雰囲気にか何か怪しいと感じ、長居は無用だろうと判断した。

変なことに巻き込まれるのはなるべく避けたいからね。

「ビビが戻ったらすぐに出発しよう」

「……スタイナーはどうするの?」

とつても置いていく気のジタンさん。

「城の連中はダガーを探しているんだ、南ゲートを通るにしてもダガーを隠せば問題ない!おっさんがいなくてもオレさえいれば大丈夫ってコトさ!」

そんなこと言っていて、ダガーは心配しつつも連れ戻そうとするス  
タイナーだから南ゲートを通るときに邪魔されてしまっても困ると  
思っているのだろう。

ちよつとうつむいてしまった。

「そうだ、ビビを待っている間に、オレの盗みの話を聞かせてやるよ！  
ヴィエラも聞きたいだろ？」

「ふぁーききたーい」

半分微睡みながらそう言いつつ、時計に目をやる。

そろそろ24時間経ったかなあ……

「ジヨブチェンジ、精霊術士」

唱えてみるも、やはり時間が経っていないんで変われませんでし  
た。

腕時計か懐中時計が欲しい。マジで欲しい。

「ゴメン村の散策行ってくる！とけいほしい！」

ジタンの話を聞くのをやめて私は宿を飛び出していった。

適当にお店に入って腕時計か懐中時計がないか聞いたが、高価なも  
のらしくて扱いはないと言われてしまった。

リンドブルムに行くまでは時計はお預けだな……と、外で肩を落と  
していたら、宿から二人が出てきて、ビビを見なかったかと聞かれた。

確かにみてはいない。

「声かけたはずなのに来てないっておかしいよな……どこに居るんだ  
？」

と、言うことでビビの搜索が開始された。

小さな畑をぐるっと回ったり、ジャンプして家の上に登っても何も  
見えない。

一面の草原のみで、ビビは居ない。まあ、居所は知ってますけどね。

その時、ジタンがビビの声がした！と私とダガーを呼び、とある家  
の横に行けば、足下の筒からビビの声が聞こえた。

いきなり連れてこられて、ここから出るなって言われて戸惑ってい  
るようだ。我々もすぐに助けに行くということになり、地下への通路  
を探し始める。

でもそんなの案外簡単で、その家の中に入ってみれば、怪しい蓋が床にあるではないか。

「いかにも地下に行けますって感じだねえ」

「さあ行ってみよう」

第一号で私が入り、はしごも使わずに飛び降りた。ヴィエラ族万歳。

ジタンが次に降り、最後にダガーが降りてきた。

随分怪しげな洞窟だ、何を作っているのだろうねえ。ひひひ。

奥に進めば、何か話し声が聞こえてきて私たちは息を潜める。

村に居なかった大人は地下にいたようだった。

「これ、何で動いているんだろう……」

「これ見つけたの村長さんの弟だっていうじゃん？喧嘩も終わったからオレたちの仲間入りするんだとか」

「まあ人出も足りないからいいんじゃない？とりあえずこれを箱に詰めよう」

「城に送れば城の連中が判断するだろうさ」

すると彼らは移動するらしく足音がし始めたので、一旦様子見で引こうと思ったのだが、ジタンが村人に殴りかかりそうだったのでダガーが引つ張り三人で道を引き返していく。

ダガーの急な行動にびっくりしつつ理由を聞いてみたら、近くに置いてあった大きな樽に描かれた模様を、城で見たことがあると言ったのだ。

つまり、この村はアレクサンドリア城に関係する何かを作っていると言っているのが分かった。

だけどこの怪しい感じ、日用品とかを作っているには見えないなにか気味の悪さを感じた。

「さて、調査してみましょかね」

赤魔道士のとんがり帽子をくいつとあげてにんまりと微笑んだら、ジタンにヴィエラは楽しそうだな……とちよつと呆れられた。

「こういう謎な場所や秘密を探るってワクワクしない？んふふ」

「ヴィエラって意外と盗賊が合ってるかもしれないな」

「お宝探しって楽しいから、確かに盗賊はいいかも！ひひひ」

二人と違って元気になるん先へ進んでいく。

物置のように乱雑に箱が積まれていたり、荒れていた洞窟内だが、奥へ行くにつれてどんどん広くなっていた。

とある部屋に入ったときシクシクと泣く声が聞こえ、箱の中に詰められてしまっているビビを発見した。

「何でこんな箱に……」

ジタンが困惑しつつ中から出してあげて、詳しく事情を聞いた。

するといきなり男の人に連れてこられ、「動くな」と言われて怖くて動けなくなってしまうらしい。

「それと……何で外に居たんだ、カーゴシップはまだ来ていないのにつて聞かれたんだ。ボク何のことなのか分からなくて黙っていたんだけど、今日の分に入れておこうって……」

全員その言葉の意味が分からず首をかしげていたが、私は分かっているので分からないふりをして同じく首をかしげた。

「とりあえずビビが無事で良かったぜ」

「そうだね、とにかく無事で良かった。それでビビを箱に詰めたやつをとっちめよう」

私がシユシユとジャブを打つまねをして、ぶん殴る意志を見せたらジタンが笑っていた。

なんだよ痛くなさそうってか。

「ビビも黙ってるだけじゃダメだ、いざという時は自分から大声でいってやんねえと！例えば……いい加減にしろよなコノヤロー！とか」

ジタンは引つ込み思案なビビを少しでも自信が持てて、自分の言いたいことを言えるようになってほしいから、色々と教えてあげた。

「それに氷の洞窟から出たとき、ジタンがスタイナーさんと言い合いになったとき、二人ともやめて！って言えたじゃん。そんな感じで何かあったら声を出していい。あとは勇気だけだ」

ビビはもう出来てるんだよ、大丈夫って背中を撫でてあげたらウンと頷いた。

「ところでビビ、この先の様子も気になるから見に行きたいんだけどさ……ビビは嫌かもしれないんだけど……」

ジタンは謎の機械が置かれている場所を見ながらそう言い、ビビもここがなんなのか気になるから調べようと言うことになった。

私は細かい場所は知らないからるん気分で見えよう色々見てみる。

見たこともない機械から、ぬいぐるみのようなツギハギの卵がどんどん出てきていて、これがなんなのかはさっぱり分からない。

これだけ見ると卵ぬいぐるみを作っている工場なのだが、それにしでは雰囲気暗い。夢が無さそう。

そしてとある扉の隙間からは、冷たい霧が流れ出している。

異様な雰囲気だ。ここは高地のダリ村……霧からは上の場所。なのにここから霧が流れ出しているのはどうしてなのだろう。

「開けてみるか」

「そうだねえ、開けてみよっか。開けた瞬間お化けが出たりして」

「ええっお化け……!？」

脅かすようにそう言ったら、ビビは縮こまってしまつて、半分嘘だよと笑つてあげた。

「半分は……本当なのですわね」

ダガーも苦笑いして、私は自らの鼻を指さしてクンクンと匂いを嗅ぐ。

カビ臭い、木箱の匂い、霧の湿っぽいにおいがする。

「ゴーストさんの気配がしますよー」

扉を開ければ言ったとおりにゴーストが現れて襲いかかってくる。

ビビがとっさにファイアを唱え、ジタンはダガーを自分の後ろにやっつけてからゴーストへと駆けだした。

ふわりと上へと浮かんだゴーストだったが、ジタンの身の軽さには意味を成さず、ナイフでさっくりやられてしまいました。

「やー、お強い頼りになるー」

小さく拍手しながら、ビビはやっぱり強いねーとポンポン背中を叩いた。

これがこの子の自身になっていけば良いな。

そしてその扉の中には更に見たことのない機械が置かれている。

その機械は霧を吸い込んでいるようで、その機械の先には卵が出てきていたということは、この霧から卵を作っているのだらうと考えられた。

「妙な機械だな……」

「とりあえず卵の後を追ってみようよ、先に行けば何か分かるかも」

私は先へ急ごうと促し、進んでいくとチョコボが滑車を回していた。

これでコンベヤーを回していたんだろう。そこどうにか機械化できなかつたのかよと突っ込みたかつたが、まあ置いといて……

その先にある機械も見たことのない形状をしていて、ものすごく異色な気配が漂った。

なにせ、テラの技術で作られているのだから、異色な見た目なのはあたりまえなのだから。

秘密の工場探索を続けながらコンベヤーの先へ進めば、その卵が孵っているようで、更に先へ急ぐ。

「一体何が孵っているんだ？」

「うーん、チョコボかな？」

私はとぼけたようにそう言うが、ジタンはチョコボの卵はあんなのじゃないと否定し、ついに卵の正体を目の当たりにした。

「なに、これ……!!」

そこには卵から孵り、自動で運ばれていくビビに似たモノの姿……人形のようなそれが次々と運ばれていく。

ジタンはビビにそっくりだ、と言う言葉を飲み込み口を結んでいて、ビビは自分と似たそれを見ながらぶるぶると震えていた。

ダガーもアレクサンドリアに運ばれている以上、ブラネ女王の下に作られたというのに薄々気が付いてしまって呆然とその人形を見つめて居る。

すると後ろの方から誰かが来る気配がして、困惑しているビビとダガーをつれてどこかに隠れることになった。

とはいえ、隠れるところなんてないので、人形達の入っていく方へ

自分たちも入って身を隠そうとしたが、上から降ってきた箱にジタンがすっぽりと入ってしまい、梱包完了してしまう(笑)

そのままラインを流れていき、人形に押されてビビもダガーも同じように箱詰めされて、私も遅れないように箱に入ってこの地下から脱出するのだった。

みんなの入った箱入りの樽はどこかへと運ばれ、気温が変わったのをなんとなく感じられたのでおそらく外に出たのかもしれない。

だけど狭い箱の中で武器を手を取ることは出来ない。魔法も危険なので無闇に放つことも出来ない。さてどうしたもんか。

周りには人の気配もあって話し声もするし、ジタン達と相談することも出来ない。

だけど、周りの人が急に慌てだし、逃げようという声が聞こえた。記憶が正しければスタイナーさんが走ってきたのではないか？

「うむむむ、あからさまに怪しい!」

当たりです。やはりスタイナーさんです。

「スタイナーさーん!助けてー!出してくださいさーい!」

私は樽の側にいるであろうスタイナーさんに助けを求めれば、「ヴィエラ殿?!」と返事を返してくれた。

「色々あって、ダガーもみんなもこの樽の中に閉じ込められちゃったの!開けてー!」

そして私の訴えの後にジタンたちも早く早くと急かした。

狭いんだもん箱の中……このまま居たら酸欠になっちゃう。

「姫様!今お助けいたしますぞ!!」

こうしてようやく樽から脱出ができ、樽の横にはカーゴシップが停まっている。

もうそろそろ出発になるだろうし、私は赤魔道士のままなのだが、今ジョブチェンジをしてしまうといざという時に他のジョブに変わることができない。

おそらくもう24時間は経っているだろうから、何かあるまでは赤魔道士でいこうか。

「姫様これは一体どういふことなのですか!まさかこの男が何か企ん

で……」

スタイナーさんは箱詰め理由をジタンのせいかと思つて怒り始めるが

、静かにしなさい！とダガーに一蹴されてしまった。

確かに今は一番困惑しているビビに気を遣つてあげたいよね。

「なあおっさん、この飛空艇の行き先知ってるか？」

ジタンはビビを励ましながらも、横の飛空艇の行き先をスタイナーさんに聞く。

もちろん我々もこの艇がアレクサンドリアに向かうのはなんとなく察しては居る。

だけどスタイナーさんは行き先がリンドブルムだと言つた。

「あ、あの岩小屋の老人にこのカーゴシップがリンドブルムに行くと聞いたのである！間違いないのである！」

「なんかあやしいな」

ジタンも分かりながらも質問していたのだが、アレクサンドリアに連れ戻そうとするスタイナーさんが、リンドブルムに行く艇の事を教えてくれるはず無いだろうし、やっぱり嘘ついてるなど確信したのだろうか。

——その時、何かの影があちこちに移動してこちらに急接近し、そして目の前に姿を現した。

翼を生やした女形の黒魔道士。バサバサと羽ばたいて軽やかに宙に浮いている。

「女王陛下がお待ちだ！」

「えーと、自己紹介もなくいきなりそれはないんじゃないかなー」

私はゆっくりレイピアを抜いて戦闘態勢を取る。

ジタンはこの黒のワルツが城からの使いだったことに気が付いて、氷の洞窟で戦つた一号の事をみんなに説明した。

「一号を倒したのはお前か。我が名は黒のワルツ二号！一号よりも全ての能力が上……抵抗しても無駄だ、姫よおとなしく従うのだ！」

「姫様に対して従うのだ！は失礼ですねー。よってフルボッコの刑でしよう」



私はのんきにそう笑えば、癩に障ったのか二号がファイアを放つてくる。

おっとつと、爆発を避ければ、いつの間にか背後に二号が居てブリザドを放ってきた。

瞬間移動はめんどうくさいな。

「ヴィエラー！」

その放たれたブリザドをジタンがナイフで弾いてくれて、私に被害はお呼ばなかった。

女の子をかばうのはジタンの専売特許よな。

「無礼な奴め！このスタイナーが相手である！」

スタイナーさんも二号に斬りかかるが、瞬間移動をされて全く攻撃が当たらない。

ゲームだと普通に当たるけど、こうやって現実になつてしまうと結構苦戦する敵なんだな。

「姫、こやつらを始末するまで大人しくしている！」

二号は避けつつダガーにスリプルをかけ、眠らせてしまう。

まあ、回復役を眠らされても私が赤魔道士なのでケアル使えるから問題はありません。

「コイツ！当たらないぞ！」

「うぬぬちよこまかと!!」

「あわわ！」

二号の動きに翻弄されてみんなの攻撃が当たらない。ビビも魔法を放つが避けられてしまつていてこれじゃ埒があかない。

試しに私が普通に瞬間移動している二号を追いかけてみたら、ヴィエラの脚力で距離が詰められ、移動される場所を予測して行けば何とかなりそうだ。

「この……何て素早さだ!!」

二号は表情をゆがめ、私はようやく二号の袖を掴んだ。

「そーりゃー！」

そして思いつきりかかと落として背中を打ち、地面に叩き付けてやった。

一号の時も蹴りだったな。

「ナイスヴィエラ！」

ジタンはその好機を逃さず、片翼を落としてやった。

飛べなくなつた二号は途端に動きが鈍くなり、そしてスタイナーさんのサンダー魔法剣の前に沈んでいった。

「う、ん」

「あ、ダガーお早いお目覚めですね」

弱めに魔法をかけていたのか倒したから目が覚めたのかよく分からんがダガーは目を覚まし、倒れている二号を見て眉をひそめる。

「……本当にお母様が放つた者なのでしょうか……」

城に戻れ！と言っていたと言うことはそういうことなんだろうが、あんな狂暴な者を使うつてのは信じがたいだろう。

スタイナーさんもブラネ女王を信じているから、あんなおかしな者が配下に居る何て思えなかつたんだろう。

「姫様が姫様だと知り、悪さを企てた者に違いありません！」

スタイナーはそう言うが、ジタンはダガーの努力を教えてやり、ダガーが姫だと言うことは誰にも知られていないと言った。

「うん、ダガーはかなり話し方もくだけてきたもんね。それに、悪さを企てるつていっても、人の居るようなトコ通つてないし、この村も大人が全く出歩いてないし、誰もダガーに気が付いてないと思うよ」

店も子供しか居ないじゃんね。

「ヴィエラの言うとおりだぜ。それよりおっさんの方が『姫様ー』っていつて走り回つてるんだからバラしてんのおっさんじゃねえか」

そしたらスタイナーさんも流石に自覚したららしく言い返せず地団駄踏んでいたが、ジタンは気にせずこの先の話を進める。

「国境越えなんだけどさ、これに乗せて貰おうと思うんだ」

ジタンはカーゴシップを指さし、ダガーも飛空艇ならリンドブルムもすぐだと頷いた。

「乗せて貰えるか頼んでくるから、みんな待つてくれ」

そう言うジタンだったが、スタイナーさんが自分が頼んでくると言い出した。

姫様のためを想ってである！とかいってカーゴシップに向かっていき、あれほどまでに城に戻れと煩かったのに、あの態度はおかしい。「スタイナー……あれほどまでにリンドブルムに行くことを反対していたのに……」

ダガーも流石に信じられなかったみたいで目を細め、ジタンもうんと頷いた。

「この飛空艇は本当にリンドブルムに行くのでしょいか」

「間違いなくアレクサンドリアだろうな」

「では、どうしてジタンも乗ろうと言ったの？」

ダガーの問いに、ジタンはにんまりと微笑み、何とかするってと言う。

彼は盗賊だから、艇を乗っ取ろうというのがなんとなく分かって私も笑ってしまった。

「ねえ……ジタン、お姉さん……」

ビビは突然私とジタンを呼んだ。

そして地下で作られていた人形が自分と似ていた？と質問してきて、さてどう答えたもんか。

「ちよつとは似てたかもな、でも人形は人形だからな」

ジタンはそう言い、私はそうだね、と同じく似ていたと言う。

「似てるけどあっちの方が大きいし、ビビのほうが可愛いけどね」

「……ボクかわいいかなあ……」

「かわいいよおおお」

初めて会ったときみたいにギューツと抱きしめてあげれば、わたわたと手をばたつかせて困っていたので、ふふつと微笑んでしまった。その時、カーゴシップのエンジンか掛かり始め、飛ぶ準備に入ってしまった。

ジタンは置いて行かれちゃう急げ！とカーゴシップのはしごへ我々を誘導し、上らせていく。

先頭にビビ、続いて私、そしてダガー、ジタン。

すると後ろの方でダガーのちいさな悲鳴が聞こえ、ジタンからのセクハラを受けた模様である。

飛空艇は飛び立ち、優雅に雲を切っていく。飛ばされないよう柵に  
掴まり、高いところが苦手なビビの背中をポンポンと撫でた。

「よく見て私の帽子、ビビとおそろいだよ?」

氷の洞窟から赤魔道士になっていているけど、今更私はビビに私との共  
通点を言えば、ちよつと戸惑いながら彼も帽子をぎゅつと握る。

「似てるって結構あるコトなんじゃない?」

「……そう、かな」

そう戸惑う彼の背を押してカーゴシップに入る。

「……え!」

ここで見たものには、ビビは戸惑い声を漏らす。

カーゴシップの中では、あの地下で作られていた人形達がひとり  
で動いて、機械を操作していたのだった。

ビビは戸惑いながらも彼らに声をかける。その様子を、私はただ  
黙ってみていた。

## カーゴシップくリンダブルム

カーゴシップの中でせつせと働く黒魔道士達に話しかけるも、まったく反応を返されることのないビビ。

ジタンとダガーも艇の中に入ってその様子を見て切ない気持ちになっただろう。

「驚いたな……動いてる……」

「作ったモノは作られたモノが運ぶっていうシステムねえ。低コストだなー」

「ヴェイエラ……」

冗談でそんなことを言うべきではないんだろうけども、全部知っている自分からしたらそんなに感情は抱かない。

物事の効率化っていうのはいつの時代何処でも求められるものさ。

「人も人形もあんまり変わらんないもんだよ。使えれば何でも良いんだ」

ただ黙って仕事をしているこの黒魔道士と自分……大差なんて無いだろうな。

「……嫌なことってゴメン」

「……ヴェイエラにも色々あったんだな」

ジタンは何かを察したのかそういったけど、私はブンブンと首を振った。

「何も無いよ。私はヴェイエラなんだから」

そう、過去なんて無い。何も無い。私は今幸せな夢の世界に居るんだ。元の世界の事なんて思い出したくない。

ここに連れてきて貰うときに記憶も消して貰うんだった。

すると話しかけることを諦めたビビがこちらにやってきて悲しそうにうなだれた。

「何度話しかけても……まるで何も見えていないみたい……反応しなくて……」

「そうだね、彼らには私たちが見えてないんだよ。そういう風に魔法

をかけられているのかもしれない」

ポンポンとビビの背中を撫で、わざと無視しているわけじゃないんだといってあげた。

本当はお喋りできたらうれしかったのかもしれないけどね。

「ダガー、ヴィエラ、オレはちよつと上に行ってくる。このままだと城に着いちまうからな」

ジタンはビビを任せて上へと行くといった。

確かにこのカーゴシップはアレクサンドリア行きだから、そのまま放置するのは良くない。

「ん、私も行くわ。私風に当たるの好きなんだ」

と、いうことでジタンと二人で甲板に出てみる。

気持ちが良い風が頬を撫でてここでお昼寝したい気分になった。

でもその甲板には無念といわんばかりに這いつくばってるスタイナーさんがいて、思わず吹き出してしまった。

無反応の黒魔道士に困っているんだろうな。

近付いてみれば何か呟いていて、それを聞き取ったら更に吹き出しそうになってしまった。

「姫様を残して離陸してしまうなんて……ブラネ様に申し訳が立たん……！私は何ていうことを……！」

ああ、置いていってしまったと思つてたらしい。

確かに先に乗り込んだのはスタイナーさんだから、急にカーゴシップが飛び立ってしまったもんだから、我々が乗ったかどうか確認出来なかっただろうしね。

「おっさんなにやってんだ？危うく乗り遅れるとこだったんだぜ」

ジタンが話しかければビクンと身体を弾ませて立ち上がり、姫様は!?!と聞いてきたから艇内にいるよと教えてあげれば安堵の表情を浮かべた。

「でもさ、スタイナーさん。このカーゴシップってリンドブルムじゃなくてアレクサンドリア城に向かってんでしょ？」

そう聞いたら、胸を張ってそうだと答えた。

「リンドブルムにいくつていったじゃん。うーそーつーきー」

「姫様を連れ戻すのが役目！ ヴィエラ殿も邪魔しないでいただきたい！」

「へえ」

私はこれからジタンが舵を奪うことは予想済みなのでニヤニヤしながら端っこに行き、手すりに掴まりながら景色を楽しみ始め、それから数分で飛空艇は旋回を始めて違う方へと向かい始める。

おお、始めたか。なんて思いながら操舵室を見ると、ジタンとスタイナーさんが何か揉めてて草でした。

その騒ぎを聞いて集まったのか、進路が変わってしまったから集まってきたのか、黒魔道士達は操舵室を取り囲む。

意志のないただの人形のはずの彼らだけど、今微かに感情というモノが生まれつつあったのかもしれない。

すると魔道士達を追いかけてダガーとビビも甲板に上がってきていて、私はビビにヤツホと手を振った。

——刹那、黒のワルツ三号が船首に現れ、振り返ったビビめがけて挨拶代わりの軽いサンダーをお見舞いした。

すかさずダガーが駆け寄って声をかけるが、ビビは怯えて震えている。

「ちよつと、うちのかわいいこちゃんにちよつかい出すのやめて貰えないかな？」

私はその場で腕を組んで置いてあった木箱に寄りかかる。

この中にも魔道士が入ってるのかな？

「どんなやつが二号を倒したかと思えばこんな小僧どもだとは」

「一号も二号も三号もあんまり変わらない気がするんですが」

おちよくってたらサンダー飛んできました。

レイピアで弾けば、不快そうに目を細めてこちらを睨んでる。あーやんなちやうわ。

「邪魔するモノは排除する！ 姫よそれまで待っている！」

と、言ったと同時に働いていた黒魔道士達がわらわらと集まり、ビビ達を守るかのような壁になる。

ここでようやく心を持ち始めた彼らをみすみす殺すのは何だか悲

しいので、私も加勢しに入った。

「邪魔するな黒魔道士兵どもが!!」

「ブリザド!」

まず先に三号へブリザドをかすめてやれば、他の魔道士達も魔法を打って戦い始めた。

でも本気で怒った三号はその場に居たものを一瞬で吹き飛ばすほどの魔法を放ち、黒魔道士達は飛空艇から投げ出されていく。

「ファイア!」

「サンダー!」

私はファイアを放ち三号を殺しにかかる。でもやつもいい機動力を持っていて、当たるのだけでも少しだけだ。

強い敵と戦ってこなかったから、こういうときの対処法が分からない。経験不足に唇を噛んだ。

「貴様……この魔法の威力……ただ者ではないな!」

「攻撃するなら私をやれ!」

何とか残っている魔道士を守ろうとするが、もう光がなく死んでしまっているのが何体もあった。

そののも、あそののも、みんなもう光がない。

「サンダー!」

三号はサンダーの上位であるサンダラを唱えて私はまともに食らってしまう。

流石にレベル差はあるとはいえ、ダメージをまともに受けた事ってないかもしれない。甘く見ていた。

今の私は赤魔道士。連続魔法と回復が出来るって言うのが利点なだけで威力はそんな無いだろう。完全にレベルでゴリ押ししていると言うだけだ。

飛空艇に残っていた最後の一人の黒魔道士が飛ばされそうになったのを見て、私は急いで駆けつけてその手を掴む。

おちないで、その目に光があるなら、死なせたくない。

「食らえ、サンダー!」

またもサンダラを放たれて痛みに声を上げ、でも掴んだその手を離



さないように強く握っていた。

だけどサンダラの雷撃は黒魔道士の身体にも届いてしまい、黄色く光っていたその瞳が消え失せてしまった。

同時に三号は私を殴り床に倒し、黒魔道士の最後の一人の手を離してしまった。そして私の腹に蹴りを入れて、後方にあつた木箱へと飛ばす。

受け身を取ってなかったのでもとにも背中を打ち付けるし腹は蹴られるし殴られるし、あのこも死んでしまったし、実に最悪の気分だ。

「ヴィエラー！」

ジタンは私に駆け寄りポーションを使う。

ダメージ量は結構あつたけど、元々のHPが高いのでそんなに削れているわけではなかった。

「あの野郎許さねえ！」

ビビもスタイナーさんもジタンも三号と戦い、でもやはり強力な魔法に翻弄されている。

でもこちらも弱いわけではないから、戦っていた。

私はゆっくり立ち上がり、残されていた黒魔道士の帽子を掴んだ。分かつていた展開だったのに、許せなかった。

やはりその場においてしまうと情が移るんだと嫌なほど思い知った。

「ジヨブチェンジ、召喚術士」

私は姿を変え、そして額には一本の角が生える。

それを隠すように帽子をかぶり、戦いへ戻ってきた。

「ヴァルフアーレ」

そう呼べば、空から強い光と共に何か飛んでくる。

この世界の人々がまだ見たこともない召喚獣、居るはずのない召喚獣。

「船から蹴り落として」

私の言葉で、空から降りてきたヴァルフアーレは蹴りで三号を吹き飛ばす。

お互い飛べるモノ同士なのできりもみ状態で戦っていたが、明らかにヴァルフアーレのほうが上であった。

「な、なんなんだ、あれ！」

「さあ」

私は知らんぷりしつつ、通常攻撃だけで戦うようにとヴァルファールに伝えた。

「さあつて、だってヴェイエラが指示出しているじゃないか」

「……私の友達なの。内緒にしてて」

まだこの時点で召喚獣というのを教えるわけには行かない。

戦いは終わったようでヴァルファールが戻ってきてきて甲板にのってくる。

壊さないようにそつと乗ったので飛空艇は大きく揺れただけで済んだ。

「ありがとう。でももう少し仕事があるの、おねがい」

ヴァルファールにそう告げるとこくと頷き、私は頬を撫でた。

「みんな、追い払ったけど気を抜かないでね」

私がそう言うと、ビビがジツとこつちを見ている。

かぶっているのが彼らの帽子だからだろうか、召喚獣のことだろうか。

私は何も言わずいつものようにポンポンと背中を撫でてあげるだけだった。

そしてビビは飛空艇の端つこに引つかかっているおんなじ帽子を見つめにいった。

「ヴェイエラ殿、あの翼竜は一体……」

「以前旅をしているときに怪我してたのを介抱したら懐いたんだ」

スタイナーとジタンにそう説明すれば、二人は凄いなーと感心するだけで、まさか召喚獣だとは思わなかったのだろう。

そのままヴァルファールと待機していると、後方から追い払ったはずの三号の乗った小さな飛空艇で追いかけてきているのが見える。

かなり無理矢理だが、ヴァルファールにこの飛空艇を引っ張って貰おうと頼んでみたら、コクンと頷いてやってくれするという。

かぎ爪の足にロープをひっかけ、飛空艇を加速すべく羽ばたいて貰った。

そして追ってきた三号が前に立ちはだかり、サンダーを放った瞬間飛空艇に残っていた帽子が飛ばされ、三号は怒ったビビの全力のフアイアを食らって吹き飛ばされた。

ビビが力尽きたようにポテ、と倒れたので介抱すればジタンもやってくる。

「ゲートが閉じる！中に入ったら風圧で飛ばされるぞ！」

「わかった、ジタンはビビをお願い！私はこの子と居るから大丈夫！」  
そう言っつてヴァルフアーレのロープを外して彼女の背に飛び乗る。

まだ追いかけてくるあいつをやっつけてあげましょう。

「みんなはかまわず進んで！」

ヴァルフアーレの羽ばたきで一気にカーゴシップの後ろに回り込み、そして飛空艇はついにゲートの中に入り込んだ。

三号も追いかけてきて、私は彼へと手をかざし、容赦する気も無くそれを唱えた。

「シユーンティング・レイ」

ヴァルフアーレの口から白い光線が放たれ、三号もろとも小型艇を吹き飛ばす。

その爆発はすさまじく、カーゴシップが出て行くと同時にゲートから出たのだが黒煙を吸い込んで軽く咳をした。

「ヴァルフアーレ、もう大丈夫。船に降りたらもう戻ってください」

カーゴシップの側に寄って私は背中から飛び降り、彼女に手を振つてやれば空へと飛んでいき、光となって消えていった。

「さて、みんなはどうなってるかな」

カーゴシップの操舵室に行ってみれば、黒煙を上げている南ゲートを見て表情を曇らせている。

自分たちのせいでゲートが壊れてしまったとなれば大変なことをしたと思うだろうけど、これは三号も追いかけてきていたし仕方ないことだろう。

ジタンもリンドブルムの技術力ならすぐ直ると励まし、船は進んでいく。

「……ヴィエラ、あの翼竜は……」

ダガーもヴァルフアーレの事が気になったみたいで、先ほどの事を聞いてくる。

二人同様に旅の途中で怪我してたのを手当てして懐かれたと言っておいた。

「人に懐いた竜なんて、貴族などに知られたら捕まえに来ちゃうかもしれないから、なるべく呼ばないようにしていたの。見たこともない竜だから、遠くから来たんだろうし、珍しいから狙われちゃう。だから今のことはあの竜のために内緒にしてて」

それらしい事を並べたら、皆さん何も疑わずうんと頷いた。

仕方の無い嘘だけど、みんなと旅し始めて少し胸が痛くなっただが、これから先も嘘をつき続けたいと行けない。

嘘に嘘を重ねていくしかない。

「それにしても、なんでその帽子かぶってるんだ？ていうか変なかぶりかたしてて、前見えなくないか？」

ジタンはずっと黒魔道士の帽子をかぶっている事に疑問を持ったみたいで、私の顔をのぞき込んだ。

角を見られるわけにはいかないので、スツと後ろに下がり、手向けのためさと言えば皆が黙った。

ホントは手向けのため何て思っていない。ちょうど良くあったからかぶっているだけ。

また、ちよつと胸が痛かった。

「……ねえ、ボクとあの黒魔道士って呼ばれていた人たちって……おんなじ、なのかな」

流石にビビもアレがなんなのか、自分とどんなつながりがあるのか薄々気が付いてしまっていた。

そりや自分とかなり見た目が似ていて、人間達とは姿が違うんだから気になるのは当たり前だ。

それに、ダリの地下で量産されてるのを目撃しているから、自分もあそこで作られたのかと考えたのだろう。

みんなが黙っているのに、スタイナーさんは間の抜けた顔で首をかしげ、それを否定した。

「ビビ殿はビビ殿であろう？あの者達はあの者達である、何を言っているのか……」

スタイナーさんは似ているなんて思わなかったんだろう。それはビビ個人を見ているからこそ言える言葉なのかもしれない。

ジタンは良いこと言うな！とスタイナーさんを褒めてビビを慰める。

どんなに似ていてもビビはビビだ、と。

私も微笑んでビビを撫で、そしてカーゴシップはリンドブルムの城の中へと入っていった。

こんな古ぼけているし、停泊の連絡も入れていないカーゴシップを城も易々入れているところで大分警備が緩いなーと感じてしまう。

最近ブラネ女王が怪しい動きをしているって言うのにこのざる警備はいかがなモノか。

カーゴシップを停泊させ、私たちはリンドブルムの城に降り立った。

警備の者が集まってきたが、ダガーが王族の証である天竜の爪を見せて証明しようとするも、警備の者では判断が出来ずに上司を呼ぶと言った。

そりやそうよな、一般人が秘宝なんて見たことないだろうし、よく見て判ったなと思ってしまったけどキニシナイキニシナイ。

そして我々が怪しまれてしまった原因をスタイナーさんはジタンのせいだと言って喧嘩を売りつけて騒ぎ始める。

とにかくジタンの事が気に食わないからって全部彼のせいにないでよお。

「貴様のように知性の無さそうなやつと一緒に居るから我々までも怪しまれるのだ！」

「おっさんが知性溢れる紳士には見えねえけどなあ？」

「きつ貴様あー！」

「わー、お祭りだー」

私はやんややんやと手を叩いて煽るが、文臣オルベルタが到着してお祭りは終了してしまふ。

もうちよつとやってて良かったんですよ。

オルベルタさんは部下から事情を聞き、ダガーを一目見て本人だと確信して頭を下げ、シド大公に会わせてくれることになった。

「どうぞこちらへ、大公殿下がお待ちです」

オルベルタさんはそう言うって進んでいき、お忍びで突然の訪問だったはずのダガーをお待ちというのが不思議で、みんなで首をかしげていた。

私もナンデダローと言いながら後を追い、リフトで高く高く城の上まで上っていく。

普段のエレベーターって壁があるのが普通だけど、壁がなくフレームのみのエレベーターって絶叫マシンに乗っているみたいでちよつと楽しかった。

まあ、ヴァルフアーレの背中に乗ったときの方が絶叫マシンだったな。

そして最上階まで到着し、大公の間に訪れてシド大公とご対面……かと思いきや、王座には誰も居ない。

そのからの王座の上にはキラキラと何かが光っていて、アレが宝珠の一つかと思つてみたら、椅子の後ろからブリ虫が顔を出した。

ブリブリ、と可愛いような気持ち悪いような音を出しながら、ドデカイブリ虫はダガーに飛んでくる。

ブリ虫はこの世界でのゴキブリのようなものなので、とにかく気持ち悪いみたいで、隣に居たスタイナーさんが思わずパンチを食らわせて吹っ飛ばしてしまった。

「ぶ、無礼なやつブリ！ワシがシドだブリ！」

ブリ虫シド公はプンスカと怒りを表すが、ジタンもビビもデカイブリ虫にうわあと声を漏らしていた。

「リンドブルムってブリ虫まで大きいんだね……」

「ビビ、流石の栄養満点なごはん食べてもブリ虫はあんなに大きくはならないと思うよ」

私にとってはブリ虫って言うのは可愛く見えてしまうから、アレクサンドリアからどっかの街に移転してしまったブリ虫グッズも買う

ことが出来るだろうな。

「だからっワシがシドⅡファブールだと言っているブリ!!」

「そのおヒゲ……ホントにシドおじさまなのですね……!」

ダガーはターンAガンダムのような、白ひげのような立派なヒゲで判断し、やつとみんなもそのブリ虫が王様だと理解する。

「いや第一に虫は喋らないから……」

とはいえ虫の姿で王様だ、は普通無理か。

シド大公はある日城内に何者かが忍び込み、魔法でブリ虫にされたあげくに作った飛空艇と妻のヒルダを盗まれたという。

……と、言っているが、実はシドが妻以外の女性に見とれてしまった、ヒルダが嫉妬してシドをブリ虫に変えてしまったというのが真実。

ちよつと家出するつもりだったのだろうけど、そこにちよつと良く後に出てくるキーキャクター、クジヤに連れ去られてしまったというのである。

今後のことはとりあえず休んでから話そうと言うことになり、料理を振る舞われた。

豪華な料理に頬がつり上がり、何を食べても美味しく大満足だ。

この世界に来てトレノでは居酒屋のような店に入ったから、こういうお高いごはんは食べていなかったな。

それから食事が終わってから、私たちは城ではなく城下町に行かされることになる。多分姫と同室はイカンよと言うことなのだろう。

「ゴメンみんな、ちよつとしばらく私は外れるよ。野暮用があるんだ」  
私はみんなと一旦離れることを話し、ジタンはどこかに行くのかと聞いてきた。

行く場所はチョコボの森と、フォツシル・ルーからさきである。

先ほどの三号の戦いでもそうだけど、私は経験値が足りない。場数が足りないのだ。

あとチョコボは足になってくれるのかくお宝を掘り出した  
いって言う意味である。アイテムはたくさんあっても困らない。いいアイテムは欲しい。

「ダガーのこと、リンドブルムに送り届けてハイ終わりじゃ寂しいから、また会いに来てても良いかな？」

そう聞くと、ダガーは頷いていつでも会いに来てくださいと微笑んだ。

こうして我々はダガーを送り届けることに成功し、各自色々と行動して身を休めるのであった。

そんな中私は休むことなくリンドブルムから出て行く。

霧の下に出たいのだが、あいにく下の出口は霧で危険とこのことで封鎖されていて行くことが出来ない。

でも召喚士である今なら降りることはたやすいだろう。

人に見られても困るので、付近にある森のような場所、ピナツクル・ロックスで呼ぶことにした。

「ヴァルフアーレ」

名を呼べば空からヴァルフアーレが舞い降り、その背に乗って霧の下の大地に降り立つ。

視界が悪くて本当に周りが見えない。

「ゴメン、もう少し乗せて」

ヴァルフアーレの背に乗ってゆっくり飛んでいると、黄色い鳥がチラリと見えた。

森の中に入っただけから、アレがチョコボの森だろう。

「ありがとうヴァルフアーレ。戻ってください」

背中から降り、頬を撫でれば満足げに小さく鳴いてからヴァルフアーレは空へと飛んでいった。

見送ってから森に入っていくと、モーグリのメネと追いかけてっししているチョコボのチョコボの姿があった。

私を見るやいなや、情けない鳴き声を上げて森から飛び出してしまった。

「ごめんクポ、チョコボは人見知りなんだクポ」

でもギサールの野菜があれば！とメネは私に野菜をくれる。

チョコボの友達が増えてくれるのを待ち望んでいたんだろうなと思っ、けなげで泣けた。



「チョコボってカワイイね」

「チョコボは最高のチョコボだクポ！ちよつと臆病なのがたまに傷だけどクポ」

「これで釣って仲良くなってくるね！」

「無理強いはいよくないクポよ！」

そんなこと言っているのを無視して外で物陰に隠れているチョコボに野菜を見せれば、大好物だからかこつちをジツと見つめている。

野菜を食べちゃおっかな？と口を大きく開けて近づけたら、ダメと言わんばかりに走ってきたので、ぷぷつと笑いが零れてしまった。

「だべないよー。ほら、あーん」

野菜をチョコボに差し出せば、チョコボはもりもりと野菜を食べていく。

全部食べ終わったけど、その頃には勝手に触れても全く動じなくなっていて、おそらく食べ物くれる＝優しい人、の認定なのかもしれない。チョコロいな。

チョコボを森に連れ戻し、ようやくここ掘れチョコボの開始である。

「チョコボは穴掘りが得意クポ、一緒にやるといいクポ。60ギルで」

「金取るのね」

「当たり前クポ！こちらにも生活があるクポ！」

と、言うことでジタンの代わりにここ掘れチョコボをやっていく。

金はめちやくちや持っているのでバンバン使っていると、流石のメネも「お金持ちクポね……」と引いていた。

ここ掘れチョコボはポーシオンもエーテルも掘れるし、正直良いことづくしである。

謎の石版を掘り出して、お宝の地図も発掘できるしいアイテムが手に入りそうだ。

「クエ……」

「あれ、疲れちゃった？」

流石にずっと穴掘りさせていたら疲れてしまったみたいで、本日の穴掘りはここまでとなった。

だけど良いものも掘れたし、チョコグラフは明日堀に行こうか。

私もまだ召喚術士のままなので、レベル上げに行きたいのだけこの状態では出来ない。召喚獣で戦うわけにはいかない。

今日のところは戻って一日休んで、24時間経ってジョブチェンジするのが得策か。

角を隠すためにずっと黒魔道士の帽子をかぶっているけど、やはり視界が遮られているのでキツイモンがある。

「また明日来るわ。ありがとねチョコ」

掘れた野菜を全部置いていけば、チョコは目を輝かせてモグモグと食べ始めた。

だけどメネは「太っちやうクポ！制限も大事クポ！」と量を決めていて、仲が良い二人を見てふふつと笑ってしまった。

可愛いなあ……癒やしのアニマルビデオを見てみたいだわ。

ふと空を見上げてみると、もう日が沈みきるころで大分暗くなっていた。

森は霧の下にあるから、星は見えないのが残念である。

森から出てヴァルフアーレを呼んでピナツクルロックスへと飛んでもらう。

やはり誰も居なくて、ここは隠れるには便利な場所だなと思いつながら、そこに書かれている注意書きに目を止める。

「老人の幽霊に注意、ねえ」

正体は主を失ってさまよっている野良召喚獣、ラムウなんだよね。

ピナツクルロックスの深い場所を数秒眺めてからリンドブルムへと振り返ったとき、視界の少し上の岩場に何者かの足が見えて思わず後ろに飛び退いてその正体を見やる。

「お主は、術者にしては何か妙なところがあるな」

謎の老人がそう口にしたと同時に、飛び退いたせいで頭から飛んでしまった帽子が地面に落ちる。

私の額の角を見て、老人はその本来の姿へと戻り、そして私に何者かと聞いてきた。

「召喚術士一族の角を持ち合わせているが、別な種族も入り交じっておる……」

「……私は召喚術士一族の力を借りることが出来るという、少々特別な存在なのですよ、ラムウ」

正体を知っているからその名を口にすれば、ラムウは目を細める。私という存在が敵か味方かと言う判断をしようとしているのだろう。

「召喚術士一族の末裔と私は知人なのです。ですが、私自身もこの力を使えることを隠しているのです。これは知られるわけにはいけません。その最後の末裔も守らないといけない」

マダイン・サリの事もあって、ラムウもこの一族が危険視されていることは知っているだろう。

「お主は何処まで知っておる」

「一族が消されたことくらいでしょうか。我々も、互いのために知らぬフリをすべきかと」

遠回しにあんたと関わりたくないといえば、ラムウはホホ、と笑った。

「それでは、機会があればまた会いましょう」

私は帽子を拾い上げてピナツクルロックスを去った。

何も言っただけだったという事は、敵と見なされなかったと言うことで良いのだろう。

「ただどちよつとピナツクルロックスには行きづらくなったから、今度シド大公にお願いして下の門を開けてもらおうと思ったのだった。」

## 狩猟祭

リンドブルムに戻り、宿はそこらの宿に泊ることになる。

お金はあつたので高い店に入つてのんびりして夜が明け、城に行く前に時計を入手することにした。

ジョブチェンジしてから二十四時間数えるのは時計がないとはつきりはわからないし、いざ使おうとして使えなかつたら嫌だ。

色々と店を回れば、手頃なサイズの懐中時計を見つけることが出来た。

これでジョブチェンジした時間を覚えていれば大丈夫。

懐中時計は結構良い値段がしたけど、私の財力であればこんなもの安いものだ。ふははは。

さて、お目当ての物は手に入れたし、城へと向かいますか。

エアキャブに乗って城へと着いた私は多分一番遅い到着だっただろう。

行ってみるとやっぱりみんな集まっていたようで、姫様はシド大公が預かるからという感じの話になる。

つまり我々の仕事はおしまいだということだ。

だけど、ちょうど时期的なものもあり、近々狩猟祭というリンドブルムでのお祭りが始まることも話題となった。

「もちろんヴィエラも出るだろう？」

ジタンはそう聞いてきたけど、自分はこの狩猟祭で経験値が貰えるとは思ってないので、まだ野暮用があつてねと断った。

チョコボでチョコグラフィを掘って、お宝を発見するのが一つで、もう一つはク族の沼に行つて先にフォッシル・ルーに潜ること。

あそこならレベルの高いモンスターがいるから、狩りにはもつてこいだ。

現在行ける場所で一番強いやつがいるのはそこだと思う。

話し合いは終わつてまた解散し、今日もチョコボの森へ向かうつもりだ。

ジョブチェンジの時間も来たので、いつもの精霊使いに代わり、時間を覚えておく。

「頼みがあるのですが、下に出るための門を開けて欲しいのです」

近くに居たオルベルタさんに頼めば、姫様の恩人ということで私は使う許可を得た。

最も、他のメンバーは今のところ使う意味が無いので要求すらしないのである。

「どちらに行かれるのですか？」

「お宝探しですよ」

ふふつと微笑んでから会議室から去り、オルベルタさんからもらった通行証で自由に出入りすることが可能となった。

早速最下層、そしてトロツコに乗って地竜の門へと向かい、堂々と霧の下の大地へと降り立つ。

ヴァルフアーレを使ってじゃないと降りられないっていったら永遠にレベル上げできなかったわ。

道端のモンスターを蹴散らしつつチョコボの森へとは入り、今日はチョコグラフィでお宝探しに出かけることにした。

「チョコ、お願いね」

「クエー！」

近くにあるお宝しか現在は探すことが出来ないので、結構簡単に発見することが出来た。

中身もそれなりの中身である。悪くはない。

「ご苦労様」

撫でてあげれば嬉しそうに鳴いて、すぐに森に戻った。

それから私は穴掘りよりもク族の沼に行くことを優先にし、沼に入っていく。

クイナに出会う意味も無いと思ったので、採掘場跡があると思われる場所を歩き回るが、結構見つからないものであった。

確かに自分よりも背の高い草が生えていて周りが見えないというのはキツイ。

しばらく散策して、ようやく採掘場の入り口を見つけることが出来

た。

一時間くらい歩いたようだ……

早速中に入り、歩き回っているとやはりレベルの高いモンスターと会うことになった。

私はまず、なるべく魔法を使わずレイピアで戦うようにした。

首だけの女の頭のような気持ち悪いモンスターは凶体もデカいから、レイピアの攻撃は当たるのだが、やつの放つファイラは結構熱い。痛いです。

こういう攻撃も避けて、そしてレイピアで牽制していかないと。

レベル差が思ったより無いから、腕を磨くには結構良い場所だと思いながら、ポーシオンを飲んで回復しつつ、またモンスターの死骸を積み上げていく。

強くならなきゃ、また守りたいものを守れないようじゃ嫌だ。

そうやって数日はフォツシル・ルーに通って敵を倒す日々である。

グリフォンも鳥だけに動きが速く、戦いにはもってこいだ。

エアロを避けるのも大変で、風に引き込まれれば天井まで巻き上げられて叩き付けられたりと、これも実践だから知ることの出来た事だ。

何度も痛い目に遭って怪我だらけになりつつ、今日もたくさんのもンスター狩りをしたせいかな、もうモンスターが出てこなくなっちゃった。

打ち止めかな。

「うわーなんだこりゃ」

敵を倒した時に急に声が聞こえて、振り返ってみたらピッケルを片手に持っているオジサンが立っている。

そうだ、ここには一人だけ人間が入ってきているんだった。

「騒がしてスイマセンね。私はモンスター狩りしてるだけなのでお気になさらず」

「こりゃ……何て数だ。厄介なモンスターをこんなに……あんた騎士か何かかい？」

オジサンは積み上げられてるモンスターをみて顔を引きつらせて

いる。

確かこの人は盗掘屋さんだった気がする。

化石とかを掘り出して売ってるんだっけね。

「騎士を目指して自分磨きをしているんですよ」

そしてステータスを開けば、流石に狩りまくったので25レベルまで上がっていた。

ギザマルークの洞窟に行くには高すぎると言っても過言ではないだろう。

おそらく一発の攻撃が千は行っていると思われる。

この時期の敵はHPが千あるかないかだし、ボスも5千以下の体力が普通だろう。

「こんなもんかな」

「なあ、モンスターの素材とかもらって良いか？」

レイピアをしまっていた私にオジサンが話しかけ、全部要らないからあげるといえばニコニコしていた。

お金のためにこの採掘場に入っていたわけだし、素材が売れるからそりや嬉しいわな。

「……でも売れそうなのはグリフォンくらいかな」

その他のモンスターは素材になりそうになかったので、選別するとそんなに量にはならないだろうな。

それだったらフアングやムーの毛皮、トリックスパロウの羽毛の方が取りやすくして儲かるだろう。

「ありがとよ姉ちゃん」

「いえいえこちらこそ」

私は採掘場を出てリンドブルム城に戻ると、狩猟祭は明日と張り紙がされていた。

特にやることもないし、時間が余ったからやはり出よっかなと思っ城へと足を運ぶ。

すると客間にはジタン達も勢揃いしていて、お祭りの報酬の話をしてきたようだった。

「すいませーん、気が変わりました。狩猟祭出ても良いかしら」

私が声をかければ、どうぞどうぞとエントリーを許可された。

でもここで欲しいものは何かって聞かれてめちやくちや困るのである。

別に何も欲しくないんだわこれが。

「ヴィエラってそんなに無欲なのか？」

「うーん、貪欲すぎるからこそ逆に望みが高すぎて手に入らないというか」

うーんと悩んで、美味しい食事を毎日食べに来られる特権と言っておいた。

食事が美味しいのは本当だし、毎日ごちそうになることが出来れば良いことである。

食事のことをいうと何だか後に仲間になるクイナさんを連想してしまうが、しかたあるまい。ここで貰える物なんてたかがしれてるし、金なんてたんまりある。カードも要らんし、アクセサリも服も要らん。ていうか服なんてジョブチェンジしてしまうとその職の服に変わるからどうしよもねえ。

こうして出場の話も終わり、ようやく部屋にいた見慣れない人とお話する時間が出来た。

「こんにちはネズミ族の方。私はヴィエラ」

そう、居たのはネズミ族のフライヤである。フライヤも自己紹介して握手を交わし、狩猟祭では負けんよと言われた。

「ふふ、望むところです。むしろ私に獲物を奪われないように気をつけてくださいね」

何せ、出場できるとなればジョブチェンジしてスナイパーになり、弓を扱うスナイパーのスキルでの連射と遠距離というチートを使って挑もうとしているのだから、みんなからしたらたまったもんじやないだろう。

みんなの悔しがる顔が見たくていたずら気に笑えば、ジタンはちよつと後ずさりしていたのであった。

「そうじゃ、ヴィエラにききたいのじゃが、私のようなネズミ族をブルメリア領以外で見たことはあるか？」



おそらくそれはフラットレイのことだろう。

私は見たことはないので、子供だったらと答えた。パック王子はネズミ族だからまったく嘘ではない。

そう答えればフライヤは小さく「そうか」と答え、少しうつむいてしまった。

フライヤの恋人であったフラットレイは一体何処に行ってしまったのだろうかねえ。

……それからあつという間に次の日、狩猟祭がまもなく始まる。

私は昨日の話し合いが終わってすぐにスナイパーにジョブチェンジしていた。

弓使いや狩人も悩んだのだけど、スナイパーっていう名前の響きに一度くらいなってみても良いかな？って選んでしまいました。

それに連射出来るのスナイパーだけだし……

まあ、今日の夕方になれば容易く二十四時間になるだろうから、何かあればジョブチェンジしよう。

出場メンバーはそれぞれ配置につき、私も言われた場所からスタートする。

私はジタンと一緒に劇場区でのスタートになった。

「そう言えばヴェイエラの装備、弓なのか？弓まで扱えるんだな」

スタートの合図がされてからジタンは私を取り出した武器をみて「へえ」と声を漏らした。服が替わっているだけで武器までは城に持ってきていなかったの、弦をびよんと弾かせて私は「狩りまくりだぜ」とにんまり笑う。

「確かに弓つて高いところでも狙えるから便利だが……」

威力は、と言いたいんだろう。

狩猟祭も始まっているのでそこらを走っているファング共に連射で放てば、ファングが二匹倒れる。

元々レベル差があるから一発が重いみたい。

「う、うそお……」

流石の威力と連射の早さにジタンも開いた口がふさがらないのか、間抜けな顔をしていて、私はそれを見て大満足である。

ああなんて快感なんだ！ひひひひひ

「ほーら、早くしないとモンスターいなくなっちゃうよー？」

私はその場で弓を引いて、見える敵を射貫いていく。

正直スキルなんて使わず通常攻撃で即死させられるから、一発一発が早い。

「ダガーとのデートがかかってるんだ！負けらんねえ！」

ジタンは見えているモンスターに突っ込んでいき、私はニコニコ微笑みながら、この劇場区を後にする。

ここで全部狩り尽くしたらつまらないもの。

ぴよんぴよん軽々と屋根を飛んでいき、違う地域へ出る。

ゲームと違って知らない場所にも来られるし、見ている方向が違うので正直ここが何処なのかわからない。

とりあえず適当に見えている敵を射貫いているけど、ちゃんとポイントは数えて貰えて居るみたい。

あちこち移動されて数えるの大変でしょうに、何て思いながらも屋根の上から狙撃していく。

その時、フアングと戦っている女性の背後にムーが居て危ないと思っただけ射貫いたら、それに気が付いた女性に睨まれてしまった。

「ちよつと！私の獲物だったのに横取りしないでよ！」

あ、この人ラニちゃんじゃないか、と口を半開きにして数秒見つめてから謝れば、腹いせに近場にいたムーを大きな斧で叩き斬った。

「じゃあ私は空にいる獲物を落とすわ」

飛び回っているトリックスパロウを撃ち落としていくと、流石の連射と命中率、攻撃力が付いたのかラニはこの場から去った。

私と同じ場所で戦って、獲物の取り合いをしているのは時間の無駄になると思ったからなのかもしれない。

私はしばらくこの場で狩りをし、モンスターがいなくなればまた狩りをしての繰り返しをして、今何ポイントなのかなあとぼんやり立っていたら、アナウンスが聞こえてようやく自分が何ポイントか知ることが出来た。

「ヴィエラ選手、205ポイント！現在トップです！」

おいおいおいおい、確か200ポイントって一番のお目当てのザグナルより高いよな?!

それを倒しても私と同列にならないというのは結構ヤバいくらい稼いでしまっているということだ……

「やりすぎたかー」

「お主やりおるな」

ああーと空を仰いでいたら、後ろの方からフライヤさんが話しかけてきた。

彼女も屋根を飛んでこれるから、私の居るところまで難無くこれたのだろう。

「点差を離しすぎたらつまらなくなるんでやりたくなかったですけどー」

「どの面下げてそう言うか」

「フライヤさん結構言いますねえ」

「お主の実力を見ればそうも言いたくもなる。お主、かなりの強者じゃろう」

流石武に通じているだけあって、そういうものを見抜くのは長けているのだろう。

私はニヒヒと笑いながら、これ以上狩る気にはならないのでそのまま屋根の上で一眠りすることにした。

「なんじゃ、もう狩りはせんのか」

「ここまで点数を離せば問題ないでしょうー」

そう言っただけで目をつむり、ホントに心地よくて昼寝してしまう。

そして狩猟祭が終わったようで、終わりの花火の音とアナウンスで起こされて、ジタンが206ポイントと一点差で彼の勝ちになっていて、私は負けたーと、もう一度その屋根に倒れるのであった。

リアルなウサギとカメじゃん。

脱力しながらしばらくそのまま転がっていて、私が城に戻ったときにはジタンに望みの品とハンターの称号をもらい、しかも謁見の間の入り口にはブルメシア兵が倒れていた。

おいおい、のんびりしていたら色々イベント逃してるぞ。

「ヴェイエラー！戻るのが遅いぞ！」

うん、ホントにそう思う。

ジタンに言われてゴメン寝てたと言いつつ、瀕死のブルメシア兵を看る。

もうほぼ死にかけで、これではケアルやポーションでも助からないだろう。

今私はスナイパーなので回復魔法は唱えられず、何もすることは出来ない。

兵はあつという間に事切れてしまい、丁重に葬られるためにリンドブルム兵に運ばれていった。

それから私が来るまでに知らせてきた内容と、今後のブルメシアへの対処を話し合っていて、私は知っているから半分聞いていない状態である。

横目でダガーを見たら、顔色が悪く胸元で手を握りしめていた。

ブルメシアを攻めたのがとんがり帽子の軍勢だったというから、アレクサンドリアが攻め込んだことは理解できただろう。

まさか、あの優しいお母様がそんなことするなんて、本当に信じられなかったのだろう。

これも夫と“娘を亡くしている”ブラネ女王の悲しい人生と、裏で糸を引いているクジヤの甘言のせいだ。

心に空いてしまった隙間を埋めようと、ブラネ女王は狂ってしまったのだらうな……

哀れんでいたが、シド大公はブルメシアのために国境でアレクサンドリアを牽制していた飛空挺団を呼び戻して助けると言い、とんがり帽子の軍勢ということでフライヤさんもビビと同じ黒魔道士じゃないかと推測した。

「私は失礼する。飛空挺団を待つてはおれぬ」

フライヤは急いでブルメシアへ向かうと言い、ジタンも仲間の故郷が攻撃されているのだから助ける！と共に行くことを決意。

ビビも、自分と同じ黒魔道士が攻め込んでいるとなると、その真実を知るために行きたいと伝えた。

「急いで準備しましょう！私がお母様を説得するわ！」

ダガーも行く気だったからそう言うが、スタイナーさんやシド大公に止められてしまう。

流石に戦争の中に一国の姫を行かせるなんて事、普通了承する訳もない。

ジタンも危険な目には遭わせられないからリンドブルムで待てと言い、ダガーは憤りを隠せなかった。

気持ちは分かるんだけど、自分の立場を考えればそうなるのは普通のことだろう。

「万が一姫が死んだら困るし、それに、あれだけブラネ女王が連れ戻そうとしていたってのはきつと何か理由があるんじゃないかな？」

私はヒントを口にするが誰もその答えに行き着くことはない。

ブラネ女王はダガーの中の召喚獣に用があり、そして天竜の爪をもって行かれたことにご立腹なだけである。

狂ってしまったといえど、どうして長い間愛してあげていたダガーにこんなことが出来るのか、不思議であった。

長年共にしたペットにすら愛着がわいて手放したり出来ないのに、娘であるダガーにこの仕打ちは何なのだろうか。

「ダガー、戦争なんだぞ。たくさん人が死ぬんだ。今死んだブルメシア兵だってそうだ。あんなふうに死んでいくのをたくさん見ることになる。そしてその可哀想な死に方をするのが自分になるかもしれないって分かってない」

ジタンにキツク言われて、ダガーは悔しそうに唇を噛む。

私は「君の代わりに行つてくるから」となだめるように背中を撫でてやるが、その表情は変わることはなかった。

そんなに唇噛んじやうと傷になっちゃうぞ……

「狩猟祭で地竜の門を一度閉じていたが、もう一度開くブリ。門が開くまで腹を満たしていくと良いブリ」

あれれ、もうギザマルークの洞窟に行くの？

しまったな……今のタイミングで精霊使いに戻ったら、何かあったときにジョブチェンジが出来ないぞ……

準備に一日くらいあると思ったのにな。だって狩猟祭やった後なんだよ？疲れ残ってませんか？

そしてトロツコの用意だの、霧のモンスターが街に入ってこないように手配するだの、地竜の門を開けるって言うのは結構手間がかかる物だった。

私もちよっとお願いした時は狩猟祭前だったから兵もいて容易かったんだろうけど、今は街に残っているモンスターの回収作業もあつて兵が足りないんだろう。

早速会議室に料理が運ばれ、良い匂いが鼻腔を通り抜けていく。

ああ、匂いだけでよだれが出ちゃう。こんなのクイナが居たら大喜びで食べ尽くしてしまうだろうな。

この料理は大昔から狩猟祭料理として伝わっているものだという。大体が肉中心で、小皿は置かれているがフォークやスプーンは置かれていなかった。どうやら手で食べるのが習わしだという。

ナゲットやチキンなら手で掴んで食べても良いんだけど、その他のベーコンやローストビーフ、ハムも手づかみなのは正直掴みづらい物ではあるが……習わしというのならばしかたあるまい。

肉料理はとても美味しく、色んな物に手を出してそれぞれを味わう。

……で、この中にスリプル草が混ぜられているらしいんだけど、一体いつそんな物振りまいたのか……姫様侮るなかれ。

私はクスリを知っていても、目の前の美味しいご飯が冷めないうちに食べたかったので、躊躇することなく食べ続ける。

そろそろお腹いっぱいになってきたな、何て思っていたら視界が回って床へ倒れる。おお、昼間にも寝ていたのにもっと寝ちやうから、夜眠れなくなっちゃうぜ。

そしてそのまま意識を飛ばし、目が覚めた頃にはダガーとスターナーさんの姿はなかった。

「ダガーが最近眠れないからって言って、オレがこの前スリプル草をあげたから……」

料理に睡眠薬を混ぜられていた経緯をジタンは考え、答えを出し、

自分のせいで彼女を危険な地に運ばせてしまったことを悔いた。

おそらくブラネ女王を止めにブルメシアへ向かったと思われていた。

「箱入りかと思いきやあの娘、中々やりおるな」

「フライヤさん感心している場合か」

私はすかさずツツコミ、そして一行はダガーを追ってブルメシアへと旅立つこととなる。

街で必要な物はそろえ、地竜の門から霧の下の大地に出た。

そろそろ日が暮れるのか、段々と暗くなっている空を仰ぐ。とりあえずジョブチェンジで精霊術士に戻すか……いや、スナイパーのままでいた方が良くもされない。

時計ではもう24時間が経過しているのでジョブチェンジはいつでも可能だ。

現在のメンバーでは回復役が居ないが、ポーションを飲んでどうにかしのいでもらおうと思う。

フライヤが先頭になりギザマルークの洞窟へと向かう。

ここでプレイヤーによってはチョコボの森とク族の沼に立ち寄るかって言うのが別れると思うんだ。

今回のみんなはまっすぐギザマルークの洞窟へむかっているから、私が先にチョコボのイベントを済ませていて良かったと心底思った。通常の流れであれば、サブ的なことはあんまりやらないのだろう。道中モンスターに襲われるが、みんな強いから簡単に倒せてしまうので、私はただ見ているだけになっただけ。

みんなに経験値が入って欲しいから、是非私抜きで戦って欲しいよね。

1時間ほど歩いたところにそのギザマルークの洞窟があり、入り口にはもう事切れてしまいそうな兵が倒れていた。

「一体何があった！フライヤじゃ、しっかりせい！」

フライヤは必死に声をかけるが、兵は返事を返すことはなかった。

入り口の惨状を見てジタンは「こんなところにダガーが……」と表情を曇らせた。

「黒魔道士軍団とは一体何者なのじゃ……！ビビとやら、お主の仲間が……」

フライヤはビビを疑うが、すぐに「否！」と声を上げて王の身を案じて先へと急ぐ。

その先にも倒れている兵達がたくさん居て、むごたらしいこの場所にダガーがいなくてホントに良かったなと思った。

私は異世界転生のお陰なのか、こう言うのには不快感は覚えるが恐怖は抱かなかった。これは本当にありがたいことだ。

それでも、かなしい、可哀想だと思う気持ちもあり、道中でできるだけ助けてあげたいと思いポジションを使ったりするが、大体はそれでは回復しきれない者がほとんどだった。

ゲームと違ってフェニックスの羽根の効果も、意識のないものの意識を一時的に戻すくらいアイテムで、意識不明からは脱せられる程度だ。

死者は戻らない。

私は今の仲間達がそうならないようにしないと、と拳を握りしめ、洞窟を駆けていった。



## ギザマルークの洞窟くブルメシア

ギザマルークの洞窟の奥へと進めば、黒魔道士達が歩き回っていて、残っているブルメシア兵を魔法で攻撃していた。

それをフライヤがジャンプで跳んで黒魔道士に槍をお見舞いする。突き刺された黒魔道士は痛みを感じるそぶりを見せず、そのままフライヤにファイアを飛ばし、フライヤは後ろに跳んで回避した。

私も今はスナイパーのままなので遠距離攻撃に向いているから、フライヤを援護して弓で頭を打ち抜けば、黒魔道士は動きを止める。でも黒魔道士兵はまだまだいっぱい居て、どんどん押し寄せてきた。

そのなかにブラネ女王の下にいた怪しげな術士、ソーンとゾーンが混ざってこちらにやってきた。

「何者でおじやるっ？」

「見たことないでござやる」

「どこかで見たような気がするでおじやる」

「しらないでござやる」

二人は我々を見てそう言うが、最後に結局殺そうという答えになって、黒魔道士達が襲いかかった。

ビビは魔法に魔法で返し、ジタンもナイフで斬りかかる。フライヤも残ったブルメシア兵と共に応戦し、私は後方で弓を引いた。

「凶暴な奴らでござやるよー！」

「逃げるでおじやるー！」

黒魔道士達がどんどん倒されていくのを見て恐れをなした二人はとつと逃げていった。

フライヤは逃がすか！と追いかけてしようとしたが、深追いは危険だとジタンに止められる。

「二人で行くな、オレたちも行くー！」

「二人で行つちや危険だよ。あの二人、結構手練れの術士だとおもうから」

私がそう言うと、フライヤは槍を握りしめて八つ裂きにしてくれるわ!と地面に槍を突いて怒りをあらわにする。

仲間がこんな目に遭って怒りを静められるはずもなく、フライヤは息を荒くしていた。

残っている兵達にポーションを配りつつ(チョコボの森で所持数9になってたから腐るほどあった)奥へと進めば、大きな鐘が置かれていてとても神秘的な空間に出た。

そこではモーグリが「あなたー!」と嘆いていて、どうしたのか聞いてみれば夫が巨大な鐘の中に閉じ込められてしまったと言う。

「ここで結婚式を挙げていたのに……!ひどいわクポー!」

だけどその時、あわてていたモーグリがビビの持ち物に反応した。

「クポの実を持っているクポね!?それをくれないクポ!」

どうやら中にいるモーグリはクポの実が好物で、そのおいで中から出てくるかもしれないと言う。

ビビはクポの実を渡し、奥さんがクポの実があることを伝えれば、本当にドデカイ鐘の中からモーグリが飛び出した。

食べ物に対する執着……クイナ並かもしれない。

「ありがとうございます!」

そう言って二人は去って行き、その後を追えば小さな隠れ家のような場所にたどり着く。

私はその壁に上から伸びているツタに目をやる。

上にいくと確か地上にでられるんだと記憶している。そしてそこには現レベルで相手にしたらもれなく全滅させられてしまう厄介モンスター、グラントドラゴンが居るはずだ。

………今の私でどうにか出来るだろうか。いや、無謀すぎるか。

私は見なかったことにして、みんなと少し休憩しながらまた先へと進んでいく。

するとギザマルークとの謁見の間というのか、そこに倒れている兵に駆け寄れば、気をつけてくださいと言われた。

「ギザマルーク様が怪しげな二人に操られて、荒れ狂われております……!」

刹那、壁に空いた水路の穴から何かが現れる。

リヴァイアサンに似たような姿のモンスター、これがこの洞窟の主であるギザマルークだ。

この洞窟では結婚式を挙げたりするから、本当に温厚なモンスターだったのだろう。

守り神のような存在だったギザマルークは大きな尾をしならせ、我々をおそう。

フライヤは兵を担ぎ、ジタンはビビを抱え、私はぴよんと跳び上がって各々回避すると、空振りになった尾は壁に当たると大きな穴を開けた。

かなりの重量もあり、アレを食らうとただでは済まなそうだ。

「戦うしかないみたいだなッ！」

ジタンはそう言ってギザマルークに向かって飛び上がるが、ブリザドを食らって地面に叩き付けられる。

また尾の攻撃が迫ったので私はジタンを引っ張って何とか回避した。

ビビには少し離れた場所からファイアを放ってもらい、フライヤは辛そうな顔をしながらギザマルークを槍で貫いていた。

痛みで雄叫びを上げるギザマルークにチャンスと言わんばかりにジタンが背中へと飛んで、ナイフでぎくさく切り刻んでいた。

私もサポートをすべく翼のようなヒレを打ち抜いたり、尾を刺したりして小さなダメージを入れていく。

何せ普通にやったら多分三発くらいで終わってしまうから、そうなるとちよつと立場的なものがある。私が全部やれば良いじゃんみたいな感じになりかねんし、あとクジャと対峙するのだけはご勘弁願いたい。

アレはどうあがいても勝てないし話が通じる相手じゃない。間違って追い込めたとしても、そういうストーリーじゃなし、最悪ガーランドが出てきたらかなりまずい。

だから私は仲間Aという存在でいたいのだ。

ただたまたま、仲間になった存在に。

だけど、ギザマルークは雄叫びを上げながら身体を回転させてジタンを振り払い、ボロボロのヒレでフライヤを叩いて吹き飛ばした。

ジタンがフライヤを受け止めたが、ウォータを唱えられて水弾をまともに食らって壁に叩き付けられてしまった。

「ジタンー・フライヤ!!」

更に追撃しようと水弾を溜めているギザマルークに私は焦って弓を引くが、その痛みでギザマルークが後ろへと倒れていく。だが、その巨体は大きすぎたために、運悪くビビがいる場所にまでとどいてしまうくらいだった。

ビビがあんな巨体をまともに食らったらただじゃ済まない……!

一発で仕留めないといけない、相手がどれだけ体力が残っているのかも分からない。

消し去るくらいの大ダメージを当てるしかない!

「ジョブチェンジ、セージーギガフレア!!」

私のMPが全て無くなって、そして同時にギザマルークにとてつもない火力での大爆発が起こった。

その威力は水をも蒸発させてしまうほどで、強烈な熱風が洞窟内を包み込み、爆発で全てを揺らし吹き飛ばした。

壁にはたくさんの亀裂が入り天井は崩れ落ち、爆発が収まったときにはギザマルークは骨すら残っていないかった。

「ビビィィィィィィビビッ!!」

私は真っ青になりながらビビの居たであろう場所へと跳んだ。

その場所も爆風の爪痕が残されていて足下に亀裂が入っている。まさかビビまで燃やしてしまったんじゃ――

「ぶはっーび、びっくりした……」

その場から少し遠くの水辺からビビは顔を出してこちらに泳いできた。

自分が殺しちやったかもしれないと思っていたから、私はへなへなと地面に座り込んで泣き出してしまった。

殺したかと思った。本当に怖かった。

何てえげつない火力……現時点のレベルでこれだけの火力が出る

と言うことは、まだこれは弱い威力だと言うことだ。

バハムートの技もメガフレアなのに、私が使ったのはその上のギガフレア。レベルのお陰もあって威力が低かったことに感謝すべきかもしれない。

もしもつと威力が高ければ、洞窟が崩れて生き埋めになっていたかもしれないかった……助けたかと思っても、これでは私が仲間を殺してしまう……なにをやっているんだ。

もつと考えなきやいけないな……剣などで高威力が出せるようにならないと。それならこんなことにはならないはずだ。

「お姉さん泣かないで、ボクは大丈夫だよ」

「ごめんえ、ごめ、うええ」

ビビに慰められながらセージにジョブチェンジしたので服装が替わり、ローブ姿になっていた。私はローブで涙を拭い、泣くのをなんとか押さえた。

それからまだ熱の余波のあるギザマルークが居たであろう場所へと行けば、石は溶岩のようにドロドロに溶けてしまっていた。

あ！そうだ二人は無事か!?

「ジタン、フライヤー！大丈夫!？」

壁に叩き付けられて地面に伏せている二人に駆け寄れば、小さくうめき声を上げた。

急いでポーシオンを使えば何とか回復したけれども、二人とも戦えるような状態じゃなかった。

ビビも急いで駆けつけたけど、ビビも回復魔法も使えないからオロオロとするだけである。

「モーグリ達がいいたコで休ませてもらおう」

やっと歩けるかという状態の二人をつれ、我々は先ほど助けたモーグリたちの元で休むことになった。

「ギザマルーク様があんなに荒れ狂うなんて……」

フライヤはうつむきながら呟き、そして私を見上げた。

「ギザマルーク様を一瞬で葬ったお主は一体何者なのじゃ」

私は少し沈黙してから、ただの旅人だと答えた。

「巨大な力を持つてはいるけど、それを正しく使うために旅をしている、つて言う感じなのかな……でもこの力も悪いやつに利用される可能性もあったから、隠してきたの」

下手したら洞窟が潰れてたわ、つて笑ったら、みんな少し顔を青くしていた。

しやれにならなかつたもんな。

「……みんなは少し動けるようになったら、この洞窟に溢れてるモンスターを討伐した方が良いかも。ギザマルークで苦戦するようじゃ、多分何も救えないよ」

私の言葉に皆がうつむき、私は持っているポーションの半分を置いて、壁についているツタを掴んで登り始めた。

やっぱりレベルが足りない、どうしてもレベルが足りない。

「そ、外は危険クポ!!」

外にいるグランドドラゴンを知っているモーグリがそう呼び止めたが、知ってる、危なかつたら逃げるからと言って上まで登った。

そこは深い森の中で、聞き慣れない鳥のさえずりが響き渡っている。

確か森にはガルードダが居たか。

「皆は絶対来ないでね、死ぬから」

私はそう告げて森を抜け高原に出た。

見晴らしの良い景色ではあるが、やはり居ましたグランドドラゴン。

緑色の四つ脚ドラゴンさんはこちらには気が付いていない様子で、のしのしと歩いている。

群れで行動しているわけではないので、今見えるのは一体のみだ。

木の陰に隠れながらエーテルを飲んで全回し、先ほどギザマルークに放ったギガフレアを唱える。

強烈な熱が集中し、大爆発を起こす。だが流石グランドドラゴン、倒れません。

いきなりの攻撃に怒り狂ったグランドドラゴンはあちこちにサンダガを打ちまくり、辺り一面が荒野と化した。

私の居る方にはサンダガが届いていないので、またエーテルを飲んでギガフレアを打ち込む。

さて、もう一発、とエーテルを飲んだ瞬間、サンダガが飛んできて木の陰から逃げ出す。

かなりの威力に、当たったら体力は三分の一くらいしか残らないだろうなと思いつつグランドドラゴンとにらみ合った。

グランドドラゴンもようやく自分に喧嘩を売ってきた相手を見つけて、鋭い爪で襲いかかった。

確か猛毒だから……つていうかあんなの食らったら真つ二つだよ。何とか跳んで避けながら、後方に跳びつつギガフレアを唱えれば、

流石にあの威力の攻撃を三発くらったグランドドラゴンはようやく倒れたのだった。

……完全にエーテル飲んでごり押しだったけど、あのギガフレアで倒れないグランドドラゴンはやはりとんでもない強さだ。

勝てたので一気に経験値が入ってレベルもぐんと上がり30に到達した。

ここでクイナのレベル5デスを使ってグランドドラゴン狩りをしてレベル上げをするというのが楽ちんなのだが、あいにくクイナはいない。

私の青魔道士にもレベル5デスはあるから乱獲は可能だが、ジョブチェンジはさつきやってしまったのでしばらく無理だ。

さて、大分騒いだし他のグランドドラゴンが集まりつつあるので、急いで洞窟に戻ろうと森に入った。

中でガルーダに出会ったが、ウオータを唱えて水弾当てたらすぐ倒れてくれた。

ウオータでも結構威力あるな……  
ギザマルークの洞窟に戻れば、皆まだ休んでいたようで、無事か？

と聞かれた。

「めちやくちや強い竜が居て一匹だけやっつけて逃げてきた」

「やっつけたクポか……」

「皆はまだ休んで、私は見回りに行ってくるわ」

皆を残してギザマルークの洞窟を歩けば、息絶えてしまっているブルメシア兵がたくさん目にとまる。

その中に黒魔道士達も居て、ただ操られていると考えると切なくなつた。

もはやこの洞窟には誰も居ないみたいだつた。

——刹那、むくりと身を起こす黒魔道士を横目で発見し、エーテルを口にして杖を構える。

黄色い瞳があちこちを見渡したと思つたら、こちらと目が合い、そして後退つた。

私も普段と違う行動を始めた黒魔道士に目を丸くしたと同時に、その黒魔道士は走り出した。

私は一瞬で理解した、あれは自我を持った黒魔道士だと。

黒魔道士は走つたが行き止まりになつてしまい、私を見てひどく怯えていた。

「いじめないよ、怖がらせてゴメンね」

そう声をかけたらまたビクンと身体を跳ねさせ頭を抱えて縮こまつてしまつた。

こうやって自我が目覚めていく子がいるんだ……と思ひながら彼に歩み寄り、大丈夫、と抱き寄せて背中を撫でた。

「何が起こつてるか、分からないよね」

「こわい、こわい、こわい」

震えながら黒魔道士がずっとこわいとうわごとのように言つていて、大丈夫と背中を撫で、しばらくしたら黒魔道士は言葉を止めるがでもまだ震えは止まっていなかった。

私は身を離して彼に逃げるように伝えた。

「その通路をまっすぐ進めば出口に出られるよ、そしたら沼か、海あたりで身を隠しなさい」

沼の理由は、外側の大陸に行くための通路がそこだからだ。

海もあげた理由は、他の仲間達も集まり始め、船で海を渡つたりするからだ。

「君と同じ姿で、キミのように話が出来たらそれは味方。こちらに



攻撃してくるのは敵だから逃げることに。人間達にも出会わないように隠れること」

「……あなたは、ダレ」

「お人好しのウサギさんだよ」

行きなさい、と背中を押せば、少しこちらを振り返ってから走って行った。

あのこのほかにも目覚めた子達はあるのだろうかと倒れている黒魔道士達を見て回るが、全員死んでいるようだった。

数も二百番台まで黒魔道士達は作られているから、ここに居るやつのなかで目覚めるのなんてほんのわずかなのかもしれない。

でもとにかく見逃さないようにして、逃がしてあげないと。

そう思いながらジタン達の元に戻れば、残っていたモンスターを討伐していたようで、ラミアと戦っていた。

私はそれを遠目で見守りながら、三人の連携の出来にうんと頷いた。

これなら後々も大丈夫だね。

「ただいま」

「ヴィエラ！戻ったか！」

ジタンは最後の一太刀を食らわせてラミアを倒す。

私も少しつかれたと言って皆でまたモーグリ達のいる小部屋で休むことになった。

「ここら辺の敵は簡単に倒せるようになったぜ」

「それなら心強いよ。それと、生き残っている兵がいなか確認していたんだけど、皆もうダメだった」

「……そうか」

フライヤは残念そうにうつむいたが、もう少ししたらブルメシアへ向かおうと立ち上がった。

「先ほどヴィエラに言われたとおり、弱くては何も救えぬ。私はまだ、弱い」

これから先、まだブルメシアの悲劇を目の当たりにすることになるフライヤ。

そしてまた更にクレイラで絶望を覚えるだろう。

私はまた知らないふりして黙っている。

「私はまだまだ強くならなければならぬ……」

「……身体を休めるのも大事だよ」

そのまま出て行ってモンスター狩に行ってしまうそうだったから止めたが、分かっていると笑われた。

微笑んでいるけど辛そうなフライヤに申し訳なくて、私は黙ってうつむいた。

しばらく休んだ後、ようやくギザマルークの洞窟を抜けてブルメシアへと向かう。

外はもう暗くなっているが、それでも走った。

道中、逃げてきているブルメシア国民達にも何度か出くわし、リンドブルムに避難するように呼びかけた。

「ギザマルークの洞窟のモンスター狩りをしている良かったぜ」

たくさんやつつけておいたから、一般人も通れるはずだ。

逃げてきている者の中には兵士もいて、国より家族が大事だと逃げていく。

そして誰一人王の安否を知るものは居なかった。

「かなり混乱しているね」

「急がねばー」

そしてどンドン雨が降り始め、ブルメシアについたときには我々はびしょ濡れになっていた。

こんな状態でサンダー系されたら感電するのでは。

「ここがフライヤの生まれた国か……」

ジタンは皆が慌てて逃げ出したであろう街の惨状を見て顔を引きつらせた。

倒れている人々、壊された建物、活気があったであろうこの場所には雨の音しかしなかった。

「この国を出て早5年……この故郷を夢見ぬ日はなかった。そしていま竜騎士としての力が試されるときなのじゃ！」

恋人を探して国を出て、戻ってみればこんな惨状。

早く王を助けたいだろう。

「果たして、私にどれだけのことができるのか……」

街の中を行けば、生き残っている人は見当たらない。

皆もう死んでいて、フライヤは走る速度をあげ、大きな屋敷に通りかかったとき、上のバルコニーからソーンとゾーンが顔を出した。

「また来たでおじやる！」

「しつこいでござる！」

そして黒魔道士達をけしかけ、ギザマルークの洞窟で散々モンスタールと戦った我々の相手にすらならず、黒魔道士達はあつという間に倒れた。

ジタン達をあそこでレベル上げて置いて正解だったな。

「そんなことばかりしていると、あの女將軍に怒られるでおじやるよ！」

「そうでござる！あの女將軍を怒らせると怖いでござるよ！」

ソーンとゾーンはそう言い残して去って行き、我々は更に先へと向かう。

フライヤはブルメシアの王宮はもうすぐそこだと言った。

そして長い階段を上っているとき、フライヤは足を止め口を開いた。

「この先が王宮じゃが、居住区の荒れ様をみると、この先に進むのが恐ろしいのじゃ……」

フライヤは不安を漏らし、更にひどい有様になっているのはなんとなく察してしまう。

国を攻めるとなれば、王を狙いたいだろうから……

その時上の方からまだ残っていたブルメシアの民や兵が逃げてきていた。

彼らは命からがら逃げてきて、子供達は泣きじゃくっていた。

そしてビビを見て更に怯え、わんわん泣いてしまう。

「このものは黒魔道士ではない、それより早く逃げるんじゃ！」

国民は逃げていき、フライヤは更に顔を青くしていた。

「ここで立ち止まってちゃダメだ、敵の正体を見極めようぜ！」

ジタンがフライヤに言葉をかけ、ビビも黒魔道士達の正体を知りたいと言う。

「ボクはどんな人間なのか、知りたいんだ」

フライヤは自分自身の恐怖と戦っているビビを見て前を見据え、進もうと言った。

更に先へ進めば、彼らを追いかけてきた黒魔道士達と出くわし、そいつらも軽くあしらってやる。

結構な量がこの街に放たれているのか、あちこちから黒魔道士が顔を出した。

「ええい、いったいどれだけおるのじゃ!」

嫌気がさしてきたのか愚痴をこぼしながら槍で打ち抜き、ジタンは蹴りも入れて魔道士達をやっつけていく。

ビビも臆することなく魔法を当てて攻撃し、我々は順調に進めていくと思う。

大きな建物に入れば、ここでもあちこちにブルメシアの民が息絶えていて、生き残っている者が見当たらなかったが、微かに何か声がしたので見に行けば、今にも倒れそうな石像の下に生き残りの国民が見えた。

「なにやってんだ!? それより、石像が何だか倒れそうだ……!」

ジタンは何か嫌な予感を感じたのか二人に駆け寄り、石像から引き離せば同時にその石像が崩れ落ちてしまった。

そのまま移動させなかったら下敷きになっていたところだ。

ジタンが助けたのはどうやら夫婦らしいが、夫の方が足に怪我をしてもうまともに歩くことが出来ないと言っていた。

「オレのことは良い、だから、お前だけでも逃げろ」

「あなた……いやよ!」

離れないわ!と泣いている嫁さんに、外からまだ生き残っていた兵が駆け寄った。

そしてその兵が夫を担ぐから、逃げようということになり、どうにかにげられそうである。

その後ろ姿を見送ってから王宮を目指せば、王宮がめちやくちやに

攻撃されてしまっていたと分かるほどにボロボロになっていた。

黒煙が上がり、立派だっただろう城壁も崩れ落ちていて、王の安否も正直……

「そういえばダガーが来ている感じがしないね」

私がそう言うと、ジタンも同じ事を思っていたと言った。

ダガーも行方知れず、ブルメシアはこんな感じ、最悪である。

フライヤは片膝をついてうなだれてしまい、今はそっとしておこうと離れたとき、フライヤは王宮に人の気配を察知したようで立ち上がった。

この先そのまま行くとベアトリクス戦に入って強制的に負けになり、そしてクジャとの初の対峙する場面になる。

私はまだベアトリクスと戦いたくないし、クジャにも会いたくないので、この戦闘から逃れるべく、逃げていった人たちが心配だから街の外まで送ってくる！と言って無理矢理離れた。

先ほど逃げた人たちを追っていけば、逃げられてはいるけどあの黒魔道士達もまだ居て追いかけていた。

これ、来てなかったら殺されてませんか？

「エアロー！」

つむじ風で黒魔道士達を巻き上げ、地面にたたき落とす。

魔力が強いせいでこの一発で倒せるから楽ちんだ。

「街の外までお送りしましょう」

「ありがとう！」

「助かったよ！」

人々は喜び、そして黒魔道士達を倒しながら街の外にたどり着いた。

この道中で物陰に隠れていた国民も何人も居たので仲間に加えたから人数が結構増えた。

「出来ればリンドブルムに亡命する方が良いと思います」

私の案に、賛成するものとそうでないものが分かれた。

賛成しなかった者はクレイラに逃げると言っていて、昔に別れてしまった一族だが、同じネズミ族だからきつと受け入れてくれると信じ

て走って行く。

そして人々はそれぞれの道に分かれていった。

私は街に戻り、残りの人が居ないか確認する。

その中で黒魔道士達も確認するが、だめだ、皆死んでる……

……ていうか私が殺しているというか。

とりあえず反応はなさそうなのでジタン達の居る王宮へと戻り、崩れた城壁を登って中の様子を見る。

するとジタン達は負けてしまつて、地面に這いつくばっていた。

「私の闘士を満足させてくれる者は、この国にも居ないのか……」

彼らの前に立っているベアトリクスはそう呟き、つまらなそうに溜め息を吐いた。

確かに騎士として強者と戦いたいと思つただろうけども、ブルメシアが攻撃を仕掛けてきたのだというブラネの嘘を見抜けず使われているのは哀れである。

私は気付かれないように息を潜めて敵が去るのを待った。

ブラネとベアトリクスが去つたが、クジャだけが残り不敵に微笑む。

なにせジタンに国の混乱を見せつけて笑っているのだ、本人の目の前でこういうことが出来るのが気持ちよくて仕方が無いだろう。

「さて、ドブネズミは置いといて……問題はこっちの少年だな」

分かっているくせに、少年、と呼んだ。

クジャはジタンを見下ろし、気持ちよさそうに微笑む。

その笑い声がここまで聞こえるんだよね。

「そしてそこに居るネズミが一匹、かな」

え？　なんて間抜けな顔をした瞬間、背筋がぞくりとした。

恐る恐る顔を除かせれば、クジャはこっちを見ていた。

めちやくちやバレてた……!!!

「なんだ、ネズミじゃないようだけど、けだものには変わらなかったね」

そう言つて銀竜に乗り、高く高く飛び上がりどこかへ行つてしまふ。

私はクジャと目が合ったことで心臓が大騒ぎして呼吸を荒くした。下手したら殺されていたところだっただろう、あぶなかった……動物的勘というか、完全に被食者の気持ちになったよ。マジで殺されるかと思った。

胸を押さえつつ倒れてる皆のもとに駆けつければ、ベアトリクスにやられた怪我でまともに動けそうになかった。

「ほら、ポーシヨンつかって!」

「……ヴィエラポーシヨン持ちすぎじゃねえ?」

ポンポン出してくるポーシヨンの量にジタンが流石に気になり始めたみたいなので、金はあるからとにかく買えるだけ買ったと答えたら、金持ちだなあと返される。

ホントはチョコボで掘ったお陰ですが、それは言わないでおこう。

「先ほどの気色の悪い男……一体何者なのじゃ」

フライヤはポーシヨンを飲みながら先ほどのクジャのことを考えていた。

あまりにも異質な存在、クジャ。かつこも異質。

「ヴィエラはどう感じた?」

フライヤの問いに、正直に殺されるかと思ったと正直に漏らした。

「え、あいつそんな強いのか……?」

「……うーん。カンだけど、かなりいやな気配がしたよ。隠れてるこつちに気が付かれたときに目が合ったんだけど、背筋が寒くなった」

この中でも強者である私がそういうのだから、皆は冷や汗をかく。下手したらあのまま全員殺されていたかもしれなかったからだ。

だけど見逃してくれた理由があったことを、彼らは知らない。あえて殺さなかった理由を……

「とりあえず皆が無事で良かった。逃げた民達も私が守ったから大丈夫だったよ」

「すまないヴィエラ……」

「困っている人をほってはおけないよ」

また少し休んでから、ブルメシア王がここには居なかったという情

報を得た我々は、次にクレイラへと向かうことになる。  
誰も居なくなつたこの国を歩き、雨の音だけがこだました。



## クレイラ

ブルメシアから少し離れた岩陰でテントを張って休む我々……  
クレイラに向かおうとしたのだが、この暗さと先ほどの戦いでやはり一度休もうと言うことになった。

狩猟祭からギザマルークの洞窟、そしてブルメシアと連戦が続いて流石に皆の疲労が溜まっていた。これ以上無理して進む方が危険だった。

岩陰に張られたテントの側はモンスターの気配がないので、とりあえず今夜は大丈夫だろう。

「ブルメシアから逃れた民は無事であろうか……」

横になりながらフライヤが呟き、少なからず兵も一緒に居たから大丈夫だよと言って私は目を閉じる。

クレイラへの道のりで、同じようにどこかで休んでいる民も多いのだろうなと思いつつ眠ったのだった。

目を覚まし、クレイラに向かった我々は、遠くからでも見える竜巻に圧倒されていた。

「……まさかダガーがこんなところに来ていたわけ無いよな……」

ジタンはブルメシアにダガーが居なかった故に、何処に向かったのか分かっていないようだった。

アレクサンドリアに戻ったというのは思いつかなかったみたい。

竜巻の根本付近へとやってきたが、見た目より砂嵐は落ち着いている様に感じる。

フライヤも同じだったようで、普段よりも静かじやと言った。

クレイラも異変が起きていることを感じたが、先へ進むことになる。

「うーん、ブルメシアの民を受け入れるために風を弱めてくれてるって事は無いの？」

「……そうかもしれないな」

「それなら敵が来ないうちにオレたちも早く登ろうぜ！」

砂嵐を進めば、大きな大樹がお出迎え。ここの上に皆住んでいるんだな。

イーファの樹とどっちが大きいのだろうか。

頂上目指して砂の中を走るが、ローブを引きずっている私には結構キツイ。

ジョブチェンジは昨日の夕方にしたからまだまだ先だー!!

泣き言を呟きつつ進めば、砂のモンスターやら虫やらに襲われる。

「ウォーター！」

サンドゴーレムは水が弱点みたいで、たくさんの水に抵抗できず下へと流れていく。水には勝てなかったね。

クレイラの内部は木の幹の迷路のようで、砂嵐の砂にも浸食されているし大分参る。

道は分からないし歩きづらいし滑るし……

「せっかくのヴィエラなのにローブが邪魔だ……!!」

あああとわめきながらも着々と進んでいく。

ドラゴンフライに襲われサンドゴーレムにも襲われ……あああ魔術師系は基本動きづらいからこういうとき不便だー!!

「エアロー！」

「ウォーター！」

「エアロー！」

ポコポコ魔法をぶちかますが、その他の魔法がドレイン、ブライン、バイオとちよいと使い勝手が悪いのでこの二つで頑張ってます。

ああ、レイピアとか弓があればなあ。

試しに杖でぶん殴ったら、流石のレベル差でボコボコに出来た。

うん、これはいい。物理セージですわ。

「おらおらかかってこいやー！」

段々楽しくなってきた私はサンドゴーレムのコアを杖で殴って破壊する。

私の通常攻撃もそうなのだけど、この杖つよいな。

「……ヴィエラ一人でこの辺の敵全滅させちまうんじゃないか？」

「そ、そこまでしないよ！砂面倒だから先に行きたいし……」

ヴィエラ無双が始まっていたので慌ててやめたが、ジタン達は心強いと言わんばかりに笑った。

「そんなこと言ってもあの変態さんにはどうひっくり返っても勝てるとは思えないから、期待しないで欲しいな……」

こうして樹の幹の探検をして行き、ようやく頂上へと登ってこれた。

下から見上げて上の建物が見えなくらいだから、かなりの高さがあったこのクレイラ。

ええ、登山しているくらいのつらさでした。ゼーはー。

クレイラの街はほのぼのとしていて、ここでは空が広がっていても気持ちが良い。

だけでもう日が沈む時間になってしまっていて、空はあかね色で、星もぼちぼちきらめき始めていた。

ここは砂と風の音がするけど、それはまるで川のせせらぎのように心地が良かった。

そこに待っていたのは二人の神官で、フライヤを待っていたと言った。

やっぱり入り込めるように砂嵐を弱めていたんだよね？

そして二人の神官はブルメシア王からフライヤを丁寧に案内するようにと言われているとのこと、王様が無事と聞いてフライヤは胸をなで下ろし、早速案内してくれと急いだ。

「私は王に謁見してくる。ジタン達は少し休んでいると良い」

「おう、分かったぜ」

「いつてらー」

フライヤは神官達と先へと向かい、私たちは街で自由行動になった。

まるで砂漠の中のオアシスのようで美しいクレイラは観光にはぴったりで、先ほどまで殺伐とした様々な光景が嘘のようにここはおだやかだ。

あああ癒やされるー。

巨大な謎のキノコや、小さな滝、そして水車、そこらにこけも生え

ていて幻想的だ。

マイナスイオンが発生しているんだろなあ……

そこから街に出たりして歩き回り、展望台に行けば砂嵐で半分くらい外が見えないが、空がキレイなので問題なし。

「あら、こんにちは」

ふと声をかけられて振り返ってみれば、美しいネズミ族の踊り子が二人いて、美しさに思わず「おお」と声を漏らした。

「お二方、優雅で美しいですね」

「ありがとうございます」

二人はお辞儀をして、この展望台は憩いの場所なのだと教えてくれた。

砂嵐は自分たちを守ってくれる存在だから、感謝するために祈りを捧げるのだという。

その邪魔をするわけに行かないので私は街に出てみたのだが、そこでは何かもめ事のような声が聞こえ、駆け寄ってみたらビビがブルメシア民に睨まれていたのだ。

それもそのはず、襲撃してきた黒魔道士の格好なのだからそうなるだろう……

「待ってくださいその子は違います！」

私は急いで駆けつけ、今にも斬りかかりそうな男性の前に立ってビビを守るように手を広げた。

「何が違うってんだ！」

「この子は似ているだけで、ブルメシアを襲った黒魔道士達じゃないんです」

守るようになぎゅつと抱きしめてから身を離し、ほら！と見せつける。

「敵だったらもう私は攻撃されています。この子は一緒に旅をしてきた私の仲間なんです」

「そんなの信じられるわけ……！」

その時、騒ぎを聞きつけた他のブルメシア民が集まって、待ったをかけた。

「その方は私たちをブルメシアから逃してくれた……黒魔道士達から助けてくれた命の恩人です！」

「オレも助けられた！」

「その人が言うんだ、そいつは似てるだけなんだろう！」

私が逃がした人たちも間に入ってくれて、何とかこの場は収まった。

だけど似ているだけで攻撃されてしまったビビはしょんぼりとしていて、そつと宿へと連れて行った。

「今日もたくさん戦ったし歩いたから、もう休もう」

「……うん」

「ジタンも呼んでくるから、ここで大人しく待ってて」

優しく背中を撫でてからジタンを探しに行き、宿を取った事を話した。

フライヤの王との謁見もそのほかに色々ありそうで時間がかかるだろうし、とにかく休めるときに休むべきだろう。

「クレイラを登るのも大変だったし、ちゃんと休まねえとな」

ここまででようやく日が落ちて空はあかね色から紺碧の夜になり、星がいっぱい広がっている。

この世界の星空は本当にキレイだ。

私の世界では街灯が多すぎて星や月の光をもかき消してしまつて、よくみえないんだとか。

だから山とか街灯のないところに行くと星が綺麗に見えるんだよね。

少し早めだが私たちは布団に入り、今日はビビと添い寝することにしました。

「大丈夫、何があっても私やジタン達が味方だよ。大丈夫」

子供をあやすようにポンポンと背中を撫でたら、ビビは小さくうんと頷く。

ビビの頬を撫でてお休みと言い、私はビビが目を閉じたのを確認してから目を閉じたのだった。

翌日、早めの就寝だったからか、朝日と共に目が覚める。

添い寝していたビビはまだ寝ていたが、私の身じろぎで目を覚まし

てしまった。

丸い瞳と視線を交えて、私は微笑んで「おはよう」と言えば、ビビも返してくれる。

ベッドから降りてぐぐつと身体を伸ばせば、しっかりと休めていて気分は良い。

さて、ジヨブチェンジだが、昼になればできるようになるだろうか、それまでは何も起きなければ良いけど……

ここでまたベアトリクスとやりあうことになるから、ここでは闘士とかで相手をしたところだ。考えておかないとな。

「ビビはよく眠れた？」

「うん」

「じゃ、ジタンも寝てるし、早朝の散歩一緒にしない？」

「うん！」

私と一緒にならブルメシアの人々から何か言われることはないだろう。ビビは笑顔で返事を返して一緒にクレイラの散歩をする。

私が好きなのは水車のところなので、ここで座って段々と明るくなる空を仰げば、ビビも同じく空を見上げた。

のほほんと時間を潰していると、ブルメシアの民が何人か通りがかったが、平和的に挨拶を交わしていく。

ビビもなじめたみたいで小さく会釈を返していた。

しばらくすると、目が覚めたジタンが朝飯を食おうと呼びに来てくれて、宿で出してもらったサラダと卵とパンをかじる。

とても質素だけど美味しかった。

その時、外から「大変だ！」という声を聞き、なんだろうかと宿から出てみたら、子供がアントリオンに襲われていると言う騒ぎだった。

普段は大人しくしているはずのアントリオンが暴れてるといのは、ギザマルークの時のようなのと同じような感じがする。

まあ、流星にソーンとゾーンが操っていたわけじゃなかったけど、間違いなくクレイラに異変が起きているのは確かであった。

それなのに話を聞いていた神官は、大祭司様にご報告しておきます

何て言って、急ぐことなく歩き去ってしまおう。

襲われている子供が心配ではないのか、ここではそういう緊急事態が起こったことがないせいなのか、なんともものんきにしていられるなあ……

「クレイラのやつは どうして こうものんびりしてるやつばっかなんだ!!」

襲われているぞ!と報告してくれたブルメシア民が呆れて居たところで、ようやく私たちが行こうと手を上げた。

ここで戦えるのは我々くらいだろうか。

アントリオンの元に案内してもらおうと、確かに子供がアントリオンの前足に捕まってぶんぶん振り回されている。

私とビビは見覚えのある顔に、一緒に「あ」と間抜けな声を出していた。

「バック王子ではありませんか、ご機嫌麗しゆうございます」

「のんきに挨拶してる場合かー!!」

すると騒ぎを聞きつけたフライヤも駆けつけ、王子に気付いて目を丸くしていた。

「もしやバック王子ではありませんか!?」

「おお! フライヤ久しぶりじゃ……うぎゃーっ!!!」

返事を返したバック王子はこちらに投げ飛ばされ、砂に尻餅をついた。

尻餅で済んでいるのは砂地のお陰なのか、ネズミ族だからなのかもしれない。

「いってえなこのやろう!!」

「ハイハイ王子殿、戦いますのでお下がりにくださいませー」

私は王子を後ろに下げつつ、ジョブチェンジで軽く鎧を纏った闘士へと姿を変えた。鎧の面積はおそらくソルジャーの方が多かったのかももしれない。プルートの隊みたいな感じなのか。

闘士は鎧を身につけていても最低限で、力を重視しているから動きやすくしてあるのかももしれない。

普段使っていたのはレイピアだったが、ずっしりと重い両刃の剣を

持つて、早速戦いに入る。

「わお、今度は随分ワイルドになったなあ」

私の格好が変わって、かっこいいぜと言ってくれるジタン。

女の子を褒めることを忘れないのがジタンである。流石。

「攻撃もワイルドかもね。おりゃー！」

アントリオンの足下は流砂の様になっているので迂闊には近寄れないが、反対側に飛ぶ勢いですれ違いざまに足を切り落としてやる。

スパツと落とされてしまった足にアントリオンが嘆きの声をあげた。

暴れて鋭い足をばたつかせるので、皆は一旦引いてビビにはサンダーとか撃ってもらった。

「ヴィエラみたいに攻撃すれば危なくねえな！」

ジタンは私のようにすれ違いざままで足を切り落とそうと跳んだのだったが、アントリオンの粘液を浴びて戻されてしまう。

ベトベトしていて砂が絡みついてひどい有様になっている。

「な、何だよこれ……気持ち悪い！くっそ！」

ねばねばで動けなくなってしまうので、私は言い案を思いつく。

「……よし、ビビ！優しくファイアで焼いたげて！」

「えええ!!ジタン燃えちゃうよ！」

ビビは焦るが、力加減をちゃんとすれば大丈夫！なんて無責任なことを言っただけをさしました。

でもジタンもとちよつと火傷は負ったけど、ねばねばは燃えて動けるようになったという。

「ヴィエラ無茶苦茶だぜ……！」

「あら、じゃあそのまま砂まみれのネバ団子になってたかったの？」

「……いいえ。……ビビ！ありがとな！」

仕切り直してまた飛びかかり、口から出された粘液はちゃんと避けてナイフで斬っていく。

ビビも黒魔法を唱え、フライヤも頭上から槍を当てて攻撃を入れ、着々とダメージを入れていた。



そしてビビいつの間にかファイラとか唱えてるけど、「ラ」系の黒魔法いつの間に覚えたん……強くなったねえ……

「空破斬！」

闘士になったので使える技が変わったから、ここで練習がてら撃つてみる。

空破斬は斬撃を飛ばす技で、アントリオンの足をスパッと飛ばすことが出来た。

ううん、良い切れ味。動かなくても遠くに攻撃できるのは楽だわあ。

「あとは、ブリッツ」

ブリッツは攻撃力は下がるが、命中率が上がる技だ。

ぴよんと跳んで意識を集中させ、足の関節部分を狙って攻撃できた。

これも一対一での戦いで狙いたいところに攻撃できるのは良いかもしれない。

その他の技もあるが、あいにくアントリオンだと足下の流砂のせいで実験し辛いな……

ていうか多分まともに技を当てたらアントリオンすぐ死んじゃう。

私はサポートに転じて遠くから斬撃を投げてアントリオンの足を切り落としていき、ついには手も足も出ない姿になってしまった。かわいそう。

「これで終わりじゃー！」

最後はフライヤの脳天からの一撃を食らい、アントリオンは流砂の中に飲まれていったのだった。

「王子、ご無事ですか？」

フライヤは槍を置き、パック王子に跪いた。

パックは元気よく久しぶりだな、何て笑っているが、フライヤは王子が長い間行方不明になっていたことを口にする。

まさかアレクサンドリアで劇をタダ観するような事をしていたとは思わないよね。あはは……

「うん、ちよつとな……」

何か言いたくないわけがあるのか、姿をくらませていた理由は濁していて詳細は教えてはくれなかった。

フライヤは大聖堂にブルメシア王がいるから、会いに行きましょうと言うが、パックは親父に会うのは照れるから、代わりにヨロシク伝えてくれ！と言って颯爽と走り去ってしまった。

そして遠くから、ビビと私にもまたなー！と声だけ投げていって、元気の良さにふふっと微笑んでしまう。

親父に会うのは照れるって正直に言うところが凄いな。

「ビビとヴェエラは知り合いだったのか？」

ジタンはパック王子のことは知らなかったから、アレクサンドリアと一緒に劇をタダ観してたんだと話したら笑っていた。

「いやー、まさか王子様だとはねえ」

「……ヴェエラは先ほどの開口一番、パック王子ではありませんかと言っていたではないか。知っておったのじゃろう」

確かに開口一番でそう言ったけど、ふふっと笑ってビビと肩を組む。

「パック王子にはアレクサンドリアで会ったときに、子分になればタダ観出来る場所を教えてやるぜ！って言われて子分になっていたんですよ。親分！って呼ぶよりも王子の方が合ってたんでね」

「……坊ちやまの方が合ってると思うぜ」

「私的には王子でしたのー」

さて、アントリオン戦は問題なしに片付いたし、私の剣技も試すことが出来た。

後はベアトリクス戦よね。こういう強敵は相手してないから緊張するわ。

「……あの子、ボクの初めてのお友達なんだ。ボク、追いかけてくる！」

ビビはパックを追いかけていき、私はお友達じゃないんかーいって内心ツツコミながらも（友達というかお姉さんだもんな）武器をしまつてジタン達と共にこの場を後にするのであった。

パック王子のことを王へ報告へ行くとのことで、我々も大聖堂に来

ていて、私は宝珠のついでにハープを眺める。

こういう楽器つて憧れちゃうよね、弾けないけどさ。

フライヤとブルメシア王は何かを話していて、私はあんまり興味がなかったの聞いてないで内部の見学をしていたのだが、外の砂嵐をもっと強くするために古来から伝わる踊りをしよう、と言う流れになった。

見学するために端っこに待機し、その踊りの様子を眺める。

竜騎士であるフライヤもその踊りが出来ているというのは、やはり昔からの教えだったのかな？と思いつつそれを見つめていた。

そして曲が終わったと同時にハープの弦が切れてしまい、砂嵐を強くするどころかすつかり晴れてしまう。

みるみる外界が見え始めて大聖堂から世界を見下ろせば、良い景色ですねなんてのんきなことを発してしまった。

「砂嵐が強まるんじゃないのか!」

ジタンも驚いて司祭に聞くが、誰もこんな事態は初めてだと言った。

なにセクレイラは数百年砂嵐を解いたことがないはずだから、こんなことはなかっただろう。

王はうむと唸ってから口を開き、何者かが結界を破ろうとしているのではと推測するので、私もうんと頷いた。

「間違いなくアレクサンドリアの関係だと思えますね。あちらさん、何か嫌な気配を持ってますから」

ゾーンゾーンもそうだけど、クジヤ含め黒魔道士達も普通じゃないしね。

「敵が幹から上がってこなければ良いのだが……」

砂嵐がない以上、城壁のない城も同然。

誰でもウエルカム状態なクレイラはあまりにも危険だ。

逃げられるならさっさと逃げた方が良いのだが、さてどうしたものか。

それからこの先のことも王は神官と話し合うことになり、我々は外に出された。

砂嵐でよく見えなかった景色も丸見えな青空が引き立てて更に美しくなる。

でもこのクレイラでこの美しさは危険な証拠なので、街の人々は怯えているのであった。

ジタンと展望台にきてみれば、そこにはフライヤがいて、この砂嵐がなくなった原因はなんだろうかと問われた。

「うーん、オレにとっちゃあ、砂嵐があったことだけでもびっくりだからなあ」

彼は腕を組んでうーんと悩み、私は展望台から下界を見下ろしつつ、まあ……と口を開いた。

「世界にはまだ予想だにしない力つて存在するから……」

「……ブラネはそれを手に入れたと言うことか？」

「そこまでは分からないよフライヤ。だけど、黒魔道士達を作り出したことも普通じゃないし、だったらまた予想の出来ないことをしてくるのもあり得る」

私の言葉でフライヤは幹の方で砂嵐が消えた原因を調べに行くと言い、ジタンも私も一緒について行くと後を追いかけた。

その先にはビビも居て、パック王子を追いかけていたけど見失ったと言った。まあちょうど良いので一緒に幹まで来てもらうことにした。

砂嵐のなくなった幹の中は砂の音も静かで、とても通るには楽な道になっている。本来なら流砂もあり、足をすくわれてしまうとと言うのに、足下の砂はとても大人しくしている。

「行きもこれだったら進みやすかったのにナー」

なんて文句を垂れていれば、微かな殺気を感じて振り返る。

そこにはアレクサンドリア兵が2人いて、あちらは声も発せず我々を発見次第い攻撃を仕掛けてきた。

私は斬りかかる剣を受け止め、そしてはじき返し様に腹へ蹴りを一発お見舞いして吹っ飛ばす。他の皆も3対1だったから返り討ちにしてやった。

「ふふ……私たちを止めても、まだまだ来るぞ……」

倒れている兵士はそう言って意識を手放した。

このまだまだ来るぞ、は幹からほとんど部隊が登ってきている……と言う意味ではなく、テレポットを使って空から兵を送り込もうという作戦だから、こちらはおとりに近いだろう。

それからも幹を降っていくと、少ないアレクサンドリア兵としか戦闘しない。

先を知っている私は街が気になると言って勝手に戻る。

ジタンも慌てたように「おい!？」と声を上げていたが、私の足は速く追いかけてくるにも時間がかかるだろう。

振り返ることもせず幹を駆け上がれば、そこには空からテレポットで送り込まれている黒魔道士達に追われている人々の姿があった。

「助けてくれー!」

「ぎゃあああ」

「やめてえええ!」

阿鼻叫喚といえる光景が目に入り、地面を蹴って距離を詰め剣を大きく振るい黒魔道士の首を飛ばす。

私の周囲には逃げ遅れた民が3人、魔道士が3人。

向こうが魔法を放とうとするがソレを許さず腕を跳ね飛ばし、その黒魔道士を蹴ってもう一体に上から斬撃をあたえ、左肩から斜めに切り倒し、残りの一人がこちらに放ったファイラをワイルドスイングでぐるりと高速で回転することにより、炎をかき消し、そして視界が晴れた瞬間に距離を詰めて首を切り落とした。

まだまだ安心できない、彼らを安全なところに避難させないといけない。

「上へ逃げましょう!・とりあえず大聖堂に!」

何処が安置なのかも分からないから、大聖堂と言ったが、次々と空から黒魔道士達が送り込まれてくる。

どんどん合流する市民を守りつつ、一発で黒魔道士達を倒していくが、本当に切りが無い。

とりあえず守れた人々を大聖堂に押し込み、兵士も居たから籠城のための番を頼んだ。

私は他にはぐれた人が居ないか確認しつつ黒魔道士を切り捨て、辺りはネズミ族の死体より黒魔道士の死体の方が多くなる。

あんなにキレイだった街が、いとも簡単に汚れてしまった。

足下のキレイな草花、流れる滝、岩にこびりついている苔……全てが赤く斑に染まってしまった。

そうやって一人で戦っているうちにジタン達とも合流し、ジタン達も逃げていた民を守っていた。

「ヴィエラー！」

「街の人たちは救えるだけ大聖堂に誘導した！皆さんも早く！」

迫り来る黒魔道士達を退け道を開いていくが、大聖堂まで来たときに多くの黒魔道士に囲まれてしまい、絶体絶命かと思いきや、謎のネズミ族が現れて黒魔道士達をやっつけてくれた。

謎のネズミ族も一緒に大聖堂に連れて行けば、彼はフライヤの恋人のフラットレイだという事が判明する。

だが記憶を失っていて、何も分からないと言われて、フライヤは膝を落としてしまった。

旅に出た恋人を追いかけて旅をしていたフライヤ。だけど再会してみれば「覚えていない」なんて言われてしまう。

声なんてかけられなくて、ただ見つめて居たら、フラットレイはこの場から去って行ってしまった。

「フライヤ、追いかけてなくて良いのか？」

ジタンが問うが、恋人が生きていたことが知れただけでも幸せだと泣きながら微笑んでいた。

生きていて嬉しい反面、自分を知らないと言われてしまうのはキツいもんだ。

「オレはフラットレイをさがしてくるよ！」

隣で聞いていたパック王子は走って大聖堂から出て行く。途中ビビにぶつかってビビはドテッと尻餅をついていたのだった。

ビビは状況が分からなかったから泣いているフライヤを気遣ったが、フライヤは辛そうに微笑んでいた。

——刹那、背後から神官の怯える声が聞こえ、そこにはクレイラの

宝珠を手にしたベアトリクスが立っていた。

まるで怪盗の様に「この宝珠はいただいた！」と颯爽と去って行き、おいおい門番とか入ってくるまで誰も止めなかったのかーい！ってツツコミは置いといて、宝珠を取られたままでは居られないので、すぐさま大聖堂を出て行くベアトリクスを追いかけるのであった。

「逃げる気か！」

ジタンの声にベアトリクスは足を止め、鼻で笑って振り返る。

そう、ブルメシアでの戦いで、ベアトリクスに全く刃が立たなかつたはずの彼らの言葉に思わず笑ってしまったのだ。

軽い挑発に乗るような女性ではないだろうが、ここで灸を据えろという感じでセイブザクイーンを抜いてゆっくりと構えた。

「ちよつと悪いんだけどさ、ここは私にやらせてくれない？」

張り詰めた空気の中、私は前へ出て剣を構える。

ジタン達は待てと言うが、先手必勝と言うことで勝手にベアトリクスに斬りかかりました。

「ブリッツ」

小さな一撃だけど命中率が高い技で攻めれば、彼女も軽く私の剣を弾きそして呼吸をする間に私の胸へ刃を突き立てようと腕を伸ばす。

私も迫り来るセイブザクイーンをいなし、その軌道を保つたまま身体を軸にし剣を振るい、ベアトリクスはその攻撃を弾いて少し距離を取った。

「少しは私と相手が出来そうですね」

「さあ、どうでしょう」

舐めんなよ？と思いつつ、ぐつと脚に力を込め、ブーストを放つ。ベアトリクスは威力の高い攻撃だと見抜き、一気に後退して避けた。そして彼女は少し力を溜め、私にショックを放つ。

まるで閃光の様な斬撃を躲すために、近くにあった樹に向かってブリッツをしてその場からすぐさま逃げ出すことが出来た。

向こうがショックで遠距離技が使えて有利に見えるが、私だって遠距離技持ってますから、遠慮無く放っていく。

「空破斬！」

剣の斬撃を放てば、ソレをショックで打ち返される。

遠距離での戦いは不利だな、力を溜めるのに少しかかる。それに、ベアトリクスは白魔法の最強技、ホーリーも唱えられたはずだから気をつけたい。まあ現在は唱える暇すらないだろうが。

「ブリッツッー」

私は詠唱時間を与えないよう一気に距離を詰め、またも威力重視のブーストをベアトリクスにお見舞いする。流星に二回も同じ技を見れば、どういう技なのかも分かっているのか、先ほどよりも少ない回避……一歩避ける、程度で私の技を避けた。

ブーストは威力重視なだけあり大きく振りかぶるし、命中率は低い。だが、私はあえてソレを使ったんだ。

「同じ技ばかりですね」

見飽きたとぼやくベアトリクスは、無防備になっている私の横から切り捨てようと剣を振るう。

……だが、その振るった剣を“掴んで”止めた。

私の手は甲冑を着けているといえども、手のひらは所詮グローブだ。この行動も私の闘士アビリティの一つ、「ハメどる」だからなのか、手は無事です。

相手の攻撃を止め、そしてカウンターをするのがハメどる。カウンターならこちらにダメージを負ってからの行動だが、こちらのは攻撃をキャンセルする技なのだ。

流星に剣を直接掴まれるなんて思いがけない行動だったのか、ベアトリクスの目は見開いていた。

私の剣を受け止めようにも私とその剣を掴んでしまっている。

ベアトリクスは腕の鎧で私の剣を受け止め、ならば、と私はベアトリクスの腹に蹴りを入れて吹っ飛ばした。

「くっー」

宙返りして体勢を立て直し、握って離さなかったセイブザクイーンを構え、そしてこちらに突っ込んでくる。

これはおそらく大技が来るという予感がして、私も自己ダメージ付きの火力技であるバツクドラフトを準備し、相手の技にぶつけて相殺



させた。

激しい白っぽい斬撃の嵐……今のはストックブレイクだったかも  
しれない。

私はバックドラフトの反動で身体の節々がぎしりと痛んだ。

「この技も受け止めるとは……こんなところにここまでの強者がいる  
とは思いませんでした」

「ならもう少し遊びましょうよ将軍様」

またも一気に距離を詰め、剣と剣の打ち合う音が木霊する。

隙あらば技も織り交ぜるが、互いに相手の剣を打ち返すくらいの余  
裕しかないので中々大技など出せ無い。

だがベアトリクスは技を出さざるを得なかったのだ。

私のアビリティのハメどるが地味に厄介だったみたいだ。普通に  
打ち込めば止められる挙げ句に攻撃をされてしまうのだから、嫌でも  
技を使うしかない。

シヨックは少し溜めが必要だから、距離を置いた時点で発動され  
る。私も分かっているので距離を離さないようにずっと側にいた。

雷鳴剣も手早くブリッツで相殺させていたので、正直戦況は変わら  
ず膠着状態が続く。

流石のベアトリクスも少々戦況の悪さに目を細めている。

私はニヤリとほほえんで彼女を挑発する。私は攻撃を受け入れて  
も良いように準備もしていた。

「そっちがしないなら、大技入れちゃいますよ？ブースト！」

ベアトリクスは流石に距離を詰めすぎていたのか荒い大技を避け  
られず、剣で受けるが反動が大きく苦悶の表情が見えた。

でも私は技を出した事で隙も時間も与えることになった。

さあ、ベアトリクス、いまですよ？

「……っクライムハザード！」

一瞬彼女に迷いが見えたのは分かった。これが罠だと知って技を  
打ったんだ。

私は強い斬撃を何度も打たれ、身体が切り刻まれる。そしてニタリ  
と微笑んでベアトリクスにカウンターを入れ、とっさに剣で受けたべ

アトリクスを後方に生えている大きな樹へと吹っ飛ばした。

こちらにも闘士特有のアビリティ肉斬骨断。ダメージを受けたときに1.5倍にして返すという技だ。

ダメージは負うが、確実に入れられる大ダメージだろう。

樹に背を打ち付けて、ダメージに息を乱しているベアトリクスはまだ戦おうとこちらを睨んだが、黒魔道士が一人現れて無念と呟いた。「もっと楽しみたかったところですが、もうお時間です。……さようなら」

ベアトリクスはそう言うのと黒魔道士と共に光の粒になって空へと飛んで行ってしまった。

これがアレクサンドリアの新しい兵器のテレポットというものなのだ。

「あいつ、ヴェエラに勝てないからって逃げやがったぜ!」

ジタンはそう言うが、半分間違っているんだよね。

「確かに勝てなくて悔しそうな顔をしていたけど、正直まだお互いの全力を出し切ってないから勝敗は付けられないな。ソレよりも、奪っていった宝玉を持ち帰るのが優先だったんじゃないかな」

私はポーシオンを飲みつつ回復し、そう説明すると皆がうんと納得する。

とにかく追いかけてよと言うことで、他の魔道士達が光になって消えていくのに便乗してジタン、フライヤ、ビビは一緒に飛んで行った。私は最後の一人になってから、大聖堂の皆に声をかけた。

「皆さん今から速やかにクレイラを降りてください、籠城は得策ではないです!いつまでこもっていても囲まれるだけです!ある程度の敵は追い払いましたから今です!」

このままテレポットで空に行けば、クレイラの人々を見殺しにすることになってしまう。パック王子など少なからず生き延びられた人たちがいるのであれば希望は捨ててはいけない。

「ここに居ても死ぬだけです!急いで!!」

恩人である私の言うことだからか、王も含め全員が走って行く。私はその姿を眺めながら、トコトコと歩いている魔道士に近付いた。

黒魔道士達はもう帰還命令をされているので、誰かを見つけても攻撃しようとはしなかったから、今逃げているネズミ族達も狙われることはないと願いたい。

黒魔道士は手を上げ、そして光になる。私も光に飛び込んで、ジタンの居るレッドローズへと飛んで行ったのだ。

その空中遊泳は結構時間がかかる物だった。あつという間に船に到着！と言うことではなく、ゆったりと動いている。あまりにも遅いから眠くなるな、とうたた寝をしてしまうほどである。

——刹那、大きな音がして空を見上げれば、黒雲が立ちこめその中央にはマグマのように赤く光が見えている。

その中からマントをなびかせ、馬に跨がり槍を持つナニカが現れる。そう、オーデインだ。

空から一直線に駆け下りていき、そしてグングニルの槍でクレイラを貫いて、大爆発を起こしあつという間に破壊し尽くしてしまう。

飛んで見えているだけだったが、その衝撃の強さはすさまじいものだった。

爆風は感じなかったが、音と光、衝撃を身体に感じて苦しみに歯を食いしばったくらいだ。

テレポットの光になっているからそこまで被害はなかったのかもしれないが、これが生身だったら結構な衝撃だっただろう。

ギザマルークの洞窟で放ったギガフレアも、下手すればこれほどの力を放つかもしれない。そう考えたら怖くなって背筋が寒くなった。

力を強めても、使い方を間違えば味方を殺す。

冷や汗をかきつつ爆煙を見つめて居るうちに、私はレッドローズにたどり着いたのだった。

## レッドローズとピナツクルロックス

レッドローズにたどり着いた我々だが、ビビはパック王子がどうなったのか分からなくて頭を抱え、フライヤは全てが消え失せてしまったことに絶望し膝をついていた。

フライヤがあまりにも不憫でならなかった。守りたかった王も、街も人々も、ようやく会えたかと思つた恋人も、何もかもすべて失ってしまった。

私は声をかけられず、ただソレを眺めているだけしか出来なかった。

でもジタンが誰か来たから隠れろ！と声をかけてくれたので何とか移動し、階段の影に身を潜めていると、上の通路から女兵士とベアトリクスの声が聞こえた。

「ベアトリクス様、お疲れさまでした」

「ブラネ様はどうしておられますか？」

「ブラネ様はベアトリクス様のお帰りを心待ちにしております。さぞや勝利の賛嘆をあげられることでしょう！」

ベアトリクスと兵はそう会話していて、この船にはブラネ女王も乗っているという情報も得ることが出来た。

声だけなので表情などは分からないが、ベアトリクスは迷いが生じていて喜べていないだろう。

「もはやスタイナー率いるプルート隊など目じやないですね——」無駄口をたたくのはよしなさい!!」

プルート隊の立場が気に食わないのであろうその兵はベアトリクスにそう言うが、その言葉の途中でベアトリクスが叱りつける。

あのベアトリクスはスタイナーさんの事を認めているから、こうやって他者からの陰口が許せないのだろう。

まさかこの将軍ベアトリクスに数年前、スタイナーが“まぐれ”で勝てたなんてホントに信じられない。

正直さつき戦ったとき半分遊んでましたけどもかなり強かったで

すよ。技の駆け引きが上手くいかなかったらダメージ与えられなかっただろうし、逆に返り討ちにされてこつちが痛い目に遭ってたらうし……

マジでどうやって勝ったのスタイナーさん。

「ブラネ様には今すぐお伺いしますとお伝えください」

「はっ」

兵との会話はここで終わり、少し階段の影から様子をうかがえば、ベアトリクスは背中越しに迷いが見える。

そして彼女はぽつりと「何故クレイラを街ごと消滅させる必要があったのだ……」と呟いたのが聞こえた。

「召喚獣や黒魔道士などなぜ必要とする……私はこのようなことのために剣を磨いてきたわけではないのに……」

彼女の虚しさがぽつりぽつりと風に溶けていく。

そして複数の足音と共に女兵士の声が聞こえた。

「黒魔道士ども、こつちへ来なさい！お前達三体はテレポットを使って先にアレクサンドリアに戻り、城の防備に当たるのです」

女兵士は黒魔道士達を率いて階段を降りていき、我々も気付かれないうように更に影へと隠れ、女兵士と黒魔道士がテレポットに入って飛んでいく光を目で追った。

「……私はあのような心を持たぬものと同じ働きしか出来ないのか」

最後の虚しさが風に流されていき、ベアトリクスは歩き去った。

我々はブラネが乗っていることを聞いたので後を付けて行くが、通路の先の扉に阻まれて先に進めなくなった。

……というか、この通路も隠れる場所がないから扉開けられて兵士に見つかったらヤバいんだけどなーと考えながら、ブラネやベアトリクスの動きを探ろうと扉についている小窓をのぞき込むジタン。

だが薄暗くて何も見えないという。

その時、ブラネの声が聞こえ、私たちは耳を澄ませて彼女らの会話を聞くことにした。

ベアトリクスはブラネに先ほどの宝珠を渡したようで、ブラネはとても機嫌が良さそうに笑い声を上げていた。

そこからベアトリクスがダガーの事を尋ねれば、ブラネは城に戻り次第ガーネットを処刑すると言ったのだ。

「ガーネットは宝珠を盗んだ罪で処刑じゃ！召喚獣を全て抜き取ってしまえば、あんな小娘などもはや用済みよ！そんなことよりベアトリクスよ、お前は最後の宝珠を探すのじゃ！」

そしてまた大きく笑い声が響き渡り、その話を聞いてしまったジタン達は真っ青になっていた。

早くダガーを助けないと！とジタンは焦るが今ここでブラネに立ち向かってもベアトリクスが居る以上無闇に手出しが出来ない。

「ダガーが処刑されちまう……！」

焦るジタンにビビがテレポットを使ってアレクサンドリアに行くことを提案してくれた。

「さっきの黒魔道士達があの中に入って光になって飛んでいったから、きつとあの装置を使えばアレクサンドリアに行けると思うんだ」

「ビビあつたまいー！カワイイし天才!!」

ぎゅーつと抱きしめてあげれば、ビビはあわあわと両腕を振っているのが笑えた。

早速我々は急いでテレポットに入り、アレクサンドリアへと飛んでいくのであった。

それからしばらく飛んでいけば、空は茜色に染まり始めていた。

テレポットは不思議な空間で、特に身を動かすことが出来るわけでもないから、窮屈とかそういうのはない。フワツと浮いているような感覚はあるが、自分自身が光になっているから身体的なそういうのは止まっているのだろうか。

ぼんやりそんなことを考えているとついにアレクサンドリアに到着し、城の壁を通り抜けてどんどん進んでいく。

自分たちが光から戻したときには城の地下にたどり着いていて、運良くそこにスタイナーさんとも鉢合わせるのであった。

「おっさん……ここはアレクサンドリアなのか!?!」

ジタンはここがアレクサンドリアなのか確認しようとスタイナーさんに聞けば、彼は貴様にかまつている暇など無いと答えてくれな

い。

「自分は一刻も早くアレクサンドリアの地下牢から抜け出して、姫様をお救いせねばならんのだ！」

「答えてるー！ー！」

と、私がツツコミを入れつつ、ここがアレクサンドリアだというのは確認が取れたので、急いでダガーを助けに行こうと出口へ向かえば、スタイナーさんは自分をのけ者にして話を進められていたことに腹を立ててその場で地団駄を踏んでいた。

ついてこないから我々はスタイナーさんのトコに戻って、レッドローズでの出来事を簡単に説明する。

「ボク聞いたんだ……ブラネ女王はアレクサンドリアに戻ったらおねえちゃんを殺すって……」

ジタンの言葉は聞かないけどビビの言葉は信じるスタイナーさん。

これでようやく皆で助けに行こうと走り出した。

すると後ろの通路から兵士が追いかけてきたので逃げていたら、マーカスさんが現れて通路の柵を降ろして通行止めにくれた。

「マーカスじゃないか！」

ジタンは久しぶりに見た仲間の顔に驚きつつ、マーカスさんはここは俺に任せるツスと行って他にも通路の柵を降ろしてくれた。

「サンキューー！」

「じゃあ、オレはブランクの兄キを助けに魔の森に行ってくるツス！」  
「マーカスさんがんばってねえー！」

マーカスさんとも別れを告げ、ダガーを探して城の中を駆ける。  
一番怪しいのは何処なのか、というかまず城の内部をよく知らない  
ので見当がつかない。

……とはいえ、私は知っているから、ブラネ女王の部屋が怪しいんじゃないか？と言ってみれば、スタイナーさんは城の内部を把握しているからすぐにたどり着くことが出来た。

「誰も居ない……」

「正直こういう部屋って古来から隠し部屋があったりするんだよねえ。大体は暖炉に隠し通路、とかさ」

と私はいいつつ燃え尽きている暖炉を調べてみる。確かに普通に  
見ていれば気が付かないが、角などを見てみるとわずかに隙間があつ  
たり、謎に擦れた跡が残っている。

ちゃんと見ると違和感あるわ。

「本当だ、ここに通路がありそうだな……こういうのは大体近くにス  
イッチみたいなのがあるんだよ。よく貴族のお屋敷でもあるんだけ  
どき、こういう燭台を——」

ジタンが壁の燭台を引つ張つたら、怪しいと言っていた暖炉が引つ  
込んで下へと続く道が開かれた。

「……な？」

な？とか言っているけど、ソレがスイッチだと思つてなかつたか  
ら、引つ張つた本人がびっくりしていたのをは私しつかり見てたよ。  
「さて行つてみよう！」

レッツゴーと私が一番に入り込んで、らせんに続く道を下つてい  
く。

そして長い長い階段を降りていき、大きな空間に出る。

何のために作られた場所なのかはよく分からんが、とても怪しい雰  
囲気を醸していた。

アレクサンドリアも歴史が長いから、怪しい部屋なんてたくさんあ  
るんだろうな。

色々扉を開いて行けば、ついに謎の儀式を行っていただろう広間に  
辿り着いた。

そこにはダガーだけではなく、ソーンとゾーンも居て、ブルメシア  
依頼の対峙となります。

「何しに来たでおじやるか!!」

「いつもいつも邪魔して許さないでござやる!!」

そこでついに戦闘が始まり、ソーンがゾーンにメテオパワーを送  
り、ゾーンプチメテオの詠唱を始める。

ソレで何が起こるのか分かっているの、ラッシュでゾーンを吹き  
飛ばしてやれば、ソーンからのメテオパワーが解除されて力を失つ  
た。



「やめるでおじやる!!」

「やめろって言うってやめるわけねえだろ!」

ジタンはそう言うってソーンに斬りかかり、ソーンはなにげに素早いのかギリギリで避けている。

凄いい俊敏なおじいちゃん……

「ソーンよ受け取るのでござやる!!」

「はいダメです」

またラツシユで力を受け取ったソーンを吹っ飛ばせば、ころんころんと転がっていく。

こりや簡単だなあ。

「うぐぐ、覚えているでおじやるよー!!」

「でもガーネット姫はもう用済無しでござやるよ!!」

ソーンとゾーンがぴよんぴよんと跳ねながら出口に逃げていき、そして振り返ってニヤリと微笑んだ。

「イイ気味でござやるよ!!」

「イイ気味でおじやるよ!!」

そんな捨て台詞を吐いていったが、実際にダガーは今えらいことになっていたのである。

急いでみんなでダガーのトコに走れば、ダガーは眠ったまま目を覚まさない。

何度呼びかけても揺すっても目を覚まさない。

息はしているから死んでは居ないが、何故か目を覚まさなかった。

「おそろくなにかの儀式を施されたのだろうね……この部屋なんかうさんくさいし、あの魔術師がなにかしたに違いない。ブラネ女王が召喚獣を、とか言ってたから……ソレと関係があるのかも」

ヒントを口にしてあげたが、フライヤ以外はあまり冷静さを保てていないので、あまり聞いていなかったかもしれない。まあいいんだけどね。

ジタンはダガーを抱えて、休ませられる場所へ行こうと女王の間に戻ることにした。

またも長い螺旋階段を登り、上に辿り着いて近くにあったソファに

ダガーを寝かせてあげたが、皆がダガーを見て不安と憤りを感じていた。

「ブラネ女王様……何故姫様にこのようなことを。このスタイナーが命をかけてお守りしてきた大事な大事な姫様を……それはブラネ女王様も同じだったはずではありませんか……！」

悔しそうにスタイナーさん、そしてビビもダガーが目を覚まさないことに不安になるが、ジタンは優しく「今はちよつと疲れて眠ってるだけさ」と微笑んだ。

だけどうつむいて、オレがついていればこんな風にはさせなかったのに、と後悔を口にした。自分がちゃんと止めていればこんなことにならなかったって後悔しているのだろう。

ジタンは優しいから、ダガーが言うこと聞かなかったから！何てこと言わない。ほんとイイ男だよ。

「……怒りや憎しみが限界を超えると感情が湧き上がらなくなるんだな……涙すら流れやしない」

ジタンは喪失感にうなだれ、ビビも泣きそうになってる。

フライヤはもうすでにたくさんのものを失っているからか、彼女もうつむいてしまった。

ジタンのそんな姿を見て、スタイナーさんですら言葉が出なかった。

……だが、逃げたゾーンとゾーンがベアトリクスを引き連れて戻ってきた。

自分たちでは勝てないから、ベアトリクスで相手だ！いけ！ベアトリクス!! ってポ●モンみたいな感じで現れた。

「お久しぶりですねスタイナー、これまで何処に行っていたのですか？まさかこのようなケダモノ達と遊んでいたわけではないでしょうね？」

スタイナーさんの背後に居る私たちに向かってケダモノとはずいぶん言い方だ……けども、ジタン謎の尻尾付き、ビビ黒魔道士、フライヤネズミ族、私ヴィエラのウサギさん……ケダモノだね！フレンズなんだね!!!

「ケダモノはどっちだとおもってんだ！」

ジタンはナイフを抜き、今度はやってやる！と一番にベアトリクスに斬りかかる。

スタイナーさんもここは引けぬと同じくベアトリクスに向かっていくが、みんなあしらわれていく。

フライヤも参戦して4対になっているけども、その人数でやっと相手になっている感じだ。

で、私はニヤニヤしながらソレを眺めています。私が入ったらベアトリクスが不利になっちゃうからねえ。

「ヴィエラ！戦ってくれないのか!？」

ジタンも流石に私が戦闘に入っていないのに気が付いて呼んだのだが、私はニヤニヤしながらダガーを抱き起こして頬を撫でる。

「彼女を見張ってないと人質にされちゃうかもしれないのでえ〜」

ベアトリクスに見えるように、見せつけるように頬を撫でて微笑んだら、やっと彼女はダガーの存在に気が付いてくれて剣を納めた。

「ガーネット様……!!」

駆け寄ってようやくブラネが言っていたことが本当になってしまったことを痛感し、そして魔術によって眠りに落ちてしまったダガーを、自分の魔力でできる限りのことをします、と力を使ってくれた。

「やはりブラネ様はガーネット様の命を取られようとしていたのです……」

魔力を注ぎながら、ベアトリクスはスタイナーにブラネ女王の最近の行動を少し話した。

それでもブラネ女王がダガーの命を取ろうとしていたのだけはどうしても信じられなかったスタイナーは理解してくれなかった。

「スタイナー、もはや答えはひとつしかないようです……長い間の迷いが解きました、やはり私は間違っていたのです」

そして戦いで傷を負い、膝をついているフライヤにベアトリクスは謝罪の言葉を投げかけた。

「ブルメシアの民よ、私は許されない過ちを犯してしまったようです」

「当たり前じゃ!!私はお主をすることは出来ぬ!!」

怒り、そして立ち上がってベアトリクスを睨み付け、槍を握りしめて塚の部分を地面に叩き付ける。

ガン、と鈍い音が響き、そしてフライヤの表情は憎しみから悲しみの表情へと代わり、うつむいて口を開いた。

「じゃが、今はダガーとやらを助けてやりたいと思う……」

顔を上げ、ベアトリクスに頼むと言うようなまっすぐな澄んだ目を合わせる。

ベアトリクスはうんと頷き、先ほどよりも無理をして魔力を使つてダガーの眠りを覚まそうと、なんども繰り返して魔力を使った。

途中でソーンとゾーンが「我らの魔法は簡単には解けぬ!」「ムダ!」とか言ってくるが、ついに光の粒がダガーの身体を包み込み、そして彼女はようやく目を覚ますことが出来たのだった。

「ガーネット姫、お気づきになりました?」

まだ意識が混濁しているのかダガーはふらふらと立ち上がり辺りを見渡す。

そしてジタン、ビビ、スタイナーさんと顔を合わせて少しずつ頭の整理を始めた。

何事もなく目覚めて良かったよ。今回は私、何もしてないからみんなの経験値になったかな?

感動の再会を果たせて喜んでいるその時、ついにブラネ女王が女王の間に来てきた。

ソーンとゾーンがブラネ女王にガーネット姫が我々に連れて行かれると話せば、興味なさそうにダガーを見つめてフンと息を吐いた。

「ガーネットからは全ての召喚獣を抽出したのか?」

「抽出したでおじゃる!」

「抽出したでござる!」

双子が答えればブラネ女王はダガーを牢に閉じ込めろと命じ、そしてベアトリクスがそれに異を唱えた。

「ブラネ様、私の使命はガーネット様の身を守ること……どうかこれ以上ガーネット様に手をお出しにならないでください!!」

ベアトリクスがブラネ女王に懇願するが、ブラネ女王の怒りを買うだけで解決にはならなかった。

彼女も分かっていたから、この場は私が、と我々が逃げられるように時間を稼ぐと言ってくれたのだ。

「私はこの場を去れぬ！早く行くのじゃジタン！」

フライヤもブルメシアの恨みがある以上、のこのこ逃げる気もなくベアトリクスと共に武器を構えた。

自分に立ち向かってくる二人を見てブラネ女王は鼻で笑い、ゾーンとゾーンに全員を排除するように命じて部屋を出て行こうとする。

その時、ダガーが「お母様！」と声をかけたが、一瞬足を止めたかと思っただがそのまま去って行った。

「フライヤー！後は任せたぞー！」

ジタンはそう言っただガーの手を引き、ビビは燭台を動かして隠し通路を開いて道を作る。

追っ手のことは二人に任せて私もジタン達と共に通路へ逃げた。

「ねえジタン！この先に逃げ道あるの!?!」

とりあえずあの長い螺旋階段を駆け下りているけど、正直こっちは正解に道なのか分からない。いやまあ、合ってるんだけどさ。ジタンは何の根拠にこっちに逃げたんだろうと思っただけだよね。

「隠し通路って大体は城を攻められたときに逃げるために作ってあるのがセオリーなのさ！だからこの下にどこかに通じる出口があるはずだ！」

確かに城の隠し通路って逃げ道よね。流石盗人お。

そして駆け下りている途中で横の通路から黒魔道士が現れて行く手を阻むが、我々5人なら楽々倒せる相手だ。

ジタンはお得意のナイフで斬りかかり、スタイナーさんもビビとの魔法剣で戦い、ダガーは回復できるように白魔法の準備をしている。うん、イイ連携です。

「ちよ、ヴェイエラも戦ってくれよー！」

「え、必要あった？」

腕組んで眺めてたらジタンに何でそんなのんきに、なんて言われて

しまった。

出る幕無かったよ？

まあ、通路からまたも黒魔道士が出てくるから軽く首をはね飛ばしてやれば、スタイナーさん以外が「ひえ」と声を出した。

スタイナーさんは戦争慣れしているからかびつくりしてはいたものの、これは出さなかつたね。

「まあとにかくさっさと行こうよ、どんどん追っ手が来るよー」

今度は私が先頭に立って先に進み、しばらくしたときにジタンがスタイナーさんの歩みが遅くなっている事に気が付いて、早く！と急かした。

「自分は果たしてこの場所に居て良いものなのだろうか」

そう言つてスタイナーさんは足を止め、我々も止まる。

ジタンはどうしたんだよと聞くが、スタイナーさんは真顔で言葉を続けた。

「忠誠を誓ってきたブラネ様に刃を向けたベアトリクスと、自らの仲間を殺されながらも共闘して姫様を守ろうとしてくれているフライヤ……ブラネ様が本気で怒ってしまった以上、彼女たちの命を取りかねん！」

自分も同じくブラネ女王のプルート隊だ。だからこそ、ここで一緒に逃げることに納得がかなかつたんだろう。

「ジタン、お主に頼みがある！アレクサンドリアを無事に脱出し、姫様をトット先生の元へ送り届けてくれぬか？トット先生ならこの荒んだアレクサンドリアを救うための良い手立てを考えてくれるはずだ」

ここでジタンとビビはトット先生とやらを知らないから、内心誰だろうと思っっているだろうが、ジタンは任せてくれと言っとうなずいた。

いつもいつもジタンとスタイナーさんは相容れない仲だったのに、ここでスタイナーさんは大事な姫をジタンに任せるところ、しびれるよね！！

「ボクも頑張ってみる」

「私もついでだから、任せてちょうだいスタイナーさん」

私もファイティングポーズをとってやるぞ、と意志を見せれば、スタイナーさんはうんと頷いた。

「ジタン殿、ビビ殿、ヴィエラ殿、頼りにしているぞ！」

そして最後に「姫様、さらばです！」と敬礼してスタイナーさんは道に戻っていった。

ここでさらばですと言うところ、もう死ぬ覚悟で立ち向かっているのが分かる。だからダガーも切なそうにスタイナーさんを見つめ、自分のために戦ってくれる人たちに胸を痛めた。

「みんな、私のために……」

「そうだよダガー！」

ジタンはダガーに駆け寄り、進もうと言った。

「みんなダガーのため、アレクサンドリアのため、そして自分のために必死に生きているんだ！だからこんなところで立ち止まっちゃダメだ！生きよう！」

ジタンの言葉に涙を浮かべつつ、まだ迷いがあるもののダガーは進んだ。

先ほどの召喚獣を抽出しただろう広間の入り口以外の通路を進めば、急に下から柵がせり上がり道を阻む。戻ろうとするも、同じく柵が邪魔をして自分たちは閉じ込められてしまう。

「しまった、罠か！」

「あちゃー、凄い仕掛けだねえ」

のんきに言いつつ剣で柵を叩いて金属音を響かせる。うん、いい音だねえ。

「ひっかかったでおじやる！」

「何度見ても良い眺めでござやる！」

罠を発動したゾーンとゾーンが上からのぞき込んでニタニタと微笑んだ。

私は棒読みで「ああーなんてことだー」って嘆きながら剣をしまう。とりあえず必要ないね。

「お前達卑怯だぞ!!」

ジタンが畜生と柵を蹴って怒り、双子はその様子を見て更に喜ん

だ。

「これが我々のやり方でござやる」

「お前達に口出しはさせないでおじやる」

ニヒヒと笑いながらいつものステップを踏んでいたら、ゾーンとゾーンはブランクさんとマーカスさんに殴られてノックダウンする。

魔の森で石化していたブランクさんが元気に戻ってきてきてジタンも喜び、マーカスさんが罫を解除して先に進めるようにしてくれた。

「まったく、やっぱり見てらんねえぜ」

ブランクさんがそう笑って、そして私を見てなんか雰囲気変わったなどと言ってきた。

「きやーブランクさん乙女の変化に気付いちやうだなんて落とし方分かってるうー！お久しぶりー！」

以前は精霊使いで踊り子のような格好で、今は闘士だから勇ましい剣士の姿になっているから大分雰囲気は違うだろうね。

私はぴょんと上の階に跳んでブランクさんに抱きつけば、勢い余ってそのまま押し倒してしまった。

まあいいやとそのままギュツと抱きついて頬ずりしてやれば、ブランクさんは慌てて手足をばたつかせた。

この感じビビが慌てるのと同じ感じですね。

「おおおおお、おい！おま！！こんな時にのんきに抱き付いてる場合じゃないだろ！！」

「あーん、いけずう」

仕方ないので離れて立ち上がり、ブランクさんに手を差し伸べて立たせてからまたニンマリと微笑んであげれば、ちよつとそっぽ向きながら恥ずかしそうに頬を掻いていた。

「どうしてもってなら、まあ、あとで、な……」

「ん？あとで、なにを？んふふ何をですー？」

「おっ、お前分かって言ってるだろ！！」

「ヴェエラわかんない」

ブランクさんをからかいつつジタン達の元に戻れば、ジタンは「ヴェエラやっぱり遊び人だ」と言ってきたのでワカンナイデスウッ



て答えて両頬に人差し指を添えて首をかしげて極めつけに「テヘ！」って言つてやつたら引いてた。

引くな。

「ガルガントステーションはすぐそこツス、ジタンさん！急いでくださいっす!!」

そしてマーカスさんに急かされ、ダガーが二人に声をかけるが、ブランクさんが「礼なんて後でイイから早く逃げる!」と言つてくれて進むことになった。

「また借りが出来ちまったなブランク」

「じゃあまた今度じっくり抱き合おうねブランクさーん」

「お、つつつおう」

どもった返事を返すブランクさんに手を振つて、マーカスさんにもありがとー!と言つてあげれば小さく手を上げて返事を返してくれた。マーカスさんいいひと……

ジタン達と先に進み、ガルガントステーションなる場所にやってきた。

トレノからガルガントステーションを使つてアレクサンドリアに来たことをダガーが話してくれたが、ダガーは足を止めてこれからどうすれば良いのかと表情を曇らせる。

「どうすれば良いかなんてこれから考えれば良い!どうして皆が残つたと思う!?!自分で決めたからだ。ここで戦わなきゃならないって!ベアトリクスもフライヤも、ブランクもマーカスも、そしてスターナーさえも……奴らの思いを無駄にするな!今ダガーがすべきことは何だ?」

「……生き残ること」

「そうだ。行こうぜダガー!!」

そしてガルガントに乗り込みトレノへと向かつていく。

揺れも大きいし何だか不安になる乗り物だが、文句は言つてられないだろう。

だが突然ガルガントが止まってしまい、道の先を見ると蛇のような化け物が道を塞いでいた。

「通せんぼされちゃったねえ。刻みに行こうや」

私たちはゴンドラを降りてモンスターに立ち向かう。

モンスターはサンダラも撃つてくるが、ダメージはダガーのケアルでカバー出来る。

ビビはブリザラなどを撃つて戦い、私もぴよんと跳んでやつの牙の様なものを切り落としてやれば、慌てたように身体をくねらせて攻撃を避けようとしてくる。

けどジタンのナイフはちゃんと当たっていて、モンスターの身体に小さな傷が着々と刻まれていった。

「ブリッツ」

なるべく威力の小さい技で私も応戦し、モンスターは大きな凶体を地面に伏せることになったのである。

「へっへー、楽勝だったねー」

剣を振るってモンスターの体液を飛ばしてから鞘に収め、再びガルガントに乗って先に進む。

だが先ほどのモンスターに出会ったせいなのか、先ほどよりも速度が遅くてジタンが早く走れよと急かした。

これくらい緩やかに走ってくれる方が揺れも少なくて良いんだけどねえ。

「そんな、可愛いそうよ。怖い思いをしながら走ってくれているんだから……」

優しいダガーは文句を言わないであげるとガルガントをいたわってあげていて、そんな姿を微笑ましく眺めていたら段々と速度が上がっていく。

なんだなんだ、と振り返ってみたら、先ほど倒したと思ったモンスターが追いかけてきていたのだった。

ガルガントは必死で逃げ、トレノのステーションすら通り過ぎてしまふ。

「うわー、セーフティ無し of ジェットコースターだあ」

「皆しつかり掴まってろ！振り落とされるぞ!!」

そして段々と先の道がもはや道とは言えない曲がりくねった穴に

なっていて、カーブを曲がる度にゴンドラも振り回され私たちは必死でしがみついていたが、先の方に光が見えて出口についてしまった。ガルガントは穴から出たら真上に飛び上がって行き、その衝撃でゴンドラが切り離されてしまい落下する。

その衝撃に皆がしばらく気絶していたが、先に目が覚めたのは私だった。

色々つぶつけた箇所はあったが、座席がクッションになってくれていた。怪我はしていない。

他の皆もゴンドラに潰されたりともしてないので、同じように軽傷だろう。

「ジタン、起きて」

とりあえずジタンを揺すって起こせば、目を覚ましてこの場所が何処なのか聞いてきたので分かんないと首をかしげておいた。

「なんか見たことありそうな場所んだけど、周りを見てからじゃないと判断できないわ。ビビも起こしてダガーを見てもらって、その間に辺りを散策しよう」

「わかった」

そしてビビを起こして私とジタンで辺りを散策してくると伝えて一緒に歩いてみる。

緑がいつぱいだけど何だか不思議な雰囲気の場所だ。

「あ、思い出した。ここピナツクルロックスだよ、リンドブルム城の隣のトコのさ」

少し高いところから全貌を確認して、遠くにリンドブルム城が見えたのでジタンに言えば、ジタンも知っているのかうんと頷いた。

「リンドブルムの隣だからな、オレも何度か来たことあった場所だ。なんか老人の幽霊が出るって噂なんだぜ」

その老人の幽霊って召喚獣のラムウのことなんだけど、たまーに姿を見せて居るみたいなんだよね。

ニンゲン タチサレ……みたいな感じなのかな？

「怖いねソレ。ダガーのところに戻ってみる？」

そしてダガーのところに戻ってみれば、ダガーは目を覚ましていて、

ここがリンドブルムの隣にあるピナツクルロックスつて場所だと言うことを伝え、これからリンドブルムで飛空艇を借りてトレノに向かう話をした時、急に老人の幽霊が姿を現し、皆が驚いて一歩後退った。「敵か!？」

ジタンがナイフを手に取りろうと構えれば、老人は「ソレはお前達次第だ」と告げる。

そして老人が「我が名はラムウ」と名乗ったことによりダガーが召喚獣だと言うことに気が付き雷帝ラムウだと気付いた。

「……クレイラがそなたの召喚獣によつて消滅したのは知っているか？」

そのことを聞かされ、ダガーは目を見開いてから眉を寄せ、いいえと首を振る。

抽出された後はずっと眠っていたから、そんなこと知るよしもなかっただろう。

「召喚魔法は詠唱者に呼応する。欲にまみれた者が唱えたことで、恐るべき惨事が引き起こされた」

ラムウにより、召喚獣で起こされたとんでもない出来事を伝えられ、ダガーは顔を青くしながら聞いていたが、ブラネ女王がそこまで非情な事を行ったという事がまだ信じられていないのだろう。いや、信じたくないんだろうな。

「わたし、そんなことになってるなんて知らなかった……なのにただ守られてるだけで……」

「ダガーが悪いわけじゃないよ、だからあいつらも残ってくれたんだ」「そうだよ、ダガーは召喚獣を使おうとしたこと何て無いし、抽出されたのも予想外だったからね……」

自分の力を引き抜かれた挙げ句にそれで人殺しをされているとなると、そりゃ悔しくてかなしいだろう。それが見ず知らずの他人ならまだしも、自分の母親がやったからこそ憎みきれず悲しさに潰れてしまいいそうなんだろう。

私だったら半狂乱になつてるかもしれないな。

「そう、確かにそなたが引き起こしたことではない。だが我が問いは

ひとつ、そなたはどうするのだ」

ラムウはダガーにどうしたいか聞き、ダガーは力が欲しいと願った。

「私に召喚魔法が使えこなせたら……」

そしてぐつと拳を握りしめてラムウに力を貸して欲しいとダガーは願う。非力で何も出来ない自分を変えたい、そう訴えたのだ。

「再び過ちを犯すつもりか？」

「私、召喚魔法が怖かった……でももう逃げません！」

その言葉で、ラムウは本来の姿に戻り、威厳のある賢者のような風格を現した。

その姿に私も思わず「おお」なんて声を漏らしてしまったよ。

実際に見るとかつこいいもんだな。

「前の主を失ってこの世界を彷徨うようになってから随分と時が流れた。そなたが我が主にふさわしいかどうか、試させてもらおう」

そしてラムウの分身を森に置き、物語の断片を集めて一つの物語にしろと言いい残し姿を消した。

「ふむふむ、物語集めねえ。結構大変そう」

のんきにあくびをしながら私がそう言うと、ダガーはごめんなさいと謝ってきた。

「先を急がなければならぬときに……」

だけど皆気にすんなと笑い、一緒に森を歩き始めた。

森にはモンスターもいたけど我々の敵ではなく、分身になったラムウから物語を聞くことが出来た。

後はその物語を並べていくが、最後……オチが二つあったのだ。

「最後、どうしたいかダガーが決めるんだよ」

私の言葉にうんと頷き、そして物語を完成させる。

ダガーは英雄を選んだ。

「一つ聞きたいことがある、なにゆえこの勇者の物語のしめくりを“英雄”としたのか」

「行動が一貫した人物こそ、人や民が認めるのだと思います。古き時代からの伝承に残るほどの勇者ならば、どのようなときも迷わず進ん

だのではないかと思いました」

だがラムウは目を細め、「そなた自身の考えを聞きたい」と言い、ダガーは「今は国を離れたが、城の者、民のことは忘れたことはない」と答える。

「そなたの魂は張り裂けんばかりに緊張しておるな。召喚魔法になることですこしでも和らげることが出来るのなら、我が魂をそなたに預けよう」

こうしてラムウとの契約が済み、ラムウの力のこもったペリドットをもらった。

「お主も、その力に溺れぬよう、忘れる事なかれ」

最後に消えるとき、私の目を見つめながらラムウは姿を消した。

私も力の使い方を間違えたらブラネ女王のようになるのは理解しているつもりだ。だが、あやまってその力を振るう場合もある。ラムウの言うとおり肝に銘じておかないと。

「……ヴェエラに言ったのか？」

「あー、多分ね。ほら、私強いからさ」

召喚魔法が使えることは伏せて置かないとね。正直ちよつと言いつらい。

それに知られるとマダインサリの事とかと辻褃が合わないしねえ……

「さあ、リンドブルムにいきましょう！」

こうしてピナツクルロックスの出口へと進んでいけば、そろそろ夜明けも近くなっていた。

「私、召喚魔法を皆のために使いたい」

ダガーは不安そうだが、彼女の願いを口にし、ジタンは出来るさ！と微笑んだ。

「召喚魔法は術者の願いを聞き入れる。ダガーが強く、強くそう望めば聞いてくれるよ」

私もジタンの隣でニコツと微笑んだら、まっすぐな目で彼女は私を見つめる。

え、なに、こわい。

「……変なことを聞いたらごめんなさい。カーゴシップに乗っているとき……あなたから何か不思議な……懐かしいような感覚を覚えたの」

あツツツツツ、召喚術士にジヨブチェンジしてたからだと思いまっす。

「翼竜に乗ってドラゴンライダーしてたから召喚魔法みたいだったんじゃない?」

「……そう、よね」

「……それに、もし私が召喚魔法使えたとして、何を聞きたいの?」  
半分白状している感じで聞けば、怖くないのかと聞かれた。

「えつとね、ダガーと離れている間に私ちよつと危ない魔法を使ったことがあってね、うっかり皆を殺しかけた」

そう言ったらダガーは少し顔が強ばり、私はだけどと言葉を続けた。

「力って使ってみないとどれくらいのものなのかってわからない。怖がって逃げてばかりじゃ何も出来ない。召喚獣は意志があるから、ちゃんと願えば大丈夫」

「……ヴェエラって不思議ね。召喚獣にも詳しいのね」  
「古い古い文献を読んだだけだよ」

さあ行こう、と先を進んでいく。  
その時、ビビが上を見て、上空のブラネ女王のレッドローズが飛んでいることに気が付いた。

リンドブルムにテレポットの光が飛んで行っているのをみて、内部に直接黒魔道士達を送り込んでいるのが理解できる。

海からのたくさんの砲弾の雨、そしてテレポットで送り込まれる黒魔道士。リンドブルムは大混乱だろう。

「クレイラはこのあと召喚魔法でとどめをさされた!」

ジタンはクレイラの二の舞になるのではと焦り、ダガーはリンドブルムへと走って行ってしまおう。

「待っただダガー!」

追いかけて行くが、強い光の後に大きな何かの姿を現す。

口を大きく開いた城のように大きな化け物……

それを見て足を止め、ダガーは引きつった悲鳴のような声を上げて口を覆った。

「あれは……アトモス……!」

ダガーも知っているのかその名を口にし、アトモスはリンドブルムのものを吸い込んでいく。

亜空間に続くその口に吸い込まれたものは……考えたくもないだろう。

「やめて……やめてえ……っ!!こんな、ひどい……!!」

ダガーは嘆き膝をつき涙を流す。

敵味方関係なくアトモスは吸い込み、そして光になって消えていった。

ジタンは何も言わずダガーに寄り添い、そしてレッドローズを睨んだ。

「あの力も取り返さないと、また利用されるだろう。ダガー、大丈夫。私たちがついてるよ」

彼女は泣き続け、私はダガーの背中をそっと撫でた。

「一度ピナツクルロックスに戻って、朝になってから入ろう。今だとまだ戦闘が続いていて危険だ」

私の案に皆が賛成し、ピナツクルロックスでテントを張った。

ダガーはせっかく召喚魔法を使えるようになったと言うのに、いきなり怖いものを見せられてしまった。ひどいよね。

「ダガーってさ、召喚獣をちゃんと見たことある?」

「……ないわ。ただ、使えるというのは分かっていたの」

テントの中で膝を抱える彼女に聞けば、首を振った。

そりやそうだよな、使ったことないだろうよな。

「……文献で読んだんだけどさ、シヴァは優しいと思うよ。キレイな人だし。イフリートも見た目は怖いけど、味方になれば心強い。ラムウは今話して味方になってくれたでしょ」

私も隣で膝を抱えながらダガーにそう言うと、詳しいからジツとこつちを見ている。



そうやって悲しみを紛らわせるなら話しちゃうよ。紛れるだろ？

「なんでそんなに詳しいの？アレクサンドリアの学者だって必死に調べて残っていた文献だって少ないのに」

「リンドブルムのシド大公だって召喚獣のこと知ってると思うよ？召喚獣はこの王国にも文献が残っていると思うしね。ただ何でか500年前くらいからはったり情報が無くて」

「学者達もそう言っていたわ……」

「何でだろうね。ていうか召喚獣ってなんだろうね？」

「……わからないわ」

「ラムウのおじいちゃん優しかったね」

「……うん」

その「うん」は涙ぐんでいて、優しい味方がいるから怖くないよと微笑んだら、ダガーは泣き出しちゃった。

今は泣いとけ、まだまだ辛いことあるからさ。

軽くダガーを抱き寄せて、子供をあやすように背中を撫で、泣き疲れて眠ってしまうまで抱いてあげるのだった。

## リンドブルムくフオツシル・ルー

日が昇り、我々はリンドブルムを訪れた。

城壁は崩れ落ち見るも無惨な光景が広がっている。

黒魔道士も倒れていて、まだ燃えている場所もあり火がくすぶり煙が立ちこめているのでとても空気が悪い。

メインゲートに入ってみたが、とても静かだった。

「何てひどいことを……お母様、リンドブルムにまで手を出すなんて……」

「気を抜くなよ、奴らまだ居るかもしれない。だけどビビは隠れていた方が良く、中に攻め込んだ黒魔道士達と間違われる可能性がある……」

ジタンにそう言われてビビはうんと頷いてリンドブルムに入るのをやめて近くで隠れることにした。

でも怖いから早く戻ってきてねと震えていて、私もビビに頑張れ！とエールを送ることしか出来なかった。

リンドブルムに入れば、あちらこちらに黒魔道士達が倒れている。

人は回収されているけど、黒魔道士達は放置されたままというのは何だか嫌な感じだ……

アレクサンドリア兵も我が物顔で歩き回っていて、住民は嫌そうにソレを睨んでいる。

兵はダガーの顔を見ても誰か分からないようで、誰も寄っては来なかった。

道中、倒れている黒魔道士を囲んで住民が騒いでいるのを見つけ、もう動かない黒魔道士を攻撃していた。

「やめろよーそいつだっけいきているんだぞー！」

ジタンが止めるが、住民は怒ってその手を止めない。

「人を人と思わねえ破壊の仕方……まるでオレたちを建物の一部にしか見えてねえような……コイツらこそオレたちを生きていると思つてねえんだ!!」

あまりにもひどい光景に、私はジタンとダガーの手を引いてその場を去った。

気持ちは分かる。無慈悲に攻撃されて、たくさんの人たちが死んだ。その憎むべき相手が居れば、攻撃したくなるのも分かる。

でも操られているだけの黒魔道士が哀れでならなくて、アレが止まっているのが唯一の救いだ。私は思いながらやるせなさに唇を噛んだ。

「今は我慢して……どっちの気持ちも分かるだろうけど今騒ぎを起すのは良くない」

「……そう言うヴェエラの方が辛そうじゃないか」

「……つらい」

正直につらいと零しつつ街を進んでいけば、文臣オルベルタさんが居たので声をかける。

シド大公は無事だと聞き、そして我々が無事だったのも喜ばれたけど状況は悪い。

完全にリンドブルムは制圧されてアレクサンドリアのものになってしまっていた。

「殿下の元へご案内いたしましょう」

オルベルタさんがそう言って歩き出したが、私はもう少し街の様子をみたいから、と離れた。

もしかしたら生きている黒魔道士がいるかもしれない。

おそらく今までの中で一番数を使っただろうから、街中に散らばっていることだろう。

生きていて、意志までもってしまった黒魔道士が街の人に危害を加えられてしまったら、その子は深い傷を永遠に刻まれてしまうだろう。

だから私はあちこち屋根を飛んで路地などを見たり、皆止まっているのか確認していた。

すると薄暗く細い袋小路に三体の黒魔道士が集まっていた。

明らかにおかしい動きだ、攻撃の指令を出されているのであればこんな狭いところに居るのはおかしいだろうし……

「立つんだ！早く逃げないと……」

「こわくて、体が、うごかないんだ」

「ニンゲンに見つかったら大変だ……！」

屋根の上から彼らの会話を聞いて、私は彼らの元へ降り立った。

その瞬間三体はビクンと体を震わせたが、私はすぐ駆け寄り、震えている黒魔道士の頬を撫でた。

「こわいね、大丈夫、私は傷つけないよ」

よしよし、と撫でてあげれば、逆に力が抜けてしまったのか座り込んでしまった。

「他の人に見つかったら大変だよ、早く逃げて。私も他の子達が目覚めてないか探し回ってるの」

「あなたは、一体……」

怯えて壁に寄っている黒魔道士が聞いてきて、お人好しのウサギさ、と答えた。

「君たちのように目覚めた子を以前見かけたことがあるんだ。おそらく他にもたくさん目覚めた子がいるはずだから、その子達と遠くへ逃げなさい。出来ればこの大陸からは逃げた方が良い」

「……わかった」

ずっと黙っていた黒魔道士がそう言い、二人を連れて走る。

魔法を使って空間をゆがませて自分たちの姿をくらませながら走って行く。

どこもかしこも穴だらけだから、城壁まで行けば逃げる穴くらいあるだろう……

さて、ほかにもいるはずだ、と私は立ち上がり、搜索を続ける。

倒れている黒魔道士をのぞき込んだら、急に瞳に光が点り、死んでる思っていたからこつちがびっくりしてしまった。

だけど黒魔道士は動かず、微かに声だけが聞こえた。

「いたい、いたいよ」

そしてその瞳の光は消えてしまう。

意志を持って、そして死んでしまったそれに私は耐えられず泣いてしまった。

こんな風に意志を持たないで欲しかった。辛すぎる。

その他にも、生きている黒魔道士を見つけたが、錯乱してしまつて全然話を通じない子も居た。

「こないでこないでいやだこわいこないでいやだこわいこわいこわいこわい」

魔法は撃つてこなかったけど来るなど拳を振り回していて、私は近付いても殴られてしまい、近づけない。

殴られながらも無理矢理隙を見つけて抱きしめて、背中を撫でる。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね……」

ずっと殴られているけど、私が強いからそんなに痛くなかった。

でも、心が痛くて謝りながら泣くことしか出来なかった。

「ナンデ、痛いコトしない？」

錯乱してた黒魔道士はやっと手を止めてくれて、でもカタコトな言葉で投げかける。

私はこの子の頬に私の頬をすり寄せ、背中を撫でる手を止めない。

「私はキミをいじめない。君の仲間がたくさん居る」

「みんな、うごかない」

「……キミみたいに動ける子もいたよ。……仲間を連れてくるから、ここで隠れていられる？」

崩れた建物の下に出来ているわずかな隙間があったので、そこに入つてと言えば素直に入つてくれた。

「私が来るまで動かないで、絶対迎えに来るから」

「うん」

良い子、と最後に頬を撫でてから、近くに同じような仲間が居ないか探し回った。

倒壊した家の残骸に潰されている黒魔道士も皆止まっている……

あの子は一人にして逃げられる気がしない。

するとガタンと物音がして、その方向を見れば瓦礫の影から顔を出していた黒魔道士と目が合った。

私が声を出す前に引つ込んでしまったけど一気に距離を詰めて、逃げるその背中に抱き付いて止める。

「まって！大丈夫！！攻撃しないよ！」

黒魔道士は制止を聞かずに逃げようとする。何度も大丈夫、大丈夫と声をかければようやくやく止まってくれた。

離れてから向き合い、頬を包み込むようにして撫でて、落ち着いてと微笑んだ。

「お願いがあるの。キミのように意識がある子が居るけど、一人で逃げられないと思う。一緒に逃げて欲しい。他にも助けた子がいるから、とにかくこの場所からにげて」

「……他の、なかま」

「そう、仲間。こっちにきて」

手を引いて先ほどの黒魔道士の元に行けば、ちゃんと大人しく隠れていた。

中から出てもらい、二人で逃げるように言えば、二人でうんと頷いた。

「他の仲間にも会ったら、力を合わせて助け合ってね」

「助け、あう」

「……わかった。ありがとう」

二人は走り出し、城壁へと向かう。

私はそれから他の黒魔道士を探し回ったが、彼ら以外は見つかることが出来なかった。

やはり、そんなに数は多くない、か。

静まった路地で肩を落とし、諦めてそこから去ろうとしたら、後ろから声がした。

「あなたは」

振り返れば、黒魔道士が立っていた。

いつの間に居たのだろうか……それとも魔法で隠れていたのか……

「あなたは、何故黒魔道士を助ける」

ずっと見ていたのか、そう彼は質問してきた。

向こうから話しかけてくるのは初めてで、少し驚いたけど、助けたいからと言えば沈黙が支配する。

「この子は他の黒魔道士と比べて随分と冷静だ。」

「それは、答えになっっているのか」

「答えを聞いてどうするの?」

逆に質問してみれば、またも沈黙。冷静そうに見えて実はそうでもないのかもしれない。目覚めて間もないから、たかさんのことが分からないから知ろうとしているのかもしれない。

「私は、人を殺した」

そこまで理解しているのも驚いたけど、私は仕方ないと言ってあげる。

「それはキミの意志じゃなかっただろう。だから、キミに罪はない。それよりも早く逃げなさい、人間に見つかったら大変なことになる」

「……どこに、逃げる」

「この子は頭が良いのか悪いのか分からんな!!」

仕方ないので私が連れて行くことにして、彼の手を引っ張った。

「姿を消せるなら消して」

と、いうと空間がゆがんで見えにくくなる。

そういう魔法は何て魔法なのか分からんが、黒魔道士の村に入るときに偽装されていたから、そういう魔法があるんだろう。

「他の黒魔道士達も逃げているところだと思う。高い崖があるけど、皆で力を合わせれば降りられる」

城壁を抜けてリンドブルムの外へと行けば、一部変に空間のゆがんでいる部分が見える。

おそらく皆そこに居るのかもしれない。

駆け寄ってみれば、私を見つけて魔法を解除してくれたのか、黒魔道士達が姿を現してくれた。

「あなたはさっきの」

「助けてくれたひと」

「なかまだ」

数は10人。よかった、結構居る。

「恩人よ、この下に行きたいのだが、どうすれば良い」

崖の下に行きたいが、方法が見つからないと皆が悩んでいた。

確かに、崖を普通に降るのは危ないよね……

私は彼らを降ろすために召喚術士にジヨブチェンジすることにした。

「ジヨブチェンジ、召喚術士」

額に一本の角が生えて、鎧姿から布の服に変わる。

一気に皆を降ろすために、抱えて降ろしてもらいたいから……

「バハムート」

飛べて、抱えられるのを考えると彼しかいない。

雲を貫いてバハムートは滑空し、我々の側に降り立つ。

ズシンと重たい音と共に現れたバハムートに、黒魔道士達は何人か尻餅をついたけど、私はバハムートに駆け寄って頭を下げた。

「彼らをこの崖の下に逃がしたいんです、力を貸してください」

するとバハムートは小さく唸りながら腕を組み、うんと頷いてくれた。

Xの召喚獣は話を通じるからホント助かるよ。

「みんな、下に行けるよ！」

バハムートは5人くらいを一気に抱きかかえ、崖の下へと降りていく。

その際に抱えられていた何人かが叫んでいたけど、しかたあるまい。

下に降りしてもらってからバハムートは残りの5人と私を抱えて下まで降りていく。

確かにこの感覚は怖いね。

下に到着してから、海まで皆で走る。

すると他の黒魔道士達も居たのか、空間がゆがんで姿を見せてくれた。

見えなかっただけで、私が初めてこの辺に来たとき、すでに居たのかもしれない。

「船が一隻あるんだ、これで外の大陸まで逃げよう。外にも大陸はあるはずだ！」

一人の黒魔道士がそう言い、私はあるよと頷いた。



船はアレクサンドリアの船で、どうやってかは分からないが盗んできたみたい。

大きさも十分で、今見えている人数でも余裕で乗っていけるだろう。

「ありがとう、優しい人」

「ありがとうウサギさん」

皆からお礼を言われ、私は気をつけてねと後を彼らに任せてバハムートの腕に抱えられながらリンドブルムへと戻るのだった。

以前のヴァルフアーレで戻るのと同じで、ピナツクルロックスに降りてから、バハムートを帰す。

さて、額の角をジタン達に見られるのは困るから、どうしたもんか。仕方ないのでまた黒魔道士の帽子をかぶってリンドブルム兵に声をかけ、城まで行く。私の事は耳で覚えていてくれたみたいで、すんなりと通してくれた。ヴィエラでよかった。

やっとジタンやシド大公と合流したけど、また何でその帽子かぶってんだ？と聞かれ、気分と答える。ゴメン答えになつてないよねゴメン。

それからビビも住民に攻撃されていたところを保護されて連れてきてもらい、これからの話をし始める。

ブラネ女王が狂ったのもそうだが、クジャという武器商人が怪しいと言うことになり、そいつをどうにかしようと言うことになる。

「クジャさえ居なければ、ブラネ女王もこんな風に戦力を持つこともなかっただろう。狂わせたのもやつの仕業かもしれないブリ」

ブリブリとシド大公はうなり、ダガーもジタンもうんと頷いた。

ビビも自分のような存在が作られていくことが許せず、クジャをやっつけようと言った。

「トレノでクジャを見かけたという者の話に寄れば、北の空より銀の竜に乗って現れるそうです」

文臣オルベルタが説明してくれて、外の大陸にいけば根城が分かるかもしれないと情報を得た。

そしてリンドブルムの近くの沼に、昔使っていた採掘場があり、そ

の先が外の大陸に繋がっている可能性があると言われ、そこを探すことにした。

今現在動けるのはジタンとビビ、ダガー、そして私だろう。

シド大公もリンドブルムが降伏したからその後始末も残っているし、力は貸して貰えそうにない。

その代わり、古代から伝わる世界地図と準備のためのお金ももらった。

ビビはその姿だと歩き回れないので、色々な装備はジタンに任せることにしたのだった。

私もビビとダガーと一緒に待機し、半日そこで休むことになる。

私は召喚術士にジョブチェンジしてから同じく半日くらいなので、他のジョブにしたいがそれも出来ない。

せめて召喚術士から他にジョブチェンジしてからリンドブルムを出たいものだ。

「……ヴェイエラはどうしてずっと帽子をかぶっているの？」

ダガーも気になったのか聞いてきたけど、ビビだっただけでかぶっているとえば、あなたは普段かぶってないと言われる。

ジョブチェンジする度に姿を変えているし、普段の人であれば服を変えるのは普通だ。

「ファッションだよ」

「ヴェイエラは何か隠してる」

ちよつとぎくりとしたけど、転んでたんこぶ出来たんだよ！と大きな声で言えば、びっくりしたのか一歩引いていた。ホントゴメン。

「……腫れが引くまで休んだ方が良いわ」

「出来ればリンドブルムを立つのは明日がイイです……」

と、そんなこんなで夕方になって、ジタンが戻ってきたけど休む間もなく最下層へと進んでいく。

最下層では兵は誰も居なくて、反対側の通路からブリブリと声がして、シド大公が飛んできていた。

「トロッコを止めてやったブリ！今がチャンスブリ！！ガーネット姫を任せるブリ!!」

はしやいでいるシド大公にお礼を言いながら地竜の門へと向かい、我々は地竜の門から無事に出ることが出来た。

「えっと、沼は……こっちか」

ジタンは地図を見ながら、採掘場のあると噂される沼に向かう。

私たちも後に続き、私は時計を見る。ああ、ジヨブチエンジするまでまだ先だ……トホホ。

ずつとかたくなに帽子をかぶり続け、一時間ほどで沼に到着した。

この沼には住んでいる種族がいるから聞いてみるとイイとアドバイスをもらって居るので、背の高い草をかき分けて行けば広い空間に出て、そこにはカエルが飛び交っている。

それを懸命に捕まえようと追いかけて回しているクイナと出会ったのだった。

「なあ、この辺に採掘場があるって聞いたんだけど、知らないか？」

ジタンが必死に走り回っているクイナに話しかけるが、返事が無い。おそらく夢中なのだろう。

「……ジタン、あの人カエル取るの下手だから、代わりに取ってあげると話を聞いてくれると思うよ」

遠回しに、私はカエル捕まえたくないと言えば、仕方ないなとジタンはカエルを捕まえ、クイナにあげた。

「くれるアルか!？」

「いよ」

ジタンにカエルをもらって大喜びしていたら、どこからか師匠が現れてクイナを呼んだ。

「誰かにもらって居るようでは、まだまだアルよクイナ」

「師匠!!」

クイナがジタンからカエルを受け取っているのを見ていたクエー  
ル師匠が、まだまだと首を振っている。

彼らは食の道の修行のために常鍛錬してる……?のかな?とりあ  
えずクイナはカエルをたくさん捕まえるのが目標らしい。

外の大陸というものは二人とも知らないと言われたけど、外の大  
陸にはもつと美味しいカエルがいるかもしれないと言うことで、クイナ

もついてくることになった。

「仲間が増えるのは良いことだと思うよ、ヨロシクねクイナ。私は  
グイエラ」

「よろしくアルよ！食の道はまだまだ果てしないアル!!」

皆とも自己紹介して沼にあると言われている採掘場を探すこと  
になる。

ここに住んで長いはずのクイナが見つけたことないって言うのは、  
多分カエルしか見ていないからだと思うんですよね……

自分は採掘場の場所を知っているけど知らん顔してどこだろうっ  
て探してみる。誰も違和感ないみたいで気が付きません。へっへっ  
へ。

長い草をかき分け、かなり時間が経ったその時、クイナがカエルの  
匂い！と走り出してしまい、ジタンはやれやれと追いかける。

だがその追いかけた先には採掘場の入り口があり、クイナは気にと  
めていなかったが、皆は見つかった事に喜んで、中に進むことにした。

「クイナのお陰で見つかったぜ！ありがとな！」

「カエルには逃げられたアルが、道が見つかったなら良かったアルよ」  
遺跡のような採掘場の中を歩いて行くと、途中からやたらと凄い異  
臭が漂い、皆で鼻を押さえる。なんだ、この腐臭……!!

「これは、生き物が死んだときの臭いアル……!!しかもかなり大量ア  
ル……食べないで捨てるなんて何てもったいない!!」

だつとクイナが走り出し、その場所には山のように積まれているモ  
ンスターの死骸があり、皆がその光景に驚いている中、私は間抜けに  
「あ」と声を出した。

それは私がレベル上げに倒しまくったモンスター達だ。

盗掘屋さんがいくらか素材を剥ぎ取ってはいたが、大半が使えない  
気色悪いモンスターだったから残されてしまったんだろう。

「なんだこれ……ここで誰か力試したやつがいるって事か？」

わ、ワタシデース。と心で小さく手を上げて、コワイネと言いなが  
ら去ることにした。

通路を進んでいくと、急にガチャンと嫌な音がして、振り向いたら

たくさん武器を構えた謎の戦車のような何かがちらに向かってくる。

「冗談じゃねえぞー!!」

「きやー!!」

「うわあああ!!」

「アイヤー!!」

「わー」

皆で叫びながら、振り子の斧が行く手を阻み、まるでインディージョーンズのアトラクションの様な感覚である。

迫り来る謎の戦車から逃げ、畏も避けてがむしやらに走って行けば、通路に大きな穴が空いていた。

「みんな！とべー!!」

皆で大穴を飛び越え、そして追いかけてきた戦車は穴に落つこちていった。

それでも私たちは足を止められず、飛んだ先にあった細い通路に皆入って行って、逃げ切れたのを確認して足を止めるけど、勢い余って仲間同士でぶつかり合ってそこでコケてしまった。

私は一番ケツにいたので、ぶつかる前にブレーキかけて止めました。

皆は顔を合わせてから溜め息を吐き、一安心だねと思ったその時、女性の声はどこからか聞こえた。

「やれやれ、思ったより役に立たなかったようね」

そう言って姿を現したのは、狩猟祭でも出会ったラニという大きな斧を持っている女性だった。

裏の仕事をしているというから、結構危ない人ではある。

「えっと、どちら様でしょうか……」

ジタンはお姉さん系に弱いから、めっちゃ下手に出ているダガーがぎろりと睨む。

ダガーもすでにジタンの事大好きよな。ふふふ。

「私はラニ、ブラネ女王でガーネット姫を探しているね」

まだブラネ女王が探しているというので、ダガーは眉を寄せなが

ら、もうアレクサンドリアには戻らないと言えば、ラニはふふ、と笑った。

「用があるのは城から持ち出したものよ。大人しく返せば悪いようにはしないわ」

ブンブンと首を振るダガー。

ダガーがそれを拒否した瞬間にラニは大きな斧を振り上げ、ジタンがとっさに引き寄せて移動させが、ダガーの居た場所に大きな斧がズドンと轟音と共に突き刺さる。

「悪いけど、ガーネット姫を無事に連れ戻せとは言われてないの。さっさと出いな！くたばりたいの!？」

そうして斧を引き抜き軽々と振りかざす。

「ダガー！さがっててくれ！」

その攻撃はダガーを狙っていて、ジタンは自分を盾にしながら背後に追いやる。

ビビやクイナも距離を開け、攻撃の準備をするが、ここは狭い通路の中だから、思ったように攻撃は出来ない。

でもそれはラニも同じであろう。武器が大きいので振り回せば壁などに当たり引つかかってしまうだろうが、そう言う戦いも慣れているのか、小回りのきく攻撃をジタンに繰り返してやる。

ジタンはナイフで斧を受け止めるが、重量もあるのか少し苦戦していた。

私も試しにびよんと跳んで彼女の背後を取り、召喚術士なので武器が杖なのだがそれで殴ってみようとしてみたが、ラニはくるりと体を捻ってこちらに振り向きざまに斧で振り払われる。

とっさに杖でガードしたけど、3歩ほど後ろに下げられた。

「ははっ、術者のくせに杖で物理？どれだけ頭悪いの？」

あざ笑ってきたのもう一度杖でぶん殴りに行ってみたら、私も結構力を込めていたのもあってか、まるで剣で打ち合っているかのような感覚になる。

大きな斧を杖で弾き、こちらが振りかざせば向こうは斧でガードし、でもその威力に目を見開きながら彼女は怒鳴ってきた。

「杖でなんでそんな威力が出るのよ！あんた術者でしょ?!」

まあそりや、ビビやダガーの杖攻撃だけでモンスターを吹っ飛ばしてたらびっくりするよな。私はレベルが高いからこうやって杖だけで牽制できるんだろうね。

「ふっ、強くなり過ぎちまったぜ」

「むっかつくわね!!」

彼女の斧のラッシュが始まり、それを杖で受け止める。

私はまあこれくらいにしておくかと、ぴよんと跳んでジタンの背後についた。

「杖には限界があるのでジタン任せた」

「ええーいきなりかよ!!……しかたねえな」

そしてジタンがラニに向かっていき、戦いが始まって数分経って、分が悪いと感じたラニは退散していく。

採掘場の入り口の方へと走っていき、我々はやっと一息つくのであった。

「ヴィエラ、急に任せるってひどくないか？」

「だって杖ボロボロになりそうだったんだもん」

結構へこみと切り傷を受けてしまった杖さん……物理なんてさせてしまったばかりに。すまん。

「そう言えばなんでヴィエラは魔法を使わないんだ？杖持ってるって事は魔法が使えるんだろ？」

「洞窟が崩落してもイイならつかうけど」

私の一言で、ギザマルークの洞窟の出来事を思い出したジタンはブンブン首を振っていた。

実際、この狭い通路で召喚獣はまずいだらう。

「……あとさ、ずっと言わないで居たけど、なんでまだ黒魔道士の帽子かぶってんだよ」

「転んでたんこぶ出来たのー！見せたくないのー！」

ぷいと背を向けて私は勝手に進んでいく。

時間が来たらさっさとジョブチェンジしよ。久しぶりに精霊使いになりたいな。レイピアの攻撃も出来るし、敵にデバフもかけられる

し、サポートにはもってこいなんだよね。  
時計を見るが、まだ時間にはならない。

あと3時間くらいなんだが、この洞窟を進んでいればそれくらいになるだろう。

それから野生のガルガントに掴まって奥まですすんだり、スイッチを変えたりしてガルガントの行く先を変えたりして進んでいくが、道が入り組んでいてとても迷子になる。

「ジタン……一回休憩しようよお」

流石にガルガントに乗って逆さまになったり右行つて左行つて……この洞窟内で彷徨つてかなり疲れてしまった。

途中で出会った盗掘屋さんのトコに戻って、皆で一旦休憩することになった。

盗掘屋さんは私が召喚術士だから見た目が違うこともあって、会ったこと無いと思っっているようで声をかけてこなかった。

まあ、ありがたいが、精霊使いに戻ったら「あの時の!？」って言葉それそう……めんどくさい。買収しとくか。

「ねえおじさま」

盗掘屋さんに寄っていき、実はと話をしていく。

「小さな声でお願いします、ほら、私入り口でモンスター狩りしてた……」

「……あ。あの時の騎士見習いか。どうした？」

「実は、私がここに来ていたことを内緒にして欲しいので、おじさまとも初対面だったというふりをしていて欲しいんですよ。もちろん謝礼はありますよ」

ジタン達と来て、最初にポーシヨン一個くれないかと聞かれたから、ポーシヨンが欲しいんだと思う。いっぱい持っているので5個ぐらい見せたらにつこり笑って、ありがとな、見ず知らずのお嬢さんと言ってくれた。交渉成立。

これで思い出されたり、精霊使いに戻っても何も言われることはないだろう。

ジタン達の居る場所まで戻れば、クイナがお腹がすいたと言ってう



なだれている。

沼に居るときも結局カエル1匹しか捕まえていないもんな……

近くには木材やロープがたくさんあったので、近くの水辺で魚釣りをしようと言うことになった。

こういうのはジタンが得意だと言って色々と準備してくれる。

ダガーも初めての釣りにちよつとワクワクしながら、皆で竿を握り釣り糸（縄をほどいて細くしたもの）を垂らす。

先端にはそこらで倒したモンスターの肉を縛り付けて置いたので、かかってくるだろう。

数分待っていたら、ビビの竿に魚がかかり、続いてダガーの竿にも魚がかかった。

ビビのは大きくて一人では釣り上げられなくて、クイナと一緒に引っ張り上げてくれた。

ダガーのは手のひらより少し小さい小ぶりの魚だった。

「ビビおつきいね！すごいじゃん！」

「クイナと一緒に上げてくれたから釣れたよ！」

嬉しそうに釣れた魚を抱えて、びちびち跳ねるのを押さえていた。

クイナは鍋を探しに行き、私もそれに続く。

「ここら辺は色んな道具が落ちているアルね。鍋とかフライパンもありそうアルね」

「あ、これどうだろ！比較的にきれいだよ！」

私はフライパンと鍋を拾い上げ、中を覗く。

鍋は土が入っているだけで、穴も空いてないし使えるだろう。

フライパンは持ち手の変形しているだけで、それ以外に問題は無い。

水辺でフライパンと鍋を洗い、ビビを呼んできて火を起こす。

レンガを組んで鍋を煮込む準備も整い、ジタンとダガーが大きな魚を持って戻ってきたので、これで食料はOKだろう。

「クイナさん、調味料はこういうの持ってるんだけど、使えそう？」

私の4次元バッグから持っていた調味料を見せれば、十分アルと頷いてもらった。

それから野菜をガルガン草で補い、料理開始！

「そうアルねえ。ビビの釣った魚はスープに、ジタン達が持ってきたのは炒め物にするアル」

手際よく魚を捌き、ガルガン草も刻まれていく。

スープに調味料とハーブを入れて煮込み、そして同時進行でフライパンで焼き目を付けつつガルガン草と炒めていた。

ガルガントが好む草ってどんな味なのか分からないが、クイナのご飯は美味しいだろうなど、良い匂いを嗅いで待っていたら完成したのだった。

「良い匂いだな！」

「ガルガン草での料理は初めてアルねー！私もワクワクアルよ！」

料理する前に生でモグモグしていたから、味付けに失敗はしていないと思う。

というか、長旅になるかもしれないなら料理道具を用意するべきだったよなと後悔しています。

その辺で集めた食器を洗っておいたので、それにスープと炒め物を分けて皆で食べる。

魚も美味しいし、ガルガン草も甘みがあってシャキシャキと歯ごたえのある食感。スープも調味料が絶妙なバランスをたもっていて、全ての具材の味と混ざってとても美味しい。

流星アレクサンドリアの厨房にいただけあるよ!!

炒め物も美味しくて、おつきな魚二匹だったのに、あつという間に食べてしまったのだった。

「クイナの料理、本当に美味しかったわ！」

ダガーも満足そうに微笑み、クイナは残っていた魚の骨もポリポリ食べている。何も残さないんだろなあ……

「ワタシ料理は得意アルよ！食べるだけじゃ無いアルよー」

「クイナを連れてきて良かったぜ！」

ジタンもクイナのお陰で美味しい食事にありつけたから、皆でお礼を言うのであった。

「外の大陸に行ったら、またこうやって食べるアルよ」

「その時はまた頼むぜ！」

こうして洞窟内なので時間が分からなかったが、もう夜も遅くなつてしまっていることに気が付いた。

盗掘屋さんも寝るために残されていた小屋に入ったようで姿が見えない。

我々も食事も済ませたし、今日は寝ようと言うことでテントを張るのだった。

私はもうジョブチェンジが出来るので、召喚術士から精霊使いに戻っておいた。

釣りしているときにはもう時間が来ていたのにチェンジするの忘れてたぜ。やっぱりタイマー的な欲しいぜ。

「あれ、服変えたのか？」

ジタンは私の変化に気付き、レイピアが使い勝手が良いと剣を振るう。

ヒュウと風を切る音はきもちがいいな。

「私の魔法だと洞窟が崩落しかねないから、サポート的な魔法にとどめたかったから変えたの」

「使える能力が変わるって不思議だな」

「クイナだってモンスター食べてモンスターの技覚えたりだからクイナだって不思議だよ？」

「たしかに……」

そう言ったら納得してくれたみたいで、それ以上聞かなかった。

テントで休んで夜を過ごし、目を覚ましてまた釣りをしてガルガン草の料理を楽しみ、先へと進んでいく。

「もうさ、こうやってガルガントを乗っていくのも疲れたよ……逆さまになるから頭に血が上るしー」

私は文句を言いながらガルガントから降りて、付近に居たモンスターをレイピアで切り捨てる。

ここ最近レベル上げてないからそろそろどっかでやっとなかないとなあ。

「そういうなよ、ガルガントが居なかったら歩いて進まなきゃならな

「かつたんだぜ」

「そうなんだけどねえ……」

逆さまになるのがいやなのよお、うええ。

そうやって文句を言っているうちにどンドン先に進んでいく。

そしてようやく洞窟の出口に辿り着くことが出来たのだった。

「この光は……霧が晴れているのか？」

そう、霧の大陸は名の通り霧に包まれているのだが、その外の大陸は霧がかかっていない。だから、どこでも晴れ渡る青い空を見ることができなのだ。

「さあ、行こう！」

私は先に出てお日様の光を浴びる。

霧の香りも何も感じない、すがすがしい空気だ。

「すごい……！霧が無い……！」

ダガーも驚いていて、ビビもクイナもキヨロキヨロと辺りを見渡していた。

だが、外の大陸は霧の大陸と違って荒野が多い気がする。あまり緑豊かではない。

でも、この大陸にある文明の中で、コンデヤ・パタはとても新鮮な山の幸が採れるって記憶があるから、そこでのご飯が楽しみだなと微笑みながら、遠くに見えるコンデヤ・パタの建物を指さした。

## コンデヤ・パタく黒魔道士の村

「すごいー！みてみて！なんか建物があるよ！」

フォツシル・ルーの出口からでも見えるコンデヤ・パタの建物を指さして言えば、皆が行ってみようと歩き出す。

この大陸のモンスターは見たことのないものばかりだったが、サボテンダーが出てきて私は大興奮。

サボテンダーってFFの代表的なマスコットだよね。

「何が可愛いんだよとんでもないモンスターじゃないか!!」

飛んでくる針の嵐に皆が逃げ惑い、私は逃げつつもサボテンダーを愛でる。

触ると刺さりそうだから近くでカワイイカワイイと言って回ったら、流石のサボテンダーもドン引きだったみたいで逃げてしまった。

サボテンダーも逃げるほど引くってどういうことよ……

「……ヴェエラって変わってるわよね」

「変なものを見る目で私を見つめないでダガーさん!!」

ダガーにも呆れられながらもコンデヤ・パタに辿り着き、クイナさんは食べ物求めて中へと突進してしまった。

もしダンジョンだったら罠にはまってるぞ。

「つたく、クイナは食べ物の事しか頭にねえんだから」

ジタンがしかたねえなと溜め息を吐けば、ダガーに「ジタンは女の子のことばかり考えてるけどね」と言われてしまう。

ダガーもクイナさんの後に続いてコンデヤ・パタに入っていく、ジタンはまたも溜め息を吐いた。

「本日も進展無し、と」

トボトボと歩いて行くその背中についていけば、ドワーフ族が入り口で「ラリホツ」と挨拶をしてきた。

この里ではラリホツと挨拶するのが習わしなので、しない人は歓迎してくれません。元気よく歯切れ良くラリホツと言うのがコツ。

皆も動揺しながらも挨拶を返していて、私も素直に元気よく「ラリ

ホツ」と答えて進んでいく。

コンデヤ・パタはまるで古代の遺跡のような見た目で、暖かな陽を感じられた。

「こんなところでお昼寝したら気持ちよさそう。」

中を探索していると、クイナさんの「濡れ衣アルよー！」という叫びを聞き、行ってみるとお店があった。

そこには新鮮な山の幸がずらりと並んでいて、クイナさんが勝手に食べようとして泥棒に間違えられたのだろうと悟る。

まあ、勝手に食べたらどろぼうよね。

「ラリホツ！何か良い食材ありませんか」

「ラリホツ！見かけない客人がまた来るなんて珍しいド。今日はこの爆弾カボチャがオススメド！」

「それじゃ、その爆弾カボチャと……この辺の食材もくださいな」

私もこの山の幸を楽しみたいのでたくさん買い物しました。

お金には困ってないのでたくさん買って、あとは調理器具も必要なのでそれもそろえる。これで長旅も大丈夫だろう。

食材もあるし、一流のシェフもいる。最高だな。

るんるん気分で歩き回っているとビビと合流。

我々はクジヤの情報を得ようとここまで来たのだが、特に何も情報はない。だが、ビビには何か違和感を感じたようだ。

「この人たちはボクに会った事があるように話しかけてくるんだ……どうということなんだろう」

ビビが私にそう零したら、後ろから来たドワーフ族のオジサンが、この前の木の実がどうだこうだと話しかけてきて、ビビは首をかしげた。

知り合いがいるはず無いのに、なんでこうやって話しかけられるのか分からなかった。

「うーん、だれかとまちがえてるんじゃない？」

「ボクを誰かと間違える？」

「聞いてみた方が良いよ、ラリホツ！おじさん、あのさー」

と、話しかけようとしたらそのオジサンの背後からオバサンが現れ

て夫婦喧嘩を始めてしまった。

オバサンはほつつき歩いてねえデとつと働け！とオジサンを仕事場へと戻らせてしまった。

「おんやまーまんずめんこい客人がおったなんてな！今日はお使いド？」

オジサンから情報は得られなかったが、オバサンなら知っていそう  
だ。

「あの、ボクの他に訪ねてくる人が居るんですか？」

ビビの質問に、オバサンはうんと頷く。

ビビは答えを聞いたけど訳が分からなくて帽子をぎゅつと握った。

「ほれ、あそこに居るド？クロマ族」

オバサンの指さしたそこには、お店で物を交換している黒魔道士が居た。

そこにジタンが鉢合わせ、それに驚いた黒魔道士は凄早い早さで里から逃げていく。

「まっつてよ!!」

ビビが追いかけるが、あまりの早さに追いつけなかった。

黒魔道士が居た以上、調べなければならぬ。

コンデヤ・パタの人たちにクロマ族という人たちのことを聞き、近くの深い深い森の奥に住んでいるという情報を得た。

「黒魔道士が、なんでこの地に」

ジタンがうーんと悩み、私は知っているし、逃がした張本人だ。だからまあ、行こうと里を出る。

「会ってみれば分かるよ……あ、よかった、クイナさん来てくれた。おーい、クイナさーん、出かけるよー」

「ま、待つアルよー」

クイナさんも何とか合流し、我々は黒魔道士達の住む村へと進んでいく。

だが、段々日も傾き、そろそろ夕方に入ってしまう。

そのまま森で一夜を過ごすのは危険なので、荒野でも高台に今日は根城を作ることにした。

「コンデヤ・パタで一泊つて言うのも手だけど、この深い森……迷っちゃまいそうだから朝から入りたい。その方が安全だと思う。コンデヤ・パタからだと時間がかかっちゃうからな」

ジタンの提案で、今日はここにキャンプなのです。

早速買ってきた調理器具が登場！

「じゃじゃーん！今日は美味しいご飯が食べられるよー！クイナさん！お手伝いー！」

「任せるアル！」

買ってきた食材を全部出して、クイナさんにまだ何日か歩くかもしれないんで、半分だけ使って。と頼んだら、その分の調理をやってくれた。

半分でも多いとのことでは少なくて使われ、材料は枯渇することはない。

「これだけたくさん材料がそろっていると料理のし甲斐がアルよ！どれもこれもうまそうアル！」

そう言うとおり、本当に良い香りが漂ってくる。

食材は野菜の他にもフクロウや木の実があつたので、それも買わせてもらった。

肉も彩りもある炒め物と煮物とスープができあがり、月明かりの下、焚き火を囲んで皆でご飯を食べる。

ホント、クイナさんが居てくれて助かった。めちやくちやうまい。

「爆弾カボチャの煮っ転がし美味いわあ……スープもタマネギみたいなのとほうれん草っぽい草のスープでうまあ……炒め物も鳥肉うまあ……」

かんぺきよ、さいこうよ……

「クイナさん、味の方はいかほどで……」

「美味しいアル!!この食材達は食べたことないものばかりだったアルが、少し食べれば特性が分かるアル。全て適した料理が出来たはずアル！カエルも美味しいアルが、この山の幸も美味しいアル！」

クイナも満足そうにペロリと食事を平らげ、近くにある湧き水を汲んで食器をビビと洗った。



「美味しかったねビビ」

「うん、お腹いっぱいだあ」

二人でニコツと微笑んでご飯の余韻を楽しみ、洗った食器などを拭いてから鞆に押し込める。

明日もまたご飯作ってもらわないとな、と。テントに入って目を閉じた。

朝になり、昨夜の残り食材で朝飯を用意。

食べ終わって、ようやく深い森の入り口に立った。

「枯れてる森だね……この大陸は基本水不足な気がする」

「とりあえず気をつけて進もう」

森を進み、モンスターとも出食わずが、たいした相手ではない。

私無しでもみんなまで戦って進めている。私は温かい目で見守っていた。

だけど進んでも進んでも同じ場所に戻されているような感じがした。

「……この看板、さつきも見たよな？」

ジタンが首をかしげ、私も「見たねえ」と頷く。

「うーん、何かしらの魔法で偽装しているのかもしれないね。まあ、進もう」

私は気にしないで適当に歩き、すると遠くに黒魔道士を発見することが出来た。

あとに着いていけば、黒魔道士は枯れ果てている森にかけた偽装を解いて、緑の茂る青々とした森の姿を見せる。

黒魔道士が入っていくのを遅れないように追いかけて、私たちは黒魔道士の村に侵入することに成功するのであった。

外は枯れ果てていた森だったが、ここでは川のせせらぎと小鳥のさえずり……緑豊かな風景の中に魔道士達の顔のような建物が連なっていて、おとぎ話のテーマパークのような雰囲気でした。

かわいいんだけど。

ぼんやりとその風景を眺めていたら、黒魔道士達が私たちのことに気が付いて、目が合った瞬間に飛び上がって逃げ出してしまう。

「人間だー!!」

「人間が来たぞー!!」

外を散歩していたであろう黒魔道士も近くの家に飛び込んでしまつて、森は静まりかえる。

ビビは動いている黒魔道士達に驚くと同時に同じような仲間が居たと言うことで喜んでいて、話をしたいから彼らの後を追いかけて行つてしまつた。

ダガーは何故こんな枯れた森に村が?と疑問に思っていたけど、そのままビビの後を追つて村の中へと向かつた。

「うーん、別に黒魔道士達は敵意は無いと思うし、各自情報集でいいかな」

私がそう言つて離れて、家の窓から顔を除いてみる。

黒魔道士は私と目が合つたら数センチ飛び上がつて物陰に隠れてしまつた。

うーん、ここは話し合い出来そうにない。

適当に歩き回りながら、沢に作られた家に入つてみる。

構造的に、ドアには鍵をかけるところはなかった。

「ヒッ!人間……!!」

「……あれ、その耳……」

ここは宿屋のようで、隣の部屋にはベッドが見える。

中に居た二人の黒魔道士は怯えつつも、一人が私を見て何か気が付いたようだった。

「あなたは……ギザマルークの洞窟で助けてくれた……!?!」

「あ、キミはギザマルークの洞窟からの子か!道中で他の仲間に出会えたの?」

どうやらこの子は私が初めて助けた子だった。

ギザマルークの洞窟以降、ブルメシアやクレイラでは誰も助けあげられなかったから、この村で顔見知りなのはおそらくリンドブルムで助けた子達くらいだろう。

「はい、あなたから逃げるように言われて、海沿いを走っていたら、他の仲間も数人出会つて……それからリンドブルム側であなたがたく

さんの仲間を引き連れてくれてから船でここまで逃げてこられました……すべてあなたのお陰です」

深々と頭を下げる黒魔道士と、それを見ていた隣の子も一緒に頭を下げた。

私は嬉しくて二人まとめてギュツと抱きしめ、無事で良かったと言って離れた。

「私、仲間と一緒に来たから、私の仲間を見て皆びっくりしたみたい。誤解を解きに行ってくるね」

「ああ、私もいきます。恩人が来たのです、皆に知らせなければ」  
そう言う二人は宿を出て行って、私はのんびり後を追った。

すると恩人が来たとき声をかけられたせいか、隠れていた黒魔道士達がどンドン集まってきて、「恩人！」「ウサギさん！」何て声が多数聞こえる。

騒ぎになっているからジタンもダガーもやってきてしまった。

「えっ、ヴィエラ、どうしたんだ!？」

「ごめんちよつと実は顔見知りがいっぱいで……」

「顔見知りがいっぱいって……お前黒魔道士達がこうやって動いていることを知ってたのか!？」

まあそうなりますよね。

ジタン達が来たので黒魔道士達は私から彼らに視線を移し、じいつと見つめて居る。

視線に圧倒されてジタン達が少し引き気味になっているけど、私の仲間だからって言えば黒魔道士達は視線を私の方に戻した。

「恩人が来たんだから歓迎しないと」

「でも、歓迎ってどうやるんだろう」

「コンデヤ・パタの人たちみたいに、お祝いってのをやれば良いんじゃないか?」

「なにをするの?」

「お祝いってお花を摘んだり料理を並べたりするよね」

黒魔道士達は歓迎会をしないとばらけていく。

私はジタン達に事の経緯を軽く説明することにした。

「実は、カーゴシップの時に動いている黒魔道士達を見てから、もしかしたらビビみたいに動く子も居るんじゃないかって気をつけていたんだ。まあ、攻撃されたら私もバンバン殺してたんだけど……最初はギザマルークの洞窟で一人動いている子を見つけてとにかく遠くに逃げるように言つて、次はリンドブルムの城が攻められた時に、動いている子を探したらたくさん居たの。その子達を集めて、霧の大陸から逃げるように言つて別れたんだけど、まさかこんな村を作っているとは思わなかったよ」

「でもよ、何で今まで自我を持った黒魔道士達のことを隠してたんだ？」

「彼らには静かに暮らして欲しかったし、自我があるかもしれないなんてビビの耳に入ったら……まともに戦えなくなるだろうって判断したんだ。ビビは優しいから、自分の手で目覚める前の子を殺したかもしれないなんて思わせたくなかったんだ。この村の子も、私の逃がした黒魔道士達だとは思つてなかったし、もしかしたら他にも見えないうと暮らしているかもしれない」

私がそう説明すると二人はうんと頷いた。

「ビビには……確かに話辛かっただろうな」

「それに、私も逃がすので手一杯だったから、ビビに紹介してる暇なんて無かったし、「いたよ」って変な期待を持たせたくなかったからさ」  
「そうだよな、あの戦いのさなかじゃ……そういうえばダガー、ビビは見なかったか？」

「いえ、見てないわ」

「うーん、んじやあもつと奥の方に入っちゃってるのかもね。まあ、同じ魔道士達だから話が弾んでいるのかな……あれ、ビビだ」  
遠くの方で駆け足のビビが横切った。

おそらくお墓のことを聞いたのかもしれない。

私も後でお墓参りに行くでしょう。

「ねえ恩人！ 歓迎会ってどうすればいいのかなー！」

元氣な黒魔道士が質問してきて、私が持っている材料と、魔道士達各自で木の実やフクロウ肉、キノコを採ってきてもらうことにして、

料理長は我らがクイナさんに任せようと、クイナさんを探す。

ついでに黒魔道士達にカエルも生きたまま集めるように言っていた。

「ごめん。ジタン達は適当にくつろいでて！」

「お、おう」

探して数分、クイナさんはチョコボの小屋でチョコボの卵を狙っていて、黒魔道士二人に「来るなー！」「あっちいけー！」と怒鳴られている。

「チョコボの卵は珍味アル……」

「あーお忙しいところスイマセン、クイナさん。黒魔道士達が歓迎会を開きたいんだけど、誰も料理が出来ないそうで、材料を取ってくるから料理をして欲しいんですけど。カエルも集めてくるって言ってたよ」

カエルの単語でクイナさんは目を輝かせ、この大陸のカエルの味を想像してよだれが出ていた。

よし、これでチョコボの卵から意識がそれた。

「料理長、どうか我々に料理を作ってください」

「分かったアル。この周辺でキノコも木の実も豊富なのは見たアルから、美味しい料理ができそうアル」

クイナさんを連れて、村の広場のようなトコに来て、私の持っている材料を並べる。

爆弾カボチャの残りとその他野菜、いつもの調味料……

すると調達をして戻ってきた黒魔道士達が、カゴいっぱい食材になりそうな物を集めてくれたようだ。

魚や鳥、獣肉、木の実、キノコ、葉っぱ、そして大量のカエル。

カエルの量にヒエって思わず声が出てしまった。

目視20匹くらい居る。ひい。

「カエルアル!! いっぱいアル!!!」

「クイナさん、カエルは全て差し上げますので料理をお願いします」

私はもう一度深々と頭を下げてクイナさんに任せたら、クイナさんは何匹か食べてから「たくさん料理を作るアル!!」と燃えていた。

集められた材料は、クイナさんの手で食べられるものとそうじやないものに分けられ、その広場で料理道具を広げて火を焚き、歓迎会の事を勉強するために黒魔道士達は集まってクイナさんの料理姿を眺めている。

私は数人に声をかけてテーブルを用意するように伝えれば、家を作った端材などでテーブルがたくさん作られていく。

広場に並べ、様々な料理ができあがり、たくさんのお皿に盛りられてテーブルに並べられて、所々に花瓶も添えられてとても華やかだ。

流石にテーブルクロスは布が足りなかったのでなかったが、これでも十分だった。

準備しているうちに日も落ちて、ロウソクに火が灯される。

魔道士達は見たことのない彩り豊かな料理達を見て目が輝いていた。

「いっぱい作ったアル。この村に何人居るのか分からないアルが、きつと余るくらい作ったアル」

そう言いつつパクパクとカエルを食べるクイナさん。

クイナさんはカエルを箸休めに料理を堪能するのである。

「余ったらまた明日食べようね。私他の皆も呼んでくるね」

黒魔道士達を連れて「歓迎会」と言うのをやるぞと声をかけて回り、ジタン達にも会えたので、中央広場で歓迎会だよと伝えた。

「はやくはやく！料理冷めちゃうよー！」

私は小走りで広場に戻り、何が起こっているのか分かっていない黒魔道士達も誘導してテーブルに着かせた。

やはりいっぱい作りすぎたみたいで、料理の量が人数に合っていないようだけど、足りなくなるよりずっといいだろう。

「恩人、歓迎会とは」

「えっと、ホントは外からやってきた私たちが中心に用意するのは違うんだけど、皆に知って欲しいから、今回は私たちがやらせてもらおうね」

木箱を積み上げて目立つ様にそこに立つ、手にはお茶の入っている木のコップだ。

「えー皆様様、お集まりいただけたでしょうか」

私はマイクはないので少し大きめの声量で皆に話し始めた。

「本日、我々が急に村に踏み込んでしまつて、一時的といえど騒がせてしまったことをお詫び申し上げます。ですが、私が逃がした皆さんとまた会えたことは本当に嬉しく思っております。歓迎会は本来、この村の住人である黒魔道士達がよそから来た我々に行く、僕らの村に来てくれてありがとう！という喜びを伝えるためのものです。今回は初めてのことで、食材を用意したり、テーブルをつくつたり、花で飾り付けをしたり、たくさんのことを覚えましてね。これから先、同じような黒魔道士がまた来てくれるかもしれない。その時は、今日のようなお祝いをしてあげて欲しい」

そう言うと、黒魔道士達はうんうんと頷き、ジタンはパチパチと手を叩いてくれた。

「手を叩く、それは「すばらしい」や「すごい」と言うのを身体で示す行為です。皆様、一度拍手をお願いします」

私の言葉の後、少し静寂が訪れたが、小さくパチパチと手を叩く音が聞こえ、それから皆も同じように拍手をくれて嬉しくてにつこり笑つてしまつた。

それから拍手を止ませようと手を上げれば、自然に音は止まり、私は言葉を続ける。

「我々は同じような悲劇を起こさないよう、ブラネ女王の陰謀を阻止するためにこの大陸までやってきました。悪いやつは私たちが必ずやっつける！」

そして大量の拍手。

なんか演説みたいになつちやつたよ、やだん。

「では、ここで我々の出会いに感謝を込めて、乾杯！……あ、乾杯つて言うのは……各自好きな飲み物をまず飲んでから、お祝いを始めてご飯を食べよう！つてことね」

細かいことは知らないから、もう見た目だけ意味が伝われば良いと思う。

お酒無いだろうし。

「そうそう、乾杯！って言ったら皆目の前の食事を食べて盛り上げれば良いのさ」

ジタンがそう言って、お茶を一気飲みしてから、ハーブ焼きの魚にかじりつく。

うめー！とジタンが言えば、他の黒魔道士達も同じく各々何か飲んでから食事に手を付け、始めて食べた美味しい料理に目を輝かせていた。

「キノコと葉っぱでこんな美味しい物が出来るの!？」

「この鳥も木の実と一緒に煮込んだらこんなに味が変わるんだ！」

「この野菜焼きおいしい！」

皆喜んで食べていて、ジタン達もニコニコしながら食べている。

ビビは最初うつむいていたけど、少しずつ食べ始めたトコで、他の黒魔道士達と何か話している。

打ち解けているみたいでよかった。

私も箱から降りて料理を食べてみれば、クイナさんの料理はやはり最高だ。めちやくちやうまい!!

「恩人、次この村を来たときは、同じように色々用意するよ」

「あはは、ありがとう。もしかしたらコンデヤ・パタの人も来るかもしれないから、敵意のない人だったら歓迎してあげてね」

敵意のない人……こうわざわざ言うってのは、後にクジャがこの村にやってきて魔道士達を連れて行ってしまふからである。

だから、訪れた人全員歓迎するな、と、遠回しで言ったのだ。

恐らくその意味は伝わっていないだろうけども、まあへたに警戒されても困るからそれでいいのかもしれない。

それから歓迎会は続き、夜も更けていく。

ようやく皆おなかいっぱいになった頃に解散となり、料理はいくらか残ったが明日食べようと言うことで器に入れて皿で蓋をする。

これで虫は入らないだろう。

宿屋のベッドは二個しかなかったので、ジタンとダガーに譲って私は黒魔道士達と一緒に広場でテントを広げてパジャマパーティー的なアレになってめちやくちや楽しんでる。



クイナさんはお腹いっぱいでもう眠ってしまったって、ビビは他の黒魔道士達と話があるからとこちらには混ざらなかつた。

このテントに居る子達は寿命のことを知らない子達が多いみたいで、精神年齢も低く感じる。

私は子供とお喋りする様に、色んな事を聞かれて、それを説明しているうちに眠ってしまったのであつた。

目が覚めたら黒魔道士達は眠っていて、時計を見たら朝の4時。外は薄暗く、でも朝日が昇る方角の空が明るくなっていた。

起こさないようにテントから出て、お墓にやってくれば、そこにはずっと立っていたのか黒魔道士が一人居た。

「君は眠らないの?」

声をかければ、眠くなれば、眠ると答えた。

「恩人は、私を覚えているか?」

どうやらこの子も助けた子だったみたい。

「助けた数が多くてちよつと分からないかも」

正直に言えば、そうだろうと言われた。

この黒魔道士は何処で出会つたかは口にはしなかつたが、288号と番号を覚えてくれた。

「恩人が逃がしてくれた後、何人かが止まってしまった」

「……お墓なのね」

かかしの様に立てられているそれらを見て、私は目を細めた。

これから先、彼らは次々止まっていくだろう。

「恩人は何処まで知っている」

「ダリの村で作られている時、卵の頃から見たかな」

「我々の寿命のことは」

「私は作った人じゃないから流石にそこまでは分からない」

そしたら288号は黙つてしまう。

私は気休めになるかは分からないけど、ちよつと話してみようかなと口を開いた。

「生き物ってさ、それぞれ寿命が違うって知ってる?環境にもよるし、猫や犬は15年くらい、人間は平均的に70くらいかな。でも昨日料

理してくれたクイナさんはク族っていう種族だけど、100年以上生きるとかいうし。この世界に居るかは知らないけど、エルフなんて1000年超えるとかいうし……人間の基準で見れば犬や猫だって短いつて言われるのかもしれないけど、エルフからしたら人間は短命つて言われるよ」

「……恩人は我々の寿命の事を知っているんだな」

「いや、寿命の事は？つて聞かれたら恐らく短命なのかなつて察するよね。お墓あるし」

「……………」

288号は黙ってしまい、この沈黙が辛くて私が口を開く。

「逆にさ、死ねないつてなつたらどうする？」

「……死ねない」

「自分の大切な友達や大事にしていた動物、彼らがどんどん先に死んでいく。自分だけ死ななくて、知っている人は自分より先に死んでいく」

「……いやだ」

「長寿だからイイつてもものでもないつてこと。それに、病気とかしたら寿命があつても死ぬんだからあんまり関係ないかもね」

「ボクは人を殺した」

「なら命の大切さを理解できるかな」

「……………」

288号はまた黙ってしまふ。

生きること、正しい答えつて難しい物だ。

人によつて意見が違うからどうしても答えは一つに絞れない。

「今を大切に生きる、つてのが一番良いことだと思ふけどね。もしかしたら私も明日モンスターに食べられちゃうかもしれないし、そんなことをずつと考えながら生きるのは辛いかな」

「……それは、ボクも思う。今を皆と一緒に過ごせるのが凄くたのしいんだ」

その言葉を聞いて安心した私は288号の背中をポンと叩き、ちゃんと寝てね、とお墓を後にした。

テントに戻ればまだ黒魔道士達が寝ていて、恐らく昨日びつくりしたりはしゃいだり、色んな出来事があったから疲れてるのかもしれない。

まだ朝も早いので、私ももう一眠りすることにして、自分が寝ていた場所に戻るのであった。

「おーい、ヴェイエラ。出発するぞ！」

めっちゃ寝たみたいでジタンに起こされました。

どうやらこの大陸の北西辺りで銀色の竜を見たらしいと情報が入った。

クジャの後を追うためにコンデヤ・パタの聖地という場所に向かわないとならない様だと言うことで、コンデヤ・パタに戻る支度をする。

ビビはようやく仲間が出来たから、来ないかもしれないとジタンが言った瞬間ビビが置いていかないでと走ってきた。

「村の皆に頼まれたんだ！村の外をたくさん見てきて、それを教えて欲しいって！」

「そうだね、ビビが皆の代わりに冒険して、それを教えてあげよう！次来たときはフォツシル・ルーで戦車に追われた話とかイイかもね！」

そう笑えば、嬉しそうにビビは帽子の鰐を握ってえへへと笑った。

昨日の残った料理をキレイに食べきり、我々はコンデヤ・パタへと戻るのであった。

## コンデヤ・パタ〜イーファの樹

黒魔道士の村からコンデヤ・パタに戻り、聖地への行き方を聞いて回る。

それとついでに食料の調達も行い、今日も美味しいご飯が食べられそうな予感である。

てけてけ歩いてしていると祭司と話しているジタンとダガーを見つけ、話を聞いていると聖地は夫婦になった者ではないと通ってはいけないらしい。

つまり、夫婦になれば良いと言うことである。

「どうする？ダガーとオレが結婚しちまえばあの道を通れるって訳だけど」

「……いいわ」

半分冗談で言ったんだらうけど、ダガーはジタンと結婚すると言ってジタンはかなり驚いていた。

「あの道を通るのに他に方法がないのなら仕方が無いわ」

「そ、そうだけだよ……」

啞然としながらジタンはダガーを見つめ、祭司は夫婦になる者が増えるのであれば、他種族であれ歓迎すると言って準備をしに行った。

「えっと、どういうこと？」

混乱しているジタンをよそに、ダガーは祭司の方へとついていった。

私はニヤニヤしながら、ヨカッタネー！とジタンの肩を叩いた。

「ビビとクイナも儀式を執り行ってもらって、私はネズミ族並みのジャンプ力があるから先に聖地への道へ行くよ。じゃ、待ってるね」  
「えーおい」

ジタンの返事も聞かぬうちに私はジャンプでコンデヤ・パタの建物の上に登り、巨大な木の根を飛び移って難無く入り込むことに成功した。

木の根の上でのんびり待っていると、小さな女の子の悲鳴が聞こえた。

下を覗いてみれば、小さな者が枝に引っかかっているのかバタバタと動いているのが見える。

エーコとモグだな。

そしてコンデヤ・パタの方からジタン達もやってきて、それを見たモグがエーコを見捨てて逃げていった。

「こらまでえーっ逃げるなモグー！薄情者ー!!」

それからがつくりと肩を落として大人しくなったところにジタン達が囲めば、「ぎゃあおたすけー！」と叫んでいる。

エーコかわいいなあ。

「だめよ私を食べるなんて！きつと美味しくないわ!!」

なんでかエーコさんは自分が食べられると思っっているのか大騒ぎ。

だけど、クイナさんが「あの変わった色のモーグリはうまそうアルね」何て言っただけで追いかけて行った。

クイナさんは何でも食べるからモーグリにも手を出してもおかしくないのがまた怖い。

クイナさんがエーコの引っかかっている土手の上から隣の離れた土手に飛び移った衝撃で、エーコが落下。

それをジタンがすかさずキャッチしてくれて怪我はなかった。

話も聞こえづらいしそろそろ私も降りるかどジタンの後ろに飛び降りれば、ジタンは「うおっ」ってびっくりして、エーコは「ひぎやあ！」って怯えていた。

「やあ可愛いお嬢さん、私はヴィエラっていうの。驚かせてゴメンネ」

第一印象を良くしようとな乗ったけど、私の耳を見て固まっている。

ヴィエラは見たことないから興味津々でしょうね。

「耳は柔らかいのよ、触ってごらん」

片耳を差し出せばエーコはにぎにぎと掴んで柔らかいと呟いた。

少しは緊張がほぐれたかな。

「ヴィエラもしかして上でずっと見てたのか？」

ジタンに言われてうんと頷き、入るタイミングが分からなくてさと笑った。

そしてその時エーコはずっとジタンに抱えられていることに気が付いて飛び降り、片言で「アリガト」と言った。

おじいちゃん以外に初めて見た人間で、しかも男性に抱えられるなんて思春期には恥ずかしいよね。

「大丈夫？」

ダガーも声をかければ、うんと頷いた。

「怪我はない？」

更にダガーが声をかければ、エーコはフンと鼻息を荒くしてその青い子みたいなお子供じゃないわ！と言い出す。

「……でも君、ボクとあんまり変わらないような」

「しつ失礼しちゃうわ！それにキミだなんて！私にはエーコっていう立派な名前があるんだから！それにレディーに名前を訊く時は自分から名乗るつてのが礼儀つてもものだわ！ヴィエラなんて礼儀正しいお姉さんだわ！」

わーい褒められた。

「私はダガー、こっちの子はビビよ」

「ふうん、で、あなたは？」

エーコは振り返り、ジタンを見上げる。

ジタンも名乗り、彼女は満足げにうんうんと頷いた。

「エーコ嬢、それで、あなたは何をしていたのかしら。コンデヤ・パタの方々から追われている様に見受けられましたか」

紳士的に丁寧に接してあげてみる私に、ジタンが何故？と言わんばかりの眼差しをしているから、貴族ごっこと言ったら笑っていた。

エーコに合わせてごっこ遊びしているのが分かったようです。

「そうそう、そのエーコさんはなぜ盗みなんて働いたんだ？」

「……お腹、すいたの」

「そりやまた立派な理由だ、まるでクイナみたいな……そういえばア

イツほんとにモーグリを追っかけていったのか？」

ジタンはクイナが進んで行ったであろう山道を見つめて、エーコがモグが食べられちゃう！と慌てていた。

「まあ、さすがにモーグリは食べないと思いたいよね……」

食べないよ、という絶対的な言葉が欲しいですが、残念ながらそうも行かず。

「ねえ、エーコの家ってこの先にあるの？」

ダガーがエーコの住処を聞いてみれば、ずーっと向こうにあると言われた。

恐らくモグも先に帰ってしまったことも溜め息交じりで話してくれた。

そして、ダガーがこの子を家まで送ってあげようと言うことで、マダイン・サリへと向かうことが決定した。

その最中ジタンがダガーと夫婦と言うことを言ったのだが、ダガーにすかさず「オトモダチ」と修正されてしまい、「オトモダチには昇格できたのね……」と肩を落としていた。

姫様のガードは堅く見えるけどそれでもないわよジタン！ファイト！

「私の家まではこの山道を進んでいかないと行けないから、皆足下に気をつけてね！」

一部ぐねぐねとうねる木の根を歩くから、足下は安定していない。ビビは気を抜いたらコケそうだ。

どんどん進んでいけば、見晴らしの良い景色と共にとても巨大な樹が見えた。

クレイラも大きかったけど、それ以上だろう。

「アレが……聖域？」

ジタンが呟き、エーコはそれの説明をする。

「アレはイーファの樹ってエーコ達は呼んでるよ」「ふーん」

私はあまり興味なさそうに視線を道に戻す。

あの樹は後でたくさんお世話になるから、今はいい。

「エーコの家はまだ先だよ！」

エーコについていくと、途中変な地響きがして、大きな生き物が歩いている震動だと気が付く。

「何か居るね」

私の言葉に、エーコはぷんと怒ったように腰に手を当てる。「まったく邪魔してくれて！」なんて言ってるうちにでっかいモンスターとエンカウントしてしまった。

「時々出てくるの、いつもはエーコ急いで逃げてるんだけど……！」

ハルクみたいな緑色でピンクのパンツを履いた人型のモンスター、ヒルギガースは大きな拳をこちらへ振りかざしてきて、避ければ地面に亀裂が入った。なんなんだこのモンスター。

「大丈夫だよエーコ、今回は味方がいるからね！戦おう！」

私はスリッピレインで水の塊を足に当てて相手の動きをスロウにする。

そしてシャイニングエアで強い光と突風を起こして砂埃を上げ、ヒルギガースの目を潰した。

「よっしゃー！相手は動きが鈍いし目を潰したぞー！！たたみかけろー！」

私の言葉に皆が攻撃態勢に入り、まずダガーがラムウを呼んで雷の攻撃を仕掛けた。

「ラムウ、お願いしますー！」

それから更に雷の攻撃を浴びせれば、ヒルギガースはラムウに襲いかかる。

ラムウは光になって消えていき、ヒルギガースの拳は空を切った。それからビビの黒魔法、ジタンのナイフがヒルギガースの体力を削っていき、かなり苦しくなったのか雄叫びを上げて暴れ始めた。

この状態で近付くのは危険だから、一旦皆で待避する。

「あんなに派手に暴れてると、岩とか飛んできそうだな」

どうすっかな、なんてジタンが考えている横で、エーコが笛を鳴らした。

「フェンリル！アイツを吹っ飛ばしてちょうだい！」



そう言ったら大きなオオカミのような何かが現れ、その足下がせり上がってゴーレムのようなものができあがる。

そしてヒルギガースの足下から巨大な腕が生えて、キレイなアツパーでヒルギガースは空の彼方へと吹っ飛ばされていったのであった。

「ありがとうフェンリル！もう帰っていいよ！」

そう言われたフェンリルは遠吠えをしてから光になって消えていった。

「ふう、いつもだったら避けられて当てられなかったんだけど、今回は皆のお陰で当てられたよ、ありがとうね！」

ジタン達にお礼を言うけど、召喚獣を出したエーコにダガーがなぜ使えるのか聞いてみたけど、ダガーも使えるじゃんと言われてしまう。

「普通は呼べないぜ、エーコは昔から呼べたのか？」

「そりやそうでしょ？おじいちゃんもみんな呼んでたよ」

エーコにとって、召喚獣は当たり前だったし、それ以外の人間を見たことがないから使えない方が不思議なようだ。

「そんなことはいいわ、さあ、いきましょ」

ヒルギガースもやつつけてこのへんに平和が訪れ、そのままエーコについていく。

すると山道を抜けて広い荒野に出ることが出来た。

奥の方にはなにやら建物が見えて、そこに住んでいるんだなど皆はすぐに理解して進んでいく。

ついにマダイン・サリに辿り着いた。

「ここがエーコの済んでいるマダイン・サリなの！」

「ここが……？」

マダイン・サリは瓦礫の山で、文明があつたがもう滅んで廃墟になっっているようだった。

人が住んでいるにしては活気がない。

「何かあつたのかしら……まるで……廃墟、だわ……」

ダガーは何か感じながらも荒れ果てた光景に言葉を詰まらせてい

る。

知らないはずなのに、何か知っている感覚なのかも。

その時瓦礫の影からモーグリ達が顔を出して、あちこちモーグリだらけになった。

「人の代わりにモーグリの巢になったみたいねえ」

いっぱい出てくるけど、モグだけが居なくてエーコは食べられてしまったのかと顔を青くしたが、隅っこの方からチラリと、申し訳なきようにモグが顔を出す。

そしてエーコのところに飛んできたけど、「エーコはもう怒ってないわ、でも次置いていくことはしないでね」って言ってて、まるでお姉さんだなんて微笑ましい場面にあふつと笑ってしまった。

このモーグリがまさか召喚獣マデインだとは思わないよな。

今はまだ覚醒してないからこうなのかもしれないが、結局は最初から召喚獣なのよね。

召喚獣は人の想いで生まれるという説もあるから、両親の願いによつてモグが生まれたつて解釈だったと思う。

「ジタンー！ついてきてー！」

エーコに言われてついていけば、噴水があつたのだろう広場に行き着き、エーコはジタンに興味津々で質問攻めしていた。

流石のジタンも困っちゃつた。

ちゃんと答えてあげていて、その間に私もうろろしたりしている。

だけど、ダガーは何だかぼーつとしていた。

やはり、記憶がなにかよみがえりそうなのだろう。

「ダガー大丈夫か？なんかぼーつとしてるけど……」

「ううん、何でも無いわ」

何だかジタンがダガーにべたべたするから、エーコは二人の関係を疑うが、ジタンは「仲間だ」と答えた。

たしかに、オトモダチというよりも、我々は仲間だよな。

するとどこからかモーグリがやってきて、片付いたと伝えた。

それからエーコが料理を振る舞うから絶対食べていってね！と言

われたのでごちそうになることになった。

「後で呼ぶからここに待っててね！」

そう言っただけでエーコは走って行き、私は後を追うために瓦礫の山を飛んでいく。

エーコの家の調理場に勝手に入り、そこに居たエーコがぎよつとしていた。

「急にごめんね、私イイ食材持っているから、ぜひエーコ嬢の料理に、と思っまして」

持っている材料を見せたら、エーコは目を輝かせて「こんなにたくさん材料いいの!？」と喜んでくれた。

コンデヤ・パタで盗みをするくらいだから、店に並んでいる品々を見たことがあるだけだっただろうから、そりゃあうれしいだろう。

この子がおなかないっぱい食べられるようにこれで貢献できたかな。

「ねえ、ヴィエラってジタンの事どう思ってる?」

「仲間だね。ジタンは優しくていい人だよ」

そしたらエーコはうんうんとうなずいて、私は微笑んだ。

「エーコがジタンのハートをキャッチ出来るように応援してるわ」

「えへへ、ありがとヴィエラ! そうだ、モリスン。待っている間まだまだ時間がかかるから、召喚壁を見学させて! ヴィエラも行ってきて!」

召喚壁をこの目で見られるのはめちゃくちゃ嬉しいことだ。

私はモリスンについていき、家から出る。するとジタンとも出くわして召喚壁を見せてくれると言うことを伝えた。

飛んで行くモリスンについていけば、途中でダガーに声をかけて三人になる。

モリスンの解説と共に召喚壁の中に入り、召喚士一族が守り続け、そして研究してきたそれを壁に書かれてると聞かされた。

ダガーも文献で読んだことがあるから、いくつかの召喚獣の名前を口にしていく。

「……………これは何かしら」

「恐らく、バハムートだね」

私はその名を口にすると、ダガーは目を見開く。

「……ヴェイエラはこの召喚獣を全て知ってるの……?」

「そうだね、ある程度は。古い古い文献に残ってたり残ってなかったりね」

そう言つてラムウの書かれている壁を撫でる。

すごいな、これらを全部見つけるのが本当に凄い。

「……ヴェイエラは、何者なの」

ダガーは聞いてくるけど、私は遠いところから来たウサギと答える。

「私のような種族は見たことないでしょ? 私たちも人々から知られないようにひっそり生きているって事よ。まあ、召喚士一族とつながりはないけど」

「どうしてヴェイエラは外の世界に出たの?」

「来たかったからだね。探求つてのは楽しいものだよ」

ふふつと笑えば、ダガーにブラネ女王を止められる召喚獣はないかと聞かれたが、それは難しい質問だった。

「なんだかんだ、全部威力が高いからね。シヴァは全てを凍り付かせる、イフリートは地獄の火炎で燃やしつくす。バハムートはやめておけ、メガフレアはえげつない。オーデインもクレイラを潰すほどの威力だし、うーん、きついな」

正直止めるものつてどういう風にして止めるんだろうか。

アレキサンダーくらいなのかもしれないけど、それは宝珠が無いといけないし、エーゴが居なきやダメ。

「どうしてそんなに詳しいの!?!」

「ヴェイエラは特殊なんだ」

「誤魔化さないで!」

「うーん、知っているからとしか言えないんだよね……文献に載ってるでしょ、これくらい。オーデインはクレイラから逃げるときに見てるしや」

まだ納得して無くて、ダガーはモヤモヤしているみたいだった。

余計なこと言つたなあ……

「おいおい……二人ともどうしたんだ」

ジタンもやってきたけど、私は溜め息交じりで少し話すことにした。

「カーゴシップの時に居たあの翼竜、あれは召喚獣ヴァルフアーレ。私は召喚魔法が使えるの」

急にカミングアウト下から二人がびっくりしていて、速いけどネタバレをすることにした。

「私は特殊で、様々な戦闘スタイルに変えることが出来るのは、一緒に戦って知っていると思うけど、その中に召喚士つてのもあるの。私はこのマダイン・サリの召喚士一族とはなにも関係はないけど、召喚魔法が使えるからある程度召喚獣のことも調べて知っているってわけ」  
「ヴィエラも召喚魔法が使えるのか!」

「ここに書かれている召喚獣とは似て異なるけどね。最も、ヴィエラが召喚士の力を借りて使えるってのか正解だね」

「何で黙っていたの?」

「抽出されちゃ面倒だから隠していたつてのが一番かな、ブラネ女王は召喚獣を集めているから、私まで使えるのを知られたらまずい気がしてね」

そう言えば、ダガーは黙ってしまい、ジタンもそりやそうかと納得してくれた。

「私は別な戦い方が出来るし、なるべく召喚獣を使わない方が私はイイかなっておもうからなるべく使わないんだ。使わなくても強いでしょう?」

すると二人ともうんと頷いた。

「隠しててゴメンネ、でも皆にはなるべく内緒にして」

そうして三人の秘密になり、しばらくしたら食事の準備が出来たとのことと呼ばれるのであった。

ごちそうが並んでいて、エーコはクイナさんにも手伝ってもらった事を話し、食事を始める。

とても美味しい料理に皆が大満足だったのだが、エーコ以外の人を見かけないことを聞いてみたら、皆死んでしまったと言った。

「エーコが生まれる4年前だから10年前かな、村は天変地異に襲わ

れて壊滅しちゃったの。生き残った人も無事ではすまなかつたって。でもその中でお父さんとお母さんが愛し合って私が生まれたの。っていつても、小さい頃に死んじゃったから顔も覚えてないんだけど、その後はおじいちゃん和暮らしてたの。そのおじいちゃんも一年前にしんじやつたけどね、だからエーゴが最後の生き残りなの」

そして、16歳になったら召喚魔法の耐性がつくから好きな召喚獣と村を出てイイって言われているらしい。

たしかに、ダガーも16歳になるのをまっていたからね。そういう文献も残っていたのだろう。

それから召喚獣と召喚士の魂のつながりの説明を受け、大きくなるまで好きな召喚獣を選んで呼ぶことは出来ないようだ。

今呼べるのは、自然と知っているものだけって感じなのかな。

「角で召喚獣と交感するのよ。ダガーって不思議だわ、どうやって交感しているの？」

「……………」

ダガーは自身が何故召喚魔法を使えるのか全く分からないし、角で交感していると言うことを初めて聞いて黙ってしまふ。

だけどその答えは出ることはなかつた。

「……………ヴィエラ」

「いや、私もその時は角あるんだわ……………」

「そう……………」

ヴィエラだって召喚魔法使うけど角無いじゃんって思ったんだらうけど、残念、角あります。

「今度機会があつたら見せるよ」

食事を終えたダガーの肩をポンと撫でたら、うんと頷いた後にうつぶむいてしまった。

その後、食事を終えた皆で食器を運んだりして、私は考え事をしているビビのトコにやってきた。

「よ、悩める少年」

「お姉さん……………」

ビビはこつちを向いたけどまた視線を下の方の川の流れに戻して

しまう。

私はポンポンと背中を撫で、何も言わずに隣に居た。

ビビも何も言わずそのままだった。

そのまま皆でマダイン・サリで一泊することになり、私はすんなりと眠りについた。

目が覚めてから、ジタンにイーファの樹に向かうことを知らされる。

銀竜の目撃情報もそつちだからね。

でもイーファの樹には召喚獣で結界を張っているから入れ無いとも言う。

そうなる進むことも出来ないのだが、エーコがついてきてくれることになった。

「どうしてもエーコが必要よね！しかたないわね、今だけ仲間になってあげるわ！」

とのことで、エーコが仲間になり、イーファの樹を目指すことになったのであった。

イーファの樹の前にまでやってきた我々。

霧が溢れていて、ここが霧の根源だと言うことがなんとなく分かる場所だ。

薄気味悪いし少し寒い。

そしてちよつと進んでみたら、見えない壁みたいなのに当たったみたいで、ジタンは跳ね返された。

「それが結界よ、今解いてあげるわ」

エーコがそう言うとか呪文的な何かを唱えるのだが……エーコは途中でやめてしまった。

「んもお、しかたないなあかつこつけたかつたのにー」

そして結界は解かれてルビーを手に入れる。

カーバンクルだったんだろう。

「エーコ、さっきの呪文は？」

「ホントはいらないんだけど、かつこつけたかつたから唱えてみたん

「ただ、召喚獣に戻すなら早くしてつて急かされちゃって」  
私も角がないから、召喚獣のやり取りは全く聞いていないのである。

ダガーも何も感じなかったし聞こえなかったから、凄くがっかりしている。

「まあまあ、ダガーが召喚獣を使えるのはたまたまなのかもしれないしね、そういう例外もあるのかもよ」

「……………」

ダガーは黙ったままで、とにかくイーファの樹を進もうと言うことで、うねる幹を登っていく。

クレイラのように整備されているわけじゃないから登るのが辛い。

進んでいくと、何やら人工物があるのが見えた。

青と水色……この色と作りはテラのものだ。

「一体誰が作ったんだ……」

ジタンは眺めながら呟き、真相を知る私は不思議だねって言う。

そして中央に何やら円盤があり、私は触っても何も反応しなかった。

やはりジェノムであるジタンがキーになっているのだろう。

「ねえジタン、これ動くかなあ」

コンコンと叩いてみたけど反応なし、ジタンが同じく触ったら、淡く光が点った。

ついでに乗ってみたら下に降りていき、ジタンは途中でジャンプして上に戻ってくる。

「どうやら下に行くための装置みたいだね、戻ってきたら行ってみようよ」

私がそう言うと同時に戻ってきて、皆で一斉に乗ったら下へと降りていく。

リンドブルムの城のリフトと違って揺れはあまりない。

下につけば、またうねる根を歩いて行くことになるが、下に来たせいかかなり薄暗い。

モンスターもアンデット系がいるしな。



どんどん進んで下がっていくと、先ほどまで薄暗い場所だったのが、やたら緑色の場所に出た。

緑が多い茂っているとかの緑じゃなく、未知なるエネルギーを感じる。

近くに葉っぱの乗り物的のがあったが、エーコと私が乗ってみても反応はない。

「動かないわねえ、これが動くと思ったのに」

「ホントだねえ。もしかしたら体重が重くないと作動しないとかかな？」

知らないふりで適当なことを言っておく。

でも重さで反応するギミックもあることはあるからさ。落とし穴とか。

「ねえ、変なのあるから皆で乗ろうぜー」

「ヴィエラ！エーコ！なんで乗ってるんだよ危ないだろ！」

「私は素早いでいいかなって」

「……まあヴィエラなら大丈夫だろうけど」

こうして葉っぱの乗り物に皆で乗ったら、やはりジタンが乗った事で反応しているようだった。

それに対して「オレの日頃の行いがいいからかな」とか言っているので片言でソウデスネと返しておいた。

リフトはぐんぐん下へと降りていき、先ほど自分たちがいた場所があったという間に見えないくらい高いところになってしまった。

「クジャと霧……どんなつながりがあるんだ」

「でも、霧が生まれるのがイーファの樹なのに、どうしてジタン達の大陸にだけ霧があるのかしら」

エーコも疑問に思い、皆で首をかしげた。

外の大陸のイーファの樹で作っているのに何故わざわざ霧の大陸に流すのだろうか。

悩んでいる中、別なことに悩んでいるのか浮かない顔をしているビビが居て、ジタンが駆け寄る。

「ビビ、どうしたんだ？」

「ボクも霧について考えていたんだ……ダリ村の工場のこと……覚え  
てる？」

「黒魔道士達が作られていた工場ね……」

ダガーがうんと頷き、エーコは何の話なのか分からず首をかしげ、  
その説明をしようとダガーがビビのような姿をした……と口にして  
しまう。

ジタンはビビが傷つかないかと心配でダガーの言葉を止めるが、ビ  
ビは自分が作られたことは気にしてないよ、と言った。

この子は強くなつたなあ……

「あの工場も霧がいつぱいあって、しかも機械もあつた」

「それと卵もだね」

「だから、何か関係があると思うんだ。霧とクジヤと黒魔道士……」

話しについて行けてないエーコはフクザツなのねえ……と呟いた  
のだった。

それからようやく底について、見たことのない機械のような植物の  
ようなものと気持ち悪い緑色の光が嫌な気分させる。

更に下にはハープの様な光の線が伸びていて、底は光で見えない。

これ以上下へは行けそうにないだろう。

一人先に走っていったエーコをビビと追いかけて、キレイだけど気  
持ち悪いねって言えば、二人はキレイだと思つたらしいから、気持ち  
悪くはないらしい。

あの光は恐らく魂の光だとおもうから、ここにはたくさんの生き物  
を感じるって言うのはそういうことだろう。

その魂をここで霧に変えて星……クリスタルへ返さず霧の大陸に  
まき散らしている。

それを知っているから気味が悪いのよね。

「まあ、作つたにしても誰がどうやって作つたんだろうね、こんな大き  
なもの」

「なんなんだろう……」

「全然分からないわ」

結局ここでは何もなく、それ以上下に降りないといけなのかと思ったとき、モグが何かを察したのか怯えていた。

「ねえ！モグが上から何かが来るって言ってる!!」

その上からの来訪者は自分たちの前に降り立ち、「クジャではなかったか」と言った。

樹のような見た目の化け物、赤い一つの瞳のような宝珠が気味悪く光っている。ここの管理者だろう。

「クジャはどこに居る！」

ジタンが聞くが、そいつは知らないと言った。

ならば霧を作っているのはお前かと聞けば、霧の事を説明してくれた。

「生産ではない……霧は精製における余物、根を通し廃棄するチリに等しきもの。闘争本能を刺激する霧によってかの大地を廃棄物で包み……かの大陸の支配者を争いさせ、かの大陸の文明を滅ぼすため。クジャは廃棄物を別の手段で利用したに過ぎない」

「クジャは一体何を……!?!」

ビビが聞けば、管理者はゆらゆらと揺れる。

「クジャはチリを使って兵器を作った。そう、お前のような……」

だがそこでエーコがなんかムカつくと言う理由でやつつけちやおうと言いだし、ジタンはちよつとまってと言って更に情報を聞くために管理者へ質問する。

「クジャが作ったって言う兵器って言うのは……」

「クジャは黒魔道士と名付けた。それは霧で作られた暗黒の生命体」

それから間を置いて管理者は言葉を続ける。

「我を倒さば霧が止まる、それすなわち人形のごとき兵器が生まれぬ事を意味する。答えよ人形よ、お前は自らの出生を否定するのか」

そこでビビは大きな声で答えた。

あんなに小さなビビから、はつきりとした強い意志が放たれた。

「これ以上人殺しの道具は作らせない！作らせちゃいけないんだ!!」

こうして戦いの火蓋は切って落とされる。

怒ったビビの魔力は相当なもので、結構危なげだがイイ火力が出て

いる。

「ラムウ、お願いしますー!」

「うむ」

ラムウの雷撃も当てつつ、ジタンも隙を突いてナイフで斬りかかる。

私もスリッピレイインで水弾を当ててスロウにさせて、戦いをサポートする。

この面子はすでに白魔道士二人いるからヒーラーに困ってないの  
で、半ヒーラーな私は回復を出す事も無く戦いを見守っている。

私もレイピアで参戦しても良いのだけど、ラムウの雷撃とビビの魔法の邪魔になりそうなので、スロウだけかけてる。

皆だけで勝てるだろうから大丈夫だろう。

回復が多く居るからダメージは問題なかったが、管理者はマスタードボムを放ってジタンがヒート状態にされてしまった。

「な、なんだ、身体が……熱い……!」

「ジタンだめ!動かないで!動いたら死ぬよ!」

私はジタンに駆け寄り、彼を動かさないように止めた。

ヒート状態で動くと思いません。

逆にフリーズだと、攻撃されたら粉々になって死にます。

「ビビ!ジタンにブリザドかけて!それしか方法がないの!」

「わ、わかった!」

ビビのブリザドをジタンに放ってもらい、ダメージは食らうものの、ジタンの身体の熱は取り払えた。

「死ぬかと思ったぜ……」

「それが冗談じゃないのが怖いねえ」

そしてそのまま戦いを続け、管理者に勝つことが出来た。

勝てたのは良いけど、変な地響きがして、ここから脱出することになる。

木の葉のリフトを乗って上に上がり、走って元来た道を引き返していった。

イーファの樹の入り口まで戻ってきたが、いつの間にか霧が晴れて

いて、心地よい日差しを浴びることが出来た。

やっぱりお日様は良いなあ。

「すっかり霧が晴れちゃった。何だかイーファの樹がきれい。……んで、これでジタン達の大陸も霧が晴れたって事なのかな？」

エーコは岩の上に登って遠くを見渡しながらそう聞いて、大本をしめたからなとジタンが笑った。

「後はクジャがどう出るか……だな」

そんな中ビビは自分の行いが間違っていないか不安を零し、私はギユツとビビを抱きしめてあげた。

「何にも間違っていないよ。仲間は生まれにくいけど、道具にされてしまふあの子達をこれ以上作らない方が絶対いい。ビビはエライよ」

ヨシヨシ、と背中を撫でれば、ちよつと涙ぐんだ声でボク、皆に嫌われる気がすると言った。

「嫌うわけ無いじゃないか。あの子達だってそれが嫌で逃げてきたのに、同じような悲しい子達を増やさないようにしたビビを攻めるわけ無いでしょ。私は、彼らが傷つくのが嫌でたくさん助けようとしてきた」

「……村の皆からお姉さんのこときいたよ。どうして動いている仲間が居るって教えてくれなかったの？」

ビビの声は更に震えていて、なんで隠していたのかと不審を抱いた。

「……みんな、たくさん戦いの中で目が覚めてしまったから、ビビに紹介する暇なんて無かったの。それよりもとにかく遠くに逃げてほしくて、私も余裕がなかった。平穩に暮らして欲しかったから、それ以上関わる気も無かったし、逃がしたあの子達の事をビビに話したら、会いたいと思うだろうし、そしたら彼らを追いかけることになっちゃうから……あと、兵器として動いている黒魔道士達と戦えなくなるだろうから、ビビを傷つけたくなくて言わなかった」

これは本当。

彼らもビビのように意志が、何て言ったら攻撃できない。

全ての魔道士達が目覚めるわけじゃないから、戦えばもつと傷つく

だろう。

「黙っててゴメンネ」

「ううん、大丈夫」

「誰も君を責めないよ。むしろ私、黒魔道士達を殺しまくったから私の方が憎まれると思うよ」

めちやくちや殺したもん。クレイラなんてひどいもんだったよ。

そしたらビビも私が黒魔道士達の首を刎ねた時を思い出して

「うあ」って声出して引かれた。

引かないで。

「……お姉さん、助けてるのに容赦ない……」

「ほら、私の方が嫌われそうでしょ？」

「っそ、そんなことない！お姉さんが嫌われるなんて事絶対無い！」

ビビが必死にそう言っつて、私はビビの頬を撫でてありがとうと笑った。

「だから、ビビだつて嫌われないよ、絶対」

その時、モーグリが飛んできて、何やらマダイン・サリであったことを知らせた。

エーコは急いで村に戻らないと慌ててたけど、我々はクジャが来るのを待っているだろうからとエーコは気を遣ってくれたけど、仲間の一大事にほつとくわけ無いのである。

「何があつたんだ？」

「村の宝珠が盗まれたの！」

「そんじや、どちら様かは知りませんが、盗人を捕まえませんかとねえ」

「そうだぜ、クジャなんか待たせておけば良いさ!!」

と、言うことで我々もマダイン・サリに戻る事になったのであった。

## マダイン・サリくイーファの樹

マダイン・サリに戻れば、モーグリ達は慌てていて、エーコも自分の家に走って行った。

追いかけてみれば、倉庫になっているような部屋に置かれている宝箱が開かれていて、村の皆が守っていた大事な宝珠が無くなってしまつて事にエーコが落ち込んでいた。

半分泣いているけど、大人だから泣かない！って意地張つていて、ジタンに、大人でも泣くときは泣くさと言われていた。

「エーコがイーファの樹の結界を解いたせいかな……約束破つたからかな……」

そう悩めるエーコをジタンが励まし、盗んだやつが悪いんだから、とにかくそいつを見つけようと言うことになった。

私も適当にマダイン・サリの中を跳び回っていれば、エーコ捕まえたラニを見つけた。

ラニはエーコの背中を掴んで持ち上げていて、召喚壁の中へ入っていった。

私はとりあえず様子をうかがっていると、ジタン達もやってきて、救出のために中に入った。

「この子の命が惜しければ、宝珠を渡しなさい」

ラニはエーコをスリプル草で眠らせてしまったようで、エーコには意識が無かった。今の状況は少々厄介である。

ダガーのもっていた宝珠はジタンが預かっていて、ジタンは手渡すその時に反撃に出ようと考えていたのだろうけど、ラニに見破られてしまい、ビビに持つてこさせることにしたのだった。

これでは何も出来そうに無い。

「村の宝珠を盗んだのもお前か」

ジタンが聞けば、ラニはこれで大金持ちになれるわ！と高笑いをしていった。

正直、私なら一気に距離を詰めて腕を飛ばすことは出来るけど、そ

ここまでするほど悪人ではないのでちよつと大人しくしている。

すると、その時どこからか「待ちな！」と声が響いた。

そしたら召喚壁の上から大柄の男性が飛んできて、ラニとエーコの間に割った。

エーコは弾みでジタンに抱えられ、ラニはラニでこの村で盗んだ宝珠をその男に取られたようだった。

「なにすんのよ！邪魔する気!? どういうつもりよ焰のダンナ!!」

その言葉でダガーはトレノに貼られていた賞金首の事を思い出し、それがここ人なのかと理解した。

「助けたわけじゃ無い、戦いを汚されたくなかっただけだ」

「なんのことよ」

ラニは意味が分からずそいつを睨むが、彼には失せろと言われてしまった。

「先走った挙げ句に人質を取るような卑怯なやつとは組まん。それだけだ。……それとも、やるかい?」

男は構え、そう言い放たれたラニは激昂して斧を地面に叩き付けてじろりと睨み付けた。

「覚えていなさい！いつか私があんたを狩ってやるわ!!」

そう言つてラニは壁を蹴って登り出て行ってしまった。

そして焰の旦那と呼ばれたそれはジタンの正面に立ち、戦えと言つてきた。

大体意味不明ですよね。

助けてくれたのかと思いきや、戦えって。

「この感じだと、最初っからジタンと戦いたかったんだろうねえ」

私は傍観を決める気で居たので、ぴよんと飛んで召喚壁の上に腰掛け、ジタンがなばれーって応援してあげた。

男二人の戦いが始まり、素早い動きの焰の旦那に翻弄されつつも、ジタンの方が優勢だった。

カウンターを受けつつ、それでもナイフで牽制し、そして隙を突いて蹴りを食らわせて召喚壁の柱にぶつけてやった。

これで戦いは終わった。



「さあ殺せー」

戦いに負けたからさあ！というが、ジタンや我々は命を奪いたいから戦っていたわけじゃ無い。

必要ないので拒否をすれば、それが意味が分からないと彼は言う。

「行けというのか」

「ここで去るなら放っておくさ」

「何を企む」

やっぱり彼は見逃してくれる意味が分からなくて、裏があるんじゃないかと言ってくるが、正直お前の命なんて要らねえんだよね、まじで。

「別に、勝負がついてお互い命があったんだからそれでいいだろ。盗まれたものも返してもらったしな」

もはや面倒くさそうにジタンは言い、その様子に呆れたように男は言った。

「殺しが怖いのか？ハッ、牙を持たない野郎に敗れるとはな！」

「牙を持つ野生の獣こそ、無駄な殺生はしないもんさ」

そう言ったら沈黙の後に男は去って行った。

宝珠も無事に取り返すことが出来て、今回は一段落である。

私はエーコの家に行つて、残った料理を持ってマダイン・サリをぴよんぴよんと跳んでみている。

焔の旦那……サラマンダーさんが居ると思うんだよねえ。

と、瓦礫の影に腰掛けているサラマンダーさんを見つけて、目の前に着地。

ジタンとの戦いもあつて怪我をしていて、ポーションも持っていないのかしらと首をかしげた。

「何をしに来た。首を取りに来たのか」

「そうですねえ、お腹すいてそうだからこの料理を食べて欲しいんですけど、食べてくれないだろうから、あなたに言うことを聞かせたくて戦いを挑みたいなあと思いました」

料理を置いてポーションを掲げ、一戦お願いしたいと言えば、薄く笑ってサラマンダーはポーションを受け取り怪しむこともなく飲んで

だ。

体力も傷も完治し、ベストコンディションとなっただろう。

「私はレイピアで戦うの。魔法も使えるけど、あなた魔法返し持つてたきがするわ」

「随分とオレに詳しいんだな」

「賞金首さんだもの、すこしくらい調べておかないとねえ」

料理にホコリが入ってしまったても困るから、遠く開けた場所まで移動して、剣を構える。

「こちらのルールでは敗者は死ぬのではなく勝者の言うことを聞く、でいいかしら」

「何でもかまわん。いくぞ」

私は俊敏に駆けるサラマンダーの攻撃をレイピアでいなす。

そしてすかさずレイピアでサラマンダーに突き攻撃をしていくとまた距離を置き、また一気に距離を詰めていくのでそれもレイピアでいなす。

あえて魔法を使わないでレイピアで戦っていき、段々と私の移動の速度を速くしていき、サラマンダーにびったりつくように執拗に背後に回る。

「クソ……っ！」

「こっちこっち」

私はいたぶるように小さく小さくサラマンダーを斬っていき、サラマンダーも遊ばれているというのが感じられただろう。

「なんのつもりだ」

「遊んでるんですよ。私にとって戦いは、楽しむものだからね。殺すんじやなくて、負かしたやつが力を付けてまた挑んで来てくれることを願っているの。何度来ても、私は負けないけどね」

それから今度はレイピアさえ使わず蹴りでサラマンダーに攻撃を仕掛ける。

横からの蹴りを腕で防いだが、思っていた以上の威力だったのか受けきれずに横に吹っ飛んだ。

「くう……っ!!」

「ホーラホラア後ろだよおお」

一気に距離をつめて後ろに回って人差し指で背中をツンと付いてやれば、サラマンダーはとっさに腕を振るってナツクルで攻撃しようとする。

でもその動きも見切っていて、流れるようにその腕をいなして懐に入る。

まるでスローモーションのような時間の感覚を味わう中、サラマンダーと目が合う。

驚いているのか目を見開いていて、歯を食いしばっていた。

「あらいイ腹筋」

さらりと腹を撫でてから水平チョップをかまして地面に叩き付ける。

完全に遊んでるし完全にリンチです。

ベアトリクスは強かったけど、サラマンダーさんはそこまでだな。ジタンと一騎打ちして負けちゃうくらいだからね……

「ぐ、う……っ」

「ごめんごめん、大丈夫？」

流石に遊びすぎたかなあって思ってたけど、ナツクルで斬られそうになって後方へと避難した。

よろけながらサラマンダーは立ち上がり、肩で息をしている。

ジタンと戦ったときより明らかにダメージがデカい。

もう勝算は無いよねえ。

「ねえ。今から魔法を交えて戦うけど、あなたに勝算はあると思う？」  
するとサラマンダーは負けを認め、また怪我だらけにしてしまったのでポーシオンを分けてあげた。

「あなたにちよっかい出した理由は、なんかジタンに因縁があるみたいだから面白そうだったってのも一つね。ひひ」

回復したサラマンダーに、食事の残りを差し出した。

「勝者の私の言うことは聞かなければならない、それが今戦ったルールだね。さあ、食べてちょうだい」

「……毒でも入れているのか？」

「かもしれないよ？毒で苦しんで死んでいく姿が見たいなあ」

そう言ったのにサラマンダーはモグモグと食事を食べていく。  
マジで死ぬことに恐怖は無いみたい。

「ま、怪我したキミが気になったただだから、それだけね。じゃあね」  
私はぴょんと飛んでエーコの家に戻ってみたら、どうやらダガーが急に倒れてしまったらしい。

それからすぐに目を覚ましたんだけど、何か思い出したらしい。  
そのことを話してもらったら、ダガーは六歳くらいまではマダイ  
ン・サリで暮らしていて、天変地異が起こったときに本当のお母さん  
と一緒に小舟で逃げたらしく。そしてたどり着いたのはアレクサン  
ドリアだったんだろうという話だった。

だけど、それから何故王女になったのか、角が無くなったのか、記  
憶も無くて何も分からないらしい。

「少しでも思い出したならヨカッタネ」

それから召喚壁に行って、毎日祈りを捧げていたことも話してい  
て、少しずつだけど記憶が戻ってきていた。

「ダガー。おかえりなさい！」

エーコはそう言って笑い、村に帰ってきたダガーはただいま、と微  
笑んだ。

あんまりにも良い雰囲気なので、私は召喚壁を去って、エーコの家  
で先に一休みすることにした。

それから陽が昇って再びイーファの樹を目指すことになる。

エーコもついてくることになり、怖いものなしだね、何て話してい  
たら、サラマンダーも顔を出した。

「何だよ、またやるってのか？」

ジタンも面倒くさそうに戦闘態勢に入るが、今回は違うようだ。

「勝者は生者、敗者は死者。お前もこの鉄の掟の中で生きてきたはず  
だ。だが昨日の行動は全く理解が出来ん。言え！殺さなかった理由  
は何だ！」

「理由ってのもなあ。そんなに死なずに生きていることが不満なのか

？」

「訳の分からん状態で生きるより、けりがついた方がマシだ。

昨日のお前の行動なら理解できる、敗者を従わせるのは勝者のみだ」

そして私に向かつてそういった。

「私は殺すより負けた悔しさをバネにしてもう一回挑んで来てくれる方が良いんだよね。戦うのは楽しいから、殺してそこで終わりじゃつままないよ」

そう言ったらジタン達数名が引いてた。引かないで。

「ていうか……あの後お前から戦ってたのか？」

「うん、ちよつと面白そうだなって思ってた喧嘩売つっというボコった」

「ヴィエラほんと怖いな……」

「怖くないよー！それに、なんだろ、この人根はまっすぐだと思っただけらさ、悪人では無くなって思ってた」

彼は指名手配されているけど、それは誤解で、実はトレノのキング家という貴族の用心棒をやっていたサラマンダーだったんだけど、キング家に盗みに入ったジタンにサラマンダーが対峙し、他の警備の者が来た瞬間ジタンがサラマンダーが盗みの首謀者だとホラを吹き、そのまま逃げていった。

サラマンダーは力があるのにそれを見せないとというのが分からないらしく、ずっとジタンを追っていた様だった。

しかも、自分は濡れ衣だと言うこともしないでそのままお尋ね者になつてしまうちよつとお茶目ちゃんなのよね。このツラで。

「お前ははつきりしているな、従えるために力を使う。お前もソイツの手下と言うことなのか」

「え、いや……オレたち手下とかそういうのじゃないけど……」

「ならば何故つるんでいる」

「えーと、仲間だから？」

「仲間……？」

やっぱり一匹狼をやってきたサラマンダーさんには理解が出来なかったようで沈黙してしまい、ジタンはそうだと案を出した。

「じゃあオレたちと一緒に来いよ、行動を共にしてりや、理解できるかもしれないぜ？」

その言葉にダガービビエーコもびっくりしてたけど、命を狙ってたやつと一緒に行くこうって言うのはマジでジタンは心が広い。肝が据わってるよねえ。

「それにオレたちはこれから一戦交えなくちやならねえんだ、あんたなら強い戦力になりそうだ」

「……その女を引き連れてもお戦力を欲するのか」

「化け物みたいに言わないでくださいましー」

「オレをあれほど弄んでおいてそう言うか」

「いやあ戦闘狂なら楽しんで貰えるかなって思ったんだけど」

「……あれほどまで差を付けられたのは生まれて初めてだ。いつかその首もらい受けるぞ」

「あれ？標的がジタンから私に変わってるう？」

「ヴィエラにしたんだよ……」

「ちよつとお戯れを……」

「その戯れで殺されるかと思つたぜ」

「い、生きてるでしょー！さあ手下一号くん！今日からはジタンの言う通り一緒に行こうじゃないか！」

なんだかんだサラマンダーさん言葉のキャッチボール出来るじゃん、なじんでるよ。

「そう言えばなんて呼べば良いんだ？確か焰の旦那って呼ばれてたけど」

仲間になることが決まったが、名前が分からない。

彼は「サラマンダー」と答え、イーファの樹へと一緒に向かうことになったのだった。

「私はヴィエラ。ヨロシクね手下一号くん」

「……………」

手下一号くんと言うのに彼は無言。否定もしない。

目だけはこつちを見ているけど別に睨んでいるわけでも無い。冗談通じない。

「ご、ごめん冗談です。サラマンダーさん、嫌なら嫌って言って良いから……！主従関係は求めてないから！私たちは平等よ！」

「……何故平等にする必要がある。強者が弱者を……」

「あああああつべこべ言うな！逆らってこい！いつでも手合わせしてやるからいつでももうえるかむだからね!!ほれパンチ打ってこい！」

そう言ったらパンチを打ってきて、それを拳で受け止めた。

私の方が遙かに手が小さいのに、彼の大きな拳はピタツと止まってしまうた。

べちん！つて音は大きかったけどね……

「いいパンチだね！フォームきれいだっただよ！」

「……あなたに追いつくまでどれほどかかるんだろうな」

「一緒に戦っていけば経験値が上がると思うよ！」

それから他の皆の自己紹介も終えてマダイン・サリを出た。

まさかサラマンダーさんの目的が二個になるとは……

ジタンの見逃した意味とか、私の首とか……

サラマンダーさんとあんまり関わらないかと思っただけど、ちよっかい出したらえらいことに。

「で、何処に向かうてんだ」

サラマンダーさんには事の詳細は説明していなかったので、道中で話してあげる。

大陸の霧を止めたりしてただけど、その大本の首謀者がいるから、ソイツが霧を止めたから姿を現すんじゃないかって言うことを伝えた。

サラマンダーは無言で聞いていて、頷くこともしてないけど話は聞いていると思う。

それからイーファの樹までたどり着き、去る時よりも霧が晴れてすがすがしい景色になっていた。

霧が無いっていいねえ。

「新たな霧は発生していないな。ってことは、クジヤもまだ来ていないってことか」

「少し待ってみよっか……あれ？上のアレ、銀竜じゃん？」

私が待ってみよつかって言った瞬間、遠くの空から飛行物体が確認出来た。

クジヤが来たんだ。

「間違いない、クジヤだーブルメシアで会った後、アイツは銀の竜に乗って飛び去っていったんだ！」

銀竜を追いかけて私たちもイーファの樹を登ろうと進んでいく。

以前の道は下へ向かった道だったから、別なルートを探して上へと進んでいた。

追いかけて行くと、クジヤが上の方の幹に降りたのが見えて、そこまで登るには道という道は正直無かった。

「ねえジタン、どうやって登るの？ エーココを登るのは自信ない……」

エーコが不安げにジタンを見上げ、確かにこのうねった幹を登っていくのはキツいだろう。

ほぼ崖登りに近い。

所々にある出っ張りに足をかけて跳んで登っていくのが理想だろう。

「何を迷う、自分一人で行きやあいじやねえか」

「サラマンダー、オレ一人で行っても意味が無いんだよ。皆アイツに言いたいことあるからな」

大体皆因縁があるんでね。

だけどサラマンダーはずんずんと幹を歩いて、ジタンに突っかかってくる。

その際に横切られたダガービビエーコ三人が足下のおぼつかない場所だったからふらふらとしていた。

「あぶないじゃない！」

エーコが怒るけどサラマンダーはガン無視である。

ちなみに私はジタンの後ろに居るので被害はありません。

「足手まといは捨てるーそれが生き残るための鉄則だろう!？」

彼はそう言うが、ジタンは首を振る。

「オレたちにはオレたちのやり方がある」



「お前らに考えがあるようには見えねえがな」

サラマンダーさん一々突つかかってくるねえ。

「ジタンに負けたくせに文句言わないでよ！」

エーコが噛み付くが、「ガキは黙ってろ」と一蹴。

ひどい。

「そうだサラマンダー、貸しがあつたよな？ここで返してくれよ。この辺にガルガン草が生えてるからガルガントが生息してると思う。一匹捕まえてきて欲しいんだ。そうすればここも登っていける」

確かにそうだろうけど、ガルガント捕まえてくるつてのは結構無理矢理よね。

居るのかなーって辺りを見渡してみるけど、ガルガントの姿は見えない。

探すの大変よこれ。

「……そんなことするよりもガキ共を担いで登っていけば良いだろう」

そういつてサラマンダーさんはビビとエーコを小脇に抱える。

「あんたは必要なさそうだな」

私を見てそう言うから、背中に担いでくれても良いんだけど？と笑ったら「断る」って言って幹を飛び移っていった。

断るつて……ちと傷つくわあ。

「そんじゃ、ジタンはダガーをお願いね」

私はサラマンダーの後を追って幹を跳んでいく。

ジャンプ力が売りのヴィエラさんは難無く上までやってきた。後から来たけど私が一着です！

こうして皆無事に上に辿り着き、クジヤを見据える。

銀の竜は美しいけど、その隣のクジヤはやっぱり本能的に威圧感があつた。

彼がどれだけ強いのか知っているから怯えているのだろう。

「……ヴィエラ、あの男はそれほど強いのか」

急にサラマンダーさんが話しかけてきて、ビクツと肩を震わせてしまった。

顔に出てたから声をかけたんだろうな……

「私が怖いって思うくらい強いよ……本能がそう感じてる」

私の言葉で場の空気がひんやりしてしまったけども、行かなきゃならねえ！ってジタンは遠くのクジャを睨んだ。

幹を登っていき、クジャと同じ目線の高さまで登り、ついに対峙する。

「あなたがクジャですね……！」

ダガーは震える手を握りしめながらクジャに問う。

私は樹の幹の影にもたれかかっているサラマンダーさんと一緒に影に立っていた。

クジャと顔を合わせるの怖くて出来なかった。

「……アンタ、何で隠れてんだ」

「私が怯えるほどの相手だからだよ……!!アレはシヤレにならないくらいヤバいのよ」

「アンタがビビるほどの相手にあいつらが勝てると思えねえがな」

「……勝敗が分かっても挑まないと行けないときもあるのさ」

影に隠れながら皆のことを見守っている。

ずるいけど、ジヨブチェンジなんか知られたら変なこと考えないか心配で……

今のところは召喚獣に入れあげているから、その他の力なんて見向きもしてないけどね。

こつちで話していると、クジャがブラネ女王をたぶらかして戦争を始めたのかと言う話をしていた。

「ボクはただレシピをあげただけだよ、魂を寝かせた霧という名のスープをコトコト煮込むんだ。そしてまごころ込めて作った黒魔法のポウルに入れて温めて……」

「やめて!!」

クジャの言葉をビビが遮り、クジャはクツクツと喉で笑っていた。

「最後まで聞かないのかい？魂の残りカスからできた魂の無い人形の作り方をさ!!」

彼からしたらそりやただの人形だ。

常に支配者だし、使う側だからこそ、他人の命何でも良い。彼は弄ぶのが好きだから更にまずい。

「魂の残りカス？霧の事か?!」

ジタン達は霧がどういったものなのか知らないから、魂の残りかすというのが分からない。

あの霧が星へ還ることを許されず破棄された人々の魂の欠片だとはおもわないだろう……

「知りたくないと行っただと思えば今度は教えろというのかい？やれやれ注文が多いね。だけど、君たちが知るには早すぎる事だよ」

そうあざ笑って、でもダガーが「人の命を奪って何も感じないの!」と言うが、クジヤは更に笑った。楽しげに、馬鹿にしたように愉快に笑った。

「いい声だけどクスなのは救えない！」

「かなり狂ってやがるな」

「でしょう？あれにちよっかい出したらシャレにならないからね」

サラマンダーさんも流石に狂気を感じ取れたらしく、ふうと溜め息を吐いた。

まあ、彼には何も因縁が無いからどうでも良いんだろうけどもね。

「なら何で付いてきた」

「皆を抱えて逃げる事は出来るから、守るためだよ」

「そうか」

それ以上サラマンダーは口を開くことは泣く、私は皆さんの言葉に耳を傾けた。

「奪った数、多いと言えば君のママだね！手に入れなければ生きた心地がしないという、限りなく乾いた心を持つ君のママのこと！戦争がボクのせい？いや、違う違う！アレは君のママ自身が望んだ行為!!ボクは背中を軽く押しただけに過ぎない」

「嘘よっ！お母様は優しい人だったわ！あなたが惑わしたの!!」

ダガーは優しくかったブラネ女王の事を想い、怒りで拳を握りしめ、ただどくジヤは笑うだけだった。

「ふふ、舞台の幕が上がる時が来たよ！丁度良い、ボクの小鳥。君の信

じるママの本性を見せてあげよう！第一幕、『醜い欲望の終わり』、開演だ！」

クジヤが指さす方には、海の方からブラネの艦隊が連なっているのが見えた。

クジヤを追い詰めるためにブラネ女王がやってきたのは一目瞭然。

あんな艦隊を出した挙げ句に大砲はこちらへ向いている。

「ねえ、ここに居たら危ない気がするんだけどー」

私が小さく手を上げてそう言うが、皆さん全く聞いてくれません。無視しないで……

「君のママは大陸一つでは満足できないみたいだね！感動的に醜く愚かだと思わないかい？」

そしてクジヤは喉で笑った後に、それも想定内だけどね、と呟いた。

それを聞いたジタンはどういうことだと睨み付けるが、君たちは指くわえて見ているがいと、自分の邪魔をさせないように霧の魔獣を作り出して私たちに放った。

「くそークジヤ!!待ちやがれ!!」

後を追をうにも霧の魔獣が邪魔をして進めない。

少し起き上がったワラジムシみたいな霧の魔獣の脚に上から突き刺されないように避けるが、とにかく足場が悪い。

「スリッパイレイン！」

最近この技ばかり使ってる気がする。

霧の魔獣に水弾を当ててスロウをかけ、ついでに足下にも当ててピチャピチャにした。

「ビビーブリザドで濡れたトコ凍らせて！」

「分かったーブリザド!!」

濡れた箇所が固まり、つるつるの幹になった。

「シャイニングエア!!」

そして光と共に突風で押し出し、霧の魔獣は幹から落っこちていった。

「よっしゃあー連携最高だね!!ないすうー！」

ぴよんと飛び上がって勝利ダンスを踊るけど、凍った幹は自分たち

も進めないで溶かすのだった。

「止めないと……！」

ダガーは焦るが、サラマンダーはほつとけという。

「敵さんの潰し合いか……だったら放つて置いて生き残った方と戦えばいい。だが、残るのはクジヤだな」

「……サラマンダーのいうことにも一理ある、ここが巻き込まれる前に一旦退こう」

ジタンがそう言うけど、私さつきそう言ったのに無視したじゃんかあ

だけどダガーはブラネ女王を守りたくて、方法はないかと頭を悩ませていた。

「どうしてだよダガー、アイツは君から召喚獣も奪って戦争を起こしたんだぜ？」

「それでも死んで欲しくないのよ!!ジタンに分かってもらわなかった方がいい!!」

彼女にとつて、最後の家族だから、彼女は優しかったブラネ女王の事が忘れられなくて助けようともがいた。

自分が殺されそうになったというのに、それでもダガーにとっては母親なのだ。

そしてダガーはエーコにこのイーファの樹に封印されている召喚獣が何処なのか聞いて、場所を見るやいなや走り出してしまった。

「ダガー!!」

ジタンも追いかけて、私も軽く後を追いながらぼやく。

「召喚士一族が手が付けられないって封印したその巨大な力で何が守れるんだかねえ」

そのぼやきを聞いていたエーコは、何が封じられているのか知らないらしくて知ってるの?と後ろから聞いてきた。

「海で召喚されたって言うのがヒントだよ。海の召喚獣は一体だけ、リヴァイアサンさ。大津波で全てを飲み込む強大な力では守りたいものも守れない。ダガー!リヴァイアサンは強すぎるけど取つて損は無いよー(聞こえてないかー)」

「ヴィエラってどっちの味方なの!？」

「私は風吹くままに、気の向くままに、流れるだけさエーコ嬢」

ダガーを追って封印の地まで来たが、ダガーはその召喚獣と交感したけど、あまりの力強さに絶望して膝をついていた。

「こんな力じゃ……お母様まで……!」

「ダガー、ひどいこというけど……どんなに強い力を持ってても、救えない命もある」

私も、カーゴシップでの黒魔道士達や、そのほかの黒魔道士達も助けるどころか殺してしまっていた。

あの中に、何人目覚めるはずだった子が居ただろう。

「……っ!!ヴィエラ!あの召喚獣でお母様を助けて欲しいの!!」

「……ゴメン、その、……クジャの前で使うわけには行かないんだ……」

「ヴィエラは隠し事ばかり!!クジャのことも最初から知っていたんでしよう!?!クジャが何者なのか知ってて……!!」

彼女の拳が私の胸を叩いて、ダガーがぼろぼろと泣き出してしまった。

やっぱり、召喚獣が使えるって言うべきじゃなかった。言いたくなくてなかったんだ。

「クジャが何者かなんて私だって知らないけど本能的にやばいつてのを感じているの……それに、ダガーから奪った召喚獣は誰が持っていると思う、ブラネ女王でしょ。クジャとその召喚獣、どっちが強いと思ってるの」

私はダガーの手を掴んで止め、ダガーの召喚獣の強さを語る。

クレイラを一撃で消滅させ、リンドブルム城では何もかもを吸い込み、そしてまだ見ぬ召喚獣がいることを。

「ダガーにはバハムートの力が眠っていたんだ、抽出されたあの部屋でその残りを微かに感じたから分かる。バハムートは文献にも載ってるほど恐ろしい力を持つって知ってるよね?」

「私に……バハムートが……?」

適当に鎌かけてみたら、本当に文献にバハムートのことが書かれて

いたみたい。

バハムートは強力な召喚獣だからね、アトモスのことを知ってるならバハムートだって残ってるだろうと思ったよ。

「その力を今ブラネ女王が握ってる、助けなんて居ると思う？」

「……お母様を信じるわ」

ギユツと拳を握りしめ、取り乱してごめんなさいと謝られたが、嘘をついている私が辛くて苦しかった。

でもここで全部クジャ達のことを話してしまえば、ガイアとテラの話になってしまう。

芋ずる式に色々暴露することになるから言うわけにはいかない。

飛んでいる銀竜に向けて砲弾や魔法を打ち続けているブラネの艦隊を見下ろしながら、私はダガーの肩を抱いてあげる。

大丈夫だよ、きっと、なんて嘘を吐いてあげた。

その時、海がマグマのように真っ赤に染まり、そしてその中から一体の召喚獣が姿を現した。

大きな翼に大きな二つの角……その姿はまるで悪魔の様であった。

「あれが……バハムート!」

ダガーが驚き、そしてバハムートはイーファの樹の海岸沿いに居たクジャめがけて火球を放つ。

あれはメガフレアではないけど、何なんだろう。FFXでいうインパルスなのかなあ。

「す、凄い力……!!」

驚くダガー。

その火球は広範囲を爆破し、焼き尽くしていく。まるで炎の津波のように辺りを飲み込んでいった。

「あれで誰を助けるってんだ……」

私がぼやけば、申し訳なきそうにダガーがうつむく。

「あの力だつて取り戻さないといけないんだからね」

私の言葉にダガーは返事を返さないが、アレと対峙するってのは恐怖は覚えるだろうな。

その時、エーコがモグが何かに怯えているって言い、辺りを見渡す。

私たちも見渡してみても、これと言った変なものは見えない。見えるとすれば強力な召喚獣バハムートくらいですね。

「竜王バハムートは最強の召喚獣よークジヤが勝てるはず無いわ!」私の腕から抜け出してエーコに視線を合わせるダガー。

だけどエーコはモグの感じている何かに嫌な予感がしているみたい。

「バハムートに勝てるような召喚獣もいないっちゃいないだろうがね」

アレキサンダーを除いて。

刹那、上空に真つ黒な雲がかかる。

「皆ー上に何か……!!」

私が指さしたと同時にその黒雲からギョロリと目玉が覗いた。

そして広範囲に謎の光線を放ち、我々には届かなかったものにやら艦隊も大混乱に陥っているみたいだ。

「な、なんなのあれ……!」

エーコは胸元のモグを守ろうと胸を押さえていて、ダガーは目を見開いたまま固まっている。

見覚えがあるだろう、それを見た唯一の生き残りなのだから。

「なんか変ーバハムートが何か変な動きしてる!!」

私はわざとらしくバハムートに視線を移させ、そのバハムートはクジヤを狙っていたはずなのに、いつの間にかブラネの艦の前に移動していた。

その口からは赤い光が灯り始め――

「お母様ああああ!!」

バハムートの息吹により、艦は吹き飛ばされてしまった。

それから次々と残りのブラネの艦隊を破壊していく。

それを見ていたら、壊されたブラネの艦から脱出艇が出ているのが見えた。

ブラネ自体はもう助からないけど、焼き尽くされてたわけじゃ無い。とりあえずまだ生きてるのは確認出来たので胸をなで下ろす。

それにしてもゲームのなかでつかったメガフレアとかと全然違っ



て、ちよつと軽く使おうもんなら大地が壊れるわつてくらい半端ない力だ。

こんなのポンポン使っちゃダメだよホント。

「おい！逃げた脱出艇にまた向かつてるぞー！」

ジタンの言葉で「え？」って間の抜けた声が出た。

バハムートは去らず、一匹残らず消し去らんと言わんばかりに息吹を溜め始め、私は背筋が寒くなった。

原作通りじゃ無い、ちがう!!ブラネをここで殺させるわけにはいかない!!

「ジヨブチェンジ召喚術士！バハムートツ!!!殴り落とせツツ!!!」

咄嗟だった。

息吹が放たれる前にバハムートを召喚し、空から降下したバハムートが両手を組んでバハムートの背中に拳を叩き付けて海面に落とした。

その衝撃でバハムートの息吹は空へと放たれ、誰も傷つけることは無かった。

「ヴィエラ!」

驚く皆をよそに、私はバハムートに指令を出し続ける。

「クジャに対してインパルスで牽制！バハムートには肉弾と黒魔法で応戦を!!」

クジャめがけて光の球が飛んでいき、クジャは銀竜に掴まりその光を避ける。

その間に水面に落ちたバハムートの顔面に拳を叩き込んだ。

痛みでバハムートは吠えていて、それを黙らせるかのようにもう一発拳が入り、海へと沈んだ。

「インパルス牽制！」

すかさずインパルスでクジャの手が空かないように攻撃をし、そろそろこちらもチャージが貯まる頃だ。

「チャージ完了後、バハムートへメガフレアを放て!!」

言うと同時に力は溜まり、燃えさかるブラネの艦隊の延長線上にならない海岸に降り、バハムートは爪を大地に食い込ませ、背中のリ

グが回り始める。

「メガフレア、撃ええ!!」

そしてメガフレアは海面から出ようとしたバハムートに当たり、片翼をもいだ。

バハムートは吠え、そして光になって消えていく。

死んだわけでは無いが、逃げたに等しい。

あれくらいならばらく経てば元に戻るだろう。この世界の召喚獣の仕組みって分からないから、怪我したらそのままって事は無いよね？

心配ではあるが、インビンシブルからの光線が怖いのでさっさとバハムートを退かせないと。

「もう大丈夫です、危険です、急いでお戻りください!」

そう伝えればバハムートは空に向かって飛んでいき、魔方陣を突っ切って消えていった。

それを確認してから私はリュックの中身をぶちまけて頭からかぶり、クジャにバレないように隠れた。

「な、なにやっつてんだよ!」

「バレたくないの!!クジャが去ったら言っつて!!それまで私動けない!!こわい!!!」

本音をぶちまけてます。

角の付いた私を見たら、きつと私が術者だと分かるだろう。

今なら記憶にも残ってないただのケダモノくらいだろうから、そのままならばれない!!!

「ちよつと!さっきのあれは何!?バハムートって言っつてたけど、なんでバハムートが二体居るの!?!」

「古文書に描かれていた姿と異なっつていたわ!どういふことなの!?!」  
「ううううやめてよおお訊かないでええ」

「ヴィエラ!これ以上隠し事するつてのは流石にひどいと思っつぞ!」

「人には言えない事だつてあるんだよお、私は召喚士一族とかと全然関係ないのおおウエエン」

どうやっつて誤魔化せば良いか分からない。どうやっつて説明して

けば良いか分からない。

「……クジヤはどこかへ飛び去ったぞ、もう見えなくなつた」

サラマンダーがそう言い、私はリュックからゆっくりと顔を出した。

キラリと輝くエーコのような真つ白な角が私の額に生えていて、エーコは私とおんなじだと言った。

「……その、わたし……異世界から、きたんだ」

言うしかなくなつて、ぽつりと吐けば、サラマンダー以外が驚いた。

「……えっと、私の世界だと、召喚獣は祈り子様って呼ばれてて、その人たちの思いが形となった姿なの。だから、この世界の召喚獣と勝手が違つて……ヴィエラもこの世界にはいないし……」

「い、異世界つて、どういう……」

「迷い込んだんだよ私だつてまさか異世界に来るなんて思つてなかつたし、だったら楽しもうつて楽しんで……皆の力になりたくて頑張つてたけど……信用できないよね……ごめん」

皆に拒絶されそうで段々怖くなつてきてぼろぼろ泣いてしまう。

言わずに最後まで行こうと思つてたのに、隠しきれなかった。

「……異世界からきたなんて……ごめんさい、詮索ばかりして……」  
ダガーが謝り、そして「ずっと助けてくれていたのに」と呟いた。  
「お姉さんがどこから来たかなんてどうでもいいよ！お姉さんはいつも僕たちを助けてくれたじゃないか！」

ビビが駆け寄つて、泣かないでつて言うから、もつと涙腺が崩壊してしまつてビビにすがるように泣いてしまった。

「そうだよな……ヴィエラがどこから来たかなんて聞く意味なかったはずなのに……ゴメン」

「クジヤの一味とかつて思えたんでしょ……しかたないよ……」

鼻声で言えば、皆に謝られてしまう。

なんかホントゴメン。

「何言つてんだ……信用なんてどうでも良いだろ、力でねじ伏せて従えりや良いだけだろう」

「サラマンダーさんそれは強引すぎます……」

彼の一言で私はアハハって笑えてしまった。

もうこっから召喚獣を出し惜しむことは無いし、流石にインビンシブルも去つただろう。警戒しつつ、もう一度バハムートを呼んだ。

「バハムート、周辺に敵が居ないか確認してください」

こちらに降りてくる前に上空から確認してもらい、インビンシブルもクジャも居なかった。

それから側に降りてもらい、ズズンと重たい音と共にバハムートは腕を組んだ。

「これが……バハムート？」

「この世界のバハムートと比べたら結構小さいけど、威力は申し分ないよ。融通も利くし」

近寄り、頭を下げ、そしてブラネの乗った脱出艇のところまで運んで欲しいとお願いした。

「乗せてもらいましょう、この人数なら腕に抱えてもらえるよ」

「うえっマジかよ」

「文句言わないで、下まで降りるの大変でしょ」

と言うことで腕に抱えられて滑空している。

「カーゴシップの時の召喚獣じゃダメなの？」

「ヴァルフアールは腕が無いから抱えてつての無理だし、背中に乗せるには多過ぎんのよダガーさん」

そして岸に着いていた脱出艇に到着して、バハムートには帰つてもらった。

脱出艇には虫の息のようなボロボロになったブラネ女王が乗っていて、運び出してケアルをかけるが、もうそんなものは効果がなかった。

今はそつとしておこうと、ダガーをブラネ女王と二人きりにしてあげる。

しばらく見守っていたけど、ダガーがわんわん泣き出したから、ブラネ女王は死んだんだと理解できた。

それからブラネ女王を艦へと運び、我々はアレクサンドリアに戻る

ことになった。

誰もダガーには声をかけることが出来ず、ほぼ誰も喋らない。沈黙だけが支配した。

私は異世界から来たことを皆に話したことで、皆からのわだかまりというのは無くなったようだった。

これからクジャとの戦いが始まっていく。

下手に改変しないよう彼らを見守りながら、私も生きていこう。

## アレクサンドリア

アレクサンドリアに到着し、ブラネ女王の逝去が城中で騒ぎになり、トット先生が内政を一時立て直してくれた。

我々は城の者ではないのでアレクサンドリア城下町にて待機になり、噂では怪我をしたスタイナー、ベアトリクスとも合流したようで、女王の国葬が行われたのであった。

アレクサンドリアの宿屋でビビとエーコと一緒に過ごしているけど、ジタンやサラマンダーは一緒に無いからよく分からない。

と、言いたいのだが、ジタンだけはパブで一人飲んだくれになってふてくされているようだった。

そりゃ、日に日に新聞とかで情報がやってきて、ガーネットが新女王になられるとあれば、もう我々は気軽に声をかけて言い存在では無くなる。

ダガーでは無く、ガーネットになるのだから。

惚れた女の子を忘れられなくて、だけど相手が女王となれば流石に無理だ。

だからジタンは酒場で腐っていたのである。

「ボク、お散歩してくるね」

「エーコも行ってくる!」

「街の外には出ないでねえ」

二人の保護者代わりになった気分で居る私。

アレクサンドリアに戻ってからもう一週間だ。時が流れるのは早い。

私も暇なので、散歩することにする。

現在の私のジョブは慣れ親しんだ精霊使い。一番これが安定よね。

「ヴィエラ」

声をかけられて、振り向けばサラマンダーさんだった。

声をかけてくるとは思わなかったな。

「久々だね、元気だった?」

「することもねえから退屈していたとこだ。運動がてら、手合わせ願いたい」

「おっけー。街の中は流石にまずいから郊外に行こうか」

二人で街の外に出て、広いところで足を止める。

「ここなら思いっきり戦えるだろう。」

「アレクサンドリアに来てから、本当に何もしてなかったわけじゃねえ。鍛錬は怠らなかつたつもりだ」

サラマンダーさんはそう言つて拳を握りしめ、戦闘態勢に入る。

この流れだと武器は無しつて感じかな。

まあ、レベルの差もあるから私も武器無しの方がハンデになるかもね。

「そちらからどうぞ」

私の言葉でサラマンダーさんはダツシユで詰め寄り、私を掴もうと手を伸ばす。

殴るんじゃ無くてまず捕まえてつてことか。

とりあえずその手の横へ一歩ずれて避けて、サラマンダーさんとの距離が一気に近付くが、両手でポンと押して返してあげる。

すると彼は横蹴りをしようとして身体を反らせ、ぴよんと垂直に飛んで避けてサラマンダーさんの肩に膝をついて乗った。

「ちよこまかと……！」

私の腕を掴んでそのまま地面に叩き付けようとしたが、私は身体をしならせて向きを変えて両足で着地し、その衝撃を緩和させる。

私の腕はまだ掴まれてたままで、そのままサラマンダーさんは手に気を溜めて殴りかかった。

「グラビテ拳」

何やらヤバそうなものだが、片手でそれを受け止めたら重くてまともに入ってしまったって地面が割れるほどめり込んだ。

痛いけど、致命傷では無い。HPや防御が高いからたいした怪我になつてないのだろう。

それに、これがナツクルだったら貫通してたわ。

「っ痛」

「……っ痛い程度なのか……!」

もう一発グラビデ拳をしようと拳をたたき込んできたけど、もう一度素直に受ける気は無いので蹴りでその拳を弾き、そしてもう片方の脚でサラマンダーさんの顔を蹴り飛ばした。

その衝撃でようやく手を離し、追い打ちにそのまま上がった脚でサラマンダーさんの腹へかかと落としを食らわせて地面に沈んでもらう。

彼の腹を脚で踏んづけたまま見下ろせば、ゲホツと血を吐いていたから流石にこれ以上はヤバいと思つて「終わり終わり!」と彼を抱き起こした。

「ごめんポーション飲む?意識ある?」

おい!と呼びかければうつすらと目を開けて、震える手でポーションを受け取り口に含んだ。

よかった。

抱えられたまま私に視線を移し、「渾身の一撃だったんだがな」と零した。

「へっへっへ、まだまだ修行が足りませんねえ」

私がいたずらげに笑うとサラマンダーは身を起こし、自分の拳を握りしめてから立ち上がった。

「どこいくの?」

「モンスター狩りだ、少しでもアンタに近付くためにな」

「この辺の敵は強くないからあんまり良い経験値にはならないかもよ?」

「無いよりは良い」

そしてサラマンダーさんは近くの森へと進んでいった。

ポーションで回復したといえど、まだ怪我が完治したわけじゃ無い。心配ではあるが、彼の技は自己回復のものがいくつあつたはずだから大丈夫だろう。

私は砂埃で汚れた服をはたいてから、久々にホワイトフレイムを唱えて自身を回復させる。

結構痛かつたよサラマンダーさん……



まあ、強くなろうとするのは悪くないからそのままそつとしておう。

私は街に戻り、ジタンは今日もいるのかな？と酒場を覗いた。

そしたらタンタラスのメンバーも集まっっていて、久しぶりの再会に入り口から「おっひさー！」って挨拶した。

「ヴェエラー！」

「ヴェエラさん」

「久しぶりズラー！」

ブランクさん、マーカスさん、シナさんがにこやかに手を振り、初対面となったルビイさんが「誰？」と首をかしげたので、丁寧に自己紹介をすることに。

「初めまして麗しのお嬢さん、私はヴェエラ。ちよつと色々ありましてプリマビスタに乗ってしまい、それから皆さんと仲良くなったのです」

プリマビスタでルビイは姫様誘拐大作戦のあのことを思い出して納得する。

あの後タンタラスのメンバーは魔の森を抜けてえっちらおっちらと色々あったからね。

リンドブルムにも戻れず置いてけぼりをくらったルビイはアレキサンドリアで頑張つて生きていたというのである。

「丁寧にどうも、ウチはルビイ。最近アレクサンドリアで小劇場をつくったんよ、暇があったら観に来てな！」

「それはそれは是非とも！」

「おいルビイ、そいつ結構猫かぶりだから気をつけた方が良いぜ」

ブランクさんがそんなこと言うんで、びよんと跳んで彼の横に降り立ち、ニヤニヤしながら腕に絡みついた。

「猫なんてかぶつてないぴょーん、ウサギかぶってるんだぴょーん。そう言えばアレクサンドリア地下での約束がまだだったね！ただいまのギューッ！」

そう言つてブランクさんに抱き付いてほっぺにスリスリしたら慌て出し、だけど平静を装つて私の背中を撫でた。

「おっおいーし、しかたねえな」

それを見てたルビイはニタリと微笑み、「なんや、モテへんと思つたのにちゃんといえるんやねえ」と言つて、「オレはいつだつてモテモテだつての!」と返しているブランクさんが面白くて笑えた。

「それにしても、ジタンは相変わらずへこんでんのね」

へこんでるといふか、ふて腐れてるといふか。

ブランクさんから離れてジタンを見つめるが、目の前のグラスとにらめっこして何にも言つてくれない。

ま、後でどうにかなるさね。

「なあなあヴィエラ、ブランクのどこがええの?」

ルビイはジタンを置いといて私に質問し、私はにこやかに答える。

「ウブなところがカワイイよね!!」

その瞬間隣ですつころんでるブランクさんと、それを聞いたルビイは大笑いであつた。

「アンタおもしろいわ! ブランククールぶってるけど全然クールじゃないし正直センス悪いし」

「何言つてるのそこひつくるめてカワイイんですよお」

「……………カワ……………イイ」

まさか自分はカツコイイポジだと思つていたのに、カワイイとの発言に男としてのプライドにひびが入つたのだろう……いや、うん。すまん、かわいいんだわ。

女子二人でわいのわいのやっていたら、シナが「小劇場観に行きたいずら!」つて言つてくれて、タンタラスそろつて皆で行くことに。

でもジタンはそんな気分じゃ無いだろうから無反応であつた。

皆で酒場から出て行き、その時ビビが居てブランクさんとぶつかつてしまつてビビがコケてしまう。

ブランクさんは悪いなと言つて手を差し伸べ立たせてあげ、久しぶりの再会にブランクさんは微笑んだ。

「城の地下で会つたぶりだったな、元気だったか?」

「う、うん、色々あつたけど、元気にしてるよ。お姉さんも一緒だし」

「そうそう、私とビビと、あともう一人可愛い女のこと一緒に宿を取つ

てるんだー」

「何だそうだったのか、オレはお前達を逃がした後にスタイナーって  
いう鎧のおっさんとフライヤってネズミの女、あと女將軍の……」

名前が出てこなかったようでブランクさんの言葉が止まり、その続  
きを先に行っていたはずのマーカスさんが「ベアトリクスツス」って  
教えてくれた。

「そうそう、そのベアトリクス將軍もボロボロの状態で、そいつらを抱  
えて城から抜け出すのが大変で……」

そう経緯を話してくれているが、マーカスさんはちよつと焦ってい  
る顔をしていた。

「兄貴、早く行かないとルビイが怒ってしまっすよ……」

「げっ……そりやあやばい……」

「ついでだからビビも劇を観に行こうよ、ルビイには途中で友達に  
会って誘ってたんだって言い訳するよ」

と、いうことでビビも連れて小劇場へ行ってみたら、ルビイはプン  
プンと怒っていて、背中を向けた状態で「ウチが時間にルーズなのは  
嫌いやのしつとるやる!!いつまでウチを待たせたら気が済むんか聞  
かせてもらおやないのん!」と怒って振り向き、先頭に立ってた私は  
「大変申し訳ありません。ここまでへの道の最中、劇が好きで友人と  
再会してしまい、共に鑑賞しにいかないと誘っておりました。ル  
ビイ様に断りもなく、お待たせしたこと心よりお詫び申し上げます」  
と言ってピシッと日本式に角度もしつかりした礼をしたら、ルビイ  
2、3歩退いていた。

「ヴィ、ヴィエラそんな謝らんでもええんよ!ウチそんな怒ってない  
ねん!な!!お友達も連れて来てくれるなんて嬉しいわあ!ありが  
とー!」

だがそのにこやかなルビイの表情は一変し、私とビビの後ろにいた  
ブランクに向かれていた。

「ブランクー!アンタは後ろでコソコソ隠れてんの見えてるで!!後で話  
があるからな!!!」

ルビイには頭が上がらないタンタラスのメンバーであった。

小劇場でのお芝居を観ながら、ルビイの演技力が素晴らしいと感じた。

あのプリマビスタでのお芝居も、皆上手かったなあ、なんて、そんなに時間が経っていないのに何だか懐かしい気分になってしまった。

「あのお姉さんキレイだね、ビビ」  
「うん」

私はグラスのお酒を少し喉に流して、彼女を見つめたのだった。

劇が終わり、ルビイにキレイだったわと伝えたら、嬉しそうに自分の頬を包み込んでいた。

「ルビイは歌は歌える？得意？」

「多分歌えると思うで？」

もしかしたら一風変わるオペラのようなミュージカルのようなものも出来るかもしれないと思い、その話をしたら、ルビイは目を輝かせていた。

「なんやそれ！面白そうやね!!」

「私は劇をやっていたことは無いけど、観るのは好きだったから……ちよつとまねられるかな？」

学生の頃の学芸会みたいなことや、デイ○ニーのあれとか。

紙を借りて台詞と歌を書き出し、脳内で映画を再生して、試しに舞台に立って披露してみる。

「ええやん！初めて見る劇や！」

「脚本は無いから私が書くくらいしか無いけど、どうせだったらオリジナルで作った方が楽しいかもしれないね」

オリジナルって言うが私は私の世界の物語を持つてくるのでぱくりデスけど。

「ヴィエラ書けへん？」

「歌も……ストーリーも多分書ける」

と言うことで私はこの小劇場でお仕事が出来てしまった。

さらさらと文字を書いているが、それを見たブランクさんが止めた。

「……文字が読めないんだが、何語だ？」

日本語で書いていました。と言うか日本語しか書けません。

この世界の文字は読めるのだけど、書けないという変なことになっております。

「なんてこった!!口答でストーリーを語るからブランクさん書いて！」

「ええー！何でオレが!!」

「ブランク……？」

ルビイの威圧でお仕事仲間になりました。

で、ジタンがあんな感じになっているから、アラジンモチーフに劇を作ることにした。

「へえ願いを叶えてくれる魔法のランプ、ねえ。面白そうやね」

「3回擦れば中から魔神が出てきて、3つ願いを叶えてくれるの。そのランプとはある洞窟の奥深くに隠されていて、国の悪い大臣が盗賊に盗ってくるように依頼をする……」

と、箇条書きのように物語を話していき、最後、盗賊とお姫様が結ばれるって言う話になり、ブランクさんは「ジタンもそうなりや良いがな」とぼやいた。

だがこの世界に居た悪い大臣……というか女王はもう死んでしまったからね。

「まあ、こちらは所詮おとぎ話だから」

と色々やっているうちに夜になり、ビビには先に帰ってもらい、私はそのままストーリーを完成させ、今度は台詞まわし、そして途中の歌もやったりして、いつの間にか朝になってしまっていた。

「こんどは、衣装をつくらんと、な！」

「ルビイは是非ともお姫様で……」

と、言うところで二人で意識を飛ばしてしまったとき。

いろいろと話を煮詰め、そこから歌やダンス、細かなところはルビーに任せることにした。

私は正直そろそろこの空いている時間でレベル上げに行きたいなと思っていたのだった。

サラマンダーさんとの戦いで、手加減していた&甘く見ていたといえど、思ったよりも追い込まれていたからね。

もっとレベルの差を上げて武器だけで敵を倒せるくらいにならないと行けないから、今の状態だとそろそろ苦戦が始まってしまいうだろう。

「ええ、どこか行くん？」

「ギザマルークの洞窟の上に居るヤバいドラゴン狩りでもしようと思ってる」

この大陸で一番強いのは恐らくグランドドラゴンだろう。

前はセージになり、ギガフレアで無理矢理焼き尽くしたが、さて今は精霊使いでどこまで出来るだろうか。

「ドラゴン狩り!?大丈夫なのかよ……」

心配そうに見てくるブランクさんだけど、じゃあ手合わせする?と言ったら首を振っていた。

なんとなくだけど私が強いのは感じ取っていたらしい。

「ダガーが新女王になるまでまだ時間があるから、それまでには戻るねー」

私はそう言って劇場を出て、途中で会ったエーコにも女王誕生のときには戻るーって伝えてこっそりとアレクサンドリアの地下に侵入。

それからガルガントを使ってトレノを過ぎ、そしてピナツクルロックスまで出る。

今回は追いかけていたわけじゃないので、穴の出口で止めてもらい、ガルガントは後進して戻っていった。

ピナツクルロックスからリンドブルムの城に入り、そして地竜の門を出てギザマルークの洞窟にやってきた。

あの時とは違い、もうネズミ族の死体は無かった。

モンスターだけは残っているのでレイピアのさびにしたり、それからモーグリ達の巢になっている部屋にやってくれば、ここで結婚式を挙げていたモーグリ達の子供が走り回っていた。

「やあ、いつかのー!こんなところでどうしたんだい?」

モーグリが声をかけてきたので私も「久しぶり」と手を振った。

上のドラゴン狩りに来たと言えば真つ青になっていて、「以前も狩ったから大丈夫ー」といって上から伸びてるツタを伝って上へと登っていく。

森の中に出て、ガルードと出くわすがレイピアでたたき切れる。コイツはそんなに強くない。

森から出れば、大きな足音と共にグラントドラゴンが歩いている。足音の数からして、一匹だけだ。

私はすかさず森から飛び出し、グラントドラゴンの首を狙う。

レイピアはグラントドラゴンの首をえぐるが、切り飛ばすことは出来ないくらい硬かった。

レベルの差ですね。

怒ったグラントドラゴンは爪で切り裂こうとしてきたが、こちらの方が俊敏なので全て避けるが、そのままサンダガを落としてきた。

範囲が広いから飛び退いてからすぐに離れたが、少し電撃に当たり左腕がしびれた。

しびれた程度で良かった。

「ファイアウィップ!!」

炎の輪っかでグラントドラゴンを包み込めば、輪は絡まりグラントドラゴンの攻撃を封じる。

この世界では無いけど、ドンアクっていう攻撃不可という状態異常を付与できた。

そしてその隙に先ほどえぐった首を狙い、何度も何度もレイピアで切り刻む。

暴れるが攻撃が出来ないグラントドラゴンは雄叫びを上げるだけでなすがままである。

ついにその首は中程まで切り刻まれ、流石にグラントドラゴンは死んだ。

経験値が入ってくる感覚があり、自分のレベルもぐんと入り40を突破した。

だけどこの感じならまだ狩れるから、グラントドラゴンを見つけてはとにかく攻撃をした。

ファイアウィップのドンアクが結構効く、逃げ回るだけのグランドドラゴンの翼を切り落として首を刻んで絶命させて、5体くらいは殺した。

単体での討伐故かレベルは50台にまで到達し、満足いくほど強くなったはず。

50台だなんてマジで終盤系のレベルですね……

今ならグランドドラゴンの首も、全力でなら切り飛ばせる。

めちやくちや強くなったわ、私。

すでに日も落ちてしまつて、辺りは暗くなつてしまう。グランドドラゴンをそのまま捨て置くのももったいないので、牙やら翼をもいで四次元バッグに突っ込んで戻ってきた。

「大丈夫だつたクポ!？」

「めちやくちやたくさん狩つてきたわ。ひひひー」

「す、凄いクポね……」

そしてモーグリ達に別れを告げてギザマルークの洞窟からリンドブルムへと戻つた。

本当なら飛空艇に乗せてもらつてアレクサンドリアに戻りたかつたのだが、霧が動力である飛空艇達は動かすことが出来なくなつてしまつて、今では街への行き来が大変であつた。

仕方ないのでリンドブルムの城からまたピナツクルロックスに行き、ガルガン草でガルガントをおびき寄せてアレクサンドリアへと向かうのであつた。

移動だけで時間がかかり、アレクサンドリアの地下に着いたことは朝になつてしまつていた。

ふぬうあ、とあくびを零しながら城内を歩いていたら、エーコを城からつまみ出そうとしているスタイナーさんと再会した。

「ヴィエラ殿!」

「お久しぶりー、元気そうね。なんでエーコつまんでんの?」

つままれたままのエーコはジタバタして、離してよおと嘆いている。



「無断で城内に入り込んだ挙げ句、騒ぎ立てるからなのである」  
そして入り口にきてポイツとエーゴを捨てる。

扱いが雑ねえ。

「きいー！レディに対して随分と失礼じゃない！」

「それ以上騒ぐと牢屋にぶち込むぞ」

両者がにらみ合う中、ジタン、ビビ、フライヤ、サラマンダーも騒ぎを聞きつけたのかやってきた。

「あらジタン、テーブルと同化するくらい潰れてたのに、元気になった？」

「随分嫌みがありそうな言い方だなヴィエラ……」

ジタンは苦笑いしていたが、スタイナーはガチャガチャ音を立てながら待たんか！と声を出した。

「悪いがお主達！ここは城内、お前達の来る場所では無い!!とっと立ち去れ！」

「今まで仲間だったのにスタイナーさん冷たい」

「感謝はしている。だがそれはそれ、これはこれ、である！」

やっぱりまだ頭硬いですね。

「だけど、ビビがスタイナーのおじちゃん、と声をかければ、スタイナーさんは態度を変えた。」

ビビには対等なんだよなあ。

「僕たち、ダガーおねえちゃんに会いに来ただけど……」

「姫様でありますか？うーむ……わかりました、ビビ殿の頼みならなんとかいたしましょう！」

ビビにはチョロいおっさん。

こうしてそこで待っておれ！と言われてからスタイナーさんは中へと走って行き、しばらくしたら見時間時間がが謁見を許してくれた。

その場所まで案内され、サラマンダーさんは別に会う気も無かったから、影で立っている。

そして二階の通路からベアトリクスと共にドレス姿のダガーが顔を出してくれて、キレイになった彼女に何人かが見惚れたのだった。

「みんな、よく来てくれましたね」

「わあ……ダガー、キレイ」

エーコはうつとりしていて、ビビもキレイだよ！とにこやかだった。フライヤも見事なものじゃと微笑んでいて、私も美しさが増したね。と言っておいた。

でもジタンは何も言わなくて、フライヤに何か言うことはないのか？と言われていたが、オレは、いい。って何も言わなかった。

ダガーが一番欲しかったのはジタンの言葉なのに、ジタンは何も言わず、彼女は寂しそうに目を伏せた。

「まってダガー！」

エーコは走り出して階段を登り、ダガーの側へと向かう。

「私たちもう会えなくなっちゃうの!？」

「いいえ、そんなことはありませんわ。でも、今までのように世界を自由に歩き回る事は出来なくなると思いますけど……」

口調も、王族の口調になっていて、ダガーではなくガーネットになったなあつて、ちよつと壁を感じた。

私ですらそう思うのに、彼女に惚れているジタンからしたら、まるで月を見ているかのように、手に入れることの出来ない相手なんだろう。

「あなたたちと一緒に冒険した広い大地のことは、一生忘れません」

それからガーネットは召喚士の絆の証として、持っていた宝珠を二人で分けようと言うことになり、エーコはそれを受け取る。そしてガーネット姫は去って行った。

去って行ったそのドアを見つめたままジタンは止まっていて、ビビに何で何も言わなかったのかと聞かれ、だけどジタンも感情に揺さぶられて辛そうな顔をしていた。

「オレの言葉が何も出てこなかったんだよ……！ダガーに会ったら離そうと思ってた言葉があったけど、そんなの全部嘘だった！そんなのオレの言葉じゃなかったんだ！」

ふて腐れるように座り込んで、私はかける言葉も見つからないのでただその丸めた背中を見つめる。

初めての本気の恋。だからこそ、やるせないんだろうねえ。

それからプルート隊にも早々に去るように言われて城から追い出され、私はぶらぶらと夜の城下町を歩いている。皆酒屋に入っているか、家にもつているかで誰も外には居なくて、私のヒールの音だけが木霊している。

こつん、こつんて、こういう音は好きなんだよね。

しばらく歩いているとサラマンダーさんが隣に並んできた。

「あれサラマンダーさんもお散歩？」

「お前、また強くなつたな？」

「え？手合わせしてないのに分かる？正直上げつないくらい強いよ？」

「自分で言うか？」

「だってホントに強いでしょー？」

ニヒヒって笑ったら、サラマンダーさんが3メートルくらいバックステップして離れ、戦闘態勢に入る。

ここでやつても……まあ、うん、いいか。誰も居ないし。

「かなりレベルの差を出しちゃったから、やめた方が良いよー」

と、私も戦闘態勢をとったらサラマンダーさんは地を蹴った。

まず私の足を払おうとしてきて、ぴよんとその場で飛べば、腕を掴まれてグラビデ拳が顔に迫る。

だけどその拳を額で受け止め、むしろ頭突きのように返して弾き、そして私は掴んでいるサラマンダーさんの手を握りしめれば、苦悶の表情でサラマンダーさんは手を離す。

でもその離れた手を握りしめて胸へとグラビデ拳をたたき込むが、地面が割れ、私は耐えて立っている。

「なん……だと!？」

「胸触るとかえつちー」

全然痛くないのである。レベルの差が酷すぎる。

もう一度拳をたたき込むようになってくるからその手を握りしめ、では残った拳で殴ろうとしてきたがそれも私の手によって止められてしまふ。

「なんでそんなに力をつけてきてんだ……!!」

「とある山にいるすんごいドラゴンをレイピアでたたき切つてたら強くなれたんだよねえ……っへっへっへ」

取っ組み合いの中、私はどんどん彼を後ろへと下げていく。

踏ん張っているが、靴がズズつとすれていく音が響き渡る。

「く……そ……!!」

「ほーらもう後ろは壁ですわよー?おほほほほ」

壁まで追い込み、両手を壁に縫い付けるように押しつけて、壁ドンしてる感じになつてる。

「こない女に迫られて嬉しいぴょん?」

「化け物みたいな女は願い下げだ……つく!」

腕がダメなら膝でと、膝蹴りを私の顎にクリーンヒットさせてきたけれども、その衝撃で私が上を向いてニンマリ顔で視線を戻せば参つたと降参された。

「ふふふ。女に迫られるのも中々悪くないでしょう?」

「嫌な思い出になつたぜ」

掴まれていた手は結構痛かつたらしく、ブンブンと振つていて、ゴメンよと言えば何も言わなかった。

まあ、挑発してきたの彼だし。

……との時、ジャリ、石が擦れる音がした。

サラマンダーさんと私は二人でその方向を見たら、ブランクさんとマーカスさんがいて、今の戦いを見ていたらしい。

「ヴィ、ヴィエラ……その男……は」

ブランクさんが動揺してる。すんごい動揺してる。

そりやお手々つないで押しまくって壁ドンかましてりやそうか。

「彼は私の弟子なのだー」

「何も教えることもしねえで師匠面か?」

「まあ手合わせをよくやってあげててさ、なににない?ブランクさんったら焼き餅い?お手々いっぱい繋いじやおおやおウへへへ」

シユパツとブランクさんに詰め寄り彼の手を恋人つなぎで握り、そしてぐいぐい後ろに下げていく。

ブランクさんは「ちよ、まてつて、おい！」と慌てているけど壁に付けられて、サラマンダーさんと違って身長差は大きくないから、私からの壁ドンが威圧があるのだろう。

「力強……!?ま、まてヴィエラ！ほ、ほら、別にオレは妬いてた訳じゃ」「そんなこと言わないでぴよん！あたしと、こうやって、スキマゼロになりたかったんでシヨ？」

ぎゅううつと身体をくつつけて顔まで近づけて耳元で「ブランクさんったらかわいいなあ……」と、吐息と共に言ったら情けなく「ほわああああ」って言つててめちやくちや可愛かった。

「おい、あんまりいじめてやんな」

そこでサラマンダーさんに止められ、「てへ！」って言ったら引かれた。引くな。

「そういえばブランクさん達は何してんの？」

夜の街を徘徊しているって何なんだろうか。

「ジタンが少しでも安心できる様に、オレたちタンタラスがこの街の平和を守ろうって事で見回りをしているんだ。あの落ち込みよう見たら情けなくつてな」

そう言ってるけど、かなり心配しているんだよね。

「ブランクさんやさしーヴィエラしびれちゃうー！」

「つお、おう、とりあえず今は忙しいから、またな」

そしてブランクさんはマークスさんと二人で走って行った。

「ヴィエラ、アイツはお前の男なのか？」

「ううん？違うよ？可愛いなあって思ってる」

そしたらサラマンダーさんは無言になり、そのまま去って行った。

恐らくブランクさんを哀れんでいたのかもしれない。

それからちよつと歩き回ってから酒場に戻れば、ビビ、エーゴ、フライヤ、サラマンダーさん、そしてトット先生とジタンがその場に居た。

トレノでカードゲーム大会があるから、トレノに行かないかという話になり、久しぶりのトレノに顔を出したかったので、みんなで地下のガルガントを使ってトレノへといくのであった。

トレノ〜アレクサンダー〜…

トレノに着いた我々は各々行動するようでぞろぞろとトット先生のお宅から離れていく。

ビビもこのタイミングで一度クワン洞に顔を出すんだっけな。

私も散歩がてらびよんと建物を跳んでいき、街を見下ろす。

リンドブルム、アレクサンドリア、ブルメシア三国がボロボロになったといえど、この街の活気は変わらない。

いつも通り貴族が闊歩し、煌びやかに宝石達を輝かせている。

それを眺めながら屋根を渡り歩き、ふと脚を止めた。

そう言えばこの酒屋でギルガメツシュとごはん食べたなあ、何て思い出しながらふふつと笑ったら、息を乱して走り、そして品物が入っている木箱の影に身を潜めた何者かがいた。……ギルガメツシュだ。何やってんだろ？と走ってきた方向を見たら、クイナさんが居た。

「見失ったアル……！美味しいものを食べ損なったアル!!!お腹すいたアル……」

クイナさんはそう言ってもと来た道を引き返していき、そして水面をのぞき込んで数秒、飛び込んでいった。

南無………

「はあ……っは、死ぬかと思っただぜ……」

ギルガメツシュはクイナさんが居なくなっただことを確認して出てきたが、その隣に私が上から降りてポンと肩を叩いたら「ぎやああああ!!」って叫んで飛び上がった。

「あはははは！酷い怯えようじゃん!!」

「あれ……お前確か……ヴィエラだったな？びっくりさせんなよー！」

寿命縮んだぜ……て胸に手を当ててるから更に笑った。

「久しぶりに会ったことだし、ちよつと飲も！もちろんおごるからー」

「やったぜー」

席について注文し、私は肉の串焼きを食べておいしさににっこり微

笑んだ。

クイナさんが作った料理も美味しいけどこっちも美味しいー！

「ヴィエラ聞いてくれよ、この街にあの賞金首の焰色のサラマンダーがいてよ。それがガキ連れてたんだぜ！アイツそんな趣味があったのかって驚いちまったんだ」

ガキを連れている。恐らくエーコのことだろう。

「んで、その子を誘拐してサラマンダーさんをおびき出して賞金もらおうかなって思ってたのかな？」

続けて出された野菜のグリルにフォークを刺しながらモグモグしている、ギルガメツシユはそのガキに護衛がいたんだ……さっきの白くてデカイやつ……と嘆いていて、ドンマイと言ってお酒を勧めた。

「そういうときはパーツと飲んで忘れよう！キミは運が良いよ？だってただで飲ませてもらってるから！」

「そうだ！オレは運が良い!!」

そしてジョッキの酒をぐいーつと飲んでニツコリ微笑んだ。

「オヤジー！あと三杯追加！」

そしてぐいぐい飲んでいくギルガメツシユ。

これ初めて会ったときもこうやって飲んで潰れちゃったよな。今回は私、またアレクサンドリアに戻らなきゃ行けないから、彼の面倒を見ている訳にはいかないんだよね。

私の分は食べたし、そろそろおいとましますか。

「ごちそうさま。5千ギル置いておくから、払っておいて」

「なんでえ、もう行くのかー」

ちよつと出来上がってるギルガメツシユさんは4本の手全てにジョッキを握っていて、カメラがあれば撮りたいくらいふ抜けた絵にふふつと笑みがこぼれた。

「まだやることあるからね、また機会があったら会おう」

多分……ダゲレオとかくらいかなあ

「じゃあねギルくん」

「おー」

と、外に出たらサラマンダーさんと出くわした。

飲みに来たって感じではなさそう。

「お前でもこんな飲み屋には入るんだな」

「んん？つまりもう少し小洒落たトコで飲んでるイメージって事で良いのかな？」

「ごろつき共が来るような店だからな」

「そんなごろつき友達と飲んでたのー」

「お前に友達が居たのか……」

「サラマンダーさん手合わせしたいのかな？ん？」

「今はやめておこう」

今のは彼なりの冗談だったのかなあ。

サラマンダーさんはそのままどこかに歩き去って行き、私は酔いを覚まそうとカードスタジアムの屋根の上でのんびり風に当たった。

スタジアムを出入りしている人を見ると、ジタンも参加しているのか何度も出入りしていた。

すると大きなブリ虫を連れた船乗りエリンが現れ、外野がブリ虫気持ち悪いといっついて数歩下がっていた。

私はぴよんと飛び降り、久しぶりに大公へと挨拶した。

「こんばんは、今宵は良い風が吹きますね。さあ勝敗はいかに」

「おおヴェイエラではないか、まったく、この姿ではかつこがつかんブリ！」

ブリブリブリブリと文句を垂れながらスタジアムに入っていく、そして戦いは始まる。

ジタンは決勝まで上り詰めていたようで、ブリ虫マスターと激しいカードの攻防の末、惜しくも負けてしまったのであった。

「ジタンドンマイ。あんまりカードゲームやってなかったからイイの集まってなかったもんね」

負けたジタンに言えば、ブリ虫マスターに少し引いていた。

うん、カード全部ブリ虫って大分やばいよね。

と、引き気味に何でシド大公がここに居るのか聞いてみたら、彼がチャンピオンだったらしい。



自分の姿がブリ虫なのになぜカードまでブリ虫デッキにしてしまったんだ……

「実を言うと大会に出る以外にも、他にもちよつとテストしたかったことがあったブリ。新型の飛空艇、ヒルダガルデ2号の試運転ブリ」  
「霧が無くても飛べるって言う、あの新型飛空艇か？」

元々シド大公は霧ではない動力のものを求めていて、ヒルダガルデ1号も同じように霧機関を使わない最新型だったのだが……嫁さんを怒らせて乗って出て行かれてしまったと言う悲しいお話……

「そうブリ、まだ速度を上げることが出来ないブリが、何とかここまで来られたブリ」

「何で今頃そんなテストを……」

戦争を引き起こしていたブラネは死んだし、もう戦争は終わったから、新型の飛空艇を急いで作らなくても良いのでは？とジタンは言うが、シド大公は何か嫌な予感がしているらしく、気が抜けないらしい。気が抜けないけどカードゲームはしているというのはツツコまな  
い。

「心配要らねえさ、ご立派なガーネット女王様が何とかしてくれんだろ？」

何だか嫌みつたらしく言うジタンをジロリと睨めば、ぷいっとそっぽを向かれた。

なんだかんだ、まだまだジタンは子供だもんな。

と、その時エーコが「たいへんたいへん！」と慌てて走ってきた。

トレノのモーグリから、アレクサンドリアが襲撃されている話を聞いたらしく、急いで助けに行こうと言うことになった。

どうやって伝わったのかは知らないけど、モグネットで大変だ！って手紙が届いて知らせてくれたのかもしれない。

私たちは急いでアレクサンドリアに向かうため、街に散らばってた仲間達を収集し、ヒルダガルデ2号に乗り込んだ。

ヒルダガルデ2号はふらふらとした動きで空へと浮かび上がり、ガルガントのゴンドラのようになんだか不安になる揺れと、時々鳴る軋みや異音が何だか怖い。

「おいおい……この船大丈夫なのかよ……」

皆も不安になりつつ、だけどガルガントで行くよりも早いとは思ってから乗っているのだけれども……これは怖い。

「ヴィエラ、バハムート呼んでくれよ……」

「いやこの人数はちよつと……。あとジョブチエンジンに制約があつて、24時間経たないと召喚士にはなれないんだ。時間的にはあと……3時間くらいかも」

「そんなに待つてられないぜ」

すると私とジタンの会話を聞いていたシド大公が、バハムートを呼べるのか!と驚いていたが、召喚士の力をちよつと借りられるだけだよと言つといた。

シド大公が詳細を聞こうとするも船は更にガタガタと揺れ始め、船員に色々指示していて忙しくなってしまう。

そうしている間にビビの表情も段々と悪くなっていき、高いところが苦手だというのに船が揺れまくっていて船酔いしてしまったようだ。

「ボク……何だか、気分が悪く……なってきた……」

ふらふらしながら我々のいる船首の方へ歩いてきたけど、倒れそうである……

そしたらサラマンダーさんが船室で休んでくるといって優しい気遣いを見せてくれて、私はサラマンダーさんはやっぱり根は悪い人じゃないんだなって思ったのだった。

「う……うん。そうするよ……」

ふらふらしながら船室に向かおうとしたその時、エーコの横を通ろうとしたらエーコから何か光が漏れた。

「エーコ?なんか光らなかつた?」

ビビは首をかしげ、エーコはハツとしてダガーの声が出たと呟き、そして船は限界が近いのか更に大きく揺れ始めた。

エーコはそんなこと気にしないで船首まで走って行き、聖なる審判の時が来た!と船から飛び降りて行ってしまった。

がたつく船に気を取られていて、いつの間にかアレクサンドリア城

の真上にいたことに気が付いた。

ジタンは飛び降りたエーゴをみて取り乱していたが、私が大丈夫だと肩を掴んだ。

「エーゴは聖なる審判の時が来たって言ったでしょう？それはとある召喚獣を呼び出すための。召喚獣で悪しき道をいくものは、聖なる審判……大いなる召喚獣でお仕置きよ……ってね」

なんて冗談をかましていたが、ホントに船が爆発し始めてプロペラが止まり、プリマビスタが魔の森に落ちたときみたいに墜落していくのであった。

何とか城の側に落ちこちて、そして皆たいした怪我もして無くてヨカツタネって言っているけども、ダガーやエーゴが心配だといって急いでアレクサンドリア城を駆け上っていく。

こうやって皆で登っていくのは、ダガー奪取大作戦の時みたいだ。「上って言ったって何処良きや良いんだ！」

ジタンも城の内部を分かっている訳じゃ無いから、どこから行けば良いのか悩んでいたのも、ゲームで見たことある景色になったから、私がかつちじゃん？って引っ張って行って、城の上の祭壇までやってくる事が出来た。

「さあ、二人を助けに行くブリ！」

シド大公が祭壇への階段を登ろうとしたが、ジタンが止めて行く手を塞ぐ。

「ここは俺が行く！皆は他の人たちを助けてやってくれ！」

ジタンは自分だけで行くといい、ビビがボクだって一緒に……と零すが、ジタンはゴメンと頭を下げた。

「今オレはダガーのことで頭がいっぱいで、ダガーのことしか考えられないんだ……だから、そんなオレが他の皆を助けるなんて、自信が無いんだ……」

ジタンは自分の思いを吐き出し、サラマンダーさんは「情けねえやつだ」と言って去って行った。

ジタンだけで助けたいという気持ちを汲んで、この場は任せることになり、私たちは城に残っている人たちや街の人々を助けようと動き

出した。

「お姉さん！この召喚獣のこと、分かる!？」

走りながら後ろでビビが質問したので、全ての攻撃を無に還し、悪を滅ぼすバハムートより遙かに強い召喚獣だと話せば、街の人々を城に集めた方が良いと言うことになり、急いで救出活動が始められた。「城って言うてもなるべく地下がいい！召喚獣の戦いはあまりにも激しすぎる!」

私の言葉で城の近くに居たもの達を中に避難させ、道は長くなるがガルガントの穴を歩いてもらうのもアリだろう。

そうやって街で活動していくと、風が一陣頬を撫でた。

振り向き、見上げれば、美しいアレクサンダーの翼が空を覆った。生で見るとあまりの迫力に魅入ってしまう。何て美しいんだろう。

他の皆も同じで魅入って居たが、バハムートはアレクサンダーへと攻撃を始める。

だがその火炎は全て真っ白な翼にかき消され、そして大きく羽ばたいたかと思えば無数の光が放たれてバハムートを追う。

当たれば爆発し、バハムートは宙を飛び回り光から逃れようともがくも、逃れきれず光によって消し飛ばされてしまったのだった。

「バハムートをやっつけた！やっつけた!!」

近くに居たビビがぴよんぴよん跳ねているけど、私はこれから起きる悲劇を思い出し、まずいといってその場にいる皆に城の地下へ走れと叫んだ。

「ど、どうしたのお姉さん……」

「嫌な予感がするんだ……はやく!!」

私も早く城の中に逃げないと、インビンシブルからの攻撃でこの辺りが全て破壊されてしまう。

瓦礫の下敷きも、インビンシブルからの光線もノーセンキューです!!

ビビを掴んで私は死に物狂いで地下へと駆ける。

ガルガントステーションに着いた途端、大きな地響きが鳴り響き、立ってられないほどの揺れに避難していた住民が声を上げた。

恐らくインビンシブルからの攻撃を受けてアレクサンダーが消滅したのだろう。

「……ゆ、揺れがおさまった?」

「私見てくる!」

「え!ボクも行くよ!」

私はビビとガルガントステーションを出て城内へ向かえば、フライヤや、サラマンダーさんとも合流し、彼らも何とか無事だったみたい。

一緒にジタン達を探せば、廊下で倒れているジタンダガーエーコ三名を発見し、気は失っていたけど無事ではあった。

「……一体、何が起こったと言うのじゃ」

呟くフライヤ。

中に居た我々は誰がどんな攻撃をしてきたのかすら見ることはかなわなかった。

我々は破壊されたアレクサンドリアに留まる訳にはいかないので、ブラネの艦隊の一つであるブルーナルシスという船舶を使い、リンドブルムに向かうのであった。

……それから数日、エーコやダガー、そしてジタンも目を覚ましてこれから先のことを話し合うべく、リンドブルムの城の会議室に皆で集められた。

その中にはダガーだけがおらず、エーコが探しに出て行き、話はそのまま進められる。

アレクサンドリアが壊滅状態になり、復興まで時間がかかること、そしてやはりクジャの目的が分からず、やつがどこに居るのかを突き止めなければならぬと言ったことになった。

「武器商人だっというなら、武器を買ってくれるアレクサンドリアまで破壊することはないだろうし、もし召喚獣の力を欲していたのであれば、やつは何と戦っているんでしょねえ」

私は小さなヒントを交えながらクジャって何だろうねと知らぬフリをした。

「ヤツの力を見ただろう、ヴェエラですら震え上がるほど強い相手に

「どうしようってんだ」

サラマンダーさんはそう言い、ジタンもそれなんだよなあと解決策が見つからず悩んだ。

「そのクジャなんじゃが、ワシはアレクサンドリアで信じられない光景を見たブリ！最後の爆発の直前に、ヒルダガルデー号に乗って逃げたブリ!!しかもヒルダガルデー号には“普通に喋っている”黒魔道士兵がのっていたブリよ!」

シド大公がそう言い、喋っている黒魔道士達となると、黒魔道士の村の皆なのかもしれないと、ビビは震えていた。

私はそこよりもシド大公が何処でそのクジャが逃げていくのを目撃した挙げ句に、インビンシブルからの攻撃で街がめちゃくちゃになったのに無事だったのが気になるよなだけだ……

シド大公は一緒に城の中には行つたし、そこから郊外まで離れるには時間がかかるだろうし……街中だとしてもあのデカイヒルダガルデー号を駐められる場所無いだろうし何処で呼んだのか分からんから……うん、ツツコまないでおこうか。

必要なのはシド大公がヒルダガルデー号とクジャと黒魔道士達を見たことなのだろうから。

それからヒルダガルデー号がクジャの手に渡った経緯を調べないといけないのだが、以前我々には「何者かがワシにブリ虫になる魔法をかけ、ヒルダガルデー号と妻を盗まれた」と言っていたので、ここで訂正するそうだ。

街に居た美人に見とれていたら優秀な魔女の嫁が嫉妬してブリ虫になる魔法をかけてヒルダガルデー号に乗って出て行つたと話し、恐らくその際にクジャに奪われたのだろうとシド大公は言った。

だが、クジャから飛空艇と妻を取り戻そうにも、こちらには足が無いのである。

ヒルダガルデー2号も全壊してしまってもはや直すことも出来ない。新たな飛空艇を作りたいのだが、あいにくブリ虫の姿では設計図がまともに書けず建造は難しいという。

そこでトット先生の知恵を借りて、ブリ虫の姿から人間に戻る方法

を聞こうと言うことになった。

魔の森の石化を直す白金の針を持っていたり、マダイン・サリや召喚獣ことも詳しいトット先生ならその魔法も何とか出来るだろうという。

その時、エーコが大慌てで会議室に入ってきて、ダガーが喋れなくなった！と知らせてくれた。

会議は一時中断になり、心配になった面子で客室に居るダガーに会いに行く。

私も流石に行かないのは酷いと思つて付いていき、トット先生が診察して、失語症と判断された。

「立て続けに悲しいことに見舞われ、心に深い傷を負われたのが原因でしょう……」

トット先生はうつむきながらそう言い、ジタンとスタイナーさん、エーコも悲しそうな顔をした。

「おい！ダガーはずっとこのまま喋れないままなのかよー！」

「……いや、これは一時的なものです、いつ話せるようになるのか明言することはできません。姫様の心の傷が癒やされれば、お言葉を取り戻されるでしょうが……」

トット先生がそう言うので、私はダガーを抱きしめてポンポンと背中を撫でた。

「ダガーはさ、姫様だから頑張んなきゃ、女王になるから頑張んなきゃ、召喚獣を取り戻さなきゃって頑張りすぎなんだよね。たくさんたくさん失って、大事なものも守れなくて、だから更に頑張んなきゃってなってるんだよ」

ダガーの肩が段々と震え始めた。

泣くのもずっと我慢してたもんね。

「たくさん泣いていいんだよ、自分の気持ちに嘘ついちゃダメってエーコも言ってたでしょ？ダガーはたくさん辛い目にあった。いいんだよ、泣いて。支えてくれる仲間がいっぱい居るでしょ？」

そう言ったら声は出てないけど、震える息と涙が私の肩を濡らしていった。

それからジタンはここは任せると言い、クジャのヤローをぶっ飛ばさねえと怒りを露わにしていた。

ここまで全部クジャが手を引いていた。黒幕であるクジャをやっつけない！と息巻いてトット先生と一緒にまず飛空艇を作るためにシド大公を戻そう！となった。

ジタンとトット先生は部屋を出て行き、スタイナーさんは嘆き悲しんでるし、すぐ泣き止んだダガーは話せないからただうつつむくだけだった。

何か気を紛らわせるものって無いかなあ……

「……ねえ、気晴らしに空飛ばない？」

「……………!?!」

ダガーは目を見開いていて、私は目の前で召喚士ヘジジョブチェンジする。

「流石に我々単独でクジャを探しに行こうって言うのは無しで、ちよつと遊びに行こうぜって事。もう一度訊くよ？一緒に空飛ばない？」

そしたらダガーはゆっくりと頷いたので、エーコには嘆いてるスタイナーさんを任せてダガーの手を取った。

見張り塔へと登っていき、そして望遠鏡のあることまでたどり着いてから、ヴァルファアレを呼び出した。

「カーゴシップの時はあんまり見られなかっただろうしね。二人だけたら乗れると思う。大丈夫ですか？」

ヴァルファアレに聞いてみれば、うんと頷き、早速ヴァルファアレの背中に乗って空を飛んだ。

私の後ろで私の腰に掴まっているダガーの手が強くなったけど、周りを見てごらん！といって世界を見てもらう。

霧が晴れていて大地がキレイに見渡せる。

とりあえずアレクサンドリアとブルメシアには近付かないように、世界を飛び回る。

「こうやって飛び回れる召喚獣ってダガーにもエーコにも居ないと思うよ！良いでしょー！」



私はゲームでの画面と違ってリアルで綺麗な景色に私も見惚れてしまった。なんてキレイなんだろうか。

しばらく飛んだ後、霧の大陸から出て行き閉ざされた大陸に向かう。

何でかというと、輝く島を見せてあげたかったからだ。

あそこはとりあえずキレイな場所だから、観光には良いだろう。

「見てダガー！島が光ってるよ!!」

ダガーは返事が出来ないでぎゅ、ぎゅと私の服をにぎって返事を返した。

「不思議だねー！街はあるけど、今回は空の散歩だから入らないよー」それからダゲレオの上も通ったり、忘れられた大陸の上も飛んでいく。

ここには建物がほぼ無いけど、知らない大陸に「冒険って楽しいねー!」って笑ってあげた。

彼女も知らない世界に、少しでもわくわくしてくれたら嬉しいな。そしてある程度飛び回り、日が段々傾いてきた。

夕方になりそうな時間になったので、リンドブルムまで戻る。

だけど寄り道でチョコボの森に降りてもらい、森の中にいるチョコとメネに久しぶりに会ったのだった。

「クポ！久しぶりクポねヴェイエラー！隣はお友達クポ？」

メネはチョコボの隣から飛んできて、ダガーにこんにちとはと挨拶をした。

ダガーはぺこりと頭を下げ、私は彼女はちよつと声は出ないんだけど気にしないでねと説明しておいた。

「ダガー、チョコボは人見知りだからギサールの野菜をあげて懐かせて」いきなりのチョコボのふれあいに戸惑っていたけど、ダガーはギサールの野菜を受け取りチョコボに歩み寄る。

チョコボも警戒気味だったが、野菜の匂いに負けて、差し出されたギサールの野菜をパクパク食べて喜んでいた。

チョコボチョコボ過ぎんだろ。

「メネ、ここ掘れチョコボやりたいんだけど、前金で一万ギル渡すわ」

「多いクポよ?!いい、いいけどクポ……」

そしてダガーにはチョコの上に乗ってもらい、チョコと一緒に穴掘りを始める。

ダガーは気になる場所を指さし、そこを掘ってもらい出てくるポーションやフェニックスの尾などを見つけ笑顔になっていた。宝探しに夢中になっていてくれていて、チョコにも笑いかけていてホツとしたよ。

しばらく掘ってもらっていたら、ハイポーション、エリクサー、万能薬やアンクレット、カチューシャを手に入れたらしく、土まみれになっっているそれらを抱えてニツコリ笑った。

「たくさんとれたね!すごいや!リンドブルムに戻ったら洗ってもらおうね!」

そしてチョコ、メネと別れ、チョコボの森から出て、私はふふつと笑ってからまた召喚獣を呼び出した。

「イクシオン!!」

黒い空間が現れ、そこから杖で雷の綱を引くようにイクシオンを引つ張り出す。

これもこの世界に居ない召喚獣だから、初めて見る召喚獣にダガーは目を輝かせていた。

「雷を司ってるんだ、背中に乗せてもらおう」

イクシオンの背中に乗せてもらい、今度は高原を駆け回る。

流石に崖は登れないので走れる範囲は決まっているけど、空を飛ぶのとまた違った楽しさがあるだろう。

「チョコボに乗ったときより速いでしょ!イクシオンもつと速くお願いしますう!」

速度を上げてドリフトするようにカーブしたり、ダガーは怖いのかギョツと掴まっついて私だけケラケラ笑っていた。

「さて、日が沈んじゃうからそろそろ帰ろうねえー!!イクシオンつつリンドブルムの入り口までおねがががが」

速すぎて呂律がおかしくなってしまうていたが、理解してくれたみたいで地竜の門まで走ってくれたのだった。

イクシオンから降りたらダガーがぐったりしていて、振り回したことを謝れば、声は出てないけどケラケラとダガーが笑った。

かなり豪快なことしたもんな今日は。

世界を先に飛び回り、チョコボに乗って掘りまくり、イクシオンで爆走し……

「中々出来ない体験だったでしょ？」

コクリと頷き、そしてダガーは私を指さしそして今度は自分を指さす。それから指で一を作ってから、手を伸ばして空を指さした。

「……もう一回私と一緒に空を飛び回りたいって？」

うんと頷いて、「こんど」と口が動いた。

「また今度飛ぼう！それと、また見せたことの無い召喚獣も紹介してあげるね！」

ダガーは微笑み、二人でリンドブルムの城に戻ったら勝手に外に出て行ったことをめちやくちや怒られるのであった。

「だって引きこもっても億劫だなあと思ってたんでえ、召喚獣に乗って世界中飛び回ってからチョコボの森でお宝発掘しましたあ」

「お宝発掘……だからダガー泥まみれなのか……って、うわ、エリクサーとか掘ったのか!? 凄いな!!」

戦利品を見てジタンが驚き、ダガーはふふんと微笑んだ。

それからとりあえずお風呂タイムになり、そして会議は再開される。

するといつの間にかシド大公がブリ虫からカエルの姿へと変わっていたのであった。

私たちが飛び回っている間に元の姿に戻ろうとしてみたが、なぜかカエルの姿になってしまったという。

結局飛空艇を作ることとは出来ないという事になり、クジヤ搜索にアレクサンドリアから脱出したときに使ったブルーナルシスという船舶を使うことになった。

「当ては無いからな……まずは黒魔道士の村に行く方がいいな。ダガーはどうする？」

ジタンが聞けば、ダガーは一緒にいくという素振りを見せた。

「エーコや私が一緒だから大丈夫さ、一緒にいこう」

「わかった、行こう」

ジタンの言葉に皆がうんと頷き、皆で港へと向かうのであった。